
コードネームは『146-86』

南条仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コードネームは『146-86』

【Nコード】

N0924S

【作者名】

南条仁

【あらすじ】

小さいのに大きい？そのアンバランスが可愛くて。学園の男子の視線をあらゆる意味で釘付けにする美少女、初音美結。強気で我が侬と噂される彼女のラブレターを拾ったのが運のつき。なぜか、全校生徒の前で美結に恋人宣言されてしまっ——！！？ロリッ娘先輩との甘い学園生活、始まります？謎の数字も気になるラブコメディ！！

プロローグ：『146-86』との遭遇

【SIDE：倉敷貴雅】

この学園には噂になる美少女がいる。

コードネーム『146-86』。

影で噂する男達から彼女は謎の番号で呼ばれている。

それは決して、女子に知られてはいけない意味で伏せられていた。その番号に秘められた謎とは一体何なのか？

それは後に分かる事になるだろう。

だが、それが俺、倉敷貴雅（くらしき たかまさ）と関わり合いになるとは予想すらしていなかったのだ。

「……146-86？」

「何だ、お前は知らないのか？」

高校1年の11月の終わり、ある日の放課後に友人の北村翔馬（きたむら しょうま）から告げられた謎の番号に俺は疑問を返した。

「146-86？何だ、それは？バーコードか何かか？」

「最近、噂の美少女の事だよ。ホントに知らないのか？」

「知らん。というか、つい最近まで恋人のいた俺にとって興味ある話題ではなかったからな。いけない、思い出すだけで胸に痛みが…」

…どうして、俺達は別れたんだろう」

「まあ、その恋人にも見事にフラれたんだ。この話を聞け」

うう、マジで本命の相手にフラれたのは辛い。

俺の何が悪かったのか、彼女はこう言いました。

『私の運命の相手は貴雅じゃないんだって。有名な占い師にそう言われたの』

そして、俺達はあっけなく破局を迎えてしまった。

適当な事を言いやがった占い師、出てこいやっ。

俺は怒りを通り越して嘆いていた。

俺と彼女の愛は占いごときに引き裂かれるものだったのか、と。

今でも思い出すだけで失恋のショックが蘇える。

ちくしょう、今度は絶対に本物の恋をしてやる。

「で？その146-86って何だ？」

「……それはだな、耳を貸せ」

翔馬は俺に番号の詳細を話す。

コードネーム『146-86』。

大きな声では言えない内容だが、俺はまずその詳細に首をかしげた。

「マジでそんな子がうちの学園にいるのか？俺は見たことないぞ？」

「いるんだって、先輩にそう言う人が……」

「へえ、1度そういう子に会ってみたいね」

男にとっては憧れる存在には違いない。

……まあ、その時は俺もただのその番号だけに興味を持っていたのだ。

俺達はそのまま帰りに遊びにでもよるかと思い、教室を後にする。世界は動き出す、己の意思さえ無関係に――。

まるで導きあうように俺達は出会ってしまう。

校門を出ようとした辺りで胸ポケットに入れておいた携帯電話がないのに気づく。

「……あつ、教室に携帯電話を忘れてきた」

「おいおい。あんなの忘れたら、あとで面倒だぞ。さっさと取って来いよ」

「悪い。すぐ取ってくるから待っておいでくれ」

俺は翔馬を校門に待たせて再び、学校内へと戻る事にする。

俺の記憶が確かならば机の中に置き忘れたはず。

すぐに教室に戻ると無事に携帯電話は見つかった。

「よかった。ちゃんと見つかった」

これには別れた彼女との思い出の日々を記録した写真たちが残っているのだ。

いかん、未練ありすぎて涙が零れるぜ。

「……誰もいない教室って寂しいものだな」

放課後の教室ほど寂れたものはない。

俺はさっさと校門で待たせてる翔馬の所へと行こうとした。

だが、しかし、急いで教室を出たために誰かとぶつかってしまったのだ。

「ふにやつー!？」

猫のように鳴く生き物が俺に当たって勢いよく吹き飛んだ。

……なんで、猫が校舎内に？

そんなわけない、すぐにそれが女の子だという事に気がついた。

少女は廊下に倒れこんでいる、勢いあまってえらく吹き飛んでたからな。

「……あ、あの、生きてるか？」

声をかけるが倒れこんだ女の子に反応なし……逃げるか。

まるでひき逃げしてしまった罪悪感はあるが、一步後ろに下がるうとする。

「くおらッ、か弱い美少女が倒れているのに逃げようとするなあッ!」

だが、その気配に気づいたのか彼女はバツと元気よく起き上がる。頭の打ち所でも悪かったのか、言葉遣いが荒いぜ。

「私はとても悲しいものを見たわ。倒れた人間を、いえ、ぶつかって倒した人間を哀れとも思わずに逃げ去ろうとした卑劣な男を私は見たっ！そんな最低な野郎は将来、絶対に平気でひき逃げしたりするのよ。私が今、肅清してあげよっか？」

「……いや、その件は真摯に反省する。すまない。おでこ、赤いんだけど大丈夫？」

どこかでぶつけた額が真っ赤になっている。
元氣そうなので大した怪我ではないと思うが。

「うう、痛い……。おでこが痛いよう」

今さら痛みが来たのかおでこを押える少女。

「大丈夫か？保健室にでも連れて行こうか？」

「……そんな暇はないの。私には今、重要任務があるのよ」

それにしてもやけに小柄な少女だ。

どう見ても高校生にも見えない、むしろ身長で見れば小学生？
大きな瞳が印象的な可愛い顔をしている。

制服はサイズが合わないのか、少し裾があまつてるようだ。

「それじゃ、俺はもう行くから。悪かったな」

「ふんっ、次からは気をつけてよね」

彼女は用事でもあるのかすぐにその場から去ってしまう。

……女の子相手とはいえ、悪い事をしたな。

次からはちゃんと確認して廊下に出るとしよう。

「……ん？何だ、これ？」

ふと、足元に落ちていた紙に気づく。

拾い上げるとそれは手紙のようだった、しかも封にはハート型のシール。

俺はこういうような手紙を知っている。
もらった事は人生で2度しかない、これはまさか……。

「これってラブレターじゃないか？」

今時、こんなので想いをつたえようとする子もいるんだな。
中学の時はよく見かけたが、高校になってあげている人間を見るのも久しい。

「……これは誰のなんだろう」

名前は書いていない、あげる方へも差出人の名前さえも。

「まさかさっきの小さな子と書いて“小女”、もとい、“少女”の手紙か？」

何やら急いであるようだだし、可能性としては1番高い。
しかし、俺としてはどうすることもできない。

名前も知らないので届ける事もできないし、どうするかな。
そのままとの場所に捨て置くのもあんまりだ。

気づかれずに明日になれば、うちのクラスの誰かに拾われてしま
うだけ。

非常に微妙な気持ちを抱いてどう対応するのか思いあぐねている
と、

「……その男子、ちょっとどいてっ！」

大きな声をあげて廊下を走る女の子。

先ほどの子だと思ったが、こちらに向けて直進してくる。

「きゃっー、止まんないっ！そこ、どきなさいっ！は、はうっ！？」

しかし、ここで俺がどうしても彼女はどうなる？

あの勢いだと、壁にぶつかりでもして怪我をしてしまうかもしれない。

「ふああっ！？」

どうやら、自分では走る勢いを止める事はできないようだ。

なので、俺はあえてその場に待機、彼女を受け止める事にした。

「ぐっ！？」

「ふぎゅっ！？」

猪突猛進、弾丸のように突っ込んでくる少女の身体を受け止める。衝撃に倒れそうになるのを堪えて踏ん張った。

よくやったよ、俺、男の子としてカッコいいぜ！

「……おい、生きてるか？」

「かろうじて……生きてるわよ」

俺の腕の中に飛び込んできたような格好の女の子。うむ、小柄ながらも抱き心地は悪くない。

「あ、ありがとう……」

小さくお礼を言って彼女は俺から離れる。

照れた表情を見せるなんて可愛げはあるんだな。

「廊下は走るな、子供じゃないんだからさ」

「分かってるわよ。……って、それ所じゃないの」

慌しい様子で再び走り出そうとする彼女。

俺は急いで読みとめて手紙を差し出した。

「ちょっと待て。これはアンタのじゃないか？そこで拾ったんだ」

「……ち、違うわよ。そんなの、私のものじゃないしいー」

手紙を見るや否や、顔色を変えて彼女は否定する。

「アンタのじゃないのか？それじゃ、誰のなんだ……？」

手紙を開けようとすると少女はそれを止めようとする。

「人の手紙を勝手に見ちゃダメっ！」

「中を見ないと誰の手紙が分からない。やっぱり、アンタのラブレター？」

「違います。私はラブでベタなレターなど書いておりません」

めっちゃ怪しい、9割方、この子が差出人なのは間違いない。

だが、そこまでして否定するのはなぜだ？

本人のものならすぐにでも受け取るはずだが、事情でもあるのか？

「まさかこれはアンタから俺宛のラブレターなのか？」

「そんなわけないでしょ！誰が初対面の人間にラブレターなんて…ハッ！？」

簡単に引っかかる辺り、見た目と同じく中身も子供っぽいようだ。他クラスの同級生だろうが、こんな子もいるんだな。

「ほら、返すよ。アンタが書いたものなんだろう。好きな奴に渡しに行けよ」

「……違うもん、私のじゃないもんつ。そんな手紙、捨ててしまえ」

「意味が分からん。捨てろってアンタが自分で捨ててくれ。人の手紙は捨てられない」

どうしても手紙を受け取る気はないらしい。事情は不明だが勝手に手紙を捨てるわけにもいかんだろ。

「あっ！？」

突然、窓から吹きこんだ強い秋風が手紙をさらい外へと飛んでいく。

急いでふたりで窓から下を覗き込むと木の上に見事にのっかっていた。

「ちよつ、ちよつとどうしてくれるのよ！捨てろとは言ったけど、窓の外から放りなげるなんて。うう、あれじゃ隠滅もできやしない。ひどいわ、この男。やってくれるじゃない」

「わざとじゃない。文句があるなら悪戯好きな風に言ってくれ」

「風のバカーっ！アホー」

マジで風に文句を言いやがった、本物の子供だな。

少女はムツと表情を不機嫌そうに強張らせたままだ。

「はあ、しょうがない。あの手紙を取りに行くか」

「もういい。どうせ、誰の名前も書いてないし、バレても私だと分からない」

「それで、誰かに出そうとしてたのか？意味なくないか？」

宛先もなければ差出人の名前も書かないなんて手紙としては意味がない。

「名前を書かないなんて、それじゃ、ただの悪戯になってしまっぞ？」

彼女は俺の言葉を無視して、こちらを見つめてくる。

何だろっ、理由は聞くなと目で語ってる。

「もういいから気にしないで。はい、おしまい」

そう短く言葉を終わると彼女は俺にビシッと指をつきつける。

「貴方は自分のおうちに帰りなさい」

「なぜ、アンタに命令されなきゃいけないのかは分からないが、もう良いなら帰るぞ。あとになって手紙を落とした責任取れって言うなよ?」

「言わないからさっさと帰れ。じゃあね」

少女はそう言つと鞆を持って廊下から立ち去ってしまう。

何だろう、あの手紙に書かれていた中身が気になる。

俺は再び窓を見下ろした先に引っかかるラブレターらしきものを確認する。

少し木を登るなり、ホウキなどで払えば取れそうな位置にはある。

「……俺に関係ないのは分かるが、気になるんだからしょうがないよな」

俺は手紙の詳細を調べるために現場に向かう事に決めた。

気になるんだ、あの手紙も女の子の事も。

ワケありのラブレターと小柄な美少女。

それが俺と“コードネーム『146-86』”との初遭遇になるなんて思いもしていなかった。

第1話：ラブレター救出作戦

【SIDE：倉敷貴雅】

謎の美少女が書いたと思われるラブレター。

それは風の悪戯で木に引っこかかってしまった。

少女は放っておいてと言っていたが中身が気になる。

俺はホウキを一本、入手して手紙の落ちた中庭へと向かう事にした。

「えっと、あの廊下の場所からだこの辺だと思っただが……」

俺が引つかかる木を探していると目の前に先ほどの少女の姿が見えた。

「ううっ。あんなの届くわけないじゃんっ！」

一生懸命背伸びしたり、跳ねてみたりとチャレンジしている。
だが、身長の高い彼女では到底届かない場所に手紙はある。
上手い具合に引っこかかって多少の揺れでは落ちそうにない。

「……人に帰れといっておきながら、やっぱり気になっていたのか」

自分の書いたラブレターを放置する恥ずかしさもあるのだろう。
俺が同じ立場ならきつとそうしている。

彼女は木の枝と睨めっこ状態だ。

俺のようにホウキを使うというのは頭はないのか？
しばらくすると彼女は振り向いて歩き出す。

「……ん、もう諦めるのか？」

と思いきや、助走をつけて走り出した。
垂直に見事なジャンプを決めて木に登る。

「ホントに猫みたいな女の子だな」

身軽なのかひょいっと木に登る彼女。
だが、そこで問題は起きていた。

スカートの端が見事に枝に引っかかっている。

真下からはパンツが見放題な状況。

イチゴ柄パンツ……歳不相応な下着に俺は何とも言えない。
見た目（外見が小学生）には合ってるので、よしとするべきなのか。

「う、うわぁ、どうしよう!？」

そんな場面で彼女は俺に気づくのだ。
せめてもう少し後で気づいて欲しかった、いろんな意味で。

「ば、バカッ!こっち見るな、下着を見るな、変態っ!!!」

「見せ付けているのは誰だ?おい、右手を離したら落ちるぞ?」

「……うるさいっ。私は……あっ!？」

言ってる傍から、片手を離してバランスを崩してしまう。
パンツうんぬんと言ってる場合ではない。

「きゃーっ!?!」

そのまま彼女は俺の方へと木から落ちる。
本当に世話のかかるお嬢ちゃんだ、しょうがない。
地面を駆けて滑り込むように彼女の身体を受け止める。
だが、想像しているよりも勢いのついた人間の身体を支えるのは
難しい。

「ちっ、このままじゃ……」

受け止めはしたが勢いを止めきれない。
ホントにこの子と俺はさっきからこんなのばかりだ。
だが、相手は女の子、無傷で守ってやるのが男の子ってもんでし
よ。

俺は地面に身体をぶつけて少女の身体を衝撃から守る。

「ぐはっ……」

ギリギリセーフとは言え、地面に打ちつけた背中が痛む。
俺は彼女を抱え込んだまま倒れこんでしまう。
かろうじて無事なのはいいんだが、少女の反応はない。
俺は声をかけようとするが、その前に何やら手の平に不慣れな感
触がある。

ぽにゅんっ。

「……は？」

予想外の感触に俺は驚きを隠せなかった。
揉み、揉み、揉み……この手に感じる柔らかでボリュームのある
ものは何だ？

な、なんだ、これは……片手に収まりきらないこの膨らみは何なんだ！？

「……あつ……んっ……」

少女の甘い声に現実に取り戻される。

ありえない、制服を着ていた見た目には分からなかった。

だが、しかし、この手にある感触は紛れもなく本物……この華奢な身体に不似合いすぎる。

そんなバカな、俺は幻でも見ているというのか？

「……って、いつまで人の胸を揉んでるのっ！変態ッ！！」

少女は俺にヘッドバッドを食らわせる、後頭部が鼻に直撃して普通に痛い。

「痛いじゃないか。助けてあげた恩人に何たる仕打ちだ」

「うつさい！人の胸を揉みまくった変態なんか死んじゃえっ！」

俺から逃げるように起き上がると彼女は自分の胸を隠すように押えた。

「うつっ。誰にも触らせた事なんてないのに……」

俺も起き上がると威嚇するようにこちらを睨みつける彼女（の胸）を見る。

よく見れば確かにその膨らみは立派なものだ。

しかし、その幼さ全開の体格に似合わないその魅惑の膨らみ。

俺はハッとあの噂を思い出した。

「……なあ、アンタつてもしかして身長146センチ？」

「は？そうだけど、何よ？何で貴方が私の身長知ってるの？」

不思議そうな顔をして答える彼女。

間違いない、彼女だ……あの男子諸君の噂の存在。

“コードネーム『146-86』”。

身長146センチながらも、バストサイズ86センチというナイ
スなボディ、見事なアンバランスがその魅力を溢れさせている。

コードネーム『146-86』というのは、噂していても女子に
気づかれないためだ。

学園男子が憧れてやまない“ロリ顔巨乳の美少女”が目の前にい
る。

というか、これで俺よりも1つ上の高校2年の先輩だという事が
信じられない。

「もう、最悪……私、帰るから」

「ちよいと待つて。ラブレターはいいのか？」

「あんなのどうでもいいしっ！私に近づくな、変態！！」

警戒されている様子だ、不可抗力だというのに。

「……あんなのって、自分で書いたラブレターだろ？渡す相手もい
たんじゃないか」

「ふんっ……」

彼女は怒ったままこちらを睨みつける。
だが、身長差のせいだろうか、全然迫力がない。
むしろ、猫が必死に威嚇しているようで可愛い。

「貴方の名前と学年を答えなさい。早くっ！」

「何で？俺に興味でも持ったか？」

「ええ。セクハラされたって風紀委員に訴えてやる」

「ひどっ！……って、おい。こらっ」

いきなり俺の胸ポケットに入ってる学生手帳を奪われた。
無理やり奪い返す事も出来ずに、彼女は俺の名前を読み上げる。

「1年2組、倉敷貴雅……変わった名前？」

「そう。たかまさって名前、結構カッコいいだろ？自分でも気に入ってるんだよ」

「どうでもいいし。はい、返す。名前は覚えた、仕返しは覚えておいて？」

「それはマジで勘弁してくれ。アンタを怒らせたのは謝るからさ」

それにこっちは手を軽くすりむいて怪我してるんだ。

落下を守ってあげたお礼くらい言ってもいいじゃん、いや、お礼はすずにもらったか。

顔がにやけるの堪える俺に彼女は言う。

「どうせ、貴方も私の事なんて——しかないって思ってるくせに」
小さく言葉にされた声、何を言ったのかは聞き取れなかった。
寂しそくに何かを告げた彼女は今度こそ、俺の視界から姿を消した。

「さあて、どうしますかね」

とりあえず、俺は木に引かかるラブレターを救出してやる事にする。

ホウキで何度か木の枝を揺るとラブレターは俺の手元にひらりと落ちてきた。

宛名も差出人もないラブレター。

回収し終えたので、中身は後で見る事にしよう。

「……おい、貴雅！お前、こんな所にいたのか？」

男の声に振り向くと呆れた顔をする翔馬の姿がそこにある。
しまった、完全にアイツの事を忘れていた。

「携帯取りにどれだけかかってるんだと思ったら、ここの掃除かよ」
「先生に頼まれて断れなかった。すまん、メールでもすればよかったな」

「……ったく、しょうがないな。さっさと終わらせてゲーセンに行くぞ」

適当に掃き終えて、俺はその場を誤魔化す事にする。
ホウキを片付けた俺は翔馬にたずねる事にした。

「なあ、噂の『146-86』って美少女。本名は何ていうんだ？」

「おっ、興味でも持ったか？ロリ顔巨乳だもんな。男なら興味は持つだろう」

「まあな。で、先輩の名前を教えてくれ」

「初音美結（はつね みゆ）。 “ みゆ先輩 ” って呼ばれる事が多いぞ」

みゆ先輩……？

名前も可愛らしい、ぴったりの名前だな。

「胸のデカさも一流ながら、その容姿も可愛いっていただけあって人気も高い。だが、気が強い性格らしくて、告白されても断る事しかない。まさに難攻不落の要塞だ。あんな子に好かれたら幸せになれるだろうなあ」

「……そんなものか」

俺は彼女の去り際の表情を思い出していた。

寂しそうな横顔を見せたあの子、ただ気が強いだけには見えない。

「貴雅も本人と会えばきつとその魅力が理解できるさ」

実際にあってはいるんだけどね、しかも、胸の方も確認済みだ。などとは口に出していないので軽くはぐらかす。

俺はこっそりとラブレターを鞆にしまい込んだ。

これが本当にあの子が書いたものか、それは分からない。

誰かにもらったものなら“返す”という名目でまた会えるのではないか。

どちらにしろ、接点は残り続けている。

そうだ、俺はすっかりと彼女の魅惑にハマりつつあった。

もう1度会ってみたい、そう思っている。

“コードネーム『146-86』”との出会いは俺の心を突き動かす。

……みゆ先輩、またお近づきになりたいものだな。

第2話：その手紙は誰のもの？

【SIDE：倉敷貴雅】

コードネーム『146-86』。

身長146センチでバストサイズ86センチという素晴らしいスタイルの美少女。

学園屈指のアイドル的存在、『146-86』、みゆ先輩と出会ってしまった。

俺は自宅に帰ると気になっていた彼女のラブレターを開封する事に。

捨てておいて、というからには中身を確認しておきたい。中には便箋がひとつだけ入っている。

「ホントにラブレターじゃん。みゆ先輩って好きな人でもいたのか？」

ロリッ娘に好かれるのはどんな相手なのだろう。気になりながらも読み始めることにする。

『貴方に出会い、ずっと思い続けてきました。私は今まで貴方に言えなかった事があります。私は貴方と交際したいと考えています。どうか、貴方にも私への気持ちがあるならば受け入れてもらえないでしょうか？』

……ラブレターそのものだが、何か引っかかるというか。

「うーむ、何だろう？この違和感は？」

女の子らしい文字、しつかりとした想いはそこにある。

なのに、妙な違和感が付きまとうのだ。

俺はベッドに寝転がりながら、続きも読んでみることにする。

『貴方の事を想うだけで私は胸が辛くなつてしまいます。それは恋をしているからでしょうか。それとも、他の女の子に振り向いている貴方の姿を見ているからでしょうか。私は貴方にとって1人だけの女性になりたい』

……独占欲は強い方なのかも、いや、人間って誰しもそうか。

俺も元力ノの最初で最後の恋人になりたかったのさ。

占いさえなければ、絞め殺したいくらいに恨みを持つ占い師さえいなければ。

ハッ、また俺は過去の傷跡に涙するところだった。

今は俺の過去はどうでもいいのだ。

問題はこの手紙、みゆ先輩の気持ちだ。

『最後に、どうか私の我が侘をひとつだけ聞いてください。もしも、貴方が私に好意がなくても、嫌いにだけはならないで欲しいんです。私は友人としても貴方の傍にいたい。貴方の前向きな答えを聞かせてください。そう願っています』

ラブレターを読み終えた俺はその違和感の正体に気づいた。

貴方、という言葉が引っかかっていたのだ。

この手紙には名前が出てこない。

この想いを向けている相手が先輩なのか、同級生なのか。

それすら書かずに貴方というだけ、友達としての関係を望むなら名前くらい書いてもおかしくないはずなのに。

みゆ先輩がこの手紙を放置した理由は分かる。

これだと名前がないので、誰に出したのが全く分からない。

……だが、それは想いを伝えるラブレターとしては意味がない。

「初めから誰かに渡すつもりはなかった……？」

そっぴゃ、彼女の態度から本命相手に渡すって言う感じはなかった。

思い込めて書いたラブレターなら手荒には扱わないはず。

…… 真実は闇の中、どれだけ考えても答えは出ない。

「明日にでも返すことにしよう」

その時に聞いてみればいいか。

学年と名前が分かっていたらすぐに会えるさ。

俺はそう軽い気持ちで考えて、その手紙を再び鞆の中にしまいこんだ。

……そう、名前と学年が分かっていたら会えるのである。

「遅いっ！学校にはもう少し早い時間に来なさいよ！」

翌日の朝、学校に登校した俺の目の前にみゆ先輩はいた。

というか、俺の教室で俺を待ち構えていたのだ……。

なぜ、彼女がここに……ま、まさか本当にセクハラで訴えるつもりなのか！？

「おはよう、みゆ先輩」

「おはよう……あれ、名前は言ってたっけ？」

「それよりも、何でここに？俺に何か用事でも？」

「……ここじゃ、視線が気になるから移動するわよ。ついて来て」

俺は強制的に誰もいない屋上へと連れ出される。

朝のHRが始まるまで時間的には余裕があるからいいか。

「……昨日の件で俺を訴えるのはやめて欲しいな」

「は？何言ってるの？いいから、手を出して」

俺の手に手錠でもして、ついに逮捕ですか？

うう、俺の手が悪いんです、魔がさしたんです……すみませんでした。

そんなビクつく俺の予想とは違い、彼女が取り出したのは絆創膏だった。

そして、俺の手にある擦り傷を見て「やっぱり」と呟いた。

「昨日、私の手に血がついてた。私には怪我がなかったから、貴方が怪我したんだって思ってた……これ、貼っておくわ」

そう言っただけで俺の手に絆創膏を貼ってくれる。

「別にこの程度の傷、放っておいてもいいのに」

「そんなワケにはいかない。私のせいで怪我させたんだもん。昨日は嫌な思いもしたけど、それとこれは話が別。助けてもらった事には感謝してるよ」

意外と素直な先輩は昨日の事を引きずらないらしい。
ちよつと安心した、セクハラで連行されると本気で思っていたかな。

すっかりと肌寒くなりはじめた秋の屋上、いつまでもここにいるのもアレなんだが。

「そうだ、昨日のラブレター。ちゃんと回収しておいたから取りに来てくれ」

「あれはもういらない。それなら……」

「捨てておいて、はなしにしてくれ。人の手紙を捨てれるタイプじゃないんだ」

みゆ先輩は少し考える素振りを見せる。

「……あの手紙の中身は読んだ？」

「あ、ああ。気になったんで一通りは目を通した。すまん」

「別にいいわ。それでどう思う、あの手紙？ちゃんとしたラブレターだった？」

彼女は手紙を読んだ事を責めずに感想を求めてくる。
俺は文面を思い出しながら言葉を考えた。

「いい感じのラブレターではあったけど、相手に対する気持ちって
いうか、想いみたいなのは感じ取れなかった」

「そりゃ、別に誰かを思っただけじゃないもん」

誰にも想いを込めていないラブレター？
ますます謎は深まるばかり……。

「どういう意味だ？」

「……貴雅だっけ？貴方、恋人はいるの？」

「いないよ。つい最近、別れたばかりだ」

俺に元カノの話をさせるな、泣けてくるから。
彼女はそんな俺の心の傷を知りたくもないらしく、

「それなら、昼休憩に私のクラスに来て。2年3組よ、いいわね？
そこで私に話を合わせてくれたら、昨日のセクハラ事件は無効に
してあげる」

「……もしも、それを断ったらどうなるんだ？」

「今日の放課後は無事に帰れないわね」

つまり、セクハラ事件を風紀委員会に伝えるということか。

“B - 86”をつい揉んでしまった俺も悪いが、脅しとも取れる
発言、このロリ先輩はやるのが荒い。

だが、俺にも完全無視する事ができないのも事実だ。

「よく分からないがいけいいんだな？」

「私の名前、知ってるみたいだけど、一応、自己紹介しておくわ。」

2年の初音美結よ」

先輩ねえ、こんな可愛い先輩と知り合いになれたのは良いが、妙な雰囲気だ。

ここからどういう風に関係が 발전していくのか。

それはこの時の俺達には想像すらできていなかっただろう。

教室に戻った俺の周囲を翔馬たち男子に囲まれる。

その事に俺は「……なんだ？」と疑問を抱きながら彼らに問う。

「どうした？俺が何かしたのか？」

「聞いたぞ、貴雅。さっき、この教室に“コードネーム『146-86』”が貴雅に逢いに來ていたって話じゃないか？どういう繋がりだ？というか、いつから知り合いに。昨日まで知らなかったんじゃないのか？」

「……まあ、落ち着け。お前らの知りたいのはこれだろう？」

彼らの羨望の眼差しに調子に乗る俺はついあの手紙を出してしま
う。

ピンク色の封筒に入れられたラブレター。

「そ、それはまさか青春を謳歌するための必須アイテム、ラブレターか！？」

「何で倉敷がみゆ先輩からラブレターなどもらっているんだ？」

クラスの男子共の嘆きにも似た叫びに優越感を得る。

ふふふっ、手紙は破棄しろと言われている、有効活用ぐらいさせてもらおう。

「昨日の放課後、いなくなったのはホントはそれが原因か？」

「それも原因だと言っておこう」

翔馬も意外そうな顔をして、「それでふたりはどうなった？」と尋ねてきた。

興味津々とクラス中の視線が俺に向けられる。

周囲からの期待に応えてやりたい気もするがここは無難に収めておく。

「悪いが、俺も恋人と別れたばかりなんで、今はそういう事を考えられないって答えた」

その言葉にクラスメイトの反応は様々だ。

女子は「みゆ先輩に好きな人がいたんだ」とそちらに興味を、男連中は「146-86は誰のものにならずにすんだ」と安堵の声が聞こえる。

「もったいないな？あれだけの美少女、恋人にすればいいだろう？難攻不落、他人からの告白には絶対にOKなどしないうって有名なんだぞ」

「……関係ない。恋愛って言うのは恋して始まるものさ。遊びや見栄で付き合えるほど俺は甘いものだと思っていない」

「さすが、どこぞの占い師の言葉で可哀想なくらいにあっさりと恋人に捨てられた男の台詞は重いな」

「それを言うな。本気で泣くぞ、おらっ」

そんな感じで、みゆ先輩の話はクラスの話題になり、そのうち沈静化するだろう。

俺と先輩が付き合うなんてありえない。

——そう、思っていたんだ。

昼休憩、俺はみゆ先輩の教室に行くまでは……。

そこで彼女は自分の友人達に俺の事をこう紹介した。

「彼が私の恋人の倉敷貴雅よ。昨日、告白して付きあう事になったの」

満面の笑みで俺を紹介する、みゆ先輩。

……は？俺がみゆ先輩の恋人って一体、どういう事なんだ！？

第3話：恋人？いえ、他人です

【SIDE：倉敷貴雅】

みゆ先輩に呼ばれて俺は彼女のクラスへと行く事にした。
昼食を早めに終えて、2年の教室に入りこむ。

……他人のクラスってどうしてこんなにもいづらいのだろう。
そう思いながらも扉を開ける。

辺りを見渡すとみゆ先輩たちのグループが食事しているのはすぐ
に見つかる。

『何があっても私に合わせて』

それが彼女の話では会ったが、何をするのやら。

女の子たちの前へと俺が足を踏み出すと、みゆ先輩が俺の姿に気
づく。

「貴雅っ！来てくれたんだ、嬉しいっ」

見たことのない満面の笑みでの出迎えに俺は戸惑う。

これは誰だ？

本当にみゆ先輩なのか？

俺が知る彼女は怒ってばかりの顔しか見ていない。

笑顔は美少女らしく可愛いな。

「こんにちは、先輩。来て欲しいって言うから来ましたよ」

みゆ先輩に敬語口調なんて嫌だが、話を合わせるためには仕方な
い。

彼女は俺の手をとると、女の子達の前へと連れてこられた。

3人の女の子は俺を見るや否や、値踏みするようにじつくりと観察される。

「へえ、この子が美結の恋人？顔はそれなりにいい感じじゃない？」

「そうねえ。でも、男の子は顔だけじゃダメ。私達の美結は簡単に渡せない」

「……あの、俺は何で呼ばれたんでしょう？」

彼女たちに問うより先にまず、みゆ先輩が俺の事を紹介する。

「彼が私の恋人になった倉敷貴雅。昨日、告白して付きあう事になったの」

「……は？」

思わぬ発言に俺はポカンと口をあけてフリーズする。

「私達、恋人だよな。貴雅？」

甘い声のみゆ先輩に違和感を抱きながら、

「恋人？いえ、他人で……ぐはっ」

3人からは見えない位置で俺にひじ打ちをかましてきた先輩。腹にひじ打ちって普通に痛いんだけど、この人、鬼か。

それに誰が、誰の恋人だって言った？

俺がみゆ先輩の恋人ってどういう意味だ？

「私は小夜子（さよこ）っていうの。ねえ、貴雅くん。本当に2人は付き合ってるの？私は美結がどこかで男の子を捕まえてきただけにしか思えないんだけど」

しかも、思いつきりバレているし。

よほど、普段から彼女には男が近づいていないんだろう。

みゆ先輩はそれでも嘘を突き通すつもりらしい、流れは何となく読めた。

彼氏でも連れてくるとでも見栄を張ったのか。

話をあわせるしかないようだ、セクハラで捕まるのもごめんだからな。

「……本当ですよ。昨日、先輩に告白されたんです」

「嘘ついても意味ないよ？どうせ、この子に好きな人なんているわけないんだから。美結の初恋なんて信じてない」

真ん中の女の子、小夜子先輩は焦った表情を見せるみゆ先輩に言った。

「違うっ。ホントに私達は交際してるんだってば」

「それなら、聞かせてもらいましょうか？貴雅くん、この子とどういう出会いをして惹かれたの？教えてもらえる？」

「それは私が……」

「美結には聞いてない。私は貴雅くんに質問してるのよ？」

なるほど、意思疎通が出来ていないと悟るや、俺から攻めてくるか。

正しい判断だと思う、ここで俺が分かりませんって言えばそれで終わりだ。

みゆ先輩は俺にチワワのような愛らしい瞳でアイコンタクトを向けていた。

『話を上手くあわせて』 『了解』^{ラジャー}……そんな感じでここは何とか乗り切るしかあるまい。

ここまで来たら、共犯者でも運命共同体でも何でもしてみせる。

「先輩と俺が初めて出会ったのは数週間前です」

「最近なの？ま、この子が好きな子がいるって聞いたのが昨日だからそんなものか」

「って、昨日かよ……あのラブレター、まさか、昨日書いたばかりのものか。」

先輩の短絡的思考&行動から見て、状況が分かり始めてくる。

「……どういいうきさつで出会ったのかしら？それが大事、答えてくれる？ねえ、美結ちゃん？」

小夜子先輩はまだ俺がすぐそこで捕まえられただけと思い込んでいるようだ。

……初めての出会いか、俺は昨日の事を思い出しながら語る。

「初めて先輩と出会った時、中庭の木に登ってましたね」

「え？木？木って学校の？」

「ええ。木に登って降りれなくなったらしく、騒いでいた所で遭遇したんです」

「作り話にしてはありえなさすぎる。何で木登りなんかしてるわけ、美結？」

俺の発言に彼女たちは「でも、この子ならありえるわ」と各々咳く。

普通なら笑ってしまう事なのに、普段からホントに何してるんだろうね、この先輩は。

チラリと横を見ると彼女は俺の発言がムツと来たのか言い返してくる。

「ち、違ってもんっ！あれは木から降りられなかったんじゃない。貴雅が私のパンツを覗こうとして、慌てただけよ。それで思わず手を離しちゃって……」

「俺の上に落ちてきたんですよ。まさか、上から女の子が落ちてくるなんて思いもしませんでした。まあ、そんな感じで、俺と彼女は出会って、知り合いになりました」

先輩達は俺との出会いが現実起きた事だと何となく理解したようだ。

それはみゆ先輩の言葉があまりにも自然に出てきた言葉だったからだろう。

事実であるために、嘘はついていない。

「本当に以前からふたりは知り合いみたい。私、絶対にその辺で捕まえたと思ってた。おふたりさんは恋人なんだ？」

「そつだよつ。さつきからそう言ってるじゃん。私は貴雅が好きで告白したの。昨日、ようやくOKをもらえたんだ」

できる事なら、みゆ先輩には黙っていて欲しい。

そうやって考えもなしに余計な事を言うから、そこを突かれてしまふのだ。

小夜子先輩はそれだけでは納得できないのか、更なる追及をしてくる。

「ようやく、ね？それまでは、ふたりが結ばなかった理由は何かしら？今度はみゆに答えてもらいましょうか？さあ、今すぐ教えてちょうだい。どうして？」

「え？あ、あう、それは……」

思いつきで言ったんだ、すぐに適当な言葉が思い浮かぶわけがない。

話をあわせると言われたが、合わすべき相手が悪い場合にはどうすればいいのだろう。

黙り込んでしまふ先輩に3人の視線は疑惑へと変わる。

「何だ、やっぱり出任せ？美結に恋人なんているわけない」

「だよねえ。見栄張らずに好きな子なんていないって言えばいいのに」

「……美結、やはり私たちに嘘をついたの？貴雅くんはただのお知り合い？」

「違っつ！ホントに私達は付き合って……いるんだから……」

語尾の方が弱々しくなる、本当にその嘘を突き通したいのだろう。なぜ、そこまでして必死なのか、理由は分らない。

だけど、俺は彼女にここで「嘘だった」と言われるのもマズイのだ。

セクハラの件、何としても揉み消したい、いや、揉んだから事件なわけで。

……ふう、と深呼吸をひとつして俺は彼女たちに言いになった。

「先輩の口からは言い辛いので俺から言わせてもらってもいいですか？俺には1週間前まで別の恋人がいたんです。でも、彼女にフラれてしまって落ち込んでいました。それで慰めてくれたのが……みゆ先輩だったんですよ」

先に言っておく、失恋の件でこのロリ先輩に慰めてもらった覚えはない。

だが、破局は事実、その沈黙も俺個人の事情ならば納得もいくはずだ。

「恋人にフラれたって……それは本当なの？あつ……」

案の定、小夜子先輩は俺の言葉に苦笑いするような表情を見せる。

「その、悪かったね。それは確かに簡単に人に話せないわ。ちゃんとその辺の気遣いできるようになったのねえ。えらい、えらいっつ。いい子ね、美結」

小夜子先輩はみゆ先輩の頭を子供のように撫でている。
むしろ、先輩が本物の子供の容姿なので違和感すらないが。

「慰めてるうちに恋愛感情が芽生えたって事が」

「実際にそういう恋愛ってあるんだ。美結なら他人の失恋を笑い飛ばすと思ってた」

他の二人も納得してくれたみたいだ。

先輩は危機を脱出できた安堵からか笑顔を見せる。

「ふたりが付き合ってるのは理解できたよ。疑って悪かったわ」

「別にいい。私にも恋する事くらいできるんだって分かってもらえればそれでいいの」

「……そっかあ。ついに美結に恋人が出来たわけね。おめでとっ」

疑惑が晴れて、3人からみゆ先輩は祝福の言葉を向けられる。

本当に仲のいい友人たちなのだろう。

微笑ましく見守ってきた、そんな感じさえ見受けられる。

「でもさ、貴雅くんは美結でいいの？この子、すっごく我が侬だし、見た目子供だし」

「……そうそう。でも、胸だけ無駄に發育良すぎるんだよう」

「もっつ、余計な事を言わないでよっ！」

まあ、その辺の事情はよく知ってるつもりだ。

見事な發育をなされております、はい。

俺がチラッと胸部に視線を向けると先輩はにっこりと微笑んでる、こええ。

「どこを見てるのかな？ んんっ？」

「先輩の顔を見てる。嬉しそうだなって……。俺をここに呼んだ理由、皆に紹介しておきたかったんですか」

「え？ あ、うん。そんなところかな」

素直に褒めたら、怒った姿は恥ずかしさに消えていく、そういうのに弱いのかもしれない。

とにかく、これで一難は去ったようだな。

「それじゃ、俺はここで失礼します」

「……またね、貴雅。来てくれてありがとう」

ここで終わってくれば俺達はこのまま、さよならで終わるはずだ。

セクハラ事件も水に流し、これからはただの知り合いの先輩後輩としての付き合いができる、そう思っていた。

しかし、最後に小夜子先輩はここぞとばかりにこう言ってきたのだ。

「それじゃ、最後にキスしてみせてくれない？ 恋人なら出来るわよね、おふたりさん？」

意地悪く笑う小夜子先輩にみゆ先輩は身体をビクッと強張らせ、俺はと言えば「お約束だな」と他人事のように流してしまいたいができずに、冷や汗を浮かべていた。

……さあて、この最後の大ピンチ、どう乗り越えればいいのかやら。

第4話：俺と先輩の関係

【SIDE：倉敷貴雅】

何やら勝手に俺とみゆ先輩は恋人関係だという事になっていた。
ロリ顔巨乳な先輩は何を思ったのか、その嘘を友人達の前で突き
通すつもりらしい。

だが、何とか乗り越えられと思った矢先、最後の試練が二人を
待っていた。

「それじゃ、最後にキスしてみせてくれない？おふたりさん？」

小夜子先輩に言われて俺達は固まってしまう。

マズイぜ、この展開だけは避けておきたかった。

よくある定番の確認方法だが、実際にキスしてしまうわけにもい
くまい。

「え？あ、でも？き、キスは……その、ね？」

「美結は貴雅クンとキスできないの？恋人同士なのに？」

みゆ先輩が動揺して判断できない以上、俺は必死に対応を考える
しかない。

「……実はまだふたりはキスしたことなくて。その、できるなら別
のタイミングでしたいんですよね。ダメですか？」

「うん、ダメ。そう言うことならここでしてちょうだい。それで、
疑う事はないわ」

小夜子先輩、絶対に気づいてるな。

俺と彼女がただの知り合いである事に。

多分、他の二人もそうだ。

それを納得したフリをして、みゆ先輩の反応を楽しんでいる。
だとしたら、ここでキスをして意味はない。

「……先輩、ここまでだな。本当にキスすることはない。嘘だと言
つてしまえ」

俺が小声で耳に囁きかけると、彼女は首を横に振って否定する。

「最後まで私に合わせて。き、キスぐらいやればいいんでしょう」

震える身体、潤む瞳から察するにかなりの緊張をしているらしい。
この分だと相手はファーストキスか？

余計にできない、なんとしてもキスは回避の方向で話を持ってい
く。

「人前するのは苦手なんです」

「私達の大事な友人よ。任せると言うからにはその誓いを見せて欲
しいの」

「その所は勘弁してもらえないですかね？」

「ダメ」。貴雅くんは美結とキスしたくないの？」

くっ、小夜子先輩は完全にからかいモード、どうにもならんか。

「……いいよ、貴雅。それで皆がホントに納得してくれるならキス
しよ」

「みゆ先輩……？」

「えへへっ。こういうの、憧れてたんだ。好きだからしょうよ」

もはや、後には引けないとばかりに、みゆ先輩は俺とキスする選
択をした。

小夜子先輩はその判断にニヤリと笑みを浮かべる。

「美結は乗り気みたいだけど？どうする、貴雅くん？」

「……先輩、いいんですか？」

「わ、私はいいよ。うん、誰にだって初めてくらいあるもん。それ
が……今だってだけし」

無理するなよ、自分のファーストキスくらい好きな奴のために大
事に取っつけ。

そう言いたくなるが、一生懸命に作り笑顔を見せるみゆ先輩には
言葉は届かない。

そこまでして、この嘘を突き通したいのなら俺も覚悟を決める。

「いいですよ、分かりました」

俺は先輩の身体を抱きしめて見る、小さな身体に手を回す。

「146・86」というコードネームで呼ばれるぐらい胸ばかり
強調されている感じはするが、実際に触れて見ると、すごく可愛ら
しい女の子だと改めて実感させられる。

「……あつ……」

潤いに満ちた唇をこちらへと尖らせるみゆ先輩。
俺にファーストキスを捧げようとする、その行為。

「キスしてよ、貴雅……」

そんなに泣きそうな顔をして、紡いだ言葉に何の意味が……。瞳を瞑るみゆ先輩は覚悟完了、ってここまでしなくちゃいけないのか？

「……んうつ」

複雑な気持ちながらも、俺は彼女に口付ける。
優しく身体を腕の中に抱きとめて——その頬に唇を触れさせた。

「……え？」

キスの瞬間に驚いた顔をするみゆ先輩。
本気で唇にされると思っていたんだろう。
俺は小夜美先輩にこう言い放つ。

「本気でみゆ先輩が好きなので、これ以上は人前で出来ません」

「そっか。貴雅くんって優しいわね」

「さあ、どうでしょうか？」

俺はまだ呆気にとられるみゆ先輩の頬を撫でる。

「先輩、唇のキスはまた次の機会という事で」

呆然と顔を赤らめるだけしかできないみゆ先輩。

「これで俺達が交際してるって分かってもらえました？今度こそ、本当に失礼します」

「……ありがとう、貴雅くん。これからも美結をよろしく」

なぜか小夜子さんにはお礼を言われてしまう。

やれやれ、結局、こうなる事も想定していたんだろうか。
多分、みゆ先輩はそれに気づいていないんだろうけど。

放課後、俺達は待ち合わせをしていたわけじゃないのに中庭にいた。
た。

ベンチに座るみゆ先輩、俺の存在に気づくと軽く手を上げる。

「今日のお昼はどうもありがとう。おかげで大助かりよ」

「人に合わせろというなら、自分がテンパってどうする？」

「仕方ないじゃん。あんなに皆が意地悪なんて思わなかったし」

先輩は長い髪を結んでいる髪留めをいじる。

「よく、あんな手で小夜子たちを乗り切ったわね」

「あんな手つてどんな手だ？」

「頬にキス。私はてつきり、本気でチューされると思った」

まだあの時の事を思い出すのか、頬が紅潮している。
可愛いところもあるじゃん。

俺は何ともないと言う風に淡々と答える。

「ん？もしかして、ホントに俺にキスされたかったか？」

「そ、そんなわけないでしょう！！冗談でも嫌だって」

「それなら否定するなりすればよかった。俺はたかがキスで動揺するほどお子様でもないんで、恋人同士っていう設定なら、どう動けばいいか考えたただけだ。……それに、あの形でも小夜子先輩的にはOKなんだろう」

「ふえ？どういう意味？」

そう、小夜子先輩はとくに俺達が付き合っていない事を見破っていた。

それでもキスしろと言ったのは、みゆ先輩ではなく俺を試した。
俺が……どういう気持ちであの場に立っていたのかを知るために。
完全にあの人の手の中で躍らせられていたんだよ。
それにみゆ先輩は気づいていない。

「お子様先輩には考えても意味のない事だよ」

「失礼なっ。私だって、色々考えてたんだから！」

「それなら、まず、どうしてこの状況になったかを説明してもらおうか？」

まず、俺が恋人役をさせられた理由から問い詰める事にする。
先輩は昨日のラブレターの真相から話し始めた。

「昨日、小夜子たちが言ったんだ。私には好きな人もいないだろうて」

「実際にどうなんだ？初恋ぐらいしていたんじゃないのかよ？」

「ううん。今まで好きになった男の子ってひとりもない。高校に入れば誰かを好きになって恋人ぐらいできるって思い込んでいた。現実はそのなにかい世界って中々めぐり合わないんだよ」

「噂じゃよく告白されてるらしいが、それじゃダメなのか？」

その発言にみゆ先輩は溜息をつきながら、嘆きに似た声で言う。

「嫌よ。私に告白してくる相手、ほとんどが私の胸っていうか身体目当てだし。分かる？誰も私を好きになって告白してきたわけじゃない。ひとりくらい、私の事を本気で好きになれっていうのよ」

確かに「146-86」と男子が呼んでるくらいだ、失礼ながら恋人って感じではない。

「そんなわけで、私に好きな人がいないっていうのを皆にからかわれたの」

「それがあのラブレターとどう繋がるんだ？」

「……言っちゃったんだよね。私にも好きな人くらい存在する。何なら今すぐ告白して恋人として皆に紹介してみせるって。言った後で後悔、急いでラブレター書いて、彼氏を探してたわけ」

想像通りの展開に俺は呆れるしかない。

好きな奴もいないのに大見栄を張ってしまったわけだな。

それで昨日はラブレターを手に学校中を走り回ってた、と。

「それで学校中を駆け巡った成果は……？」

「私の周りに親しい男の子って誰もいないことに気づいて愕然としてた。親しいって思ってたただけなんだよね。知らない子に告白する勇気もなかった」

「なるほど、ラブレターをいらないって言ったのは作戦を諦めたからだな？」

「そういうこと。まあ、こうして協力者が見つかったのは幸いだったけど」

こちらを恥ずかしそうに見上げるみゆ先輩。

……可愛いじゃん、そういう子供っぽさも愛らしく見えてくる。

「私は誰も恋したことがない。皆にはそれが悪いみたいな言い方されて、ムツと来てたんだよね。いつまでも子ども扱いされるし。でも、今回の事で少しだけ分かった気がする」

「何に気づいたんだ？」

「貴雅にキスされた時、私の事を考えて頼にしてくれたじゃん。あの時、それまで怖いとか思ってたのになぜか安心していうか、こういうのいいなって感じの気持ちがあった。人を好きになるのって大変だなんて改めて思うわ」

つまり、このロリッ娘先輩はこれまで恋の高揚感すら知らなかったわけだ。

今回の件はある意味、いい経験にはなったんだろう。

「……本物の恋っていうのはすごいぞ。その緊張感や高揚感の何倍も胸に来るから」

「さすが経験者。そっか……恋ってどう言つのなんだろう」

「恋愛に興味でも持ったら自分でいい男でも探せよ」

「そうだね。いつまでも嘘ついてるわけにもいかないし」

小夜子先輩たちにいいように遊ばれてるとも知らずに、まだ続けるようだ。

「これで私達の関係は終わり。これから、名前だけは使わせてもらうけど、そちらに迷惑をかけない程度にするわ」

「そうしてくれると助かるよ。あと、嘘をつくならもう少し考えてくれ」

また妙なことに巻き込まれるのは勘弁だ。
先輩はうつと弱気な顔を見せて言う。

「頑張る。……多分、何とかなる、かも」

めっちゃ不安なんだけど、これがみゆ先輩か。
俺はその小さな頭をポンツと撫でる。

「……困った事があれば後輩として手伝ってやらんこともない」

「ふ、ふんっ……先輩としての意地として、頼りなんかしないもん
っ」

お互いに顔を見合わせて微笑しあう。

俺とみゆ先輩、何かいい感じの関係になれたじゃないか。

だが、俺は後にその安請け合いが新たな展開を迎える事をまだ
知らない。

第5話：恋人宣言は突然に

【SIDE：倉敷貴雅】

みゆ先輩のラブレター事件も無事に解決し、俺に平穏な日々が再び戻った。

平穏というほど大した事件ではなかったのだが。

あれから数日、何も目立った事は起きていない。

みゆ先輩とも会っていない、それまで以前の普通の日々が続いていた。

俺は知らない、その僅かな日々が俺に残された平和な時間だった事を。

「146 - 86」はアレから何のアプローチもなしか？」

「あれでお終い。ラブレターですら、気まぐれだったんだろ」

昼休憩に俺は教室で甘ったるいイチゴ・オレを飲んでいた。
好きなフルーツ・オレが品切れだったんだ、仕方ない。

「……貴雅、何か隠していないか？」

翔馬は俺に詰め寄りそんな言葉を言い放つ。

「何も隠していない。ホントだって」

「俺には未だにお前と美結先輩の接点がよく分からね」

接点〃ラブレターを拾った、以上。

いや、それにプラスして彼女の友人達には恋人として認知されているだけだ。

それが世間に広がる気配はないし、みゆ先輩ともアレ以来会っていない。

「で、正直な話、貴族的にあの先輩はどうだった？告白を断つたにしろ、本物を見たんだろう？ああいうロリ系美少女はどうだ？いいだろう？」

「本当に身長が低いな。思ってた以上に小学生に見えた」

「それに不似合いな胸の大きさが魅力なのさ。あの理想的なアンバランスは神が与えたに違いない。お前も惜しい事をしたと後で後悔するぞ？」

後悔なんてするわけない。

あんな先輩、相手をするのも大変なのに、恋人なんてありえない。そりゃ、意外に可愛い性格しているのも分かったわけだが。

「俺は大人びた女性が好きなんだ」

「元カノも年上の美女だったな。一応、あの人も年上なんだが？」

「ランドセルのよく似合う美少女は勘弁してくれ。俺はアレを年上だとは認めたくない。俺はあの子の恋人になる男を見て見たいね。本当になんていいばいいのか、変わった子ではある」

外見と同様に中身も幼いみゆ先輩。

俺の好みで言わせてもらうなら彼女はストライクゾーンではない。

「彼女は一体、貴雅のどこを気に入ったんだろうな」

「さあ？そんなのはいいから、5時間目の数学の宿題を写させてくれ」

俺は思い出した宿題を慌てて写させてもらう。

のんびりとした昼休憩が中盤に差し掛かったとき、その悪夢は始まった。

『はあい。皆さん、こんにちはっつ。放送部のお昼の放送始まります』

スピーカーから流れてくる元気のいい声。

「おっ、いつもの奴が始まったな」

毎週水曜日、うちの放送部は昼休憩にラジオ番組のような放送を流している。

いろんなコーナーがあり、生徒には概ね評判、教師たちには半ば黙認されている状態で、それなりに盛り上がりを見せていた。

『さあて、すっかりと冬になりました。12月ですねえ。なんと、今日の放送部はいつもと違うんです。後半の「恋 恋」のコーナーに皆さんの驚くような方が来てくれます。お楽しみに。さて、まずはリクエストの音楽から流します』

俺は放送部のことよりも目の前の課題の方が重要だ。

「なあ、恋 恋って今日は誰が来ると思う？」

「知らん。あんな恋愛相談などに興味はない」

『恋 恋』っていうのは放送部名物の恋愛コーナーだ。

大抵は誰が誰と付き合い始めました、と皆に報告したり、恋の悩みを相談したりという感じの女の子向けの人気コーナーで男にはあまり関係ない。

「……おい、それよりもこの問題の2の答えって間違えていないか？」

「間違えていない。それはお前の考え方が間違えているんだよ。この公式じゃダメだ、使うのはこっちだ。そうすれば違う数値が出てくるわけなのだ。覚えておけ」

「ホントだ。さすが理系だな。俺は数学は苦手だよ」

そんな感じで俺は問題を書き写していく。

一通り書き写し終えた頃、放送部の放送も後半に差し掛かっていった。

俺はまだ中身の残るイチゴ・オレを飲み干そうと紙パックに手を伸ばす。

『皆さん、お待ちしました。次は「恋 恋」のコーナーですよ♪今日のゲストは学園のアイドル、初音美結さんです』

『こんにちは、初音みゆです♪』

『相変わらずスタイルがいいですねえ、美結さん。いいなあ』

俺はその声に飲みかけたイチゴ・オレを噴出しそうになる。

何であの先輩が放送に出てるんだよ。

「……なんと、美結先輩がゲストか。どうした、貴雅？」

「い、いや……何でもない」

何となく彼女の出現には嫌な予感がしてたまらない。

クラスではみゆ先輩の登場に賑わっている、人気があるのは確からしい。

『さて、美結さんがこの放送部に来てくれるのはこれが3回目なんです、この「恋 恋」のコーナーに来てくれるのは初めてですね？』

『私、今まで好きになった人もいなくて、こういう恋愛事に疎かったんです。だけど、今日は皆さんにある報告がしたくて来ちゃいました』

『おおつ。皆さんに報告したいって事はもしや？でも、美結さんといえは先日、後輩の男の子に告白して失恋なされたって聞いてますけど？その辺、教えてくださいよ』

クラス中の好奇心の視線が俺に向けられる。

ええい、俺を見るな……あれは遊び、ラブレターなどホントはもらっていない。

『はい、1度告白してふられちゃいましたあ。でも、あれからまた進展があつたんです』

『そうなんですか？美結さん、もしかして、進展というと？』

……待て、激しく待て。

みゆ先輩、アンタはまさか……また変な事を考えてやしないだろうな。

俺の焦りを無視するようにみゆ先輩は明るい声で言い放った。

『実は1年2組の倉敷貴雅とお付き合いする事になりました。えへっ』

『ええー。本当ですか？全校生徒の前での恋人宣言、皆さん、聞きました？美結さんの交際報告ですよ。美結さんとお付き合いなんて羨ましいですね、貴雅くん』

突然の交際宣言に教室、いや、学園中がざわめく声に包まれる。

やりやがった、みゆ先輩……何と言う爆弾を落としてくれたんだ。

『貴雅くんといえば1年生の中でもイケメンで女子に人気のある子ですよ。私は直接あった事はありませんが、女の子に優しいという評判もよく聞きます。告白は美結さんからしたんでしょう？どこを好きになったんですか？』

『貴雅はカッコいいし、本当に優しい人なんです。初めて会ったのは怪我をしていた私を助けてくれたんです。その時からすごく気になっていて……好きになっちゃったんです』

おいおい、嘘をつくな、誰が怪我をしていたって？

ただ、ぶつかってラブレターを拾っただけだ。

周囲に皆が詰め寄ってきて、俺は放送を聞くところではない。

「どついう事だ、付き合ってるって今さっき否定したばかりだろ？」

「本当に知らない。俺は付き合ってるつもりはないぞ!？」

翔馬すらも驚き、詰め寄られるので俺に味方はいない。

「我らの『146・86』を独り占めしようなどとは貴雅め、許せんな」

「ここは闇に葬るのが得策ではないか？やるなら今しかない」

などという物騒な声まで聞こえてくる、俺、命の危機ですか？

「美結さん、放送を多分、聞いている貴雅クンに何か一言ありますか？」

「貴雅、あのね……大好きっ」これからも私を大切にしてくね」

「うわっ、ラブラブ発言。貴雅クン、男として美結さんを守ってあげるんだよっ」

スピーカーから聞こえる甘い発言などは既にどうでもいい。

……守る？何を冗談言ってやがりますが、守って欲しいのは俺の方だって。

俺の昼休憩は大騒ぎのど真ん中、この騒動、どう治めてくれるんだ？

やっぱり、あのロリッ娘先輩なんかに関わるんじゃない……ぐわあ!？

——平和という2文字を今日ほど強く噛み締めた日はないだろう。所々、身体が痛む中で俺は放課後、逃げるように人気のない屋上へとあがる。

そこで待つこと数分、みゆ先輩が俺の連絡を受けて気まずそうにやってくる。

「よう、みゆ先輩。この俺に何か言いたい事があるのなら聞いてあげるぞ」

「あ、あはは……えっと、その、ね……」

言いよどみながら、彼女は俺の方をゆっくりと見つめてくる。この前と違い、俺の顔色を伺うように、

「もしかして、怒ってる？怒ってるよね？」

「怒ってなどいない。ただ、理不尽な憤りは感じている。憤懣と言ってもいい」

「ふんまん？って何？」

「憤懣っていうのは“発散できずに心中にわだかまる怒り”って意味だよ」

俺がにっこりと笑顔で丁寧に説明すると彼女はビクビクと小動物のように震える。

「うえーん。やっぱり、怒ってるんじゃない」

「泣きたいのは俺のほうだ。あの昼休憩の放送はなんだ？」

「……あれには理由があるんだって」

みゆ先輩の話を要約すると、この事件の黒幕は小夜子先輩らしい。小夜子先輩に「全校生徒の前で恋人宣言して」と言われて断りきれなかったそうだ。

なんとということを……小夜子先輩、完全に俺も巻き込んで遊んでますね。

何度か放送部の放送に出たことがあるらしく、今回の騒動へと発展した、と。

俺は突き刺さるような肌寒い屋上で息を白くさせて、

「困ってる時は助けってくれるって言ってたから、つい……」

「……確かに困ってるなら、助けくらいにはなると言った。だが、先輩は俺なんか頼りにしないって言ってなかったか？俺に迷惑をかけるいとも言ってたよな」

「ううっ。だ、だって、自分じゃどうにもならなかったんだもん」

お子様先輩にシュンつとさせると怒る気力も失う。

はぁ、ホントに何をしているんだか、この先輩は……。

「事情は分かった。だが、ホントに後先考えずに嘘をつくからこんな事になるんだ。もうこれ以上は協力できない。俺が先輩の恋人役をしてやれたのは先輩の友達内だけのつもりだった。全校生徒相手に嘘はつきたくないんだ」

これ以上は俺も付き合いきれない。

後は自分で何とかして欲しいものだ。

俺の言葉に彼女はショックを受けた様子を見せる。

「……う、嘘じゃなかったらいいんだよね？」

「ん、どういう意味だ？」

「私だって色々と考えてた。私のついた嘘を突き通すこと。ここま
で話が大きくなってどうしよって。だったら、嘘じゃなくしてしま
えばいい。これ以上、嘘は積み重ねたくない。だから……」

決意を秘めてこちらを見上げてくる先輩。

先ほどまでの弱々しさはなく、かといってこれまでのような強気
さもない。

素の彼女と言えはいいのだろうか。

「——貴雅。お願いがあるの……私の恋人になってくださいっ！」

恋人宣言の次は本物の告白が待っていた。

みゆ先輩の告白に俺はどう答えればいいのか？

12月の寒空の下、俺はひとつの選択を突きつけられたんだ。

第6話：恋人になってください

【SIDE：倉敷貴雅】

「貴雅。お願いがあるの……私の恋人になってくださいっ!」

初冬の屋上に響くのは年上のみゆ先輩からの告白。

ホントにこの女の子は自分で自分を追い込むのが好きらしい。
俺は大きく息を吐きながら答える。

「……その提案は断る」

「即答なんてひどいつ」

「ひどくなんかない。アンタ、自分が何を言ってるのか分かってるか？恋人だぞ？」

「分かってるわよ。でも、ここまできたらしょうがない。嘘を本当にしちゃうしかないじゃない。私の恋人になってくれればノ〜プロブレムよ!」

何が問題なしなのかを問いたしたい。

ホントに恋人になってしまえば、全校生徒へ嘘をつく罪悪感もなくなる。

俺は寒さなど忘れるように身体が熱くなる。

「いいか、恋人っていうのは恋をしてなきゃ意味ないんだよ」

「それなら、私が貴雅に恋をすればいいじゃない？」

「どこからその根拠のない自信がくる？恋をしたことのないお子様のくせに」

あまりにも突拍子もない展開に俺は頭を抱える。

この先輩、恋って意味を分かっているんだろっか？

「いいじゃん。私の恋人になってよう」

そんなチワワのような愛らしい顔で見つめてもダメだ。

「恋人っていうのはそんな単純なものじゃない」

「何でそんなに拒むのよ？私、可愛いってよく言われるし、文句ないでしょ？」

俺の服のすそを引っ張ってもダメだ、伸びるからやめてくれ。

みゆ先輩は可愛いがその性格には難が多すぎる。

さて、このロリ先輩の暴走をどうやって止めればいい？

「大体、みゆ先輩は俺が恋人でいいのか？まだ会って数回、しかも後輩だぞ？」

「え？いいよ？だって、貴雅って優しいし、頼りになるもん」

しれっと言う先輩、汚れを知らない純粹な瞳をしゃがる。

この子、絶対に目を離したら悪い野郎に狙われるな。

「ダメだ、そんな簡単に恋人っていうのはなれるものではないし、なるものじゃない。先輩はもっと自分の事を考えてくれ。俺はアン

「タが心配だ」

「心配？私の事を心配してくれるなら私の恋人になって？」

「なりません。人の話をよく聞いてたか？」

まったくもって話は平行線、この先輩は恋人になると言う意味を理解しているのだろうか。

「恋人になつてくれないの？私じゃ嫌？ダメ？」

むうっと唇を尖らせる仕草を見せる先輩。

「何で俺なんだ？先輩、本気で恋人を見つけるなら……」

「何でって、まず貴雅は私の事情を知ってる。しかも、すでに皆に告知済み。さらにいえば……貴雅はそうして、私の事をよく考えてくれる。普通の子なら、私と恋人になれるって言えば喜ぶだけ。でも、貴雅は私のことを本気で考えてくれた。迷惑かけて、困らせて、そんな私でも優しくしてくれる。だからよ」

ただ、俺が放っておけない性質なだけだ。

誰にでも優しい、そんな大層な人間ではない。

「……私は貴雅をすごく信頼しているの。ホントに恋人になっても良いって思う」

この子には基本的に迷うとか悩みとかってないのだろう。いつも自分の感情や想いのままに真っ直ぐ行動している。

「みゆ先輩、俺はやっぱり、アンタの恋人にはなれない」

「……………」

先輩は黙り込むかと思いきや、俺に抱きついてきやがった。

「ああっ、もうっ！！いいから私の恋人になれっ！」

「今度は命令かよ！？」

俺の態度に業を煮やしたか、キレだしたぞ。

本当に子供だ、はあ…………世話が焼ける。

「そうよ、命令するわ。私の恋人になりなさい。いい？私達は今もう学園中に恋人だって宣言しちゃったの！もう、戻れないのよ、私達はっ……！」

「…………戻れなくしたのはアンタだろ、みゆ先輩」

「今さら後に引けないこの状況、私達が恋人になれなければどちらも嘘つきになってしまっわ。それでいいとホントに思うの？私たちが恋人になるしか道はないのよ」

「…………だから、後に引けなくて大嘘をついたのもみゆ先輩のせいだろ」

そうだ、あの全校生徒への恋人宣言さえなければ何とかなったんだ。

俺だって昼間に命の危機を感じるし、今さらどうにもできない。まさに自業自得、俺は巻き込まれてばかりの可哀想な被害者だ。

「ううーっ。恋人になろうよ、貴雅」

先輩は“B - 86”の胸をめいいっぱい押し付けてくる。
多分、意識してないのだろうが、その感触は柔らかくて反論する
気がうせる。

これが彼女の唯一にして最強の武器か。
なんて、魅了されている場合ではない。

「……ねえ、貴雅。貴方は前に恋人がいたんでしょう」

「ああ、いたよ。愛し合っていたら、呆気なく捨てられたけどな」

「でも、恋をした経験はある。私は恋って何かを知りたいの。人を好きになるっていうを貴雅に教えて欲しい。きっと、私は貴雅と付き合えば好きになれる気がする」

俺は別にみゆ先輩に好きになってもraithたいわけではない。
そりゃ、気になる相手と言われればそうかもしれないが。

「……俺で良いのか？恋人になるってことは色々あるわけだ。恋人を演じるつもりはないし、それなりに覚悟してくれないと困る、遊びじゃないんだ。そのところは考えておいてくれよ？」

「もちろん、私も頑張る……え？私の恋人になつてくれるの？」

先輩の身体を離すとその可愛い顔をこちらにあげる。

幼い顔立ちだが、女の子としての魅力は満ちている。

好みの問題ではあるが、美少女である事に文句はない。

「好きになるために付き合うなんて順序が逆だとは思うが、みゆ先輩と俺が交際しているという情報が学園全体に流れてしまったのも事実だ。なんていうか、先輩って放っておけないんだよな」

色々と言いたい事はあるが、ここで彼女を見捨てるのも後味悪い。先輩から目を離すところくな事になりそうにない。

俺にできるのはこの子に恋を教えて、誰かを好きになってもらうだけだ。

それが本当に俺を好きになるか、他人を好きになるかは別として。

「えへへっ。それじゃ、今日から私達は恋人同士だね」

「そういうことになるな」

「んーっ」

なぜか、いきなり俺に背を伸ばして顔を近づけるみゆ先輩。
俺は突然、その頭を押さえつける。

「……って、何するつもりだ、先輩」

「え？恋人だからキスするんでしょ？」

「あのなあ、キスにもタイミングってものがあるんだ。先輩、これだけは先に言っておく。キスはアンタが俺を好きになったときしかするな。その辺、よく考えて行動してくれ」

「私が好きになったとき以外……。やっぱり、貴雅は優しいっ」

いや、これは優しさではなく、俺自身の保身と言ってもいい。だって、このロリ少女、手を出したら犯罪的なんだよ。すでに今でも何ともいえぬ背徳感が……俺、早まったかも。

「それじゃ、今日は一緒に帰ろうよ」

「一緒に帰るのが、妥当な案だ。採用しよう」

「その言い方、恋人らしくない。そうだ、手を繋ぐのは恋人としてOK？」

「……そのくらいなら、別にかまわない」

手を繋ぐなんて、中学生の恋愛かよ……。

いや、それくらいから全てをはじめないとダメなようだ。

「私、男の子と手を繋ぐなんて小学校以来かも」

「そうかい。……それにしても、小さな手だな」

女の子らしいと言うか、本当に子供のような手をしている。僅かに指先が触れる程度で、彼女はビクツと反応する。

「貴雅の手は大きいよ。男の子って女の子とは全然違うんだ」

俺の手を不思議そうに握ったり、離したりしている。何がそんなに興味深いのやら、それは分からないが。

「さあて、帰りますか」

みゆ先輩が俺の恋人……本当に人の関係って言うのは不思議だな。数日前に出会った時はただの気が強い先輩ってだけだったのに。まさか、『146 - 86』が俺の恋人になるなんて思いもしなかった。

「……ふふつ、なんかドキドキ、わくわく♪」

俺の手をしっかりと握り締めて、彼女は嬉しそうだ。横に並びながら放課後の学園の校舎をゆつくりと歩く。

「先輩って、初恋もまだしてないんだっけ？」

「そう、こうビビッと意識する相手がいないの」

「幼稚園とか小学校で気になる子ぐらいいなかったのか？」

「いないっつ。私って男の子とか本気で縁がないの。1人っ子だし、幼馴染も女の子ばかり、見事に男の子と関わらない人生送ってきたんだ。こんな風に男の子と色んな話するのも貴雅が初めてなんだよ」

それなのに、彼女は男に抵抗感があるというわけでもない。

本当にただ、男の子と縁がなかっただけに見える。

恋に興味もあって、普通に男に出会えてさえいれば恋人も出来ていたはずだ。

……ちょい待て、それが俺ってわけなのか？

「貴雅が私の最初の好きな人になればいいなあ」

「……それは俺も先輩を好きにならないといけないんだが」

「そうだよ。貴雅も私を好きになるように頑張っ。早く相思相愛になって本物の恋人らしくなろう。キスってどういうの？気持ちいい？どんな感じ？経験者でしょ、教えてよ？」

俺はみゆ先輩にこれから色んな事を教えていかなくてはいけないようだ。

その過程で好きになって、恋に落ちるのならばそれもひとつの恋愛の形じゃないか。

繋ぎあつた手と手、触れ合う指先。

寒さなんて忘れてしまいうくらいに温かく感じる。

「私、絶対に貴雅に恋をするよ？覚悟していてね？」

俺は静かに「分かったよ」と頷いて見せた。

このロリッ娘先輩に出会えた事が、俺にとっても恋の始まりなのかもしれない。

なぜなら、これから先、俺がみゆ先輩の事を好きになってしまう予感があったから。

第7話：好きと嫌いの境界線

【SIDE：初音美結】

好きとか嫌いとか、恋とか愛とか。

そんなことを考えたことなんて私の人生に一度もなかったかもしれない。

初恋もまだな私に、恋人ができるなんてありえるはずもなくて。

「美結には好きな子っていないんじゃないの？」

「私もそう思うな。だって、男の子と接点もほとんどないみたいだし」

「だよねえ。で、実際はどうなの？好きな子ぐらいいないわけ？」

友人たちにからかわれて私はムツとする。

童顔で身長も低い私は年齢より幼くみられることも多々ある。だから、私は……何も考えずに嘘をついてしまった。

「好きな人くらいいるよ。仲よくしてる相手ぐらいいるもんっ！」

つい子供扱いされて、ムキになってついた嘘。

私の言葉に友人たちは鼻で笑うように、

「ありえないわ。つくならもつと現実味ある嘘にしようよ」

「そうそう。みゆちゃんが好きな男の子なんているはずない」

「……嘘ではないと頭ごなしに否定するのも可哀想でしょう。美結、好きな子がいるなら私たちの前に連れてきてよ？ ぜひ、見てみていたわ」

小夜子は意地悪く、私にそう呟いた。

昔から私は嘘をついた事で自滅する場合がある。

だけど、今回だけは私の女としてのプライドにもかかわる問題だ。

「いいわよ。それくらい……。そうだ、どうせなら告白して恋人になつてから連れてくる」

「恋人？……へえ、面白いことを言うじゃない。本当に連れてくることができたなら、美結を認めてあげるわ。もう子ども扱いもしないって約束もする」

後になつて恋人なんて言わなければよかったと悔やむことになるのだけだ。

私はすぐに出す相手もないラブレターを書きあげると、放課後の校舎内を歩きだす。

同じクラスに男の知り合いがいなくても、学年すべてを回ればひとりくらい……。

だが、私の考えは甘すぎて、現実には私は親しくしていた男の子が一人もいないことによりやく気付いてしまうんだ。

恋人役を頼めるほど親しき人間もない。

結局、うろつろと行くあてもなく校舎を徘徊するしかなかった。

……でも、それは私と一人の男の子と出会うきっかけになる。

彼の名前は貴雅、私よりも1歳年下の男の子。

身長は180センチ前半と高く、いかにも女の子受けしそうな顔をしていた。

はじめは何て生意気なんだろうと感じていたけど、1回、2回と

会ったたびに私の中で印象が変わっていく。

気がつけば私は彼を信頼していて、恋人役を頼んでしまうくらいの仲になっていた。

貴雅は気がきくし、優しくて頼りにもなるいい男の子だ。

小夜子達に紹介して無事に嘘をつきとおせたとホッとするもつかの間。

私は全校生徒の前で貴雅が恋人だと宣言しなくてはいけなくなる。すべては小夜子が企んだこと。

『本当に好きなら紹介してみたらどう？できるわよね、大好きな男の子と結ばれて嬉しいんでしょう？大丈夫、貴雅くんならきっと許してくれるわ』

それまでも、何度か放送部の放送呼ばれて出た事もあり、私の登場はすぐに決まった。

貴雅に迷惑をかけない、そう言った矢先の出来事。

ちよっぴりの罪悪感ながらも、恋人がいるという嘘をつく。

これで、みんなが私を子供扱いしないなら……。

そう思い、私は全校生徒の前で貴雅が恋人であると宣言したんだ。恥ずかしくて、でも、嘘なのに皆に認められるは嬉しくて。

「私の恋人になってください！」

さらに私は貴雅に告白した。

このまま嘘をつき付けるよりもホントに恋人になってしまえば問題も解決する。

でも、それは嘘を誤魔化すためだけに告げた言葉じゃなかった。彼と一緒にいる事が楽しくて、本当に恋人になれるなら貴雅がいい。

私は恋を知らない、それなのに恋人になりたいなんて思ってしまった

う。

貴雅につい甘えてしまふ自分。

彼がそれを許してくれるのもあるけれど、こういう風に男の子相手に接するのが初めてでもあるから。

何ていうのかな、お兄ちゃんみたいな感じ。

私の方が年上なのに、そういう雰囲気になつてしまふ。

それはきつと貴雅が常に私の事を考えて行動してくれるからに違いない。

私は彼に恋をする事ができるのかな。

うつん、初めて好きになるのなら貴雅がいい。

恋を知るための交際、私達は付き合い始めることになつたんだ。

貴雅と付き合い始めた翌日のお昼。

お昼ごはんを友人たちと食べようとしたら、小夜子が「何でここにいるの？」と不思議そうな顔をする。

「え？何でって？」

「貴雅クンと食べないの？恋人と一緒に食べればいいじゃない」

そういうものなのかな？

世間一般の恋人関係をあまり理解していない私にとって普通がよく分からない。

「ええー。でも、私達、お昼くらいはそれぞれの関係を重視したいっていうか」

「美結。それは貴雅クンからの提案なの？」

「え？あ、えつと……」

貴雅が付き合う条件として『これ以上、勝手な事はしない』と約束した。

ここで勝手に嘘をつけばまた貴雅にも迷惑がかかるかもしれない。

「……違います、です」

「ほら、見なさい。いい？確かに私達との関係を大事にしてくれるのもいいけど、付き合いたてなんだから彼氏と一緒にいる時間を大切にしない。せっかく仲良くなるチャンスなのに」

小夜子はそう言うけれど、私は過去の話进行い出しながら、

「でも、前に光紀ちゃんに彼氏が出来た時は『最近、付き合い悪くなったよね。やっぱり、友情より恋愛優先っていうの？恋人できた子ってホントに友情が薄くなるわ』とか言ってたじゃん。あれは違うの？」

私の発言に小夜子は「うっ」と言葉を詰まらせる。

「それは……まあ、あの頃は彼氏とか羨ましかっただけよ。今は色々考える事もあるの。ほら、さっさと貴雅クンに会いに行く。文句は言わない、行くわよ」

私はお弁当を手に、猫のように首根っこを掴まれて引きずられていく。

「ふにゃあゝっ」

小夜子、私のことを完全に子ども扱いしてるし。中学以来の付き合いだけど、いつも彼女にだけは逆らえないんだよね。

貴雅の1年のクラスについた頃には彼が食事に出かけるところだった。

「あ、貴雅くん。ちょうどよかったわ」

「小夜子先輩？どうしたんですか？って、それ、何ですか？みゆ先輩？」

「貴雅くんに届け物。せっかく恋人になれたんだから食事と一緒にしたらどうって」

貴雅は連れてこられた私を見て優しく微笑む。

「みゆ先輩には友達同士の付き合いがあるから気にしていませんけどね」

「私達のことは気にしないでいいからこの子をよろしく」

「分かりました。小夜子先輩、お世話をかけます。みゆ先輩、行きますよ」

小夜子の前で私の手を引いて歩き出す。

「また後でね、美結」

彼女が手を振って私たちを見送る。
なんか、小夜子にしてやられた感が……。

「何やってるんだよ、みゆ先輩？あんな猫みたいに引っ張られてさ」
「むう、違うもん。私、今回は頑張って誤魔化さずに正直に言ったんだよ」

「何か分かんが、とりあえず飯でも食いに行くぞ。先輩はお弁当か。俺は学食なんで、食堂で食べてくれ」

私達は食堂に移動すると彼はすぐに定食を注文しに行ってしまう。
私はテーブルの一角で彼を待つ事にする。

「何かこついのつていいなあ」

恋人と一緒に食事とか、羨ましいと思ってたので実際に自分が出ている事にドキドキしたりしてしまう。

何気ない事が楽しく感じる、これが恋人関係っていうのかな。

……私はまだ貴雅に恋はしていないけど、一緒にいたらすごく満たされるんだ。

「またせたな、先輩」

彼が私の前の席に座る、うどん定食が今日の昼食らしい。

「……それじゃ、食べよっか」

私がお弁当箱を開くと貴雅はマジマジと視線を向けて、

「やけに小さなお弁当箱だな。それで足りるのか？」

「小食だから、これで十分なの」

量はあまり食べられないんだよねえ。

甘いものは別として、普段から食事も少ない。

「それでも、一部にはちゃんと栄養が言ってるんだな」

「……セクハラ発言、禁止。あのねえ、私だって好きで身長低くて胸だけ大きいわけじゃないの。貴雅、今後はその発言はしないように気をつけて」

中学になった頃から、胸ばかり大きくなって身長は低いまま。ずっと皆にそればかり言われるから正直、うんざりしてる。

「それは悪かった。機嫌を直してくれ」

「別に怒ってるわけじゃないから、気をつけてくれればいいの。いただきます」

私は中に入ってる卵焼きに箸をつける。

「ねえ、貴雅。いつも学食なの？」

「うちは両親共働きで、弁当なんて作らないからな。かといって、パンだけだと腹持ち悪いし、こういう食事の中々値段のわりに美味しい」

私は学食で食事は取らないからよく分からないな。

「お弁当とか作った方が恋人らしいかな？」

「それって先輩の手作りなんだ？」

「まあね。自分の好みと食べられる量のお弁当だもの。他人に任せても分からないじゃない。……で、どうしよう？」

「せっかくのお誘いだが、遠慮しておくよ。みゆ先輩に負担させるも悪い」

そんな事なのに、別に大した事はしていない。

「そう？試しに1回作ってくるぐらいならいいでしょ？」

「それくらいならいいけど、できるのか？」

「私に任せて。だって、私達……恋人同士なわけだし」

貴雅は私の恋人、好きを知るためではあるけれど、関係が恋人である以上、する事だってそれに近いことをしていきたいんだ、これもひとつの勉強でもあるし。

「……それより、食事はどうする？小夜子先輩の様子だと、これからは一緒に食べた方がいいんだろ？その辺、どうなんだ？先輩はどうしたい？」

「貴雅がいいなら私はふたりで取りたいな。今は少しでも貴雅と一緒にいる時間がほしい。私は貴雅を好きになりたい」

彼はふと食事する手を止めると顔を隠す。
ふにゃ？

「どうしたの、貴雅？」

「いや、何か普通に聞いてたら恥ずかしくなるな。俺を好きになり
たいって」

どうやら照れているらしい。

何かそういう貴雅の姿、初めて見た。

こういう時の男の子って可愛いな……。

「だって、好きになれたら本当の意味で恋人になれるじゃない」

私だってこれは順序が逆だと思っている。

でも、貴雅はいい男の子だもん、好きになるだけの価値があると思
ってる。

けれど、彼は私を複雑な表情で見つめていたんだ。

「俺はみゆ先輩にそこまで好かれるほど立派な人間じゃないぞ？」

「それを決めるのは私でしょ？大丈夫、信賴しているんだから」

「その信賴に応えられるかどうか、それが問題なわけだが」

苦笑する貴雅、私はその時、彼の表情の意味をまだ理解できな
かった。

私の前で見せる彼はいつも優しく、温かくて……。
すでに私の心は貴雅に惹かれ始めていた、それなのに――。

第8話：恋に恋してる年頃ですから

【SIDE：初音美結】

貴雅と言う男の子を好きになるきっかけ。

私がそのきっかけを得る出来事は交際し始めてわずか1週間後の事だった。

恋を知るための恋愛関係。

恋かあ……恋って何なんだろうとよく考えて見る。

思春期、青春真っ只中、恋に恋する年頃なので興味はある。

好きっていう感情は理解できるよ。

あの人が好き、あの人は嫌い。

人間の感情的なお話で好きと嫌い、という意味だけなら私はすでに貴雅が好きだ。

けれども、私は彼にそれは恋とは違うと否定された。
恋って言うのは意識をする事なんだって。

……何となくその意味は分かるけど、私にちゃんとした恋ができるのかな。

「ねー、小夜子。ファーストキスってどんなのだった？」

4時間目の授業が教師不在のために自習になっていたので、課題のプリントをしながら私は小夜子に質問する。

「は？ファーストキス？」

「そうよ。小夜子はもちろん経験あるんでしょう？」

小夜子は中学時代からずっと付き合ってる男の子がいる。同じクラスメイトでもある彼とはいっただって仲がいい。ああいうのを見て羨ましいなと思ったことはあったんだ。

「……念のために確認。美結ってキスは未経験？」

「当たり前じゃん？男に縁なく、彼氏いない歴17年だったんだよ。貴雅が初めての恋人だもの」

「まあ、美結の場合は“できない”じゃなくて、“作らない”だけなんだけどね。それでようやく彼氏ができたわけだ。で、何？今度は初キスするチャンス到来？」

この前、無理やりキスさせようとした人間から出る台詞じゃないし。

絶対にアレはわざとだったよ、意地悪小夜子めっ。
なんて膨れてもしょうがない。

「うーん。チャンス到来ではないけれど、こういうものかなって」

私のキス経験はほっぺにチューだけ。

しかも、自分からした経験はゼロだもん。

「……そっかあ。美結もようやく乙女らしくなったわねえ」

しみじみと親友に語られるのもどうか、と。

よっぽど今まで私は乙女じゃなかったらしい。

過去を振り返り、自分の幼さに少し恥ずかしさを抱いてみたり。

「ファーストキス。チャンスがないなら自分で作ればいいじゃない。美結も彼女としていつまでも貴雅クンに甘えてばかりなわけないでしょう？いくら恋愛初体験でも、自分から行動しなくちゃダメよ」

小夜子の言う通りかもしれない。

私は貴雅にいろいろと頼ってばかりだ。

課題プリントをさっさと仕上げると私は本格的に小夜子に相談を持ちかける。

「……具体的にどうすればいいか教えてください」

「そのプリントを写させてくれるなら相談に乗ってあげないこともない」

「別にいいよ。これくらいで恋愛マニュアルを教えてくださいなら」

「サンキュー」美結って見た目は●学生、中身も小●生だけど、胸は大きいし、頭もいいんだよね。さすが、学年トップクラス、問題もばっちりじゃない」

ものすごくバカにされてる気がするけど、笑って言われると怒れない。

何だかんだで小夜子は意地悪だけど、頼りにしちゃうんだ。

彼女は私のプリントを書き写しながら恋愛マニュアルを教わる事にしました。

「まず、ふたりはぶつちやけどこまでの関係よ？」

「この前のほつぺにチューだけ。後は手を繋いだりするけど、腕は

まだ組んでないなあ」

「……美結、わかっていたけど言わせてくれる？」

小夜子は思いっきり呆れた顔でその言葉をはいた。

「ホントにお子様だね。17歳にもなった女子高生が手を繋いで頬にキスだけって」

「ま、まだただけだもんつ。お子様禁止って言ったのに！」

「言っておくけど、恋人にはキスが終着点じゃないの。キスしたら、まだ次のステップがあるのよ。その辺も分かってるんでしょね？さすがにそこまで子供じゃないでしょ？」

キス以上と言われたら思い浮かぶのはひとつしかない。

私は羞恥に顔を赤らめながらそれを言葉にする。

「——その先って“調教プレイ”って奴？はぎゅっ!？」

いきなり小夜子に口を押えられた。

彼女らしくない慌てた様子で私に言う。

「ちょっと待て。美結ちゃん、今、変な事を口走ったわよね？どこでそんな悪い知識を覚えてきたのかしら？」

「小夜子、怖い……。だって、クラスメイトの男の子たちが言ってたんだもん。『やっぱり、こういうのっていいよなあ。男なら女を調教して服従させてみてえ』って、変な本を見ながら笑ってたの。違うの？」

だから、キスの次は“それ”なんだと漠然としながらもずつつてた。

小夜子は頭を抱えて、私に強い言葉で否定する。

「うちのクラスの腐った男連中なんて無視しなさい。いいわね、それは間違えた知識よ？」

「ちなみにその台詞しゃべってたの、和也くん（小夜子の彼氏）なんだけど」

「——アイツ、後で1回マジで泣かせてやるわ。誰が服従してやるか」

何やら小夜子に彼氏への憎悪を抱かせてしまったらしい。
身体を震わせて怒りを押さえ込んでいる、めっちゃあふれ出してるけど。

そこまでひどい事なのかな、もう誰にも言わないことにしよう。

「……で、調教プレイって何なの？」

「お子様の美結は一生知らなくて良い知識よ。この話はなしにしましょう。いいわね？忘れなさい。今は美結がどうキスを迫るかを語りましょうよ。純情路線で話を進めましょう。ね？」

「は、はい……もう言いません」

威圧感たっぷりの物言いにそれ以上、私は尋ねることはできない。
うう、小夜子って時々、何か怖いよう。

とりあえず、彼女が落ち着くのを見計らい、私は先日のお話を

事に。

もちろん、好きになってという前提は内緒にしました。

「へえ、キスをするなら美結からしてって言われてるんだ？優しいのか、ヘタレなのか、微妙に判断に迷うところ。貴雅くんは美結の事をよく考えてくれているんだけど、それは女の子として少しハードルをあげられた感じかも」

「そうなの？私からしちゃダメ？」

「……タイミングの問題。初めてキスする子にそのタイミングを自分で考えろって事でしよう？こういう場合は経験のある貴雅くんが奪ってあげればいいの。そうすれば美結だって2度目からは自分からできるのに」

確かにキスの仕方はいまいち分からない私には難しい。

「いい雰囲気になったら、瞳を瞑って近づいてみるのもありね。そうすれば誘いのって向こうからしてくれるわよ」

「……経験ない私が無理にしてもダメってことなの？」

「ダメとは言わない。全ては雰囲気次第よ。自分がしてもいけそうならすればいい、できなさそうなら彼に任せればいい。恋人の2番目の通過点よ、頑張りなさい」

1番目は告白っていう事かな、私の場合は少し事情は違うけど。恋人らしくするためには逃げるわけには行かない。

「そんなに意気込むこともないわ、美結。1回しちゃえば挨拶みた

いなものになるし」

「0と1の間には大きな溝があるんだよう」

ファーストキスが当面の私の課題。

今からでもドキドキなのです。

いつかするかもしれないキス、私はそつと自分の唇を抑える。ふと、携帯電話が震えて一通のメールが来ているのに気づく。送り先は貴雅から、授業中に携帯使っちゃダメでしょ。

そう思いながら中を確認すると「今日のお昼はこちらに用事があるので一緒にとれない。帰りはいつもの場所で待ってる」という内容だった。

「一緒に食事できない理由。怪しいわねえ」

「別に。向こうにも都合くらいあるでしょ？」

「単純な理由だといいいんだけど」

「うん……って勝手に人の携帯を覗かないで、小夜子」

そんな風に意味深に言うから余計に気になるじゃない。

貴雅にメールで「用事はなあに？」と尋ねるわけにもいかない。

こういう時は気にしない方向で行くのがいいんだ。

しばらくすると4時間目の授業も終わり、昼食タイムとなった。

私は今日は小夜子たちと一緒に食事することにする。

「久しぶりに美結と食事だ。たった1週間程度なのにすごく久しぶりな気がする」

「前から気になってたんだけど、小夜子は彼氏と食事しないの？」

「アレがそんな甘ったるいことしますか？いいのよ、私たちみたいに付き合い長いとある程度の距離も必要。美結はまだ付き合いたてなんだから、一緒にいる時間を増やす必要があるの。私とは事情が違うでしょう」

恋人というのはいろいと複雑なようだ。

恋愛初心者の私にはまだまだ謎が多いんですよ、ふみゆう。

そんな感じでのんびりと食事をしていたら、友人のひとりが驚いた様子で私に駆け寄る。

「あー、美結！貴雅君が中庭で沢近絵美（さわちか えみ）と一緒にいたんだけど、こんな場所でのほほんとしていて大丈夫なの？あの2人って元恋人同士って噂だよ」

「沢近さんと貴雅が元恋人って、そんな話、初めて聞いた」

沢近さんと言えば2年の女子の中でも指折りの美人。

でも、男受けはするけれど女子には評判があまりよろしくない。

私も好きじゃないなあ、常に他人を見下す感じがして嫌なタイプだ。

「……あの極悪サディスト女が貴雅クンと付き合ってたの？そういえば、半年くらい1年の男と付き合ってたって噂があったわね。ちっ、貴雅クンも変な女に引かかかってるじゃない」

ちなみに小夜子とは1年の時に同じクラスで相当揉めた過去（因縁？）があるらしい。

すごく陰悪なので詳細は聞いてないけど、ふたりは会えば口喧嘩

は当たり前なんだ。

不機嫌な小夜子はその友人に詰め寄ると、

「それで、貴雅クンと極悪女と一緒に中庭にいたってどういうこと？」

「私も詳しくは分からない。一緒に話をしている所を見かけたの。それで他の子に聞いたらふたりが前に付き合ってたって聞いてびっくりした。で、美結に報告しに来たわけよ」

「あの女、今さら何を……？ 貴雅クンは彼女にフラれたって言ったのよね、美結？」

「うん。何か占いで相性よくないってフラれたという話を聞いたよ」

本当はそんな理由じゃなかったのかもしれない。

あの2人が付き合ってたなんて嫌だ、私も不安が胸に込み上げてくる。

「美結、中庭に行きなさい。事はすでに始まっている。あの女、絶対に貴雅クンへ何かを仕掛けているに違いないわ」

「え？でも、元カノなんだし別に会っててくらい……」

「しのこの言わずに、私も中庭までついていってあげるから行きなさい。嫌な予感がするのよ。あの性根の腐ったバカ女が何をするのか。想像するだけで気持ち悪い。さっさと行くわよ、美結」

「は、はい」

小夜子の勢いに飲まれて私は頷くしかない。

不安もあるし、中庭に行くのもいい。

けれども、私には本当の恋人だったふたりの過去が胸に突き刺さるように辛かった。

貴雅、私はこういう時にどうすればいいのかな……。

今はただ、彼の事を信じることにしか私にはできなかった。

第9話：ロリッ娘にお仕置きを

【SIDE：倉敷貴雅】

冬独特の寒さも、唯一身体の温もる太陽の日差しも、今の俺にはどうでもいい。

中庭に向き合う2人の人影、ひとりは俺でもうひとりは……。

「久しぶり。こうしてまた貴方に呼ばれるなんて思ってもいなかったよ、絵美」

綺麗にウェーブがかった長髪、強気なその瞳にかつての俺は惹かれていた。

俺の元恋人だった先輩、名前は沢近絵美という。

俺の好みの美人で、向こうから告白された。

初めて付き合いだしてから半年、破局を迎えた先日まで俺の心を支配してた女性。

そんな彼女が再び、俺の目の前にいる。

「同じ学校なのだから、こうして会う事くらいはあるわ。でも、今日は貴雅に用があって呼び出したのよ。本当に来てくれると思わなかったけど」

「呼び出されて、興味くらいは持つだろう？喧嘩別れしたんじゃないから」

相変わらず、色気ある大人らしい雰囲気を持っている。

やっぱり、年上のお姉さまって感じた。

俺の好みと真ん中、どこかのロリ先輩とは大違い。

「それで、絵美が今さら俺に何の用事なんだ？」

あっさりとフラれてしまったので、もう話すこともないだろうと思っていた。

それが先ほど「貴雅にもう1度会って話したい」と連絡が来たんだ。

そのメールをもらった時、自分の中にわずかな期待を持っていたのも事実。

だから、こうして俺は彼女に会いにきた。

絵美は俺に近づくといきなり抱擁をし、甘い声で囁いた。

「……ごめんなさい」

「え？」

「貴雅、私がバカだったの。あんなエセ占い師の占いごときで貴方との関係を解消したこと、今、すごく後悔している」

どこぞのロリ先輩と違い、絵美は170センチというモデル体型のために俺と並んでも違和感がない……みゆ先輩だと正直、身長差がありすぎだからな。

「私、貴方と別れて分かったのよ。どんなに貴方の優しさに私が救われていたのか。私は貴雅じゃないとダメなんだって……自分勝手、今さら、そう言われるのは仕方ないと分かっているわ。でも、言わせて欲しい」

絵美は豊満な胸を俺に押し付けながら、その想いを口にする。

「私はまだ貴雅のことが好きなのよ。どうしても、この想いを捨て去る事なんてできなかった。私には貴方が必要なの、お願い……私とよりを戻して欲しいの」

まさかの復縁宣言に俺はびっくりした。

彼女の方から恋人に戻って欲しいなんて……。
それでも、俺はその返答に困ってしまう。

「だが……俺は今、別の子と既に付き合っているんだよ」

「初音美結。彼女のことは知っているわ。でも、本当に彼女でいいの？ 貴雅相手にあんなおチビさんじゃ犯罪でしょう？」

「それは否定できないな」

すまん、みゆ先輩、それだけは否定できない。

くすつと絵美は微笑みを見せて、俺をベンチへと誘う。
俺が座るとその横に方を預けてくるようにして座る。

「最初、貴雅が初音さんと付き合っていると聞いてびっくりしたわ。いつのまにロリコンになったんだろうつて。よく考えて見ればあんなロリ系は貴雅の好みじゃない。違う？」

「ああ、好みかどうかと言われたら、彼女は好みではない」

……胸の大きさは別として。

いや、あれはちよいと裏技的な反則みたいなの？

もちろん、女の子としては可愛い方だが、あくまでも個人的な好みの問題だ。

「それならどうして、2人は付き合ってるの？愛していると、言えるのかしら？」

「……」

愛してる、俺とみゆ先輩はまだその域に達してなどいない。

世間的に見れば俺達の関係は恋人でも付き合っているとも言えない。

「もう1度、私と付き合ってよ。今度は勝手な想いで別れたりしない」

「気持ちは正直に言えば嬉しい……けれど」

「考えるまでもないんじゃない。私ほど魅力的な女にこれから先、めぐり合える事なんて確立的に少ないわ。さつとあの子なんて別れて、私のものになりなさい。いいわね……？」

ゆつくりと彼女は俺にキスをしようと迫ってくる。

初めての恋、初めての恋人、初めてのキス、初めての……愛。俺にとって絵美は初めての女性。

今だ変わらぬ心の存在……はずだった。

「——ちよつと待った!!」

中庭に響き渡る大きな声。

叫んだのはみゆ先輩、なぜか後ろには小夜子さんもいる。

「どうして、みゆ先輩と小夜子さんが……？」

驚く俺をよそにロリ先輩は俺達を咎める。

「貴雅は私の恋人よ！！勝手にキスしようとするんじゃないっ。…私はまだなのに」

俺と絵美の身体をみゆ先輩は文字通り身体を張って離れさせる。ムツとした顔は俺ではなく、絵美に向けられていた。

「こんなのひどいつ。沢近さん、どういうつもり？」

「どう？どうって？私はただ、元恋人とよりを戻そうとしていただけよ」

「堂々とよく言えるわね。さすが性根がとことん腐った極悪女。人のモノになったのが面白くないからって奪い返しに来たってわけ？どうやったらそんな捻じ曲がった性格が生まれるの？」

小夜子さんは喧嘩腰だ、このふたり、仲がよくないのかもしれない。

「小夜子、人聞きの悪い事を言わないで。貴雅はこんなロリッ娘に興味なんてあるはずがないでしょう？大体、どれだけの身長差があると思ってるの？」

「し、身長なんて恋には関係ない。恋は見た目するもんじゃないっ」

さすがに身長を攻められるとみゆ先輩に勝ち目はない。絵美は余裕めいた表情で先輩を潰そうとする。

「あるに決まっているわ。人は所詮、外見にこそ価値を求めるの。そんな小さな身体でつりあいが取れると本気で言ってるの？それは明らかに周囲が見えなさすぎ」

「うう、そこまで言われる筋合いはないし。そもそも人の恋人に手をだすなんて最低っ」

「……勘違いしてない？これだから、お子様は嫌なの。私は貴雅にまだ愛されているのよ。貴方みたいな胸が大きいだけのロリッ娘には最初から不釣り合いなの。ふたりが交際しているなんて事実、そのものがありえないわ」

「私だつて貴雅に……あ、愛されてるもんつ、多分」

不釣り合い、その言葉に自信なさげにみゆ先輩は俯いてしまう。
絵美の攻めにたじろぐだけ、らしくないぜ、先輩。

「愛されてる？そんな自信もなく言われても。これではつきりしたわ。貴方に貴雅はふさわしくない。元々私のモノだし、返してもらうわよ。愛し合うモノ同士が付き合ってこそ初めて恋人だと言えるの」

「嫌だつ。私にとつても貴雅は必要で……気になる相手で……私達は恋人なんだからっ!!」

みゆ先輩が泣きそうな顔で叫ぶ姿に俺の答えは……。
そんなの最初から決まっている事だろう？

「絵美、俺とみゆ先輩は付き合ってるんだよ。どんなに彼女が……ロリな見た目でアレだとしても。それだけは事実だ、他人である絵

美には否定はさせない」

「ちょっと本気で言ってるの？貴雅、この私がまた付き合っただけで言ってるの？こんな口リ女と付き合っただけになるっていうの？私じゃなければ貴方を満たす事なんてできやしないわ」

俺は思い出す、絵美との交際は本当に楽しかった。

彼女の性格に難があるのはよく知っている。

それを踏まえても、魅力たっぷりな彼女との幸せだった時間は存在していた。

……だが、それは既に終わりを告げたもの、過去なんだ。

「そうだった、俺とみゆ先輩が出会うまではずっと、そう望んでいた。一緒にいられた時間は楽しくて、自分が恋をしていた実感もあった。それでも、元に戻るつもりはない。絵美、俺は貴方の恋人には戻らない」

俺の気持ち、すでにそこにはないんだとはっきり言い放った。

絵美が本気で復縁を求めているのか、気まぐれなのかは分からない。

それでも、嬉しくはあっても、過去を振り返りはしない。

「そう、残念ね。はっ、こんな子供相手に私を否定されるとは思わなかった。私と付き合いなかったこと、後悔するわよ？貴雅、その選択は間違えている。それでもいいの？」

「後悔なんて私がさせない。貴雅は私と付き合っただけになるんだからっ」

「どこにその根拠があるのかは疑わしいが……ということらしい。

絵美、今度こそ本当にさよならだ」

ベンチから立ち上がると、今度は俺の口から別れを告げる。

「ふんっ……。こんなロリッ娘が良いなんて貴雅って女の見る目がなさすぎよ」

絵美は納得いかないと不機嫌そうな顔をしてる。

みゆ先輩は睨みつけているままだが、相変わらず子猫が威嚇しているようにしか見えん。

「それは自分も否定しているんだけど？まあ、アンタが元力ノなんだからその通りね、絵美」

「うるさいわよ、小夜子！大体、アンタはこの件に関係ないでしょう！」

「あら？負け犬さんがワンワン可愛く吼えてるわねえ。それにしても、マジで貴雅クンの事を好きだったの？失恋したての可哀想な絵美、私が慰めてあげよっか？」

「だ、黙りなさいっ。本当にアンタは昔からムカつくわ！って、ついてくるな！！」

小夜子さんと絵美は言い争いをしながら去っていく。

その場には俺とみゆ先輩だけのふたりきりになってしまう。

みゆ先輩は俺の顔を小動物のような瞳で見つめると安堵の溜息を漏らす。

「……ふう、何とか貴雅を失わずにすんだ。もしかして、初めから

断るつもりだった？」

「揺れる心はあったがな。初めに言ったら、この交際は俺も本気なんだって……あのナイスボディで魅力的な姉さまをこの腕に抱きしめられないのは非常に残念だな」

「あつそ。それくらい私が代わりになつてあげるから、そう拗ねないでよ」

「……あと10年後にその台詞を言ってくれ、お子様先輩」

俺はそう言いながら、彼女の頭をポンツと撫でる。
いつのまにか、自分の中で絵美が過去存在になっていた事には驚いてる。

あの誘いを受けたときから、みゆ先輩を裏切る気には全然なれなかったんだ。

「ふふつ、何だかんだで私の溢れるばかりの魅惑にのめりこんでいるわけだ」

「どこにそれだけの自信があるのか、教えてくれ」

自意識過剰、いや、子供っぽい中身が早々変わるわけもないか。
それなのに、知らず知らずに俺も彼女に惹かれているのかな、参ったね。

「ふみゆ？何を笑ってるの？」

苦笑する俺が気になるのか、背伸びして顔を覗き込もうとする。
……やめてくれ、恥ずかしくなるだろうに。

「……みゆ先輩、目を閉じてくれ」

「え？あ、え？そ、それって……もしかして!？」

戸惑いながらも彼女は静かに瞳を閉じた。

端整で幼さの残る顔立ち、それでも彼女はちゃんと年上の女性なんだ。

その事を俺は改め思わせられる。

ドキドキと緊張してるのが見てるだけで伝わる先輩に俺は軽くデコピンをかます。

「……ふにゃんっ」

まあ、この程度で勘弁してやろう。

彼女は痛むおでこを押さえつつ、不満そうに唇を尖らせる。

「な、何で？ここはキスシーンじゃないの!？」

「絵美を恋人に出来なかった恨みを先に晴らしておこうと思ってな」

「ひどいつ。何よ、私のせいなの？まだ未練あったの？私に八つ当たり……?」

「そうだ。で、俺に付き合って後悔させないんだろ？その台詞、本気にするぞ」

そう言って、俺は彼女の額に唇を触れさせた。

真っ赤になって照れるみゆ先輩。

「たく、みゆ先輩に俺もすっかりハマってきているようだ。」

この子が可愛くて仕方がないって思うんだからさ。

「……あつ」

本当に俺と身長差が約40センチもあるんでキスも満足にできやしない。

そついうじれったさも彼女とする恋愛の魅力なのかもしれない。

「……痛いけど、嬉しい。何でデコチュー？」

「ファーストキスは好きになってからしろと言っただろ」

「私は……まだ、その、気持ちが固まってないし。恋はまだよく分からなくて」

「焦るなよ、みゆ先輩。俺は……こういう恋も悪くないって思うんだ。失恋した俺にとっていいリハビリになるよ」

俺はみゆ先輩に出会えて絵美の事を吹っ切る事ができた。いつか俺が本気で彼女を好きになって。

そして、みゆ先輩も俺の事を好きになる。

ちゃんとした恋人としての付き合いができる日もそう遠くはないのかもしれない。

冬の寒空の下、俺はロリッ娘の身体を抱き上げてみる。

「きゃっ！？ちょっとやめてよ、こんな子供みたいじゃない」

「ははっ、みゆ先輩みたいな女の子に会えたのは幸運かもしれない。期待してるよ、ロリ先輩。これからが楽しみだ」

「ロリじゃないっ。ホント、生意気な後輩なんだからっ！絶対に私を好きにさせてやるんだからね！！」

そんな軽口を叩きあいながらも、お互いに笑いあう。

これは俺達の恋が始まる少し前のお話。

——そして、物語は次のステージへと進み始める。

第10話：ファースト・デート

【SIDE：倉敷貴雅】

「——貴雅は私を子ども扱いし過ぎよ」

いつものようにみゆ先輩は大きな胸を無意識に強調しながら腕を組む。

何やら、俺に対して不満があるようだ。

「子供扱い、ね？」

目の前にいる美少女の容姿を見つめて、他に何を言えばいいのやら。

俺の恋人はロリ顔巨乳の美少女、男子諸君からのコードネームは『146-86』。

その名の通り、146センチという小柄な身長に不似合いな86センチのバストを持つ、魅惑のプロポーション。

このスタイルのギャップに背徳感さえなければ……いや、可愛いのでそれほど大きな問題はないのだが。

「みゆ先輩、それは妥当なことだと思うぞ」

「どうしてよ？私のどこが子供なの？」

「童顔な顔と体型という見た目だろ。あとはその子供っぽい性格も問題だな。大人には絶対に見えない」

そうなんだ、彼女は本当に中身まで容姿相応な幼さが残る。

みゆ先輩は恋をまだ知らない。

例えるなら、彼女はつばみ、どんな花を咲かせるのが楽しみではある。

だが、俺に対して不満なのか、むうっと唸る。

「貴雅が私を子ども扱いするのってひどくない？私、こっ見えても17歳なんだよ」

「そう、“こっ見えても”17歳だよな」

「ム力つくっ！貴雅には愛が足りてない」

今度は拗ねてしまう、そういう所が子供らしいと言っている。

だが、性格を込みでみゆ先輩の魅力だと思うんだ。

これで歳相応に振る舞って見る、違和感ありまくりだ。

「先輩はそのままでもいい。ちっちゃくても俺は気にしない」

「性格の話であって、見た目の話はしていないのっ！うう、私が気にしている事を……貴雅って本当に意地悪だ。好きな子いじめってやつ？仕方ないなあ」

「どこのガキだよ。俺はそんなのとつくに卒業している」

俺はどこそのロリ先輩とは違うんだよ。

からかうのを楽しんでいる俺にみゆ先輩はこれならどうだとかばかりに抱きついてくる。

魅惑のふくらみ、密着する事でその破壊力は倍増する。

「……だったら、私が大人だっていう証拠を見せてあげる」

みゆ先輩は恥じらしいの表情を浮かべながらも、俺の耳元に甘い一言を囁くのだった。

「——私、もう子供じゃないよ。大人だってこと……確認してみる？」

彼女を年上と認めたくない理由は外見や内面、みゆ先輩の存在自体にある。

だが、もうひとつ……こんなお子様先輩に年上の魅力なんてものを感じたら負けだと思っただよ、いや、マジで。

大きな瞳を潤ませて、俺に顔を迫らせてきやがる。

「ふふっ、貴雅だつて男の子だもん」

「……負けるもんか、俺は……ま、負けない」

俺の頬を小さな手で撫で回すみゆ先輩。

くっ、こんなお子様に反応したら男として負けだ。

必死に感情を抑えこむ俺に先輩は立場逆転とばかりに。

「——さあ、始めよ。私が大人だってこと、証明してあげるわ」

そして、みゆ先輩は自分の衣服に手をかけ、露出したのは白い肌――。

緊張感と何とも言えない高揚感に身動きがとれない。

待て、俺が悪かったから早まるなあ！？

……。

「ぐはつ。めっちゃ、いてえ……」

俺はベッドから転げ落ちて、目が覚めた。

カーテンから差し込む太陽の日差し、ひんやりとした室温に現実を感じ取る。

「……夢、か。そうだよな、夢で当然だ。あんなのありえない。最悪だ、俺としたことがお子様相手に欲情しかけるとは何たる屈辱。俺があのおリツ娘に女を感じるとは……はあ」

夢でよかったと思いつき溜息を吐いて、俺は身体を起こした。どうやら変な夢を見ていたらしい。

やけに先輩が魅力的に見えたわけだ。

あれが俺の願望と言っのだろうか、冗談きついで。

さすがに彼女に女を望んだりしたら俺は犯罪者だよ、全く……。

俺と彼女にどれだけ体格の差があると思う？

小学生に手を出したらいかんでしょ……。

自己嫌悪に頭を抱えながら、時計を見て時間を確認する。

現在の時刻、『AM 11:00』…… 11時？

「ちょっと待て、今日は約束の時間って何時だ？」

急いで枕元においてある携帯電話でメールを見返す。

昨日の夜に俺に届いた一通のメールの中身。

『明日の11時半に駅前で待ち合わせ。デートの約束、忘れないでよね』

……そうだ、今日はみゆ先輩との初デートの約束をさせられていた。

前回の元カノ事件で危機感を抱いたらしい。

『私とデートしてよ、貴雅。私の方がいいに決まってるもん！』

まあ、恋人である以上デートもありだろう。

だが、行き先が遊園地とは……いや、悪いとは言わんが似合いますぎだろ。

とりあえず、駅前に集合と言う話になったのだが、急いで準備しなければ間に合わない。

「つたく、ロリ先輩が妙な事をしに夢に出てくるから」

俺は夢で見た身体のラインを思い出し、更なる自己嫌悪に襲われる。

やべえ、俺、知らない間に変な方向に向いてないよな？

「……俺にロリッ娘属性はないはずなんだが」

年上趣味な俺としてはアレは好みから大きく外れている。

「やれやれ、冗談は夢の中だけにしておいてくれよ、俺」

肩をすくめて自分の考えを否定すると、俺は着替え始める事にした。

時間ギリギリに駅についた俺はみゆ先輩にさっそく怒られる。

「おそーい。デートの待ち合わせで女の子を待たせちゃダメー!」

「時間に間に合ったんだからいいだろう」

「せっかく、『待った?』『ううん、今来た所よ』ってしようと思っただけ、1時間も待たされたら言う気もなくなっただわ」

「約束の1時間前に来たみゆ先輩が悪い。そこまで責任は持てない」

しかもそんな定番、実際にやるやついないだろうに。

「で、何で1時間前に来たんだよ?時間を間違えたのか」

「違うもんっ。は、初めてのデートだから緊張して……」

なるほど、俺も似たような経験あるから分かる。

どうすればいいのか分からなくて、困って、時間より早く来ちゃったりしたっけ。

俺は微笑すると、先輩は馬鹿にされたと勘違いしたらしく、

「むっ、何よ。そんなに笑わなくてもいいでしょ」

「まあ、気を楽しんでくれよ。俺相手に緊張するのもおかしい話だろ」

「……貴雅だから緊張するんじゃない、バカっ」

小さな声で何かを囁いた彼女、照れてますなあ。

俺はその着ている洋服に何気なく目が行く、想像してたより普通の服装だ。

ピンク色のダウンコートを着ている先輩に俺は言う。

「みゆ先輩の私服ってゴスロリ系とかだと思ってた」

「は？私がロリータファッションなんて着るわけないし」

「そうか？よく似合うと思うぞ。甘ロリ系とか着せたらやばいね」

絶対に傍に近づきたくないけどな、似合いすぎて、ヤバい方向に行きそうで怖い。

みゆ先輩の冷たい眼差し、何やら考え込むと俺にビシツと指を突きつける。

「ううつ。今日は私のことを子ども扱いするのは禁止！いいわね？」

「……善処しましょう」

思わず、夢の出来事を思い出して、少しの罪悪感から俺は素直に答える。

さあて、この初デート、どうなることやら……。

地元の駅から電車で揺られて数十分、そこには海をテーマにしたテーマパークがある。

そこは夏は大いに賑わうのだが、冬は水をテーマにしているだけに人気は少ない。

とはいえ、俺も子供の頃から何度も来ている場所だ。

遊園地としてアトラクションもそれなりに楽しめるし、恋人とのデートには悪くない。

「まさか男の子とこの遊園地に来る日が来るなんて……」

みゆ先輩は嬉しそうに呟くと子供みたいにはしゃぎだす。

辺りは想像通り、子供を連れた家族連れは少なく、男女のカップルが目立つ。

さすがにこの寒さ、無邪気に遊びたい気持ちにはなれんよ。

「どこから回る？どこに行く？うわあ、なんだか悩んじゃうなあ」

……いたよ、無邪気に遊ぼうとしている先輩がここにいた。
パンフレットを手に、どこに行きたいか検討している様子。

「とりえあず、寒いから野外系はパスの方向で」

「そんなの遊園地に来た意味ないでしょ！あ、それじゃ、これはどう？」

「……マイナスの世界を体験、ってなぜに真冬に氷の世界を体験せねばならない」

室内型のアトラクションで気温マイナス何十度って世界を味わえるらしい。

「文句言わずについてくる。今日は思いっきり楽しむんだから覚悟してよ？」

みゆ先輩が主動のデートだ、ホント、どうなるんだか……。俺は「分かったよ」と頷くと可愛らしい手を俺に差し出してくる。

「何してるんだ、先輩。お手の練習か？はい、お手」

「違うっ！誰がワンちゃんだ。私は犬じゃない。手を繋いで欲しいのに決まってるでしょう」

「寒いくせに手袋してないから。しょうがないな」

手を繋げば恋人らしいとも思ってるんだろう。
この箱入り娘さんは可愛らしい。

「えへへっ。温かいね……。それじゃ、行こうよ」

手を繋いだけで笑顔になる、そういう先輩の純粹な所は嫌いじゃない。

「まずはマイナスの世界を体験しにレッツゴー」

「いや、外も十分寒いから。わざわざ寒い所に行くのはどうか、と」

俺は別に北極にも南極にも興味はないし、ペンギンさんに会いたいわけじゃないのだ。

だが、先輩は俺を引き連れて進んでいく。

……ホントにしょうがないな、今日はとことん付き合つと決めることにしよう。

「今日は楽しいデートになるといいなあ」

「それはみゆ先輩次第だろ？」

「ええー。貴雅次第だよ。私は恋愛初心者だもの。私を楽しませて

ね？」

既にその時点で年上のお姉さんらしさはないわけだが、それもみゆ先輩も魅力ですか。

ついに始まる初デート、いい思い出になればそれでいい。

……だが、ひとつだけ問題があるのを言わせて欲しい。

どこからどう見ても、俺と先輩のふたりは仲のいい“兄妹”です、恋人には見えないのは仕方ない。

お兄ちゃん、可愛い妹とのデートを楽しむことにしますか。

第11話：ロリ先輩、恋を知る時

【SIDE：初音美結】

遊園地デート、私にとって貴雅との初めてのデートなんだ。

恋人になって2週間が過ぎて、未だに唇同士のチューはしていない。

私は貴雅を好きになりかけている。

それは彼の元カノが出てきた時に本気で奪われたくないと思った事から実感したの。

でも、恋を知るにはまだ経験不足。

なので、今回はデートを試してみる事してみました。

それにしても、初デートをして改めて“経験”ってすごいなと思う。

私なんてはしゃいでいないと緊張しちゃってどうしようもないのに、貴雅はいつもと変わらない様子で私と接していた。

「おい、みゆ先輩。次のジェットコースターは大丈夫なのか？」

「ここのは怖いらしいけど、ジェットコースターは好きだから大丈夫！」

「いや、身長が足りているかの心配なんだ。おっ、140センチ以上だって。みゆ先輩の身長でも大丈夫そうだ」

「そんな心配はしなくていいっ！」

このように貴雅はちょっと意地悪だったりする。でも、私は彼が優しい事は誰よりも知ってるの。

普通の男の子なら私の我がままに付き合ってくれたりしない。

「きゃーっ。超楽しい！」

コースターに揺られながら隣の貴雅を見る。

彼も別に苦手と言う様子もなく、こちらと視線があつた。

「……この上りが終わった後が1番ヤバいから覚悟しておけよ？」

「ふーん。そんな余裕よ、受けて立つわ」

私は上昇を続けるコースターに楽しみを抱きながら、しっかりとレバーを握る。

次の瞬間、コースターは急降下して円を描くように一回転した。落差のあるスピード感がたまらない。

やっぱり、ジェットコースターは迫力あるし、スリルが最高だね。

一周を終えた後、私は貴雅に「もう1度、乗ろうよ」と誘う。それがあんなことになるなんて。

——数十分後。

私はジョットコースターから降りてふらついていた。

「ああ、頭がぐらぐらする。目が回るよう」

「そりゃ、3回もジェットコースターに乗り続けたら酔うだろ」

あまりにも楽しくて何度も乗ったのが間違いだった。

これがデートだってことも忘れちゃったし、貴雅は2回目でやめたから普通に平気の様子、私だけバカみたいじゃない。

私は気分を悪くして貴雅に介抱される。

「ほら、飲み物を買ってきたぞ。オレンジジュースでいいんだな」

「ありがとう……」

「とりあえず、寝るなりして休め。落ち着いたら楽になるはずだ」

私はベンチに寝転がると、貴雅が膝枕してくれた。
まずは額に缶のジュースをのせて冷やす。

「気分はどうだ？」

「冷たい。でも、気持ちいい。……貴雅、ごめんね」

「こんな事は何でもない。先輩ならいつかバカすると思っていたしな」

「そんなの予想しなくていいよ。あう……」

怒るでもなく、呆れるでもない彼は私が安心するように優しさで包み込んでくれる。

……私には貴雅を好きになるという目的がある。

だけど、それは適当に彼氏が欲しいからじゃない。

貴雅を好きになっても後悔しない、確信が私の中にあつたからだ。
迷惑とか思われたら嫌だけど、今のところ彼に私を嫌悪する感じは受けない。

このまま甘え続けることが悪い事だというのは分かっている。
でも、私には貴雅に甘えることがひとつの幸せだったりするんだ。

「ふにやつー!？」

いきなり、貴雅が私の頬に触れてびっくりした。

「あ、悪い。驚かせたか？いつまでもこいつを乗せたら温くなるだろうつて」

頭を冷やし続けていたジュースを私に手渡す。
少し休んだおかげもあって、気分も調子もずいぶんと楽になってくる。

「貴雅、身体を起こしてくれない？」

「はいはい。これくらいでいいか？」

私は貴雅に肩を預けるような格好で恥ずかしくなる。
今までも十分照れるんだけど、本物の恋人みたいに寄り添うと気持ちが高ぶる。

私はオレンジジュースの蓋を開けて飲み始めた。

「ん、ちょっと復活。もう大丈夫かも。次の所にいこうよ」

「おいおい、無理はするなよ？」

私の心配をしてくれる貴雅に悪い気がする。
初めてのデートなのに私って何してるんだろ。

「ホントに大丈夫よ。その代わり、貴雅に手を繋いでもらっけど」

「はあ、それならしばらくは軽い奴で行こうか。これなんてどうだ？」

彼が指差したのはメリーゴーランド、子供が楽しそうに乗って遊んでいる。

彼がにやつとするので私は不機嫌そうに言う。

「はっ、そうしますか。貴雅は意地悪さんだよ。子ども扱いしないって約束したでしょ」

どうせ、私にはメルヘンチックがお似合いです。
自分の髪をいじりながら拗ねると貴雅は否定する。

「……違っつて。その横だ、横。さすがに俺もみゆ先輩にアレに乗れとは言わない」

「その横……？ふえ？だ、ダメっ！！あれはもつとダメ！」

その横はもつとひどい、だって大嫌いなホラー系なんだもんっ。
ボートに乗って、水の上を進んでいくタイプのアトラクション。
それにホラー要素なんて足さなくていいのに。

「何だよ、ザブンツと水しぶきになるタイプじゃないぞ？ゆっくりと進むから大丈夫だって。……それとも、あれか？ホラー系ダメなのか？まさかそんなわけないよなあ？みゆ先輩、大好きだろ？」

「べ、別に怖がりなわけないし！ただ、ホラーなんて時期じゃないでしょ。あれが楽しいは夏だけよ。冬にホラーなんてつまらないも

ん。そうよ、時期はずれなものにわざわざ乗る事なんてないわ」

「……真冬にマイナス温度の世界を体験させたのは誰だ？ いいから行くぞ」

ふにゃー、連れて行かないでよお。

抵抗むなく、手を握ってるために逃げられない。

分かってはいたけど、時期はずれと水物という事で人気もなくすぐに私達の番が来た。

うう、暗いの怖いよ、お化け嫌いだよ、ぐすつ。

今さら怖がっても仕方ない、私は貴雅の腕にすがりつきながら、

「……ねえ、ここってどういうコンセプトなの？」

「水をテーマにしたホラー系で幽霊だったり、化け物だったり、襲ってくるんだ。時々、ボートが揺れたりして結構面白んだぞ。……

怖いのか？ 怖いなら抱きついてくれ、胸を押し付けるようにしてな」

「ふざけるな。怖くなんかないわよ。ただ、まだ疲れてしがみついてるだけなんだからねっ」

ぎゅっとする、と彼はくすつと笑い、「そういう事にしておきますか」と言った。

胸を押し当ててとか言うし、私が怖がるの楽しんでいるに違いない。

問題のアトラクションは、子供っぽいお化け屋敷だと思っていたらボートに迫ってくる幽霊やお化けが本当に夏向けホラー映画並に怖くて震えまくる。

バカあ、こんな事にお金かけてリアルに作らなくてもいいじゃない

い。

ふえーん、怖いよ、怖いよ……また変なのが出たっ、もうやだあ。
ガタガタとボート自体も激しく揺れて、雰囲気誘い出す。

「……たかまさ……貴雅あ……うっっ」

「大丈夫だって。俺はここにいるから安心しろ」

貴雅はずるいの、だって、意地悪するくせに助けを求めるとすぐに優しくするんだもん。

落ち着いた声で私の身体を抱き寄せてくれる、ホントにずるいよ。半泣き気味の私は出口にまで、恐怖と戦いながら貴雅の温もりを感じていたんだ。

デートも終盤、最後のアトラクションは夕焼けをバックに観覧車に乗る。

絶対にこれははずせないと最後に持ってきた。

だって遊園地デートっていったらこれでしょう、少女漫画とかで憧れてたんだあ。

告白シーンだったり、キスシーンだったり、この密室は何でもOKな不思議な空間。

高所恐怖症ではないので、のんびりと景色を見下ろす。

「……先輩は自分が苦手なら素直になった方がいいぞ？」

「そっだね。じゃないと意地悪な彼氏に悪戯されるものっ」

「ははっ、そうそう。ついからかいたくなっちゃうんだよ。みゆ先輩って可愛いから」

貴雅の笑う声が室内に響く、ム力つくけど憎めない。
だって、そこには悪意なんて微塵もなくて……。

こちらに向けられる視線そのものが愛しさに満ちてるんだもの。
私は窓に手を付いて真下の景色を眺める。

高いだけあって、遊園地の全てが見下ろせる。

「夕焼けって本当に綺麗だけど、こういう場所は夜景の方がいいのかな？」

「俺は夕焼けの方が好きだな。先輩はどちらの方が好き？」

「私も夕暮れの朱色一色に染まる方が綺麗だと思う」

文字通り、ふたりっきり……これまで以上に私もドキドキしてしまっ
た。

「もう、これが終わったらこのデートも終わりだな。初デートはどうだった？」

「……楽しかったよ。途中アクシデントはあったけれど、すつごく満足した」

だから、こんなにも終わるのが寂しく感じる。

——寂しいんだ、本当に胸に寂しさが込み上げてくるんだよ。

でも、寂しいのはデートが終わることじゃない。

そっだ、私は貴雅と離れちゃう事が寂しいんだ。

今日一日でたくさん貴雅の表情を私は知った。

優しさも意地悪な所もたくさん見てきた、彼と接している時間はとても満たされる。

この観覧車が地面にたどり着いたらデートは終わってしまう。そうしたらまた明日、学校でしか会えなくて。今と言つ時間の愛しさ、もっとゆっくりと時が進んで欲しいと願う心。

これは何なの、どうして私は……。

「みゆ先輩、何かボーっとしてるけど遊び疲れたのか？」

「……貴雅はどうだった？私とデートして楽しかった？」

「そりゃ、予想通りな事もあったけど、概ね楽しませてもらった。俺って遊園地でデートするの初めてだからな。絵美とのデートは買い物や映画とかそんなのばかりだったからさ。こういう風にデートするんだって思った」

彼の元恋人である絵美の話に私の心はチクリと痛む。

彼の口から他の女の子の名前が出るのは嫌だ。

これは“独占欲”……思い出を作りたい、私と一緒にの思い出をもっと作って欲しい。

貴雅とたくさん時間を一緒に過ごして行きたい。

「……貴雅は優しくて、男の子なのに気配りできるし、頼りになるよね」

「ん、何だよ。いきなり俺の事を褒めるなんて」

「私との付き合いだって無視する事できたはずじゃない。それなのにこうしてデートまで付き合ってくれるのはどうして……？本当に

脅したくらいで付き合ってくれるわけないもん」

彼には私に絡むこと自体、メリットなんてほとんどないはず。メリットと言えば私みたいに可愛い美少女と付き合えることだけ。それは自慢は出来ても、彼自身を満たすことには思えない。

貴雅は交際相手に形ではなく愛を求めている事を知っているから。脅したくらいでこんな風に付き合う義理なんて何一つないんだ。私の疑問を貴雅は今さらとでも言いたそうな顔をして、

「放っておけないんだ。理由と言うのならあまりにもみゆ先輩が純粹だから。自分でも不思議なくらいに、みゆ先輩と絡むのは嫌じゃない。恋愛は置いといても、先輩の笑顔を見ると和む。俺はみゆ先輩の笑顔が好きなんだ」

「それが……理由なんだ？私の笑顔……ふにゃあ」

高鳴り続ける心臓の鼓動、ドキドキがおさまらない。

私は今、ものすごく顔が赤いに違いない。

貴雅と離れたくない、ずっと一緒にいたい、この寂しさは楽しさを知るからこそその感情。

……楽しい時間に終わりを告げたくない。

必然だったのかもしれない。

私がこの気持ちに目覚めて、実感してしまうことは。

ずるいなあ……本当にずるいよ、貴雅。

「みゆ先輩、もうすぐ頂上に辿り着くぞ。みて見ろ、人がゴミのようだ。なんて名台詞を言いたくなる」

「……景色よりも私を見て欲しいな」

「え？何か言ったか？……みゆ先輩？」

私は思わず自分から貴雅の身体に抱きついていた。
アクシンデントでもなく、自分の意思で彼に正面から抱擁するのは初めてだ。

私の鼓動の速さが彼に伝わってしまうんじゃないか。
そんな事を思いながらも男の子の身体を強く抱きしめる。

「私は今の今まで知らなかったことに生まれて初めて気づいたの」
そう、この溢れ出す気持ちの名前は……。

「私は貴雅が好き、大好き……。私の中で初恋が始まったんだ」

眩しいくらいに輝く夕陽が私たちを穏やかに照らす。
初音美結、人生17年目にして初めての恋心が芽生えた瞬間だった。

——そして、間近に迫る貴雅の顔、その唇に私の視線は自然と向けられていた。

第12話：私を好きになりなさい！

【SIDE：初音美結】

生まれてから17年、男の子を好きになつた事もなかった。

初恋はいつかするとは思ったら、“いつか”なんて中々こない。高校になれば恋人くらいできるはず、でも、告白はされるけど、身体目当てで誰一人私を好きだつて人はいなくて。

恋人くらい簡単に作れると友人に見栄を張つて、初めて私は現実に気づかされたんだ。

私は自分から恋するために行動した事がなかった。

これは運命、貴雅に出会ってから私は色んな事を知っていく。人を想う事、好きつて気持ちは何なのか。

恋は身体を、心を熱くさせるものなんだ。

心の底から溢れ出す、自分では制御できない強い想い。

それが恋だと私は知ったのは貴雅とのデートのクライマックス。乗っていた観覧車は頂上に達して、窓から差し込む夕陽が眩しく見える。

狭い室内、私は貴雅に抱きついて身体の火照りに戸惑う。

「貴雅。私は今の今まで知らなかったことに生まれて初めて気づいたの」

恋愛は恋だと気づいた時から始まる。

「私は貴雅が好き、大好き……。私の中で初恋が始まったんだ」

動き出すのは小さな想い、やがてそれは私の心を大きく膨れ上がりに満たすんだ。

好きだっと思って思いを伝えても貴雅は何も言わない。

この沈黙は私にまるでキスしてもいいと言う合図にさえ思える。唇が触れ合うほどの間近に顔がある。

“ファーストキス”。

貴雅は私が彼を好きになったらキスをしてもいいと言った。

それまではしちやいけないものなんだって。

「最初のキスは私から」、それが2人の間にあるルールだったの。今こそ、初キスの大チャンス。

だって、普段は身長差があつてこんなに間近で顔を見合わせることもないもん。

貴雅って男の子らしい顔つきだけど、結構可愛いかも。

そうだよな、まだ高校1年生、男としての成長はこれからだ。

ふうっと心を落ち着かせるように深呼吸して私は再びその唇に目を向ける。

密着状態で体温上昇中、冬で寒いはずなのにここの室温ちょっと高くない？

見つめ合う瞳と瞳、ゆっくりと唇を近づけていく。

……あつ、で、でも、キスってどういう風にするの？

ドラマだと唇を重ねるだけに見えるけど、呼吸法とか全然分からないし。

そつえば、よく歯が当たって痛いとか漫画のシチュとかであった。

わ、わかんないよ、初めてだから、ドキドキ……。

いざ、自分からキスをすると思うと未知の世界に足を踏み込むみたいで謎だらけ。

こういうのは経験者の貴雅にしてもらうべきなんだ。おねだりでもしてみる？

『……貴雅、して？（はあと）』

だ、ダメえ、絶対に言えないし、言ってる自分を想像したくないっ！

そもそも、今でさえ恥ずかしいのにこれ以上、恥ずかしくなると死んじゃう。

ふにゃー、どうすればいいのお。

「さっきから何をにやけたり、嘆いたり、百面相をしてるんだ？」

「ち、違っの、これには深いわけがあるの」

私は1度タイミングを改めるべく、彼から距離を取る。

うう、ファーストキスは手強いです。

貴雅は私の行動を不審がることもなく、先ほどの言葉に話を戻す。

「で、好きっていうのは本当なのか？」

「え？あ、うん……私は貴雅が好きなんだ、多分」

「……それは恋じゃないぞ、先輩」

「こらっ。人が真剣に恋心を実感しているのに否定するなあ」

貴雅は私の頬をむにと引っ張った。

ふえ、いきなり何するのっ！？

「俺が好きだっていうのが本当ならば、先輩が恋をしていると言っわけだ」

「にゃによう、いひゃいじゃにゃにの（何よ、痛いじゃないの）」

「……ホントに恋してるのか？ 雰囲気流されただけじゃないのか？」

「ちゅがう、ふおんとにしゅきなんだもんっ（違う、ホントに好きなんだもん）」

私の頬を伸ばしたりして遊ばれると彼はようやく指を離す。
そんなに痛くないけど、からかれる理由が分からない。

好きだから好きって言っただけなのにーっ。

貴雅が意地悪なのは知ってるけど、こんな時まで……ん？

その時、私は気づいてしまったんだ。

そっぽ向いて視線を逸らす貴雅の頬がほんの少しだけ赤らんでいる。

それは夕陽のせいでも、目の錯覚でもなくて。

もしかして、照れちゃってるの？

私相手に貴雅がそういう素振りを見せるなんて。

いつも余裕ぶって上から目線、さらに言えば私を子ども扱いばかりする男の子。

そんな彼の照れる顔がやっと可愛い年下の男に見えたんだ。

「ふふっ、そうか。貴雅、私に好きだって言われて照れてるのねえ」

「なっ！？ そんなわけないだろ。ロリ先輩に好きって言われたくらいで照れるか」

「隠さなくてもいいのよ。お姉さんの魅力にメロメロだと素直になりなさい」

「ある胸をはって、えらそうにするな。だ・れ・が、意識してるって？ ロリ先輩のクセに生意気だ」

そういいながらも彼は顔を手で隠してしまう、可愛い所もあるじゃない。

やっぱり、私は貴雅が好きなんだと思う。

だって、今、この瞬間、目の前の彼が愛しく思えるんだもの。

「――何度でも言うよ。私は貴雅が好きなんだ。恋してるの」

貴雅は手で顔を隠したまま、静かに私に語りかける。

「それがホントに恋だとしたら、このデートにもそれなりの意味はあったわけだ」

「うん。初めての恋、人を好きになるって意味も分かったの。だから、キスして？」

言っちゃったよ、私。

勢いに任せて自分の口から出た台詞に今度は私が頬を紅潮させてしまう。

「……ちよいと待て、みゆ先輩。世の中には両想いと片想いって言葉があるんだ」

「私の片想いだっていいたいの？何よ、私を好きになりなさいっ！」

「相変わらず、無茶苦茶だな」

「私だけ好きになるなんてずるじゃない。貴雅が私を好きになればいいでしょ？」

今さらごちゃごちゃ言うなんて貴雅らしくない。

私は別の理由があるんだって気づいたんだ。

……緊張してるんだ、貴雅だって私と同じなんだって。

私のことをちゃんと意識してくれている。

もうすぐ観覧車が終わっちゃう、キスするなら今しかない。

キスするのは大変だよ、でもね、私はそれでも……。

「好きだよ」

溢れていく愛しさの気持ちのままにキスがしたい。

貴雅との思い出が欲しいんだ、初恋記念だもん。

ありったけの勇気を込めて、私は貴雅にキスをしようとした。

それは一瞬の出来事、私がするよりも先に彼から唇を触れさせてくる。

「……んうつ」

初めてしたキスの味はレモン味でもなかった。

だけど、その行為は私に幸せをくれたの。

ずっと羨ましかった、愛されるという証。

私は今、大好きな男の子とキスしてるんだ。

「……っ……んあ……けふっ!？」

だけど、恋愛初心者の私はキスの最中に呼吸をするの忘れて（呼吸法が分からず）、思わずむせてしまう。

どうしよう、キスを失敗してしまった……あうう。

唇が離れると気まずい雰囲気かふたりの間を流れていく。

「……うわっ、もうやだあ、恥ずかしいよお」

まさかのキスの失敗に穴を掘ってそこに入りたい気分。
超がつく恥ずかしさ、でも、貴雅はそれを笑って誤魔化す。

「ふははっ。何だよ、それ。みゆ先輩らしすぎ」

「わ、笑うなあ！私だって初めてなんだからしょーがないじゃんっ」

「分かってるって。あははっ、面白いよ。今度、ちゃんとしたキスの仕方を教えてやるから。みゆ先輩は俺の期待を裏切らないな。可愛いぞ、先輩。よしよし」

ぼんっといつものように私は彼に頭を撫でられる。

ム力つくと私は唇を尖らせるけど、これが彼の気遣いだと知っている。

この失敗、貴雅じゃなければドン引きされてるかも。

彼はあえて笑う事で、嫌な雰囲気ごと、流してくれたんだ。

年下の男の子なのにホントに頼りにしちゃってるなあ。

「……むうっ。私を子ども扱いするにやー」

「そう拗ねるな、みゆ先輩。可愛い顔が台無しだ。……さて、次は俺の番だな」

「え？それはどういう意味なの？」

尋ね返すと彼は赤い夕陽を背に優しい声で言う。

「みゆ先輩は恋を知ることが目標だった。それを今日、達成したということは俺がみゆ先輩を好きになる。それが次の目標になったわ

けだろ？」

「私を好きになってくれるの？」

「それができるかどうかはみゆ先輩の頑張り次第さ。今の俺の先輩の評価は恋ではないぞ。生意気なのに憎めない可愛い感じが近所の小学生を連想させるし、何より俺は大人の女性が好きなんだ」

「ちょっと、それはひどい！私、小学生じゃないのにつ！！」

絶対に私を好きにさせてやるんだ。

むしろ、私なしじゃダメなくらいにしてみせる。

私は決意を胸に秘めて、観覧車に残り僅かな時間を彼に甘えて過ごす事にした。

初めてのデートは大成功。

恋を知り、キスもできたし、貴雅の良さを再確認できた。

しかし、私にはまだ難題が待ち受けている。

自分が人を好きになるのはそれほど苦労はしない。

でも、逆に自分を好きになってもらうのは難しいんだって。

まだまだ恋愛のスタート地点に私は立ったばかりなんだ。

これからが本番、頑張って貴雅の心を手に入れてみせる。

私の恋愛、ファーストフェイズは無事にクリア。

難題ばかりのセカンドフェイズの始まりはすぐそこまで来ていた。

第13話：初恋は人生に1度だけ

【SIDE：初音美結】

生まれて初めての恋はとても幸せな気分です。
貴雅を好きになった私は毎日が充実していた。

寝ても覚めても、頭の中は彼のことばかり。

まさに恋の病、恋わずらい状態……だって、初恋なんだもんつ。

自分がこんな風になるなんて想像もしていなかったな。

授業中でも机に寝そべりながら彼を思う。

これが4時間目だから次は昼休憩、貴雅に会える。

早く会いたいなあ……あと20分が待ち遠しい。

ちなみに受けているのは数学の授業。

私はこう見えても頭がいいので、適当に授業を受けてもテストの点は大きく変わらない。

「……こらっ、初音！お前はまた授業中に寝て、いい加減にしろ！」

でも、ぼーっとしていたらいつのまにか真横にいた先生に注意されてしまう。

ついでにポカッと教科書で頭を殴られる、角は痛いよお。

「なんだ、文句でもあるのか？成績優秀だからって、先生の授業を真面目に受けなかったお前が……」

「うう、先生が暴力振るつたあ……ぐすんっ」

私が涙をぬぐうような泣き真似をすると教室中がざわめく。
泣き真似するのはオーバーだけど、ちょっと痛かったし。

「ひどいな。美結ちゃん、殴ったよ。教師としてというより人間として最低だ」

「可哀想じゃない。ホントに先生だからって暴力が許されるって思ってるわけ？」

「初音さんに謝れよな。我らのアイドルに暴力を振るうなんて許さ
ん」

周囲の生徒からの集中砲火、先生は顔を青ざめさせていく。
このクラスはほとんどの子が私の事を好いてくれている。
さすがにクラス全員からの言葉の攻撃に先生は追い込まれていく。

「そ、そんな目で皆、私を見るな。なぜ、不真面目な生徒を注意しただけで……いや、だから、お前ら……も、もう何も言わないから私を責めるな。ごめんなさい」

先生は分が悪くなり、私に謝罪して逃げるように教壇に戻る。
教師という仕事も大変ですねーっ、と私が言ってみる。

「ありがとう」

私が皆に微笑むと彼らは嬉しそうに笑顔に包まれる。

「いやあ、美結さんのためならこれくらい何て事ないよ」

「そうそう。初音さんは私達クラスのマスコットキャラだからね」

常に守ってもらえる私って皆から愛されてるね、うふふっ。

と、私が4時間目を無事に乗り切ったので、チャイムと同時に貴雅に会いに行く。

そんな私を数学教師が何の権利があつてか呼び止める。

「ちよつと待て、初音。昼休みの前に少し職員室に寄れ」

「え？今からですかあ？……まさか、さっきの注意の続き？」

ジロツとクラス中の視線が再び先生に向けられる。

「ち、違う。あれはもういい。それとは別件だ、あと西村と河崎も職員室まで来い」

「はう、急いでるのに」

どうやら、別の問題で呼ばれたみたいだ。

私は渋々、職員室に行くことになってしまう。

後わずかに迫った期末テスト、私は毎回、それなりにいい点を取ってるつもりなの。

でも、前は数学でちよつとミスして平均点を下げた苦い思い出がある。

てつきり、その事かなと思つたら、クラスに渡しておいて欲しいプリントを渡されただけ、私じゃなくてもいいじゃない。

あれか、これはさっきの件での嫌がらせに違いない。

おによれ、先生め……覚えておいて。

私がつまらない用事で職員室から戻ってきたら、昼休憩に入つて

15分が経っていた。

貴雅を待たせたままなので、急いで私は彼の教室に向かうことにする。

「お待たせ、貴雅っ。ごめん、先生に呼ばれて……いて？」

彼の教室に貴雅を昼食に誘う私、そこで見た光景は驚きを隠せなかった。

「……あら、恋人さんが来たみたい。それじゃ、私はこれで戻るわね」

「ありがとう、助かるよ。正直言つて、今回も協力してくれるとは思わなかった」

「私は今でも貴雅の事は後輩としていい関係を築いてるつもりよ。こういう時は頼りにして。じゃあね、貴雅。他の科目はまた近いうちに教えてあげるわ」

私の目の前にいる女、それは貴雅の元恋人の沢近さんです。私にとつては天敵、だって、めっちゃ貴雅好みの大人の美女なんだもんっ。

はっ、この人、また私の貴雅に何か仕掛けようと……？
私は危機感と警戒心をむき出しに彼女たちに近づく。

「ふふっ、可愛い顔してるわね。怒った顔も素敵よ、美結さん」

超余裕の表情で含み笑いを浮かべて私の横を通り過ぎていく。
ガンっ、何だか乙女として負けた気分。

私は貴雅に詰め寄ると、事の詳細を聞き出す。

「何であの人が貴雅と仲良くお話してるの？」

「何でって勉強を教えてもらっていたんだ。もうすぐ期末試験だからな。付き合ってた頃からお世話になってたんだが、今回はダメかなと思っていたら快く承諾してくれた。絵美は優しい先輩だよ」

絶対に違うから、思いっきり下心ありだからっ！

私は通りすぎる瞬間の挑発的な笑みを見たもの。

うう、まだ貴雅は彼女に狙われているの？

「不満顔だが、どうした？みゆ先輩が気にする事でもないだろう？」

「気にするよ。だ、だって、私達は恋人なんだから」

「それもそうだな。それじゃ、みゆ先輩が教えてくれるのか？」

「人に教えるだけの頭はあるけど、沢近さんより賢いかと言われると、うう……」

私が言葉を濁す理由、それは彼女が学年首位で私は10位以内という成績の差。

悔しいけど、私が教えるよりも沢近さんが教える方が貴雅のためになる。

ちくしょーっ、今度のテストでは1位になってやるんだからあ。

私は嘆きながらも納得する事にした。

「別に今さら復縁どうこうじゃないから安心してくれ？いいな？」

「不愉快だけど、理解したくないけど……納得します」

「ごめんね、貴雅……えぐっ、私がもつと頭がよければよかったのに。」

やっぱり、沢近さんは私のライバル、今度こそ完全に倒すという決意をする。

時間もあまりないので、今日は貴雅の教室でお昼を取ることにする。

年下の子のクラスで食事なんて、めっちゃ浮いてるけど、気にしない。

まあ、私達の交際もそれなりに認められてるので前ほど騒がしくないし。

一時は一緒にいるだけでも相当騒がれて、大変だったの。

「みゆ先輩は相変わらずの小食だな」

「あれ？貴雅は今日、お弁当なんだ？可愛い女の子の手作り弁当……って、え！？」

明らかに親が作ってくれたものじゃない、女の子の手作りお弁当だ。

しかも、両親共働きという貴雅がお弁当なんてかなり珍しい。

「恋人という私を差し置いて、誰が作ったの？言ってみなさい？」

私が問い詰めると彼は苦笑いをして、素直に答えてくれた。

「ああ、これが。これは妹の手作り弁当。何でも近いうちに調理実習があるらしくて、そのための練習で今週はずっと弁当を作ってくれるんだとさ」

「貴雅って妹がいるんだ？どんな子なの？可愛い？っていうか、いくつ？」

「質問はひとつに絞ってくれ。……世間では可愛いと呼ばれているぞ。あと、歳はだな……小学6年生だ」

彼は言いにくそうに私に言うと、一応、私は話の流れで聞くだけ聞いてみる。

「ちなみに妹ちゃんの身長の方は？」

「この前、150センチになったと喜んでいた」

「ふえーん。どうせ、私は現役小学生より身長が低いですよーっ」

今日は何だかショックなことばかり続いている。

本日の運勢がそんなに悪い日なのかなあ。

私は気を取り直して妹ちゃんの話をする事に。

「妹ちゃんはお料理上手なんだ？」

「どうかな。料理するのは好きみたいだ。昔から失敗作を兄貴に食わせていたっけ」

これはかなり作りこんでると思う、見た目もいいし、美味しそうなお弁当だもん。

こついつの作ってきたら貴雅も喜ぶかな？

「妹ちゃんとは仲がいいの？いいお兄ちゃんやってる？」

「うちの妹はもう少し兄離れして欲しいくらい。まあ、妹が誰よりも仲がいいのは兄貴だけど今は大学生でいないから」

「お兄さんもいるんだ？貴雅は3人兄妹の真ん中なんだね」

私は1人っ子だから兄妹とか羨ましいな。

お弁当を食べながら彼は兄妹の話をしてくれる。

貴雅の妹の名前は天音（あまね）ちゃんって言っらしい。

お気に入りのお兄さんがいなくなつて、天音ちゃんには彼にべつたりで、お兄さんの分まで甘えてるみたい。

なるほど、彼が私に対して優しいのは天音ちゃん相手に慣れてるからかも。

絶対にいいお兄ちゃんだよ、彼が私の兄ならブラコンになるに違いない。

「今度、天音ちゃんに会わせてよ。どんな子か気になる」

何気なく言ったら、彼はハッと表情を変える。

何だかものすごく嫌そうな顔をしてるけど、もしやワケあり？

「あー、やめといた方がいいんじゃないか？」

「それはどういう意味よ？私じゃダメなの？」

「ダメというか、なんと言うか。経験談で言うのなら、絵美に会わせた事があるんだが、『もう2度とあの子に会いたくない』と言わせたほどだ。兄の俺が言うのも何だが、親しくなる女の子が極端に好き嫌いが激しくてな」

性格に難があるらしくお友達も少なく、人付き合いの不慣れさ

は兄として心配してるみたい。

人付き合いが苦手な子ってよくいるし、特別に変な事でもない。

「沢近さんが会って、私が会っていないのは不公平だよ。ちゃんと私も会いたい」

「後で悔やんでも知らないから。どんな悲惨な結果になっても俺は一切の責任は持てない。それでいいなら、紹介くらいするけど……ホントに後悔する結果になると思う」

貴雅は真剣な顔をして「やめておいた方がいい」というから余計に気になる。

「いいよ、後悔しないし、自己責任でいいから会わせて?」

「はあ。みゆ先輩の性格で引くわけないか。俺って余計な事を言っただな。どうなっても知らないぞ」

彼は天音ちゃんに会わせるが嫌みたい。

そこまで気が重くなる理由が分からない私は逆に期待している。どういう妹なのか、気になって仕方がない。

「……あつ、予備鈴がなった。私、もう教室に帰るね」

「ああ、妹の話はまたメールで連絡するよ」

「うん。楽しみにしているから、天音ちゃんによろしくっ」

先ほどから貴雅の表情が重たいと言うか、辛そうに見えるのは気のせい?

その表情を理解するのは3日後の事だったのじゃ……にや？

第14話：竜虎ならぬ子猫対決

【SIDE：初音美結】

日曜日の朝、私は期待に胸を膨らませてある場所に向かっていた。初、彼氏のお宅訪問……いざとなるとすごく緊張してしまう。でも、両親は不在みたいなので少しは気負いせずに済むけどね。

「どんな子なんだろう？ 貴雅に似てるのかな？」

それよりも今回の目的は貴雅の妹の天音ちゃんに会う事だ。しかし、貴雅からは「少々、口が悪いがその辺は覚悟しておいてくれ。あと、これだけは絶対に言わないで欲しい禁句がある。『そんな性格だから友達がいらないんだ』これだけはマジでやめてくれ」と忠告されていた。

彼に書いてもらった地図を頼りに街を歩くと高級住宅街に入った。

「……え？ 貴雅ってこういう場所に住んでるの？」

しばらくすると目的地に到着、私は驚いてしまう。

『倉敷』と表札がある、間違いなくそこは貴雅の家なんだけど。

まず一言、めっちゃ大きいお屋敷でした……すごいなあ。

広大な敷地に建てられた和風建築の屋敷、いかにもお金持ちって思う。

もしや、貴雅ってお金持ちの御曹司？

それにしてもあまりにも普通の高校に通ってる気がする。

「よう、みゆ先輩。来てくれたか。ちゃんと迷子にならずについたんだな」

インタホーンをならすとすぐに貴雅が家の中から出てくる。

「何よーっ。失礼だね、私は方向感覚はいいから問題なし。それよりもこのお屋敷が貴雅の家なの？すごくない？お金持ちだったんだ？」

「そんな大したもんじゃない。うちは祖父の代までがすごかっただけで、今はこの屋敷も見た目だけさ。某有名財閥の分家ではあるけど。本当にお金持ちの息子ならもつといい生活してるって」

「ふーん。そうなんだ。まあ、いいや。早く妹ちゃんに会わせて？」

何やらあまり深く追求して欲しくなさそうな雰囲気。
倉敷というお家柄には問題があるのかな？

「どうぞ、今日は妹しかいないから気を楽にしてくれ」

「……天音ちゃんはどこに？」

「話はしてある。客間でみゆ先輩を待つてるよ」

それにしても、本当に和風なお屋敷、こういう家に住んでるんだ。
貴雅が落ち着いてるように見えるのは育ち方なのかも。

私が案内された客間には一人の少女が座っていた。

「貴雅兄様。私に紹介したい人がいると言っていましたけど、誰なんですか？」

漆黒の長髪が印象的な綺麗な女の子、まるで人形みたいに可愛ら

しい。

それだけじゃない、彼女は薄い青色の着物を着ていて本物のお嬢様に見える。

うわぁ、大和撫子ってこんな子を言うんだろっな。

しかも、貴雅の事を兄様って呼んでるんだもん……育ちもよさそうなこの子が問題児なの？

和服姿のよく似合う彼女は私の顔を見ると、ゆっくりとこちらに微笑む。

「ふふっ、貴雅兄様？もしかして、恋人なんて言いませんよね？」

「ああ。紹介しよう、俺の恋人で初音美結って言うんだ」

「こんにちは、天音ちゃん。美結です、お兄さんと付き合ってるの」

私が挨拶をすると彼女はじっくりと品定めするような目線を向ける。

その視線が真剣すぎて、私はジッと身体を強張らせてしまう。

「……貴雅兄様、妹として警告しますわ。小学生は犯罪だと思っんです」

「誰が小学生だよっ！……もぐっ」

さっそくの攻撃に私は反論しかえそうとすると、貴雅に口を手でふさがれる。

『いいから大人しくしておけ』と彼の目が語る。

うう、現役小学生に「小学生？」と言われた私の心の痛みが分かるの？

「天音の言いたい事も分かるが、こう見えても、高校2年の17歳。人生の先輩だぞ」

「嘘でしょう？冗談はなしをお願いします。どう見ても私の同級生ですわ」

「それが冗談ではない。俺も疑問に思うんだが、学生証ではちゃんと17歳だった」

私はいつでも持ち歩いてる学生証を天音ちゃんにも見せる。
初音美結、生年月日で見れば間違いなく17歳です。

「この学生証、偽造ですわね？」

「さも当然とばかりに言うな、妹よ。残念ながら本物だ」

「……ほ、本当なんですの。世の中は不思議が満ち溢れています」

私の容姿が幼いのは世界の不思議と同等か。

どうやら信じてくれたようだけど……ちなみに私が学生証を持ち歩いているのはよく子供に間違えられるからです。

天音ちゃんはさらに私に対して酷評を連ねる。

「でも、私から見て、彼女は貴雅兄様の恋人にふさわしくありません。大体、お兄様の女性の趣味は悪いんですよ。前も見かけ美人なだけの女性に騙されていました。あれだけ忠告してあげたのに、結局、フラれて……私が思っていた通りの結果になったでしょう。それなのにまた……しかも今度は“コレ”ですよ？」

明らかに敵意を持って“コレ”扱い……見た目に騙されたけど、

口の悪さはかなりのものだ。

絵美さんが彼女を「2度と会いたくない女の子」と言った意味を理解する。

彼女の時も大変だったんだろう、私は大人の女性として我慢中。
ここで悪口を言い返したらただの子供と同じだもん。

「見た目は幼い、身長も低い……どこから見ても胸の大きいだけの
子供じゃないですか。まさか、お兄様にそちらの趣味があったとは思
いませんでした」

「俺に口り趣味はないって。天音、初対面の相手に失礼だろう？」

「あら、私は事実しかのべませんよ。はつきり言って、彼女では私
の兄にふさわしくない。そう言ってるだけです」

にゃー、この子、すごくムカツとくる。

怒っていい？もういいよね？

「ふさわしくないって、私は貴雅のことが好きだもんっ」

「好きだから？貴雅兄様、このお子様先輩のどこが好きなんですの
？」

貴雅に聞くなーっ、私はまだちゃんと好きになってもらえてない
のに。

だけど、ここはいつもの彼に任せておけば……。

「えっと、どこが好きかといわれると……ねえ？」

貴雅は普段と違い、言葉を詰まらせて考え込んでいた。

妹の前じゃハツタリすら見せられないの!?

「見た目が可愛いところとか?」

「それは否定しませんが、それなら別にこの先輩じゃなくてもいいでしょ」

「……他には?何かあるでしょ、貴雅!」

「貴方は黙ってください。私は兄様に聞いているんです」

ふみゆう、年下なのに何か怖いよ。

このお嬢様、着物の帯でも引つ張ってやろうかな……。

「いい所ねえ。思い返せば返すほど、みゆ先輩って変な子だよなあ」

「全否定!?!ひどいつ、私の事を本気にさせておいて……」

「貴方自身に魅力がないだけでは?貴方が兄様を好きになった出来事はあっても、逆はなかったというだけでしょう」

うつ、するどい……私は貴雅の優しさに惹かれたけど、私はまだ貴雅に好きになってもらうだけの事をしていない。

「図星ですか?当然ですよ、私の兄様は貴方みたいに子供っぽい女性に嫌いなんです」

「うにゅ、私の事を嫌いなの、貴雅?」

「あー、その、だな。好きか嫌いかと問われると、嫌いではなく、

だから好きといわれたらそれは違うというか……あつ、俺は少し用事を思い出したからふたりで仲良く話し合っておいてくれ。ではっ」

苦笑いを浮かべて貴雅は部屋から出て行く。

「大事な場面で逃げるな、卑怯者っ！」

不本意ながらもふたりつきりになったので、私は目の前にいる和服美少女を威嚇するように睨む。

ここから先がホントの勝負、やってやろうじゃないの。

「さっきから聞いていれば好き放題言ってくれたじゃない。大人しそつな大和撫子の見た目でずいぶんと口の悪い子ね」

「見た目のことでとかく言われるのは、“貴方だけ”にはありませんわ」

「うぐつ。ああいえば、こういう……可愛くないなあ」

「別にこれが会つのが最後の女の子にどう思われてもかまいません」

どういう意味だよお、やんのか、くおら！

はっ、いけない、子供相手に私は何を本気になろうとしているんだろう。

落ち着いて、ここは大人の余裕を見せ付けてやりなさい。

「残念ね。私はいずれ、貴雅と結婚して天音ちゃんの義姉になるんだから」

「——女の妄想を口にするのは本気で痛いのでやめた方がいいです

わよ」

可哀想っていかにも同情するような顔でこちらを見ないで。

えぐつ、私、負けない……負けないもん。

私の大人の余裕は数秒で崩れ去り、再び、一方的に責めの言葉が放たれた。

「私は兄様の恋人だという事すら信じてませんわ。どうせ、彼の優しさにつけ込んで恋人になったに違いありません」

「うん、そうだよ？」

「なつ、自分で認めましたわね？やはり、貴方のような……」

「だって、私はまだ貴雅から好きだって言われていない。彼が私を好きかどうかは微妙だし。でも、未来は分からないじゃない。貴雅は付き合ってるうちに私を好きになるかもしれないって言うてくれた。それまで、私は頑張るんだ」

もしかしたら、それまでに破局してしまうかもしれない。

そんな不安はあるけど、私はポジティブな性格だから気にしない。必ず、貴雅を私に振り向かせて見せるんだ。

私の言葉に天音ちゃんは語気を強めるようにして、

「貴雅兄様はホントに優しい方ですね。だからこそ、私は彼に幸せになってもらいたい。……貴方のような人に傍にいて欲しくないんです」

この子、ホントにブラコンなんだと実感する。

私に兄妹はいないからその気持ちは分からないけど、家族を大切

に思えるっていいと思うんだ……だからと言って、ここまでひどい事を言われる筋合いはない。

「私は貴雅の事が好き。私が幸せにしてみせるもの」

「自信だけで、そこに確証がなければただの妄想です」

「天音ちゃん……恋愛に確実、絶対なんて言葉はないんだよ」

そう、貴雅が私を好きになってくれる事が“絶対”ではないように恋愛が難しい事を私は身を持って知った。

今だって、頑張っても努力が報われるかどうか不透明なもの。

「天音ちゃんは男の子を好きになった事ある？経験がないんじゃないの？」

「あ、ありますわ。好きな子ぐらいちゃんといいます」

おやあ、顔を赤らめて可愛い反応するじゃない。

「だったら、その子と付き合えた？恋は想いを伝える難しさ、不安、色んな事を乗り越えなくちゃいけないの。現実には思い通りになんていかない。恋愛未経験な天音ちゃんに私を否定する権利はない」

私の言葉に黙り込んでしまう天音ちゃん。

どうやら“恋愛”というワードは彼女に効果的なようだ。

この方向で攻めていけば私にも勝ち目あり？

「そんなこと、貴方に言われなくても分かっていますわ」

「分かってないよ。だって、天音ちゃんの想いは片想いだもの。恋は経験、0と1の間には常に大きな差があるの。私は恋愛の経験者よ。まだ挑戦もしてない子に恋の事だけはとやかく言われたくないな」

大和撫子のお嬢様はシュンッと視線を俯かせている。

……あれ、予想以上にダメージを与えてしまった？

天音ちゃんは先ほどの覇気を失い、小さな声で言った。

「だって、仕方ないですわ。相手は私の事を嫌っていて、見てもくれない。どうせ、私の事なんて好きになってももらえない」

「どうしてそんな事が言えるの？」

「分かります。私はクラスで嫌われていますもの。親しい友達もいません。ただ、私がいまにも美人で、育ちが違いすぎると言うだけなのに。私の存在を受け入れられない庶民の子は困りますわ」

いや、その傲慢で生意気な態度が敵を作ってしまうのは仕方ないでしょう？

でも、それは天音ちゃんにとっては大きな問題のようだけど、その性格から何とかすれば？

貴雅が最初に言ってた「そんな性格だから（以下略）」の意味をようやく理解する。

「だから、その子も自分の事を嫌っている？それは確認したことなの？」

「……そんな勇気ありませんわ。可能性としては十分ある憶測です。だって、こんな私の事を好きになってくれるとは到底思えません。」

私だって、他人から好かれる性格ではない事ぐらい理解しています」

「また、それだ。全部『かもしれない』じゃない。どれもこれも確認すらしていないのに決め付けている。本当にその子が好きなら痛みがあっても挑戦しないとダメ。私だって、貴雅を好きになって色々大変だった。でもね、失敗しながらも私は少しずつ前に進める。怖くても、幸せを手に入れるためにはその痛みは必要なの」

天音ちゃんはこちらを見上げると真面目な顔を見せた。

また何か言い返してくるつもり？と構えるけど予想外の展開を迎える。

「どうしたら、私も貴方みたいに恋を経験できますの？」

私を見下していた態度を改めて彼女は私に頭を下げる。

「……あ、あのっ。私に恋愛を教えてくださいっ！」

彼女はその可憐な容姿で私に詰め寄ってくる。

「私もちゃんとした恋がしたいんです。お願いしますわ、美結先生」
「！」

えーっ、私が天音ちゃんの恋の先生！？

恋を覚えたての初心者がまさか恋を教える立場になるなんてマジですか！？

第15話：恋のレッスン、始まります？

【SIDE：初音美結】

「私に恋を教えてください。お願いしますわ、美結先生！」

貴雅の妹、天音ちゃんからの突然のお願い。

それは私に恋愛指導をして欲しいというものだった。

「やー、まだ初恋途中なのに恋を誰かに教えるなんて想像外の出来事が発生した模様です。」

「今までの非礼はおわびしますわ。ごめんなさい、美結先生。お気を悪くならないうでくださいませ」

「それはいいけど。私が先生？ワンモアプリーズ？」

「美結先生。何度でも呼びます。私にとって貴方は先生ですわよ」

人生で初めて先生なんて呼ばれたよお、めっちゃ嬉しい。

先生と言う響きの余韻に浸りながら私は尋ねる。

「はう……嬉しい。はっ、でも、何で私が先生なの？」

「先ほどの美結先生の恋愛観に尊敬しました。今まで、何人もの男の子を好きになっても、お金持ちのお嬢様である私と庶民の彼らは身分が違いすぎると勝手に諦めていましたの。“かもしれない”で諦めた恋、全てその通りです」

あれ、身分というよりも性格に問題があったんじゃない？

しかも、自分でお嬢様って言いますか、いや事実なんだけどね。
天音ちゃんには私にぐいつと距離を縮めて迫る。

「でも、そんなの関係なかったのですわ。美結先生みたいなお子様のな外見な女性でもちゃんと恋をできる、様々な苦労を経て愛を手に入れる事ができる。私はそんな貴方の苦労も知らずに失礼な事を言いました」

…… お子様って、現在進行中で失礼発言中なんですが？

「貴雅兄様は見た目ではなく、美結先生の心に惹かれた。そういう事ですわね」

「まあ、そういう事かな？」

「私は身分違いの恋を挑戦すらしていなかった。今、好きな人は本当に好きだと思える相手なんです。何としても結ばれたい、でも、私には誰か相談できるような人間は全くとっていいほどいませんの……」

友達もいないって言ってたからそれは納得できるよ。
天音ちゃんって友達がきなさそうなタイプだもん。

「今、私のような気品溢れる美女にはお友達は少ないでしょうと思いましたわね」

「……いや、そこまでは言っても、思ってもいない」

「確かに1番問題なのは私の性格だと自覚しています。私は他人とお話しているとどうしても、つい悪意を持って思った事を告げてし

まう性質の悪いクセがあるのですわ」

「本当に悪いクセだと思っよ」

悪意を持つて、と言う辺り、自覚はホントにあるんだ。

これが無自覚なら許せるわけじゃないけど、天音ちゃんって変わってるなあ。

外見は着物がよく似合う大和撫子なのに性格がコレだとギャップありすぎ。

中身は毒舌&自意識過剰な我が侬お嬢様そのものだ。

「先生は私のどこが悪いと思いますか？」

「性格全般、例えるなら無自覚でも悪口を言ってそんな辺り」

「うう、その通りですわね。身に染みこんでしまった悪意の塊は意識した所で到底変える事などできないんです」

「……なんで、天音ちゃんって人の事をそんな風に悪く言うようになったの？」

それなりの過去があるんじゃないかって思うんだ。

お嬢様にはお嬢様なりの悩みとか、色々とありそうに見えたし。

天音ちゃんは可愛い顔をきょとんとさせる。

「どうしてって、私は幼い頃から他人とは違いますの。生まれも育ちも才能も、他の人間よりも優れています。実際に私は自分より上に思える相手にまだ出会っていません。だから、無意識でも私は同年代の彼らを見下しているのですわ」

「めっちゃ、嫌な性格だね。本気で思うよ」

彼女が周囲に敵を作りまくる理由はこれしかない。

多分、学校でも今みたいにそれが“悪”でしかない事を理解していない。

悪意ある、という意識はあるみたいだけど、それは彼女にとって些細なレベル。

例えるなら、天音ちゃんにとっての悪意は“蚊に刺されたようなもの”、でも、現実には周囲の子達は“蜂に刺されたぐらい”の意識の差があるんだ。

私がその辺の事をちょっと本気で（イラついたから）説教してみる。

彼女はようやくその意識の差に気づいたらしく顔を青ざめさせていた。

「わ、私が美人で才能があるというだけなのに、周りの人間たちはそんなに心の狭い目で私を見ていたのですか。つまりは嫉妬、何て現実には残酷なのかしら」

「その時点でおかしいのっ！天音ちゃんは自分の事を過大評価しすぎ。確かにすごいかもしれないけど、自分の評価よりも他人の評価をもっと気にするべきだと思う。むしろ、少しは気にしなさい」

「美結先生は厳しい所を突きますわね。私、ホントに友達ひとりもいなくて、お嬢様はお嬢様らしくしてろって周りに言われていましたの。他人の評価なんてどうでもいいと目を瞑ってきました。それではダメなのですね」

今度は瞳を潤ませてシュンツとうな垂れて語る天音ちゃん。
彼女の性格が歪んでいるのは環境のせいでもあるのかな。

この子はこの子なりに大変なんだ……でも、そんな自分を変えたいと思っている。

「天音ちゃんは恋をしたいんでしょう？」

「ええ。私はこの嫌な性格を変えて本当の自分を取り戻したいんです。そして、好きな人に好きと言える“強さ”と“素直さ”を手にしたいんですわ。そのために恋を試してみたいと思っています」

ホントに悪い子じゃない、ひとりの可愛い純粋な子供なんだ。

天音ちゃんの期待する瞳が私に向けられる。

ここまできたら私が何とかしてあげるしかないじゃない。

「いいよ、私が天音ちゃんの恋の先生になってあげる」

「本当ですか！？ありがとうございます、美結先生」

私は彼女に抱きつかれてしまう。

素直な彼女は結構可愛い……もったいないよ、普段からアレじゃ損してばかり。

私はまだ恋の初心者、恋愛というスキルの意味じゃ貴雅から実践指導中。

でもね、見た目は子供扱いされても、ちゃんと17年間生きてきているの。

人生の先輩として天音ちゃんにアドバイスはできると思う。

これからの彼女がどういう方向に向いて生きていくのか。

私はそう言う意味での先生になってあげたい。

「恋は人を変えるの。人生を、自分自身を変えてしまう力があるの」

「……美結先生も変わりましたの？」

「もちろん。私は恋を知って、それまで体験した事のない幸せと出会えたから」

1カ月前、貴雅に出会い、恋愛というモノを教えてもらった。

ドキドキする高揚感、離れたくないと言う寂しさ、いつも傍にいたいと思う、離れたくないと願う、様々な感情は恋をして初めて知ったものばかり。

天音ちゃんにもそれを体験して欲しいの。

「本物の恋をすれば天音ちゃんもきっと変わる。優しい自分に生まれ変わるよ」

「……先生は恋の話をする時、とても穏やかな瞳をしますのね」

「うん。恋は辛い事もある。それでも、恋愛の本質は幸せになる事だと思うの」

天音ちゃんは私から離れると、丁寧にお辞儀をする。

「私は今まで、親しい人間もいなくて、こういう時、どうすればいいかわかりません。兄様達には甘えてばかりいましたし。しかし、美結先生は私をひとりの人間として見てくれます。本当に尊敬しますわ」

「尊敬とか先生とか、そういうのはやめよう？私はそんな立派な人間じゃないもの。私は天音ちゃんと仲良くなりだけ。対等になりたいのよ」

彼女は私の言葉に驚いて、「え？」と呟く。

「仲良くなりたい？この私と？ど、どうしてですか？」

「貴雅に天音ちゃんの事を聞いた時からすごく興味を持っていたんだ。今日だつてここに来るまでどんな子なんだろう？つてずっと考えたの。結果は少し違ったけれど、私は天音ちゃんとはこれからも仲良くしたいと思うんだ」

だから、先生とか尊敬とか“上”からじゃなく“対等”でありたい。

私の想いが通じたのか、天音ちゃんは私をどう呼ぶか悩み始める。

「そ、それでは、その……先生はやめておきます。どう呼べばいいんでしょう？」

「うーん。例えば、みゆさんとか？」

「……さん付けが似合わない人をそう呼ぶのは、いえ、何でもないですわ」

「めっちゃ不満そうだね？うう、いいよお。どーせ、私には似合わないだろうし。それじゃ、みゆちゃんは？私は“ちゃん”付けされることが多いし、外見的にも似合うでしょ？」

悪口を控えるようにしてるのは分かるけど、嫌味をつい言ってしまうのはクセかな。

天音ちゃんのこういう性格を変えるのは大変そうだ。

「そうですわね。それならいいです。似合いですわ。それしか

ないと思えるくらいにぴったりだと思います」

「……そこまで言われると、逆に何か傷つくわ」

「す、すみません。自分でもまだ、人を否定しないでお話するのが大変なんです」

まだまだだね、けれども、意識して直そうというのは大切な一歩だと思う。

この子はこれから変わる、私が背中を押してあげれるはずだ。

「それじゃ、今から呼んでみてよ」

「何をですか、美結先生？」

「先生はダメだよ。ちゃんと私の名前を呼んでみて？」

天音ちゃんは戸惑いつつも、深呼吸をひとつして初めて私をこう呼んだ。

「み、みゆちゃん……」

顔を真っ赤にさせて言う天音ちゃん、白い肌だから余計に可愛く見える。

そんなに照れることなのかな、と思っていたら理由はまた別の所にあっただらしい。

「いやですわ、何か友達みたいですもの……恥ずかしいです」

「……友達じゃダメなの？私はもう天音ちゃんの友達のつもりなん

「ただだな」

照れる彼女の顔を覗きこんで私は囁く。

この子が素直になるきっかけを与えてあげる。

「私が……みゆちゃんのお友達、ですの？」

「何か意外そうな顔。私が天音ちゃんのお友達じゃダメなの？」

「い、いえ。全然、そんなことないですわ。大歓迎です……。お友達って口にしたのがあまりにも経験がなかったので。私みたいな女の子でもいいのですの？」

「天音ちゃんがいいの。これから恋愛を中心に色々な事を教えてあげる。友達としてね」

天音ちゃんは嬉しそうな顔をして「ありがとうございます」と微笑みを見せる。

笑ったら、ホントに美人さんで可愛くて……大和撫子がそこにいる。

「……みゆちゃん。私のお友達としてよろしくおねがいします」

初めて、この子が歳相応の子供に見えた瞬間だった。

これからもっと楽しくなりそう……自分の恋愛も頑張らないとね。

ちなみに、貴雅はどこで何をしていたかという数分後――。

「ふたりとも言い争いをやめて、ティータイムにしないか？今、ケーキを買ってきたんだ。ほら、駅前の有名なお店があるだろ！あそこのケーキは美味いぞ。さあ、喧嘩などせず仲良く食べようじゃないか！」

と、明らかに緊張気味でケーキの箱を手にして部屋に再び入ってきた。

……逃亡者はご機嫌伺いに必死だったと見える。

貴雅って何気に修羅場に弱いよね。

その頃の私達はすっかり仲良しで、彼は「あれ？何で？」と啞然としていた。

「この数十分の間に何があったんだ、おふたりさん？」

どうやら彼はまだ険悪な雰囲気だと思っていらしたらしい。ぶー、違うもん、私達は仲良しでお友達になったんだ。

「ふふっ、貴雅。それは、語れば少しだけ長いけど……」

「乙女の秘密ですから、貴雅兄様には教えてあげませんわ」

顔を見合わせて「私たち、お友達だもんねーっ」と楽しく笑いあう私と天音ちゃん。

状況を理解できていない貴雅だけが呆然とふたりを眺めて言いました。

「——あつ、俺、今回の出番、これだけですか？」

「そこの心配かよ、私の彼氏」

そんなわけで私に可愛くて、少し素直じゃないお友達が出来ました。

第16話：最近、うちの妹と恋人が……

【SIDE：倉敷貴雅】

図書室は本を読む以外にも自習室としての使い道がある。

12月後半、迫る期末試験をクリアすれば冬休み。

その問題の期末テストを前に俺は図書室で勉強をしていた。

「違います。はい、やり直し」

「はあ。今回はうまくできたと思っていたんだが」

「何度使う公式を間違えればいいの。貴雅は理解力はあるんだから、もう少し丁寧に問題を解くクセをつけなさい」

目の前で俺を教えてくれるのは元恋人である絵美だった。

彼女は頭がかなりいいので付き合い始めた頃からこうして勉強を教えてもらっていた。

おかげで今では俺自身、成績では上の方を取れている。

「貴雅は私の教えがなくてもいい成績が取れるわ。でもね、少しのミスに気づかない事が多いの。そこさえ直せばいい」

「それが難しくてな。そういう所を絵美に頼んでるんだよ」

俺は決して優秀なタイプじゃない。

そっぴや、みゆ先輩も見た目によらず学力はいい方だと聞いていたが、アレは本当なのか未だに半信半疑だ。

「……ふっ」

みゆ先輩の顔を思い出して思わず、笑ってしまう。
別に「あの外見で賢いなんて想像できない」と、けなしたわけでもないのだが、つい笑ってしまっていた。

「あら、思い出し笑い？それとも私に対して何か？」

「すまない。ちょっと思い出した。うちの妹を覚えているか？」

その“妹”という言葉に絵美は表情をムツとさせる。

「ええ、覚えているわよ。これでもかつてくらいにイラつかせてくれたもの」

彼女と交際している時に1度だけ妹の天音に会わせた事がある。

その時は先日の子猫対決の比ではない修羅場を迎えた。

俺も思い出したくないな、あの惨劇は……。

「で、その毒舌大和撫子が何か？」

「この前、みゆ先輩と会わせてみたら最初は戦闘モードだったのに数十分、目を離していたら仲良くお友達になっただけだったって話だ。本人曰く、生まれて初めて他人に心を開いたらしい」

まさかの展開というのはこう言う事だろう。

ほとんど人を近づけさせない、我が伧姫なうちの子猫を彼女は手懐けた。

みゆ先輩の持つ独特の雰囲気は馴染んだのか、お友達宣言など初めは信じられなかったぞ。

はつきり言つて、俺はみゆ先輩を見直した。
うちの妹は典型的なお嬢様タイプの性格、並大抵の事で懐くことは
ないからな。

「……なるほど、確かにすごいわ。あの毒舌大和撫子が他人に心を
開くとは到底思えなかった。そう、彼女は外見が幼いし、相手にと
つてよかったのかもね」

「俺としてはひとりでも友人ができた事にホッとしてる」

「貴方やお兄さんが甘やかしすぎたのよ。あの子、見かけよりも性
格は意外としっかりしているわ。お姉さんとして面倒を見てくれる
んじゃない」

俺は絵美の顔をジッと見てしまう。

この人からそんな発言が出るとは思っていなかったから。

「な、何よ。何か言いたい事でもあるの？」

「いや、みゆ先輩と絵美ってそんなに親しかったっけ？」

「全然。挨拶ぐらいしか会話もした事がないわよ。でも、あの子は
小夜子からよく聞いていたもの。見た目は子供、性格も子供っぽい
けど、物事の捉え方や考え方はしっかりしているってね。なぜか自
慢げだったから、覚えていたの」

「質問。小夜子先輩とは仲悪そうだったけど、どういう関係だ？」

めっちゃ仲の悪そうな雰囲気を前回の時（告白事件）に感じたが、
今の発言で少し疑問に思えることがある。

絵美と小夜子先輩の関係、それは意外なものだった。

「……小夜子は私の幼馴染よ。いえ、そこに元はついてるかもしれないけれど」

「幼馴染？家が近かったのか？」

「お隣さん、歩いて10秒の距離。さらに言えば、私の部屋の窓の向こうは小夜子の部屋。これが男女なら恋のひとつでも生まれそうな立場関係なの」

嫌そうに答える彼女だが、そこには複雑な事情が込み入っている。うだ。

「ん、でも、みゆ先輩とは面識がないのはどういうことだ？」

「友達の友達と知り合いになる確率は少ないものよ。貴方だって友達の全てに自分の友人を紹介する？違うでしょう？それに私と小夜子の関係は中学時代に悪化していたからね。その辺の事情はあまり話したくないわ」

と言いつつも、彼女は愚痴るように語り始めた。

要すると、小夜子先輩と絵美は中学時代に好きな男の子で揉めたりらしい。

同じ相手を好きになるって言うのは珍しい話じゃない。

お互いに初恋同士、一步も引けない状況は幼馴染の関係に亀裂を入れた。

まあ、結果は小夜子先輩がその人と交際し始めて、絵美は負けたそうだが。

それからふたりの仲は当然、悪くなってしまった、と。

今でもその件は彼女達の間影を落としているそうだ。

「私と小夜子の話なんてどうでもいいの。そのロリッ娘が毒舌大和撫子が仲良くなってお兄さんとしては安心でしょう?」

「まあな。兄貴としては妹の性格を少しでも改善できるのならそれに越した事はない」

みゆ先輩と友人になったと報告してきた天音の表情は本当に嬉しそうだった。

今まで友達と呼べる相手がいなかったからな。
悩みのひとつでも相談できる相手がいるのは心強いだろ。
それがみゆ先輩になるとは俺は思いもしていなかったわけだが。

「これで少しは安心できるよ」

俺は喋りながらも問題を解いていく。

「……これならどうだ?」

「うん、正解。さすが飲み込みは早いわね。次はこちらよ」

絵美の教え方は教師のものより分かりやすい。
頭脳明晰、容姿端麗、誰もが惹かれる女の子。
性格に難がなければ、いや、俺とロリ先輩が出会わなければ今も恋人だったかもしれない。

「……あの子が羨ましくなる。私には仲良くななんてできなかったもの」

「何か言ったか、絵美？」

「いえ、何も。ほら、手を休めない。問題はまだあるんでしょう？
数学以外にも科目はあるのよ。時間は限られているわ」

「了解。頼りにしてますよ、家庭教師のお姉さん」

くすつと微笑む絵美に俺は感謝している。

人の縁というものは想像して、どうにかなるものじゃない。
本当に世の中はいろんな出会いの積み重ねなんだと実感していた。

夜になって俺が家に帰ると妹が玄関に駆け寄ってくる。

「あーっ、おかえりなさいませ、貴雅兄様。今日もみゆちゃんとお話していたんですよ」

「そうなのか。ここの所、テスト勉強で会えていないと思ってたらそっちにいたのか」

ふたりが友人になってから数日、携帯電話や直接会って話をして
いるようだ。

俺は夕食を食べるためにリビングに向かう途中も、妹はみゆ先輩
の話をする。

「みゆ先輩と仲がいいみたいだな」

「ええ。初めてのお友達なんですもの。あ、でも、話していて気づ

いたんですけど、みゆちゃんは兄様のこと、あまり知らないみたいですね。誕生日すら教えていなかったのですの？」

「そういうのって機会がなければ話すものでもないだろう？」

「ダメですわよ。彼女は『貴雅って自分の事をあまり教えてくれないんだよ』と拗ねていました。恋人なんですから色々教えてあげればいいでしょう。貴雅兄様には乙女心が分かりませんのね」

天音に軽く注意されてしまったので、俺は肩をすくめる。

色々教えると言われても、そんな大した人生を送ってきたわけじゃない。

ネタになるような事なんて特別ないぞ？

「普通に生きてきた人間だ。特別に話す事なんてそんなにないさ」

「それでも、女の子は好きな人の事を知りたいものなんです。些細な事でも知りたい、それが乙女ですもの」

「そういうものかね？天音もそうなのか？」

「ふえ？わ、私ですか？それは、まあ……」

天音が顔を赤らめる、へえ……彼女もお年頃なワケだ。その辺の事情でふたりが仲良くなったのかもしれない。繊細でピュアな乙女心など男にはいまいち分らないな。

「私、今までお友達なんていらなかったと思っていました。でも、それはただの我慢でしたのね。やはり、誰かとお話するのは楽しいものです。今まで気づけなかった事に驚かされる毎日です」

天音は兄から見ても素直じゃない性格だ。

家族に対しては甘えたりと人懐っこい本来の性格を見せるが、他人の前では別人にも思えるくらいだ。

そういう意味では、みゆ先輩の存在は良い意味で彼女に影響を与えるかもしれない。

「彼女のどういところが気に入ったんだ？」

「みゆちゃんは優しいです。普通の人なら私みたいな捻くれた性格の子だと距離をとるでしょう？彼女はちゃんと真正面から受け止めてくれるんです。まるで姉みたいに思っています」

「自分で捻くれたというな、妹よ。兄は少しばかり悲しいぞ」

俺や兄貴のせいでもあるんだろう、甘えさせてばかりだったからな。

異性の姉妹でもいれば、少しは違ったかもしれない。

可愛く笑う天音、本人が楽しそうなのが1番いい。

「で、今日の夕食は何だ？今日も天音が作ったんだろう？」

「はい、私の手作りなんですよ。明日は調理実習なのでその予行練習です」

「……5日続けてコロッケがメインの食事と言うのも何とも物悲しいな」

「ちゃんと味付けは変えていますのに。兄様は文句が多いですよ」

妹の練習台になってやるのも兄の務めだろう。

例え、調理実習の課題であるコロッケが5日連続朝昼晩と続いたとしてもな……。

俺は苦笑いながらも、美味しそうな料理を眺める。

「悪かったよ。それじゃ、いただくとしよう」

「今日のはアレンジを加えてカレー味なんです。自信作ですわ」

妹はこれからどんな風に成長していくのだろうか。

きつと、その成長にはみゆ先輩が関わっていくのだろう。

「いいお友達ができてよかったな、天音」

「はいっ。貴雅兄様には感謝していますわ」

だが、しかし……俺にはひとつの予感があるんだ。

この流れだと次回から3話ぐらいは俺の活躍はないだろう、と……。

「ん？兄様、何を嘆いていますの？」

「なんでもない。いただきます」

今後のみゆ先輩の活躍に期待しておくでしょう、変な事しなきゃいいけどな。

第17話：ロリ先輩の本領発揮

【SIDE：初音美結】

私は天音ちゃんの恋を本格的に応援する事にした。

私は彼女の恋愛を教える先生なの。

最近ほぼ毎日、彼女の家に行き友人として仲を深めている。

親しくなってから毒舌っぷりも影を潜め、天音ちゃんは可愛らしい一面を見せてくれる。

天音ちゃんは常に家では着物を着ているみたい。

昔からの習慣らしいけど、礼儀作法もしっかりしている本物のお嬢様だ。

私は彼女の部屋でいつものように雑談を交わす。

今日の話題は貴雅のこと、正確に言えばこの倉敷家についての事だ。

「……でも、前に貴雅に聞いたら倉敷って普通の家と変わらないって」

「貴雅兄様は以前からこの倉敷という家柄があまり好きではないみたいです。実際は大財閥の分家でちゃんとした家柄ですもの。この辺り一帯はお金持ちの家が集まっていますが、その中でもトップクラスですわ」

「へえ、倉敷って本当にすごいんだねえ」

やっぱり、これだけのお屋敷を持つだけの家ということ。なぜか貴雅は家のことについて触れられたくないらしい。お金持ちだって事も気にしていたみたいだし。

それに比べて、天音ちゃんは本当に我が侂好き放題で育てられたお嬢様。

自分の家柄もしっかり自慢、ステータスとして誇りを持つてる。

「そうだ。そろそろ、天音ちゃんの恋の話を聞かせてよ。相手はどんな子なの？」

まずはどうい子が好きなのか尋ねてみる。

「相手は同じクラスメイトの男の子ですわ。川相英信（かわいいひでのぶ）というカッコいい子なんですの。ほら、写真もありますわよ。この人が私の好きな相手ですの」

彼女が机の引き出しから取り出したのは数枚の写真だった。

サッカーボールを蹴る男の子、女の子にモテそうな子だ。

「この子が天音ちゃんの恋の相手なんだ？」

「ええ。以前にクラス対抗でサッカーの試合をしている彼の姿を見て一目惚れしましたの。クラスの女子からも人気があるみたいですよ。とても男らしい子ですよ」

小学生ながらも、しっかりとした顔つき、これは将来有望かも。

「あれ？隣の子は？」

私が気になったのはその隣に写る別の男の子。

カメラ目線というか、明らかにこちらを見て写っている。

写真を撮っていた天音ちゃんを見ていたのだろうか。

「ああ、その子は小林周介（こばやし しゅうすけ）。私の隣の席の男の子ですの。彼も優しくて気配りできる良い子ですけど、川相君と比べて見劣りしますわ。ふたりとも地元のサッカー部に所属しています」

「そーかなあ、私的にはこちらの子の方が天音ちゃんに合いそうな気がする。」

外見で決め付けるのも何だけど、私は川相と言う男の子が好きにはなれない。

小学生のくせに、いかにも、女の子慣れしてそうで軟派な嫌な感じを受けた。

その分、こっちの子はピュアそうだし。」

「……で、川相君の評価はどうなの？ちゃんと聞いた？」

彼女は自分の事を嫌い、勝手に好きじゃないと決め付けていた。

その辺の改善指導、というわけでさっそく自分の事を聞いてみるように行っておいたんだけど、天音ちゃんは顔を赤く染めてしまう。

「む、無理ですわ。私にはやはり無理でした」

「何で？聞いてみないと始まらないじゃない」

「だって、そんなの……自分が相手に興味があるなんて伝える事は告白と同じくらいに緊張しますもの。すぐにはできませんわよ。話しかけるのすら、大変ですのに」

別に付き合いたいですっ、という言い方だけじゃなくても知る方法はあると思う。

「私のこと、どう思う？」「くらいじゃ告白とは別物だと思うけど。」

好きな相手に話しかける事すら緊張してしまうのかもしれない。
そうか、私ってその辺のことも考えてあげて教えてあげないといけないんだ。

……うう、何だか恋愛初心者の私に大変なミッションだよ。
これが恋愛のベテランなら色々と教えてあげられるんだけど、私も異性に対してそれほど親しくした経験もない。

「私はみゆちゃんにお願いがありますの」

「お願いって何なの？私にできることがあるのなら協力するけど」

「実は……明日の放課後は彼が小学校のグラウンドでサッカーの練習をしていますの。そこで、あの、私の事を聞いてきてくれませんか？」

「……えっと、私が？」

いきなり小学校に侵入しろって言われて呆然としてしまう。
世間一般からロリ系と呼ばれる私でもそれは無理でしょう。

「さすがに小学校は無理だつてば。バレたらどうするの」

「みゆちゃんなら大丈夫です。見た目的にも違和感ありませんもの」

現役小学生に違和感ないって言われる事に胸が痛む。
私ってそんなに童顔なのかな、ぐすんっ。

「ダメですか、みゆちゃん……？」

天音ちゃんは大きな瞳を潤ませながら私に助けを求めてくる。

はうう……ど、どうしよう!?

翌日、私は放課後1度家に帰ってから小学校の前に立っていた。放課後とはいえ小学校はまだ残ってる生徒で賑わっている。子供達の声が響く中で私は緊張した面持ちで校門を通り抜ける。

「——小学校よ!私は帰ってきたわっ!」

誰かの名台詞に私は意気込んでいた。再びこの場所に足を踏み入れる事になるとは人生っておかしなものね。

卒業以来、5年ぶりにこの場所に戻ってくることがあるなんて想像もしていなかった。

さらに堂々と入るために仕方なく5年前に着ていた小学校の制服を着るなんて。

「……制服のサイズが胸以外ぴったりというのがムカつく」

胸の辺りだけが成長しているせいでかなり上着がキツイ。

それなのに他は全然余裕で着れたと言う罍。

身長は当時からどれだけ成長していないの、と、そこにショックを受ける。

早くミッションをクリアしてここから逃げ出したい。

昨日、結局私は雨で濡れた子猫のようにすぎる天音ちゃんのお願いを断りきれなかったの。

ターゲットの川相君は運動場でサッカー部の練習をしているらしい。

私はすぐに聞き込みを開始する事にした。

ここまで来たら、やるだけの事はやるしかない。

こんなところ、知り合いに見られたら恥ずかしさで死ぬ。

「……え、そこにいるのって美結さん？」

と、思っていた矢先に私はとある知り合いから声をかけられてしまった。

「ふにゃ！？眞理（まり）ちゃん？」

小夜子の妹の眞理ちゃん（小学5年生）と偶然にも遭遇してしまう。

「どうしてここに？しかも、その格好は……？」

「これには深い事情があるの！お願いだから小夜子には内緒にしておいて」

もしも小夜子に知られたらとんでもなく恥ずかしい。

私は事情を説明すると彼女は納得してくれたみたいだ。

「ふーん。そういう事なら案内してあげる。美結さんも困ってるみたいだし」

「ありがとう。眞理ちゃんはお姉ちゃんと違って優しいよねえ」

「まあ、小夜子姉さんは個性が強い人だから美結さんも苦労してるでしょ。あ、サッカー部の子に話しかけたいならこっち側から行っただ方がいいよ」

というわけで、私は心強い味方を得て一緒に聞き込みを開始。先輩である天音ちゃんの事は眞理ちゃんも知ってるみたい。

「学内で噂のお嬢様だよ。めっちゃくちやすごい豪邸に住んでいるんだって。しかも、性格も傲慢でお嬢様っぽくてあまり評判はよくないなあ。私は会った事ないからよく分かんない」

「やっぱり、そうなんだ。アレでも可愛い所はあるんだけどね」

あの子が人前で素直になるのって結構大変なのかもしれない。彼女のように見かけだけで色々決められてしまう子には特にね。実際に天音ちゃんはお嬢様っぽい我が侬な性格なのでフォローしにくい。

「川相って男の子はサッカー部のエースで評判いいよ。うちのクラスでも気になる子もいるし。6年生の女の子だと、もっと好きな子も多いんじゃないかな」

眞理ちゃんの言う通り、運動場には彼目当ての女の子が応援している。

「……話しかけてみる？」

「それが出来る状況ならいいけど、今は無理そう。私は他の子にも天音ちゃんの評判を聞いてくるね。眞理ちゃんも手伝って。あ、その女の子、ちょっといいかな？」

今は練習中で声をかけられないので、私は周囲の子から聞き出す事にした。

誰一人私を同年代と疑う事もないのが悲しいけど、みんなからの情報は聞いた。

「天音？ああ、お嬢様。あの子、嫌い。はっきり言って他人を見下しすぎてるもの」

「私も嫌い。人に対して悪口しか言わないし、彼女と普通に話したことなんてない」

というように女子からはすこぶる評判が悪いようだ。

男子からも聞いてみると「外見に騙される」とか「さすがにアレだけ我が侘な女子だと付き合いきれない」とか同じように否定的な意見が返ってくる。

「本当に天音さんって嫌われてるんだ」

「素直になれないだけなの。本当はいい子なんだよ」

「美結さんもそればかり。フォローしづらくなってきたんでしょ」

眞理ちゃんは苦笑いを浮かべていた。

うう、このまま否定的な意見で終わっちゃうのかな？

サッカー部の練習が休憩に差し掛かったので私はターゲットの川相君を探してみる。

女の子達に囲まれていて、私が話しかける余裕はなさそうだ。いいご身分ですこと、ホントに嫌なタイプだなあ。

私は仕方なく他の子に話しかけようとする、どこかで見かけた子がいた。

「あの子って確か……？」

そうだ、天音ちゃんの写真で見た男の子、名前は小林君だった？
私は彼にも話を聞いてみる事にする。

「え？倉敷さんのことをどう思ってた？」

「そう。今、色んな子に聞いてるんだけど、キミはどう思う？」

「……ぼ、僕は可愛い子だと思っているよ。話してみると意外に話
しやすく、イメージと全然違う。周りは彼女を悪く言う子が多い
のは確かだけどね。何ていうか、人前で無理に他人を拒絶している
みたいな所もある」

いた、天音ちゃんに対して好意的な印象を抱いている男の子。

「小林君って、天音ちゃんのことか気になるの？」

「き、気になるっていうのはあくまでクラスメイトとしてだけで、
別に好意の対象と言うわけじゃないんだ。本当だってば」

慌てて否定する彼に私は確信を抱く。

この子、きっと天音ちゃんのことか好きなんだ。

だから、あの時の写真のカメラ視線に納得する。

彼は天音ちゃんを見ていたんだ、うわぁ……どうしよう。

ここで彼女の好きな人があの川相だなんて言えない。

「……これから天音ちゃんと仲良くしてあげて。彼女は今、変わ
ろうとしているの」

私の言葉に彼は静かに頷いた。

ホントに見た目どおりの子だったな……あの子をすきになれば天音ちゃんだっていいはずなのに。

天音ちゃんも彼を好きになればよかったのに。

「あれ、そう言えばキミってどこのクラスの子？見かけた事ないんだけど？」

「ふわっ！？えっと……私は……」

いけない、私の正体がバレる前に撤退しないと。

私が逃げようと後ろに下がろうとすると、誰かにぶつかってしまった。

「おやあ、小林。何だよ、可愛い子じゃん。お前のファンか？」

私にぶつかり、声をかけてきたのはターゲットの川相だった。

チャンス到来、でも、彼はあからさまに私の胸を見つめて言う。

「……なあ、アンタの名前は？俺、一目見て気に入ったんだけど」

「私のことより、貴方にひとつ質問があるわ。倉敷天音をどう思う？」

「あのお嬢様か？外見は綺麗だけど、話した事もほとんどない。綺麗な女の子は好きだけど、アレはどうか。あの子を落とすくらいなら、俺は別の子を狙うよ。なあ、それよりも俺はアンタの方が興味があるんだ」

川相は私の身体にいきなり触れてくる。

ちっ、この軟派な男、私を口説きに來たな。

「そう、私に興味があるの？なら、私の事を少しだけ教えてあげるわ」

私は肩に触れてきたその手を振り払うと言いつつ放った。

「私、お子様って嫌い。私が興味を持つのはもっと大人な男なの」

啞然とする彼、天音ちゃんも厄介なのを好きになったなあ。
雰囲気が悪くなる前にこの場を去ることにしよう。

「美結さん、そろそろ行こうよ」

ちょうど眞理ちゃんが声をかけて助けてくれた事もあり、その場を離れる事ができた。

年下相手に反応するほど私は見た目通りのお子様じゃないもん。

「ありがとう、眞理ちゃん。助かったわ」

「うん。でも、彼相手にビシツと言える美結さんもカッコよかったよ」

「そりゃ、さすがにお子様相手だからねえ」

お姉さんを相手にするには彼はまだ子供ってことだ。
一応、任務は終了したけど、結果はあまりよくない。
これを天音ちゃんに伝えるって言うのは酷かもしれない。

「本当に大変なのはこれからなのかも」

私は小学校の校門でふと懐かしい在学時を思い出す。

あの頃の私は恋なんてしていなかった……人生、少しだけ損して
たかもね。

第18話：恋は経験、いざ勝負！

【SIDE：初音美結】

なぜか小学校に侵入するという任務を終えた私は天音ちゃんに報告する。

まずは小学校の制服を着替えるために再び自宅に戻った。

今日は華道のお稽古があると言っていたので、ちょうどいい時間になっていた。

「ん、みゆ先輩？またうちの妹にようか？」

ちょうど彼女の家の玄関前で貴雅に会う。

制服姿という事は今、学校から帰ってきたんだ。

「貴雅っ！」

久しぶりだからつい嬉しくて私は抱きついた。

最近テスト勉強で中々会えなかったんだよね。

大好きな恋人の温もりにへこんでいた気持ちがちょっと回復。

「……相変わらずだな、みゆ先輩」

「むう、恋人に対して冷たい反応。ハッ、まさか私の知らない間に元力ノとの距離を縮めていたりして？私を捨てないで」

元恋人と図書室でふたりっきりというシチュエーション。

恋人の浮気を疑いたくないけど複雑な心境です。

「人聞きの悪い事を言うんじゃない。絵美とは普通に教えてもらってるだけだ。心配するな。で、我が家に来たのは俺に用事じゃないんだろ？」

「天音ちゃんに会いに来たの。でも、貴雅にも会いたかった」

「ありがと。そっぴゃ、天音の様子がどうもおかしいんだが何かあったのか？」

貴雅は妹の恋に気づいていないみたい。

天音ちゃんの秘密でもあるので私は隠し通す事にした。

「……ひ・み・つ」

「俺に秘密なんてみゆ先輩のクセに生意気だ」

むにーっと軽く私の頬を引っ張って貴雅は笑う。

「にゃ、にゃにをするのよっ」

「ほら、さっさと素直に喋ったらどうだ？」

「うう、天音ちゃんとの約束だから話したくないの」

それには仕方ないと諦めたのか彼は私の頬から手を離す。

「なるほど。みゆ先輩、俺は彼女が他人にもっと心を開いて欲しいと思っている。みゆ先輩と友達になってから少しずつ変わっていると思うんだ」

「任せて。ちゃんと責任もって私が天音ちゃんを支えてあげる」

貴雅は「みゆ先輩に感謝する日が来るとは……」と褒めているだ
かよく分からない。

「貴雅はいつも一言が余計なの！私だってやる時はやるんだよ」

「……信頼しているけどな。なあ、みゆ先輩。今度の日曜日は予定
あるか？」

「ふみゆ？別にないけど、って……次の日曜日はクリスマススイブじ
ゃん」

そういえば、期末テストが終われば楽しい冬休み。

そして、迫るのは恋愛イベントのクリスマススイブだった。

今年は彼氏ができて初めてのクリスマスだからめっちゃ楽しみ。

「も、もしかしてデートのお誘い？」

「そうだ。恋人同士だし、何も用事がないなら一緒に過ごすか？」

「もちろんっ。楽しみにしてるからね。やったあ！」

貴雅って私の事を子ども扱いばかりして全然恋人として接してく
れていないけど、こういう所の優しさは大好き。

クリスマスデートの約束に私は気分をよくする。

「それじゃ、予定の方はこちらで立てておくよ。みゆ先輩も何だか
分からないが、天音の事を頼むぞ。そろそろ、華道の稽古の時間も
終わりのはずだ。ついてきてくれ」

貴雅はそう言う家の中へと案内してくれる。

相変わらず大きなお屋敷、通されたのはいつもと違う客間、静かな室内で部屋から一人の女性が出てくる。

「あら？貴雅さん、女の子連れとは珍しいですわね？」

「紹介するよ。一応、これが俺の恋人。こう見えてもひとつ年上の先輩だ」

「そうなの。可愛い女の子ですね。お嬢さんのお名前は？」

女性に尋ねられたので私は「初めまして、初音美結と言います」と挨拶する。

綺麗な女の人だけど、天音ちゃんの華道の先生かな、それともお姉さん？

「そう。初音さんと言うの。貴雅さんをよろしくお願いしますわ」

美しい笑みと書いて“美笑”と読みたくなる微笑みを見せると、彼女は廊下を歩いてく。

うわぁ、物腰の柔らかい上品な美人さんだったな。

「……誰？天音ちゃんの先生？結構、若くて美人な先生だね」

「いや、あれは俺の母親。天音に華道を教えているのは母さんなんだ」

「へえ、貴雅のお母さんだったんだぁ……って、貴雅のお母さん！見た目的にどう見てもお姉さんにしか見えなかったんだけど？も

の淒く若くない？あれでホントに人妻なんだ？」

子供がいるなんて思えない容姿だったのでびっくり、普通にお姉さんだと思っていた。

天音ちゃんに似ている気がしたから、貴雅は父親似なのかも。

「見た目の事でみゆ先輩に言われるのはどうかと思うが。見た目は若いがちゃんとした実母だ。まあ、俺を生んだのが18才の頃だったというからな。年もまだ十分に若いはずだ」

……18歳の時って、若いなあ……あれ、何か引つかかる？

「……そうなんだ。びっくりした。あつ、それなら私もちゃんと挨拶しておけばよかった。どうしよう、私、自己紹介もちゃんとしてないよ。せつかくのアピールチャンスがあ」

「名前だけで十分だろ。その辺は俺が説明しておくしきにするな」

あう、こういう第一印象って結構大事だと思うんだけどなあ、残念……。

部屋のふすまを開けると中には着物を着て、生け花をする天音ちゃんがいる。

黙っていれば気品溢れるお嬢様。

こういう仕草や行いがすごく様になっている。

「天音、みゆ先輩が来てくれたぞ。俺は部屋に戻るからあとはよろしく」

「はい、貴雅兄様。みゆちゃん、来てくれて嬉しいですわ」

貴雅が部屋から出て行くのを確認して私は結果を報告する。

「頑張つて小学校で色々と聞いてきたよ」

「本当ですよ！？さすが私の親友のみゆちゃん、ありがとございます」

私の手を握り、嬉しそうな顔で言う天音ちゃん。
その顔を曇らせるかもしれないと思うと気が重い。

「……で、どうでした？川相君は私の事をどう言っていました？」

「えっと……それは……」

私が言いよどむと彼女は苦笑いを浮かべながら、

「その反応はあまりよくなかったみたいですね。いいんです、私の評価は自分でも大体把握しているつもりですもの。どうせ、皆さんから『あのお嬢様は生意気だから嫌い』とかそんな程度の反応だったんでしょう」

「天音ちゃん……」

「そんな顔をしないでください。私が普段からちゃんとしていないのが悪いんです」

そう言いながらもやはり客観的な事実にはショックのようだ。
顔を俯かせてしまう天音ちゃん。

私は思い出したように小林君の話をする。

「でも、ちゃんと天音ちゃんの事を理解してくれている子もいたよ。ほら、小林君って男の子がいたでしょう。あの子とも話したんだけど、天音ちゃんの事を……」

「小林君なんてどうでもいいんです。私が気になるのは川相君だけです」

小林君、残念……いい子なのに天音ちゃんには眼中にもないらしい。

絶対、あの軟派男より小林君の方がいいはずなのに。

「……私、決めましたわ。明日、勝負してみます」

「え？告白しちゃうの？」

「ダメならダメで諦めが付きますわ。私、今まで告白もした事がありません。けれど、逃げてばかりいたくない。自分の思いにけじめをつけてあげたいんです」

この数日で天音ちゃんは自分の中でそれなりの変化があったみたい。

「……明日の告白、みゆちゃんも付き添ってくれませんか？」

「また小学校に潜入？あれはもう嫌なの」

「お願いしますっ。天音ちゃんだけが頼りなんです」

潤んだ瞳で私を見つめてくる彼女のお願ひだけは断れない。
意気込みを見せる天音ちゃん、恋は経験、いざ勝負！

翌日の放課後、私は再び小学校の制服を着て、校舎内にいた。

「――私はただ駆け抜けるだけ……！」

またまたどこかの人の名台詞風に私は覚悟を決めて小学校に突入。

ここまでできたら恥は我慢です。

天音ちゃんは緊張した面持ちながら、川相を呼び出すことに成功したらしい。

「……みゆちゃんは初めて告白した時、どうでしたか？」

「緊張したし、受け入れてもらえるかどうかすごく不安だった」

「ですわよね。私も不安ですの。でも、ダメとか考えるより、まず行動しておきたい。私は恋に挑戦してみたいんですわ」
今日の天音ちゃんはすごく前向きだ。

冬の寒さに負けないように身体を震わせながら、私は少し離れた場所待機。

ここで影に潜みながら私はふたりの会話を聞く事にする。
すぐに川相が来ると天音ちゃんは顔を赤らめる。

あんな男のどこがいいのか、絶対、付き合えても痛みを見るに違いない。

「倉敷みたいなお嬢様に呼ばれるとは驚いたよ」

「……川相君にお話があって呼びましたの」

「ちょうどいい、俺も倉敷に聞きたいことがあったんだ」

「私にお話が？それでは、そちらから先にどうぞ」

天音ちゃんは緊張からか告白を後回しにするみたい。

川相は私たちの予想していなかった言葉を告げる。

「昨日、学校をうるついていた美少女って倉敷の友達？この学校の子じゃないよな？」

「え？あ、ああ。みゆちゃんですね、彼女は私の友人ですわ。本当は違う学校の子ですの。昨日はワケあって、この学校に遊びに来ていただけですわ」

「……実は昨日あの子と会って話をしてたんだけど、俺、かなり気に入ったんだよ。倉敷の知り合いって言うのなら紹介してくれないか？ぜひ、もう1度会いたいんだ」

あのおバカっ、天音ちゃんに何という事を！！

川相の言葉に彼女は状況を把握できていない様子。

「え、え？それはもしかして、川相君はみゆちゃんが好きという事ですか？」

「気になるっただけだ。可愛い子だし、結構気が強い。俺の好みって気の強い子なんだよ。俺の周りにいる連中って、ちやほやされるだけで、はつきり言って恋愛対象にならない。俺にはつきりモノを

「言える子が好きなんだ」

「……………！」

——告白する前に、その恋が終わってしまう。
まさかアイツが私に好意を抱く結末は完全な予想外。

「みゆちゃんには付き合ってる男の子がいますわ」

「それっぽいな。昨日のあの態度を見れば何となく分かる。でも、もう1度会いたい。人を好きになるのってこういう気持ちなのかもしれないな」

こいつが少しだけ真面目なのは分かったけど、気づかぬうちに天音ちゃんをグサリと傷つけているのは許せない。
静まり返る中庭、やがて、天音ちゃんにはっこりと微笑を浮かべた。

「……………みゆちゃん、お呼びですわよ」

彼女は私の方を向いて、私を呼び出してくる。

こんな事になるなんて思いもしていなくて、私は出て行こうか迷う。

「来てください。川相君が話をしたいそうですの」

「天音ちゃん……………」

「何だ、今日も来ていたんだ。また会えたな、みゆ」

私が出て行くと川相は嬉しそうな顔をする、呼び捨てにするなバカ男。

それよりも、私は1番やってはいけない事をしてしまった気がした。

彼女の恋を応援しておきながら、彼女の恋を潰してしまうなんて。

「あ、あのね、天音ちゃん」

「……私はお邪魔ですわね。あとは任せますわよ、みゆちゃん」

「今から説明すればまだ間にあうって」

「いいえ。もういいんです、これが結果と言う事ですもの。明らかに答えでしょう」

そう言って私の横を過ぎ去る天音ちゃん。

告白は無意味だと悟り、涙ぐんでいたその横顔に私は振り向いて止めようとする。

「——天音ちゃんっ！」

だけど、走って逃げてしまう彼女を追いかける事はできなかった。どうしよう、私……天音ちゃんを傷つけちゃったよお。

私は目の前のニヤけたバカ男を睨みつける。

とりあえず、こいつだけはお姉さんが肅清してやんよっ！！

第19話：素直が1番なんだって！

【SIDE：初音美結】

天音ちゃんの恋は川相が私に告白すると言う事で終わってしまう。好きな相手から別の女の子が気になるなんて言われたら誰だってショックだよ。

ふみゆー、私はそんなわけで川相を睨みつけているのです。

「……もしかして、それって睨みつけているつもり？だとしたら可愛すぎ」

「うつさい、何をしているのよ。せつかく、天音ちゃんが勇気を出して……」

「俺に告白するつもりだった、だろ。分かってる、昨日の事も雰囲気もそんな感じだった。じゃなきゃ、他校生であるみゆがこの学校に来てまで倉敷に付き合うはずがない。あ、悪い。言っとくけど、みゆの事は気にいつているが好きじゃない」

「え？それじゃ、さっきのは……？」

彼は別に私を好きになったわけじゃなかったらしい。

あれは口から出任せ、という事はどういうこと？

川相はちよいと真面目な顔をする私に言うんだ。

「俺って告白される事が多いんだが、俺には本命の子が別にいる。他校生の子だから、うちの学校の連中は誰も知らない。だから、告白されても困るだけなんだよ。倉敷の事も、断るという意味では答

えは同じだ」

「へえ、モテ男さんはそれなりに考えてはいたんだ。でもね、アンタのしている事って、結構、男として最低。恋する女の子の気持ち、考えてあげるつもりなら告白をちゃんと受け止めてあげるべきだった。“答え”は同じでも“結果”は違う」

天音ちゃんは傷ついたはず、予想していた痛みとは違う痛みで……。

「みゆはちゃんと受け止めているのか？ひとつ、ひとつの人の想いを。俺には無理だね。悪いが、俺に恋するのは他人の勝手だ。そこまで付き合いきれない」

「川相の言うことも間違っではないわ。私も彼氏ができるまで、色んな人から告白ぐらいいはよくされてた。それを受け止めていたかと言うと私も受け止めていなかったと思う。けれど、私は恋をして気づいたの」

そうだ、私も他人にどうこう言えるほど偉くはない。

私も川相みたいに男の子から告白された時にキツイ言葉で断った記憶もある、読まずに捨てたラブレターも数多くある。

それは私の場合は胸に興味を持つ男の子ばかりだったから。

「想いが大きくなって、告白しようと思う気持ち。好きだって気持ち。その意味、もう少しちゃんと考えて受け止めなくちゃいけないんだって。他人の痛みを知るという事も、恋愛には必要だと思う」

「……それが例え、見ず知らずの相手だとしてもか？」

「ええ。相手が誰であれ、自分を好きになつてくれたんだモノ。川相は天音ちゃんからの想いに逃げたでしょう。面倒だから？それとも……」

「最初に言つただろ。俺は他人の痛みを受け止めたくない。告白を断れば、大抵相手の女の子は傷ついて泣くんだよ。それが嫌だ、だから自分から身を引いてくれればそれでいい。いつもの断り方なんだ。別に好きな相手がいると間接的に伝えて相手に告白させない。みゆみたいに俺は他人の恋愛を大切には思えない」

子供のくせに彼は彼なりにこの問題に考えがあるんだろう。それを否定する事は、意見を押し付けるだけで意味はない。

「ダメでも告白はさせてあげるべきだわ。相手に自分の想いを伝える、それができないと例えダメだつても未練が残るもの。お子様のアンタにはまだ理解できないと思うけどね。本気で恋をするのって常に全力、大変なものなの」

人が違えば受け止め方も、考え方も当然違う。世の中に物事に対しての“正しさ”はあつても、それは“絶対”ではないから。

しょせんは他人の考えは別物、それを自分のモノにするかどうかは自分次第。

「……最後にひとつだけ言っておくわ」

冬の風に私は肌寒さを感じつつ、私は淡々とした言葉を彼に言う。

「女からしてみれば、アンタみたいに想いから逃げて見ないフリするタイプって1番嫌いよ。アンタも恋しているなら相手の立場にな

って考えて見なさい。自分がされて嫌な事、いつか他人にされて平気でいられるかしら」

「それは……」

黙り込んでしまう川相に私はそれ以上、何も告げずに立ち去る事にした。

まだ本物の恋愛を知らない子供とは言え彼には彼の意見がある。それを捻じ曲げるつもりはないし、する気もない。

ただ、今後、彼が成長していく中でその“意味”に気づけばそれでいい。

私は中庭を後にして失恋した天音ちゃんを探す事にする。昔懐かしい校舎内を歩き回るけど、どこにも姿はなくて。

「うう、この辺は新校舎になってるから余計に分かりづらい」

私がいた頃と違い、ずいぶんと変わった場所もあって迷子になりそう。

天音ちゃんは学校内にまだいるはずなんだ。

運動場、中庭、図書室、保健室……思い当たる場所を片っ端から見てもわる。

どこにもいないよ、天音ちゃん。

「……あれ？そうだ、6年生の教室っ！」

私は廊下のプレートを見上げながら彼女の教室を探す事にする。すぐに目当ての6年生の教室が並ぶ階について、教室を覗いた。

「何組かわかんないけど……あつ、いた」

彼女はそこにいた、机に頭を押し付けるようにして沈んでいた。けれども、私は教室にはいる事はできなかったんだ。

なぜなら……彼女の前には一人の少年が優しくそんな顔で頭を撫でていたから。

「私、バカですもの。人に嫌われる事だって平気でしますわ」

「それが嫌われると分かっているならやめればいいじゃない。倉敷さんは僕から見て、わざと他人と距離を作ろうとしている気がするんだ」

その男の子は以前に会った小林君だった。

天音ちゃんに好意を抱く男の子、失恋に沈む天音ちゃんを慰めている。

「何かと金持ちを自慢している嫌なお嬢様、それが周りの望む私だったんです。あの人はカッコいいから人当たりが言いに違いない、あの子は美人で優しいんだ。どうせ、人はイメージによって色々と決め付けられるものでしょう」

「だから？周囲のイメージなんて関係ない。倉敷さんはその通りにならなかったっていいはずじゃないか。僕は少しだけど本当のキミを知っている。我が侬だけど可愛い所がたくさんあるって事を……」

「か、可愛い？私ですか？そんなの初めて言われましたわ」

天音ちゃんは可愛い、素直になれただけだもん。

私は教室の陰に隠れて中を覗き込みながら二人を眺めていた。

天音ちゃんは顔をあげると、小林君を純粋な瞳で視線を向けた。

「小林君は以前から私に優しいですわね」

「そうかな？」

「そうですね。思えば、貴方ぐらいですもの。私がこうして普通に話せる相手というのも。今日だって、泣いてる私を慰めてくれました。どうしてですか……？」

ここで「どうして？」と聞かれる小林君は大変だ。

それが意図的なものと言えば、天音ちゃんに好意を示すことになる。

だからと言って、素っ気無いふりをしても彼女は傷つくだけ。

この選択、男の子としての重要な選択肢だよ、頑張つて。

私は影ながら小林君を応援することにする。

彼は困った顔をしながらも、ひとつの答えをだす。

「……それは、倉敷さんが気になる相手だからだよ」

おおっ、そっち路線にお話を持っていくの？

小林君はしどろもどろながら、言葉を続けていく。

「僕は以前から倉敷さんの事、気になっていたんだ。この子はこういう子なんだろって。だから、その、どうしてというのは……」

僕は倉敷さんと仲良くなりたいんだ」

「ふふっ。面白いですわ。小林君は私に興味がありますの？」

天音ちゃんは彼に穏やかな微笑みを浮かべた。

先ほどまでの涙はもうそこにはない。

ふたりだけ（私は隠れている）の教室で彼らは今、何を想うのか。

「私、この学校の生徒には無関心だったんです。きっと、今回の事すら本気ではなかった。でも、だからこそ、気づけましたわ。私も小林君に興味を持つ事にします」

「は？え、えつと、僕に？」

「ええ。このクラス全体に興味を持つにはもう卒業まで時間もありませんから無理ですわ。だけど、小林君ひとりなら興味を抱いても大丈夫でしょう」

困惑気味の彼、うう、天音ちゃんって無自覚でそういう事をさうりと言うんだ。

それが彼女なんだけど……どうなるのかな？

「何か不思議だけど、お互いに興味を持つ事はいい事だと思うんだ」

「はい。私もそう思います。また今度、私のお話に付き合ってくださいますか？」

「も、もちろんっ。僕でよければいつでもいい」

小林君は天音ちゃんに気があるからいいとして、彼女はどんなんだろう？

それにしても、失恋のショックは何とか乗り越えられたみたい。……やっぱり、人間って素直になるのが大切です。

小林君が帰ってしまったのでようやく私は教室にはいる事ができた。

「天音ちゃん、変な事になってごめんね？」

「いえ、みゆちゃんは協力してくれてありがとうございました。私、自分は恋愛をしていると勘違いしていましたの。川相君の気持ちは恋じゃなかったみたいです。本当の恋、まだまだ手にするには時間がかかりそうですね」

彼女はもう大丈夫、気持ち切り替えている。

「——案外、幸せっていうのは身近にあるものじゃないかな？」

私が何を指しているのか、天音ちゃんには理解できているようで「そうかもしれませんわね。私、その事に気づいてしまいましたものの……」

顔を赤らめて答える彼女はいつもの大人びた女の子ではなく、年相応の女の子だった。

いつか小林君と天音ちゃん、ふたりがいい感じになればいいなあ。

「みゆちゃん。改めてお願いしますわ。恋についてこれからもって教えてください」

「私にできることなら何でも協力してあげるよ。だって、私達は友達でしょ？」

放課後の教室に二人の笑い声が響き渡る。

「はいっ。私達はお友達です」

天音ちゃんはきつといい方向に変わることができると思う。

私もそれまでに対応できるようにしっかりとレベルアップしていないと。

貴雅が好きだから、彼に好きになってもらうんだ、まずはそこから頑張ろう。

「……みゆちゃんがいれば貴雅兄様も“こちら”にいらしてくれませんかっせんわね」

「え？それはどういう意味？」

「い、いえ。何でもありません。ただの独り言ですの。さあ、帰りましょう」

天音ちゃんの言葉に私の知らない貴雅の現状が込められていた事を私は知らなかった。

……私はまだ彼の事を本当によく知らないんだと思い知らされるのは数日後の話。

第20話：初喧嘩しちゃった！？

【SIDE：初音美結】

地雷を踏む、と言う表現がある。

誰にだって他人に触れられたくないものくらいあって。

私は貴雅の過去という地雷を踏んでしまったらしい。

「……みゆ先輩、それ以上は踏み込むな。これ以上、俺は話すつもりはない」

私に強い言葉で牽制する貴雅、そんな彼を今まで見たことなくて。

「た、貴雅？」

「好奇心旺盛な性格は知っているが、人を不愉快にさせてまで知りたいと思うか」

冬の肌寒さ以上に彼に嫌われてしまった現実に身体が震える。

私は彼を怒らせた、それだけが事実だ。

どうして普段、温厚な貴雅が怒っているのか。

その事件は今から数分前にさかのぼる。

学校の食堂でいつものように食事をした後、中庭でジュースを飲みながら雑談する。

天音ちゃんの事件解決後も私と貴雅の接点というのはテスト期間

中なのでこの時間しかない。

「もうすぐテストだね。それが終わったらデートだよ」

「……終わる前から余裕だな。みゆ先輩って頭はいい方なのか？」

「まあね。こー見えても、勉強は得意なの」

うちの学校は進学校、学力のレベルが高いので上位の成績に入るのはかなり厳しい。

なんて言いつつも、私は中学の頃は学年トップも取れた事あるけど、今じゃ10以内に入るのが精一杯。

上には上がいるわけで、もちろん現状でも大したものだと自負しているけどね。

「最近、天音と遊んでばかりいるから心配していたんだ」

「テスト期間中だからって勉強はおろそかにしてないよ。天音ちゃんと遊んでいる時間くらいはあるもの。貴雅はまだ1年生なんだからそんなに真剣に頑張らなくてもいいじゃん。もう少し、肩の力を抜けば？嫌でも3年になれば受験勉強で大変なんだし」

「その発言は余裕のある人間の台詞だな。俺はそこまで賢くもないし、余裕もない」

これは小夜子経由で聞いたんだけど（情報源は絵美さん）、貴雅は目指している大学があるみたい、そこにいくために日々努力していると言っわけらしい。

まあ、テスト前に遊ぶ余裕がないのは当たり前だけど、どうにも彼には余裕がなさ過ぎる気がするの。

成績が悪いわけじゃないのに、何かに焦っているようにさえ見えてしまう。

『……みゆちゃんがいれば貴雅兄様も“こちら”にいらしてくれませんか？』

そして、天音ちゃんが数日前に呟いた発言。

その真意を確かめることはできなかったが、何かワケありな雰囲気はあった。

こちらにいら続けるという言葉、つまり彼はここからどこかに行く可能性があるという事。

それが大学進学という意味ならば普通のことと特別な事じゃない。ただ、うちの学校だと地元になりにレベルの高い大学があるので、卒業後はその大学に進学と言うケースが圧倒的に多い、割合的には6割ぐらいかな。

もちろん、他の大学に進学や、さらに上のレベルの大学へ進学する子もいる。

私は地元を離れる気がないので、このまま地元の大学に進学するつもりだ。

貴雅は違うのかもしれない、うう、まだ先の話だけど気になるなあ。

直接、聞いてみようかな？

んー、でも、答えてくれるかどうかは分からない。

彼氏の事が気になるのは恋人として当然とはいえ、直接聞くのは難しい。

「……ねえ、貴雅のお兄さんってどんな人なの？」

直接聞くより前に情報収集として別の質問をする。

それがまさかの“地雷”を踏むなんて思ってたんだ。

「俺の兄貴？また何でそんな質問をしてくるんだよ」

「え？あ、ほら、天音ちゃんからよく聞いてるし。いいお兄さんなんでしょう？」

その質問に明らかに貴雅の表情が強張った気がする。後になって思えばそこで止めておけばよかったんだ。

「……そんな事は天音に直接聞けばいい」

彼から珍しく素っ気無い答えが返ってきた。いつもと違う反応に私はさらに尋ねてしまう。

「貴雅から教えてくれてもいいじゃない？大学生のお兄さんでしょう。貴雅に似ているとか、そう言うの聞いてみたいだけなのに！。むうっ。何か貴雅が冷たい」

「そんなの知ってどうする？滅多に家に帰ってこないからみゆ先輩が会う機会はない。それでなくても忙しい人だ」

「あ、別に会いたいわけじゃなくて。ただ、聞いてみただけで……」

何だろう、お兄さんの事を尋ねただけなのに不機嫌気味。

お兄さんが嫌いなのかな。

うつん、別に天音ちゃんからそう言う話は聞いていないし。

仕方ないので、そこでお兄さんに対しての追求をやめる。

時計を見れば昼休憩が終わるまであと15分くらい。

私は話題を変えようと他の話題を探す。

そっだ……貴雅のお母さんの話も興味あるんだ。

「それにしても、貴雅のお母さんってすごく美人で綺麗な人だったね」

「……それ、もしかしてわざと言ってるのか？」

「ふみゆ？わざと？私、変な事言った？」

「いや、何でもない。俺の勘違いだ」

さらに不機嫌度UPしちゃったご様子、何が悪いの？
もしか家族ネタは話題にしない方がいいのかな？

「うちの母親は華道の先生なんだよ。何流って言ったのは忘れたが、本職だ。よくそれで仕事に出かけたりしている。暇な時には妹に教えているわけだ」

「へえ、すごいんだ。そういえば……あれ？」

私は何かに引っ掛かりを感じて言葉を止める。
何だろう、私、この流れで何かマズイ物に気づいた気がする。

「どうした、みゆ先輩？そんなマヌケな顔をして」

「どんな顔しているっていうのよ。そうじゃなくて、うーん、何だっけ？」

私は以前、彼女と出会った時の会話を思い出す。
何かが気にかかる、抜けないトゲのように何か大事な事に引っかかってる。

『見た目の事でみゆ先輩に言われるのはどうかと思うが。見た目は若いがちゃんとした実母だ。まあ、俺を生んだのが18才の頃だったというからな。年もまだ若い』

……そうだよ、貴雅のお母さんって18才の時に貴雅を生んでるという事はもちろん、彼の兄はそれよりも前に生んでいるはず、それより前って……あー、これ、何か聞いちゃいけない話題な気がするにゃ。

「お、お兄さんとはいくつ歳が離れていたんだっけ？」

「俺より5つ上の21歳、大学3年生。これでいいか？」

引つかかっていた謎は私にひとつの答えを与える。

そうか、貴雅がお兄さんの事を話したくない理由ってこれかな。

「——もしかして、上のお兄さんとは血が繋がっていないの？」

私のこの言葉がふたりの間に亀裂を生む。

「……違ったかな？」

「いや、その通りだ。俺の母は後妻だからな。兄貴とは異母兄弟という事になる。天音とは実兄妹だが、兄貴とは半分しか血の繋がりが無いな」

淡々と静かに言う彼にこれ以上は“いけない”と言う気はしていた。

こういう家族の話題に踏み込む事がいけないことくらい分かって

いた。

なのに私は好奇心を抑えきれずに言葉を続けた。

「それって、貴雅があの家を出たがっているのと同関係あるの……？」

勝手な憶測だけど、私は貴雅のことを知りたい。

「俺がいつ、そんな事を言った？少なくともみゆ先輩の前で言った覚えはない」

「天音ちゃんから聞いたの。ここを離れるつもりなんですよ？どうして？」

「……さあ、そんな予定はないから答えようがないな」

誤魔化されたとはつきり分かる。

それは地雷のような触れてはいけないもの。

「何よ、私にだけは教えてくれてもいいじゃない。私は恋人だもの、知りたいと思う」

私はよく周囲が見えていないと言われる、いつも真っ直ぐ前しか見ていない。

その時、貴雅がどんな表情をしていたのか見ていなかった。

「……みゆ先輩、それ以上は踏み込むな。これ以上、俺は話すつもりはない」

低い声で私を叱り付けるように貴雅は言う。

「た、貴雅？」

「好奇心旺盛な性格は知っているが、人を不愉快にさせてまで知りたいと思うか」

彼は私に対して怒っていた。

いつもは優しさに溢れる瞳に怒りの感情が込められていたの。

感情的にはないけれど、その怒りに私はシュンツとしてしまう。

「ご、ごめんつ。私、変な事を……」

「休憩終了だ、俺は戻る。今日も放課後は絵美に勉強を教わるつもりだから。じゃあな」

彼は早口でまくし立てるように告げると身を翻してしまう。

「貴雅、待ってよ。わざとじゃないの、ホントにごめんつ」

貴雅はいつも悪口は言っても優しくて、こんな態度は見せた事もなかった。

私が悪い事をしてもし方がないなあ、とか言って許してくれるのが常だった。

「……みゆ先輩、服を離してくれ」

私は彼の制服のすそを掴んで引き止める。

このまま別れたら、気まずい展開になりそうで必死だった。

「だったら、私の話も聞いてよ」

「また今度な。今は休憩終了、話なら次の機会にしてくれ」

「今じゃなきゃダメなのっ……あっ!？」

彼が私の手を掴んで無理やり制服から離させた。

元々、彼と私の身長差は約40センチ、大人と子供ぐらいある。私の抵抗なんて最初から意味がないのは分かってる。

彼に掴まれた手、何だか知らない男の子みたいで怖かった。

貴雅は何も言わずに手を離して振り向きもせずに歩き出す。

「……貴雅……うっ……」

ど、どうしよう。

これって喧嘩……だよな？

初めて男の子とこんな険悪な雰囲気になってしまい、私はショッ
クを隠しきれない。

「私のせいだ、私が余計な事を言ったから」

貴雅に嫌われちゃったらどうしよう!？

うう、これで破局とかしちゃうかも、とか嫌な事ばかり考えてしまっ
た。

あんな風に怒った貴雅を見たのは初めてだった。

初喧嘩に私は戸惑いながらも、自分の事ばかり気にしている自分
に気づく。

「そうだ、違うじゃない。私が彼を傷つけたんだ……」

誰もいなくなった中庭に私は授業の始まるチャイムが鳴り響いても動けずにいた。

自分のした何気ない行いが恋人を傷つけたと言っ事実^{じじつ}に泣きそっ
になっ^なって^ていたから。

うえーん、私のバカあ……どうすればいいのあ。

第21話：貴雅の秘密

【SIDE：初音美結】

貴雅と喧嘩しちゃった私は放課後になるとすぐに天音ちゃんと会う。

彼女の部屋で私は事情を説明して落ち込んでいた。

「うえーん。私はバカだよお」

「ホントにバ……いえ、みゆちゃんは少し考えが甘いだけですわ」

「今、バカって認めた？天音ちゃんも私をバカだって言った。うわあーん」

「ご、ごめんなさい。悪気はありません。落ち着いてください」

大粒の涙を浮かべる私は自分のした事の責任を強く感じる。

私は彼の事を考えずに、ただの好奇心で貴雅を傷つけてしまった。彼には彼の悩みがあるのだと理解してあげられず。

私は子供だ、普段から皆に言われる通り、外見だけじゃなく中身もお子様だ。

「えぐっ……貴雅に嫌われちゃった。破局しちゃうかもお」

「貴雅兄様はそんな事ぐらいでみゆちゃんを嫌いになったりしませんわ。大丈夫です。多分」

「でも、怒ったもん。私に今まで見せた事がない顔で怒っていたの」

私は彼に叱られた事が辛い、彼を傷つけた事実が辛い。

「普段、貴雅兄様は温厚で嫌な顔はしても、怒ることなんてよほどの事じゃない限りありませんわね。私も1度だけしか怒られたことがあります」

「私も口が悪くて、意地悪はされるけども怒られたことなんてなかった。いつも甘えてばかりいて。貴雅の事、ちゃんと理解してあげられなかった」

彼氏との初めての喧嘩、どう仲直りしていいかも分からない。

ただでさえ、私はまだ貴雅にちゃんと好きになってもらえていない。

……もうダメかもしれないやー。

「ほら、みゆちゃん。泣き止んでください。これから帰ってくる兄様に謝ればいいじゃないですか。きっと許してくれます」

「……本当にそう思う、天音ちゃん？」

「ええ。私の時も時間が経てば許してくれましたもの。兄様は優しい人ですから、ちゃんとお話すれば許してくれるはずですわ。私も微力ながらお手伝いします。そうだ、まずは何か飲み物でも飲みましょう」

天音ちゃんは廊下にいたお手伝いさんに何かを告げると戻ってくる。

こつこつこのを見るとお金持ちのお屋敷って感じがする。

「ふわあ、ああいう使用人って本当にいるんだね」

「普段は両親がいませんもの。家の中の掃除や食事のお世話、いつも助かります」

「そうなんだ。天音ちゃんも貴雅も大変だ。あつ、そうだ。天音ちゃん。上のお兄さんの話って聞いてもいいかな？」

私が貴雅と喧嘩する原因にもなった家族構成のお話。

何か微妙な関係そうなので聞くのは躊躇いがあるけれど、中途半端な情報だったから喧嘩にもなっちゃったわけで。

私は今、貴雅の事がちゃんと知りたいの。

「私のお兄様は光里（みつり）と言います。光里お兄様はお父様の前のお母様の子供、つまり私とは異母兄妹になりますの。とても優秀な人なので、将来は倉敷家の跡取りとして、この家を継ぐ……はずでした」

「はずだった？何かあったの？」

「ええ。しかし、光里お兄様は本家のお嬢様と親しき仲で、そちらの方と結婚されるかもしれない。そうなれば、倉敷家の跡取りは貴雅兄様になるんです。それがどうにも彼らの問題みたいで」

こういうお金持ちの家の問題は複雑だと一般人の私でも推測できる。

「そっかあ。それで、前に言っていた貴雅がこの家から出たがっているという話は？」

これが問題、ちゃんと事実の裏取りが出来ていなかったから問題だったの。

天音ちゃんは寂しそうに語ろうとする。

「あれはですね……」

「——天音、貴雅さんがこの家を出たがっているというのは本当？」

突然、ふすまの向こうから聞こえた声。

開けて部屋に入ってきたのは綺麗な女の人、貴雅のお母さんだ。相変わらずお若い容姿、見た目で言えば20代前半に普通に見える。

「あつ、お母様？どうして？」

「ふふつ。貴雅さんの恋人さんが来ているというからぜひちゃんとしたお話がしたくて来てみたの。そうしたら、何だかおかしい話をしているじゃない」

彼女は私達の前にお茶を置いてくれる。

使用人さんの代わりに持ってきてくれたようだ。

「お茶とお菓子……ありがとうございます」

「こうして会うのは2度目ね。貴方のお名前は初音さんだったかしら？」

「はい、初音美結といいます。2年生で貴雅の先輩です」

「私は美琴（みこと）と言うの。それにしても可愛い恋人さん。」

あの子も意外に隅に置けないわね」

美琴さんは天音ちゃんに「お友達なの？」と尋ねた。

「そうですね、お母様。私とみゆちゃんは親友なんです。貴雅兄様が紹介してくれた時からお世話になっていますの」

「美結さん。天音は人付き合いが苦手な子です。これから仲良くしてあげてください」

「分かりました。あ、あの……貴雅の事、聞いてもいいでしょうか？」

私はここぞとばかりに美琴さんに質問をして見る事にした。

大事な事は直接聞いてみないと始まらない。

「私も気になるわ。貴雅さんがこの家を出たがっているというのはどういう事なのか」

私たちはこれまでの経緯を説明してみる。

私としては詳しくは知らないので天音ちゃんからの情報が頼りなだけ。

美琴さんは情報を整理して私にも分かるように説明してくれる。

「そうね、まずは私達の事から話しましょうか。私は元々倉敷の人間なの。旦那とは従兄妹同士だったのよ。幼い頃から仲良くしていたんだけど、私が中学に上がる前に旦那は以前から交際していた女の人と結婚したの」

「従兄妹。美琴さんはその前から好きだったんですか？」

「ええ、淡い初恋。年上の優しいお兄さんだったから。でも、光里君が生まれて少ししてから奥さんが事故で亡くなられたの。私が高校生に入ってからちょうど美結さんぐらいの歳よ。その頃、私は高校に通うためにこの家でお世話になっていた。実家に戻ってきた彼と光里君のお世話をしたのがきっかけで私の恋も再び目覚めたの」

奥さんを亡くされた貴雅のお父さんはお兄さんと一緒にこの家に戻ってきた。

初めは従兄妹同士で中々、恋愛感情に気づいてもらえずに大変だったらしい。

美琴さんとしては前妻の事もあるから、精神的にも大変だったろうな。

それでも、彼女の努力も実り、彼に認めてもらえるようになった。

「貴雅さんが生まれたのは高校を卒業してすぐの事。その時に私は旦那と結婚したの。確かに家庭事情は複雑よ。それでも、家族の仲は非常にいいと思うわ。子供達の事は天音の方が詳しいでしょう」

「私から見ても光里お兄様と貴雅兄様もいい関係ですわよ？」

「でも、貴雅はお兄さんのお話はしたくなさそうでした」

「そこが、彼がこの家を出たがってる事に関わっているみたいね」

私は美琴さんが入れてくれたお茶を飲む。

緑茶は普段からあまり飲まないけど美味しい。

貴雅がどうしてお兄さんの話をしなくなかったのか、その理由は一体何なの？

天音ちゃんの家を出たがっているという話の詳細を話し出す。

「貴雅兄様は以前から倉敷の家を好きじゃないみたいですの。自分はこの倉敷家にふさわしくないって昔に言っていましたから。彼は“こちら”の世界を否定する事も多いですし、性格的にもあわないんでしょう」

「……彼なりに血筋を気にしているみたいだけど、気にする事なんて何もないわ。ちゃんと彼は倉敷の人間。親族だって反対する人間もない」

美琴さんは「それはあの子だって理解しているはず」と首をかしげる。

「それ以外の理由ではないんでしょうか？」

「それ以外？例えばどのような理由があると美結さんは思う？」

「貴雅にはこの倉敷の家を継ぐという以外になりたい夢があったりとか」

家柄というモノに縛られたくない、未来を自分で決めたい。

貴雅にはそういう何か事情があるように私は考える。

「私にはその発想はありませんでした。兄様はてつきりこの家が嫌いなだけだと……。そうですね。こちらが勝手に決め付けるのはよくありませんわ。真実は兄様の心ですもの」

「美結さんの言う通り、貴雅さんにも何か事情があるのかもしれない。でも、普段からあの子は私達にそのような話をしないもの。だけど、彼が出て行くつもりならば寂しいわね」

……うーん、貴雅って何を考えているのか分からない。
しっかりしているので色々と考えてはいるんだろうけどなあ。

「私の方から聞いてみます。こういう話って家族よりも他人の方が話やすいと思いますから……。すみません、他人なのにこんな事を聞いてしまって」

「いいのよ。貴方は貴雅さんと交際している。気になる事もあるって当然なもの。私もそうだけど、好きな人の事を知りたいと思うのは当たり前な事でしょう。特に付き合い始めなら、なおさらね」

美琴さんは気さくな人のようで、結構話しやすい。

物分りもいい人で、私としてはホッとし安心できる事でもある。

貴雅の事、やっぱり、彼本人に聞いてみよう。

そうじゃなければ、私達はこのままダメになりそうな気がするの。

「次は美結さんと貴雅さんの交際について聞かせてもらえないかしら？」

「え？私と貴雅の、ですか？」

「そう。貴雅さんが女の子を家に連れてきたのは初めてだったもの」

子供の恋愛に興味があるのは母親として当然なのかも。

ちょっと嬉しそうな美琴さんに天音ちゃんはすかさず言う。

「お母様、初めてではありません。兄様の前の恋人は性格が悪い女の子でした」

「あら、そうなの？あの子もそれなりに恋愛していたのねえ。全然、そんな事を話してくれないんだもの。つまらないわ」

…… 思いつ切り拗ねてるよ、美琴さん。

そんなわけで私は彼女に貴雅との出会いからこれまでの事を話をする。

照れくさいけど、美琴さんは興味深そうに貴雅の事を聞いていた。何ていうか、貴雅の優しさはきつと優しい家族に囲まれて育ったからだと思うんだ。

私たちが雑談に華を咲かせていたら、結構な時間になっていた。

「…… もうこんな時間。そうですね、美結ちゃん。今日はうちに泊まっていきませんか？ねえ、お母様、いいでしょう？」

「ふふつ。天音はよほど美結さんの事が好きなのね」

時計を見ればそれなりの時間、まだ貴雅は帰ってきていない。

天音ちゃんの誘いは嬉しいけど……。

「私は親に連絡さえすればいいんですけど。でも、いいんでしょうか？」

「もちろん、歓迎するわ。美結さんはとても素直な子、気に入ったもの」

そんなわけで、私は今日はお泊まりすることになりました。

天音ちゃんはこっそり、「兄様と仲直りできるといいですわね」と耳打ちしてくれる。

貴雅と早く仲直りしたい…… できるといいなあ。

第22話：眠れない夜に

【SIDE：倉敷貴雅】

俺は図書室で絵美と勉強しながら昼間の事を考えていた。俺の家族関係を聞いてきたみゆ先輩にキツく言い過ぎた。彼女は純粹な意味で知りたかっただけかもしれない。だが、ある程度の事情は知っていなければ「あの家を出て行きたがつてる」などという発言は出てこない。

どちらにしても俺は彼女を傷つけてしまったかもしれない。みゆ先輩に悪気はないはず、それが悔やまれる。

「貴雅？何をしているの？」

「あ、悪い。ぼーっとしていたか。次の問題は……」

絵美に気づかれたので再び問題に目を向ける。せつかく教えてもらっているんだ、集中しないとな。

「疲れ気味かしら？それとも、何か悩みでもあるの？」

「別に何でもない事だ。……いたっ」

彼女はくすつと微笑みながら俺の額を指先で小突く。

「何にもないって顔をしていないもの。悩みがあるなら相談に乗るわよ？」

「ホントに些細な事だ。少し、恋人と喧嘩しただけ」

「へえ。それは意外かも。貴雅が喧嘩なんてするんだ？それとも向こうが？」

問題よりも悩みを話せ、絵美はそう態度で示すので仕方なく事情を話す。

テスト間近の図書室は人が多いので小声で言う。

「……それは相手に配慮できない彼女が悪いでしょ。誰にだって踏み込まれたくない部分はあるわよ。それに気づけなかったあの子が悪いわ」

「みゆ先輩の気持ちも分からなくもない。俺が話をしていないのが原因なんだ」

それに付け加えるなら八つ当たりした感もあるんだ。

その前日にその“問題”に対して敏感にならざるを得ない状況があったから。

タイミングが悪かった、それだけだ。

「私はちよつとだけ事情を知ってるから言えるけど。貴雅ももう少し余裕を持ちなさい。心に余裕を持って周りを見渡した方がいい。今は見えていないでしょ？」

「……そうかもな。まあ、この件は何とかするさ。話し合えば解決すると思っている」

「ふふつ、そうだといいわね。もしも、関係がこじれてダメになったら私の所に戻ってきなさい。しばらくの間、私の横はあけておいてあげるわよ」

冗談っぽく笑う絵美に俺は苦笑いで返す。
再び勉強を再開した俺だが、完全にみゆ先輩の事を頭から切り離せない。

家に帰ったら電話ぐらいしてみよう。

集中して勉強をしていたので、帰るのが少し遅くなってしまった。
辺りはまだ薄暗い、最近は太陽が沈むのが遅くなったな。

「……ただいま」

家に帰ると夕食を食べるためにリビングに入る。

「今日の晩飯は……なんだ？」

だが、そこには想像していなかった光景が広がっている。

「おかえりなさい、貴雅兄様」今日の晩御飯はみゆちゃん手作りで
すわよ」

椅子に座って料理を待つ天音。

その視線の先にはエプロン姿のみゆ先輩がいた。

「おかえり、貴雅。もう少しで出来るから待っていてね」

「あ、ああ……って、何でみゆ先輩がここにいる!？」

喧嘩してるはずの相手の予想外の行動に俺はたじろぐ。

もはや彼女には世間の常識すら通用しないのか。

思わず持っていた鞆を落とすとそれを母さんが拾い上げる。

「どういう事だ、母さん？」

「そんなに驚かなくてもいいじゃない。貴雅さんの恋人で、天音の友達なんだから。お料理が得意なんていい恋人さんでしょう？可愛いし、素直だし、とてもいい子じゃない。貴雅さんの将来のお嫁さんにぴったりね」

何やら既にうちの母とも親しくしているみたい、って、お嫁さんとはどこまで話を飛ばす気だ。

みゆ先輩は相変わらずの適応力というか、他人と馴染むのが早すぎる。

「いや、違うつ。そういう関係の話じゃなくて」

「美結さんは今日、天音がお泊りに誘ったのよ。私は食事を終えたら出かけてくるから、後は任せるわね。帰りは深夜になるから、戸締りはしておいて。天音、準備を手伝ってくれる？」

「分かりましたわ、お母様。みゆちゃん、ここはお任せします」

天音は俺の横を通り過ぎる時に「お話、ちゃんとしてください」と言われてしまう。

話す前にする事があるんだが……どうするかな。

「みゆ先輩。俺は正直言つて、こういう行動が取れる先輩をすごいと思うよ。尊敬さえできるかも」

まさか喧嘩中にもかかわらず、我が家に堂々と来れるとは思わない。

「俺なら絶対にできない、誰にでも真似ができることじゃないからな」

「あうあう……」

彼女は俺の嫌味な言葉から逃げるように料理を続ける。

その何とも言えない背中を見つめていると、何だか文句を言う気もそげた。

「まあ、いい。料理を続けてくれ、この話は後でしょう。そういえば先輩は料理が得意だって前にも言っていたな」

「う、うん。子供の頃からお手伝いしたりしてたの」

揚げ物だろうか、いい匂いがキッチンからする。

手際もいいみたいなので、天音と違い安心してみていられる。

エプロン姿の恋人が家事をするという光景は悪くない。

「家庭的な女の子は結構好きだ」

しばらくの間、俺はみゆ先輩の背中を黙って見つめ続けていた。

みゆ先輩手作りの味も見た目も美味しい料理を食べた後、お泊り

と言つ言葉通り、彼女は天音とお風呂に入ったりして楽しんでいるようだ。

俺はテスト勉強を終えて、雑誌を読みながら休憩していた。

「天音はみゆ先輩と出会ってから明るくなったよな」

母さんは出かけて今日の深夜に帰宅予定、いつもながら忙しい人だ。

父は現在、単身で半年間の海外勤務中、母も仕事で日本国内のあちろちらに行くために忙しく不在な事も多い、さらに兄貴も大学進学でいない。

家族が離れ離れになっている状況に天音はずっと寂しがっていたので、みゆ先輩の存在はとても大きいだろう。

元々、友達も少ない方なので、親しくする相手にめぐり合えたのは幸運だ。

俺自身、どうなんだろうな。

みゆ先輩と出会って1カ月。

あのラブレターを拾ったのが始まり、恋人役をさせられたり、学校中に恋人だと勝手に放送されたり、さらに実際に付き合うことになったり……今はなぜか喧嘩までしている。

たった1カ月の間に大きく俺の周囲を取り巻く環境すらも変わり始めた。

いつのまにか恋人にフラれた痛みも消えて、今は別のことで頭を悩ます毎日ではあるが。

「不思議な子だよな。人を惹き付ける魅力、周囲の存在に与える影響力はかなりのものだ。みゆ先輩にはある種の運命を感じずにはいられない。俺も惹かれてる人間のひとりだ」

初めは我が侘で子供っぽいだけな女の子だと思っていた。

今は違う、子供らしい内面もあるが歳相応な一面もちゃんとあるのを知っている。

俺は飲み終えたコーヒーのカップを片付けようと立ち上がる。

「……貴雅。お話がしたいの、入ってもいいかな？」

みゆ先輩の声が扉の向こうから聞こえる。

「どうぞ、入ってくれ」

俺はもう1度椅子に座りなおして彼女を部屋に招いた。

「……あれ、貴雅の部屋は洋風なんだ？畳とかじゃないんだ？」

「ああ。この部屋と隣の部屋は以前にリフォームして洋風に変えてもらったんだ。さすがに築数十年の古い家だからな。古い部屋を改装するにはいい機会だったんだよ」

俺の部屋は他の部屋と違い洋風にしてもらった、隣の兄貴の部屋もそうだ。

天音は昔から着物を着る習慣もあったし、和風を好んでいるのでそのままだが。

「それにしても……何だ、その格好は？」

「これ似合う？天音ちゃんの服を借りたの。寝る時まで和服なんだね」

みゆ先輩は天音の寝巻き代わりの浴衣を着ている。
お風呂上り、髪もまとめて可愛い格好だ。

「へえ、可愛いじゃん。天音がそれを着てるのは普段から慣れているけど、やはり、人が違うと新鮮に思えるな……」

うちは古風な家で、俺も幼い頃は和服を着せられていた。

面倒になってパジャマに変えたが、天音は昔からずっとそのままだ。

「……さて、それじゃ、本題に入るとしよう。ベッドに座ってくれ」

「うん。貴雅、まずは……ごめんなさい。私、貴雅を傷つけたよ」

「傷つけた？ いや、あの程度で傷つく柔な心はしていない。むしろ、逆に俺が八つ当たりをしてしまつて悪かった。その辺の事情もちやんと話してやるよ」

俺はみゆ先輩に事情を話していなかったのが今回の原因だ。

照れはあるが自分の事を恋人に話すのは必要だろう。

「私のこと、許してくれる？」

「もちろん許すよ、思えばこちらも少しムキになっていたからな」

「よかったあ。うう、これでもしたら破局しちゃうかもって心配だったの」

たった1度の喧嘩ぐらいで終わるのは俺としても避けたい。そんなに気にしていたのは今日の態度からして意外だった。みゆ先輩にも落ち込む事はあるようだ、気をつけよう。

「さて、と。俺の家の事情はどこまで知ってる？」

「貴雅のお父さんやお兄さんの事は美琴さんから聞いたよ。私が知らないのは貴雅本人の事。これからどうしたいのか、その辺を聞かせてくれない？」

「分かった。みゆ先輩が今日言っていた『俺がこの家を出て行く』という話。あれは若干、事実とは異なっているんだ。どうせ、天音から聞いたんだろうが、俺は別に家柄や血筋をそんなに気にしてはいない」

昔は母親の事、兄貴との血の繋がりなどを気にしていた時期もあった。

だが、今はさほど気にする事もなく普通に生きている。

みゆ先輩はきょんとした表情を浮かべる。

「それなら、どうしてお兄さんの話をしちゃダメだったの？」

「……俺にはひとつの夢がある。俺は将来的に教師になりたいんだ」

「教師って学校の先生？意外〜つ。貴雅ってそんな夢があつたの？」

「俺にだって夢くらいあるさ。子供の頃にいい先生にめぐり合つて、自分もなりたいたいと思った。だが、現実問題、今の時代は教師になるのも大変なんだよ。だから、必死になって勉強もしている。絵美が協力してくれているのはその事情を知ってるからだ。他意はないって言っていただろ」

彼女は絵美の名前にむうつと唇を尖らせる。

とはいえ、元恋人と一緒にいるのが不満なのは当然なわけで。

「次からは私が教えてあげる。やっぱり、テスト期間中って短い間だけでも離れるのは嫌だもん。さらに他の女の子と一緒になんてもつと嫌だよ」

こういう所、みゆ先輩も一人の女の子なんだなと意識させられる。普段はめっちゃお子様なので女の子として扱わないが、考えを改めるべきかな。

「でも、それがお兄さんとどういう関係があるの？」

「昨日の夜、兄貴から電話がかかってきた。兄貴は本家のお嬢さんと付き合ってるんだが、どうやらその人と結婚するみたいだ。そうすれば兄貴は本家の人間になる。……だとしたら、うちの倉敷家は俺が継がないといけないわけだ」

昔から俺は兄貴がこの家を継ぐものだと思っていた。

実際に数年前まで兄貴も将来的に倉敷を継ぐと言っていた。

だが、事情が変わり、こういう展開になった以上、俺も真剣に考えなければいけない。

「……そうなれば夢を諦めなくちゃいけなくなる？」

「さあ、どうだろうな。継ぐって言うても今の倉敷は当分、父さんがいるから安泰しているし、俺に役目が回るのは本当に何十年も先の事だ。ただ、今まで自分には関係ないと思っていたことが現実味を帯びてきた事実には驚いたんだ」

それが昨日の話、翌日にまさか“そこ”をみゆ先輩につかれるとは思わない。

俺はつい感情的になってみゆ先輩に半ば八つ当たりをしてしまったのだ。

自分の中でまだ整理できていなかったのもその要因ではある。

俺の話を聞くみゆ先輩は浴衣の端を手持ちぶさに掴んだり離れたりしている。

「貴雅はえらいんだね。まだ高校1年生なのにこれからの将来についてよく考えている。それでも、まだ16歳。本当に考えるのはこれから先でもいいんじゃないの？」

そう話す彼女は今日はやけに大人びて見えた。

実際に彼女は年上なんだが、普段の行動からはまずそれが感じられない。

「先生になりたい夢があるのなら、まずはそれを叶えればいい。家の事はどうなるのかまだ分からないんだから難しく考える事もないでしょう。自分のしたい事をすればいいじゃない」

みゆ先輩は穏やかな微笑を俺に向ける。

「未来は真っ白いキャンバス、ってよく言うでしょう。そこにどんな絵が描かれるのかはまだ誰にも分からない。そのキャンバスにどういう下絵を描いて仕上げていくのかは貴雅次第。まだまだ、焦らずにゆっくりと描けばいい」

「焦らずに、か。実際、その通りなんだろうが、みゆ先輩に言われるとはな」

だけど、みゆ先輩に言われると何だかとても安心できる気がした。俺も気づかぬ間に彼女にすっかりと心を許していたらしい。

「私、貴雅のことがもつと知りたいと思うの。好きな子の事は何でも知りたいじゃない。だから、今日は貴雅が自分の事を話してくれてすごく嬉しかった」

頬を赤く染めて、嬉しそうに言うみゆ先輩。

今日の彼女は浴衣姿という事もあってか、やけに可愛く見える。さらに言えば風呂あがり（いい香り付き）というシチュエーションはどんな男もオカミにさせるぞ。

「……た、貴雅っ？ふにやあ！？」

気がつけばみゆ先輩を抱きしめていた。

彼女の華奢な身体は俺の腕に包み込まれる。

「――夜の男の部屋に無防備でやってきた方が悪い」

美少女の色つぼさ、こういうのにたまらなくなるのは男の性（さが）って奴だ。

俺はゆっくりと彼女をベッドに押し倒す。

それは俺達の眠れない夜の始まり――。

第23話：キスの次は何するの？

【SIDE：初音美結】

貴雅に許してもらったのもつかの間、私は彼にベッドに押し倒されていた。

彼氏とは言え、こういう展開は初めてなのでドキドキまくる。

「や、やだあ。貴雅、冗談だよな？」

「……さあて、それはどうかな。俺も一応、男だぞ」

目の前に迫る貴雅に心臓は大きく高鳴る。

私の手を掴む彼は男の子なんだって意識させられる。

「みゆ先輩、自分が今、何をされているのかぐらいは理解しているよな？」

「私を子ども扱い＆バカにしないでよ。わかってるよお」

「それならOK。ここでそれさえ分らないなら、間違いないで引いていた」

彼は意地悪く笑うと、真っ直ぐな瞳をこちらに向ける。

あう、今回の場合はそちらでもよかったかも。

貴雅の事は好き、生まれて初めてした恋の相手だもん。

だけでも、体格の差もあるし、キスもまだ慣れていないの次に進むのは早いって。

「わ、私たちにはまだ早いってどうか……」

慌てふためく私と違い、覆いかぶさるようにする貴雅は余裕の様子。

恋の経験者はこちらの経験も、もちろんあるということ……。――

「うう、やだあ……私、負けてるのかな」

あの絵美とそういう事をしていたとか、こういうのはあまり想像したくない。

「何が嫌なんだ？」

「何でもないもんつ。貴雅の余裕な態度が気に入らないのっ」

「余裕？そりゃ、ロリ先輩と違い、余裕くらいは常にあるさ」

その余裕は嫌だ、でも、付き合うという事はそういう事も含まれている。

私の身体に触れてくる貴雅、いつもと違う雰囲気気持ちが高ぶる。

「す、ストップ！っ！お姉さんはこれはダメだと思っの」

「恋人なら誰もが通る道だろ？それとも、俺達は恋人じゃないのか？」

「そ、そうだけど。こういうのはもっと大人になってというか、ごによい……」

私も付き合うという事でこのような展開は想像くらいしていた。
小夜子からも以前の調教発言後にいろんな雑誌を貸してもらって
勉強してたし。

けれども、漠然としてた想像の話だったので、現実には貴雅から求
められるとは思っていなくて、何ていうか、全く実感がわいていな
い話だったの。

私はふと貴雅の話を思い出す。

家を継ぐという問題で言っていた、“理解”してたのと“実感”
するのは違うんだって。

確かにそうかもしれない、覚悟はしていても現実は大変だよ。

でも、ここは素直に流れに任せてみるのも……って、やっぱり無
理！？

私がどうすればいいか、涙目になりかけると、

「くっ、ふははっ……」

ふと、私から身体を離すと貴雅が笑い出す。

「予想以上の慌てようだな。これは俺が悪かった、冗談だよ。冗談、
あははっ」

笑いながら彼は少し乱れた浴衣を直してくれた。

私はそこで自分がからかわれていたただだと気づく。

「にゃっ。も、もしかしてからかわれていたの！？」

「当たり前だろ。俺がロリ先輩に欲情すると本気で思っていたのか
？」

「ムカっ！そう言う発言するから貴雅は意地悪なんだよ。めっちゃ

ドキドキしたじゃんかつ！こういう冗談は今後、絶対に禁止だからね！ドキマギさせないでよ！」

年下にかわかれるのは非常に不愉快なの。

私が頬を膨らませて怒ると、貴雅は意地悪な顔のまま笑い続ける。

「……自分でしておいて何だが俺と先輩がこのような展開になるのは無理があるな」

「それはそれでめっちゃ失礼だし！いいよ、そんなら今から私の本気を見せてやる！」

「俺に好き放題されるのが目に見える。それでもいいならどうぞ？」

「うう……ずるい、今日の貴雅は意地悪モード全開だよ」

もしや、昼間の仕返しとか？

喧嘩、そうだ……これってもしかして？

あまりにも自然なので今日は喧嘩していたことなんてすっかり忘れてしまっていた。

これはきつと彼なりに考えた行動かもしれない。

嫌な雰囲気全て消してしまう、いつも彼は私の事を考えてくれているから。

さっきだって、ホントに襲うつもりなんてなくて。

「……貴雅。私の事、好きならいいよ？」

「冗談だって言っただろ？大体、こんな家族のいる家でするわけないじゃないか。はあ、ロリ先輩はそう言うこともちゃんと考えくれ

よ。俺相手に不釣合いだ、それにそう言う台詞は震えずに言ってくれ」

「くうっ……ロリ先輩言うなあっ。ふみゅう」

結局、私は貴雅にいつも守られているんだよね。

喧嘩しても、彼は私が傷つかない方法を選んでくれる。

これじゃどちらが年上なのか本当に分からない。

私は貴雅の好感度をさらにあげる。

やっぱり、貴雅を好きになったのは正解だよ。

「機嫌を直せ。悪い冗談だったよ、反省してます」

「ホントに？貴雅って冗談と意地悪ばかりするもんっ。私にだって貴雅を魅了する魅惑はあるんだからね？」

「それはどうかな。ホントにみゆ先輩がからかいがあるというか、面白い子だな」

私の頭をいつものように撫でる、子ども扱いするなあ。

そう言う対象に見てもらえないのはそれはそれで残念かも。

いつか、本当に想いで結ばれた関係になったらこういう展開もありなのに。

まだドキドキ感が消えないのでそんな事を思ってしまったりするの。

「ほら、さっさと天音の所に帰れ。アイツも待ってるだろ」

「分かった。でも、恋人なんだからおやすみのキスぐらいして？」

「今なら首筋にキスマークでもつけてやるが、それでいいなら？」

「……え、遠慮します。おやすみなさいッ！」

私は危機感に逃げるようにして貴雅の部屋を去る事にする。

廊下に出た私は深呼吸をひとつした。

「……やばい、思い出すだけでドキドキするよ」

恋人同士の行為に興味ぐらいはあつて、今日も少しぐらいなら…

…。

やぁーん、私っては何を考えているんの？

あうあう、私にはまだまだ縁のなさそうなお話だな。

貴雅に最後までからかわれてばかりの私、いつか見返してやりた
いなあ。

その前に貴雅がドキッとして意識してくれるような大人になりた
い。

私っていつまでたっても貴雅好みの女の子になれないのかな……。

——その頃の貴雅。

彼は自分の布団に座り込んで頭を抱えていた。

数分前の自分の犯した過ちを後悔している。

「うわあっ！？我が家で彼女に襲い掛かるってどこのオオカミだよ」

顔を真っ赤にさせて自分の行動を恥ずかしがる貴雅。

「何やってるんだよ、雰囲気飲まれるなよ、俺。この俺がマジであのロリ先輩に欲情するとはありえない。理性で暴走を止められてよかった、ギリギリだったけど。これが浴衣効果と言うやつか？しかもあの大きな胸の揺れ方は必殺技かよ。みゆ先輩が可愛すぎなんだ。分かってはいたけど、年上で可愛いなんて反則なんだよなあ……」

そんな風に自分を責めて反省をしているなんて私は知らない。

「ちくしょーっ。布団にみゆ先輩のいい匂いがついて眠れないじゃないか」

……心配せずとも、彼もちゃんとしたお年頃の男の子なのでした。

私は天音ちゃんの部屋に戻ると、すでに布団がしいてある状態。彼女は漫画の本を読んで私を待っていてくれた。

「もう帰ってきたんですの？貴雅兄様は許してくださいましたか？」

「……ふえ？許すって？」

「何を言ってるんですか？みゆちゃんはお昼の喧嘩で許してもらいにいったんでしょう。それすら忘れて……あれ？お顔が赤いようですけど何かありましたの？」

天音ちゃんがこちらを向くので恥ずかしくて顔を隠す。
こんな顔を天音ちゃんに見られたくはない。

「べ、別に何も無いよお。貴雅は普通に許してくれたから、問題は何もなかったの。そう、何一つありません。だから、無事に解決したんだ、えへへっ……さあ、もう寝ようかな？」

「怪しいですわ、みゆちゃん。何かありましたわね？」

天音ちゃんの鋭い指摘にも私は誤魔化すしかない。
だって子供の彼女にはまだ早いお話だもんっ。

「……やだなあ、何もないよ。ちゃんと理由を話したら許してくれたの。貴雅は優しいから好きだよ。私も貴雅のことが少しだけ分かったんだ。そろそろ寝ようか、うん、そうしよう」

「みゆちゃん、首筋の所が赤いです。そんなキスマークつけて言う台詞じゃありませんわ」

「え？嘘？ホントに!？」

急いで首元を見ると確かに赤くなっている。
いわゆるキスマーク、この痕って中々消えないんじゃないの？
いつのまに貴雅がつけたんだろ、うう……。

「こ、これは……あの、やましい事をしてたわけじゃないくて」

「ショックですわ。兄様とみゆちゃんがそんな深い間柄になっ
たなんて」

「違うのっ！何もなかったんだってば」

「皆、そういうんですね。昔、お母様も同じ事を言って誤魔化して

いました」

美琴さん、せめて娘の前ではもう少し上手く誤魔化してください。

その後、私はしっかりとどういう展開になったかを説明する事に……貴雅のバカあ。

それにしても、今日はホントに大変な1日だったなあ。

そろそろ、時間になっていたので、私は天音ちゃんと一緒に寝ることにする。

「お友達と一緒に寝るのって初めてですの。こういうお泊りって言うのにも慣れていました。みゆちゃんは私にいろんな事を経験させてくれて嬉しいですね。ありがとうございます」

「天音ちゃん……。そうだ、学校ではどうなの？うまくできている？」

「少しだけ前進と言った所でしょうか。クラスで浮いた存在なのは変わりませんが、話しかけてくれる子は増えました。みゆちゃんと小林君のおかげです。彼が今、私にいろんな子を紹介してくれるんです」

あの件以来、小林君の事を天音ちゃんは気にかけているみたい。恋する一歩手前、と言う感じがな。

「小林君って天音ちゃんに優しいじゃない。いい感じの関係してる？」

「……はい。私の中で彼に期待してしまう気持ちが膨らんでいますもの。このまま行けばいいんですけどね。クリスマスと一緒に遊ぶ

約束もしたんですよ。みゆちゃんもクリスマスは貴雅兄様と一緒にしよう?」

「うん。貴雅がデートに誘ってくれたんだ。楽しみだよ」

数えるくらいに日数が迫ったクリスマスデート、特別な日になりそうな予感をするの。

天音ちゃんは布団の中で私の手を握りながら言う。

「みゆちゃんに出会えて私の世界は変わりましたわ。貴雅兄様も同じみたいですの。これからも貴雅兄様と私をよろしく願いますね。私のお友達としてお付きあいして欲しいですわ」

「こちらこそ、よろしくだよ。私も二人に出会えて毎日が楽しいの」

この巡りあいを与えてくれた神様に感謝、私も毎日が充実しているんだから。

大好きな貴雅と幸せな日々を送る事ができたら、それだけでいいんだ。

第24話：恋の予感

【SIDE：倉敷貴雅】

問題だった期末テストも無事に終わり、残すところあと1日で学校も終了。

今日は最後の授業、明日は終業式で冬休みがやってくる。そして、明日は12月24日のクリスマスイブだ。

「あーっ、貴雅くんじゃない」

「ん？ああ、小夜子先輩。お久しぶりです」

5時間と6時間目の間の休憩中、美術室に美術の課題作品を提出終えた俺は特別校舎内で小夜子先輩に出会った。

この特別校舎は美術や音楽などの特別な科目の部屋が集まっている校舎なので授業がない限りは用はない。

「……美術室から出てきたという事は選択科目は美術なんだ？」

「ええ。美術か音楽か、どちらかといえば大抵の男子は美術を選びますよ」

「ふふっ。1年はまだそのふたつなんだけど、2年になるとまだ選択が増えるからね」

「先輩もその選択科目ですか？」

彼女が手に持っているのは大きな箱だった。

特に重そうではないようだが、女性が持つのは大変そうだ。

「これは理科室からの調達もの、今日はクラスの方で授業なんだ。ほら、数日前の事件で理科室が使えないから。これを教室まで運ばないといけないの」

数日前の理科室の事件というのは実験中のクラスが火の始末に失敗して小火騒ぎがあったことだ。

消火器での消火作業で鎮火したものの、まだ室内は荒れ放題。ついでなので老朽化してきた内装を工事する事になり、冬休みまでそのままらしい。

「なるほど、それは大変ですね。クラスまで箱を持ちましょうか？」

「ホント！？ありがとう、助かるわ。正直言えば、腕が痺れかけていたの」

小夜子先輩はホツとした様子で俺に箱を渡す。

中身は器具のようだが、確かにずっしりとくる重さがある。

「今日が日直だった事を恨むわ」

「ははっ。まあ、仕方ないですよね」

「……それにしても、貴雅クンって優しいわ。だから、美結も好きになったのかな」

俺達は廊下を歩き出すと、小夜子先輩は話を続けた。

「うちの美結はどう？あれからすっかりと貴雅クンにハマって、今

じゃすつかりと恋する女の子状態じゃない。正直に言えば初めて、私たちに恋人だって紹介した時は交際していなかったんでしょ？それが本当にこうなるなんてねえ」

「やっぱり、バレていたんですか？」

「当然。あの子の嘘なんてお見通し。でもね、それが本当に恋してるに変わったのを知った時、びっくりしたの。恋を知らないお子様がちゃんと女の顔をしているんだもの。たった数日で彼女はずいぶん成長していた」

俺は並んで歩く小夜子先輩を横目で見る。

「あの子に恋を教えて、どうなるのか。興味はあったけど、心配でもあったの。見た目どおりに純粹で子供だから。貴雅クンみたいに優しい男の子が彼女の恋人になってくれたことには素直に嬉しいわあの子を任せられるもの」

楽しそうに笑う彼女、みゆ先輩の事を想うひとりの親友としての言葉。

「……美結のこと、好き？」

今度は俺に尋ねてくる、彼女はきっとこれまでの俺の気持ちすらも気づいていた。

俺がまだみゆ先輩に心の奥底から恋をしていないことを。

「気になる相手ではいますよ」

「そっか。後一押しで恋愛しちゃうかも、いいじゃない。まあ、初

めから心配はしていないんだけどさ。貴雅くん、キミもそろそろ自分の事を考えてみたらどう？美結の事を気にかけるのはいいけど、今度は自分の気持ちも向き合わないと」

立ち止まる彼女は両手のふさがる俺の制服の胸ポケットに1枚の写真を入れる。

「……これは？」

「それは美結の隠し撮り写真。ふふっ、心配せずとも着替えシーンとかじゃないわよ？」

「だとしたら、悪趣味ですが。それ以外ならこれは何の意味があるんですか？」

「それはね、美結がキミに恋をしている時の表情を写したものの。後で見れば良い。きっと思わず笑いたくなるような顔をしているわ。その写真を見たときにキミはひとつの答えを見つける事ができるはず」

どんな顔をしているのやら、とても気になるじゃないか。

だが、俺はまだその写真を小夜子先輩が見せようとした意図に気づいていない。

「恋愛っていろんな形があっていると思うの。一目惚れとか、告白とか、些細な事がきっかけで恋って始まるものでしょう。貴雅くんは美結に付き合う形で交際している。まだ明確な想いはないのに好きになるために交際してるんでしょ？」

「小夜子先輩はどこまでこちらの事情を知ってるんです？」

「よく知らない。ただ、美結を見て色々気づいているだけ。否定しないという事は多少は当たってるみたいね。キミ達の恋愛は、別に珍しいことじゃないわ。初対面の相手に呼びだされて『好きです』と告白されて、『お友達から始めませんか？』ではなく『付き合います』と答えた場合の恋愛に似ている。違う？」

「いや、全く持ってその通りです。俺はみゆ先輩を好きになるために付き合い始めたんです。それと彼女に恋を教えるためにもね」

今まで俺達の関係を整理したことがなかったが、先輩の言う形に近いのかもしれない。

恋人として付き合う事になった経緯を思い出していた。

「……人を好きになるって大変よねえ」

ポツリと言う小夜子先輩は今度は絵美の名前を口にする。

「貴雅クンの元カノ、絵美って私の幼馴染なの。昔から頭の固いお嬢様で私とはいつもぶつかってばかり。でも、お互いにそれを認め合うところもあって仲はそれなりによかったわ。喧嘩するほど仲がいつてやつかしら？」

「絵美から聞いた事がありますよ。好きな男の子をめぐりあったとか？」

「そうそう。今は私の彼氏なんだけど、これがまた普通の子なの。特別カッコいいわけでも、性格がいいわけでもない。だけど、私も絵美も彼が好きになったの。それが始まり、私は彼と交際したけど、その結果、絵美は私から距離をおくようになった。後悔はしていな

いけど、別の方法はあった気がするわ」

「友情と愛情の両立はできないものですから」

絵美も今、気にしている様子はないが、過去は大変だったのだろ
う。

小夜子先輩は「若さってやつよ」と苦笑いを浮かべて言った。

「人を好きになる、この気持ちって奴ばかりは自分じゃ制御できないんだ。気づけばそこが始まって抑える事も難しい。感情のままに、自分を突き動かしてしまう」

「……それがいつ俺に起こるかもしれない、と？」

「気がついたら恋をしていた。なんていうのはよくある話。だから、貴雅くんも自分の気持ちをよく考えて見直してみたらどう？すでにあの子に恋しちゃってるかもしれないじゃない。あつ、ここまででいいわ。サンキュー」

先輩達のクラスについたので、俺は荷物を彼女に渡す。

時計を見ればもうすぐ授業が始まりそうだ。

「美結は良い子なの。本当に純粋で無垢で、可愛らしい女の子。あれだけ可愛い子もそうそういないわ。貴雅くんはいいチャンスにめぐり合ってると思うていい」

偶然から始まった、コードネーム“146-86”のみゆ先輩と
出会い。

「だから、彼女を幸せにしてあげて。私たち、彼女の友達としては

それだけが望みよ」

これから先の未来、俺とみゆ先輩はどういう道を進んでいくのだろうか。

「……私はキミからちゃんとした交際宣言を聞けるのを楽しみにしているわ」

最後にそう言う小夜子先輩は教室の中に入っていく。

ちゃんとした、か……それはそれで緊張するな。

俺はこっそりとクラスの中を覗き込むとクラスメイトと楽しそうに雑談する先輩の姿が見えた、相変わらず、周囲に人を惹きつけているようだ。

授業の準備を終えた小夜子先輩がこちらをふっと微笑んで見ると、みゆ先輩に耳打つ。

「……あ？」

そして、俺に気づいたみゆ先輩はすぐにこちらにやってきた。

「貴雅だあ、どうしたの？」

「小夜子先輩の手伝いしてただけだ。ついで我が恋人の顔を見ておきたくて」

「や、やだあ。そう言われると照れるにやー」

昼休憩にもあったばかりなのだが、みゆ先輩は嬉しそうだ。

「……時間がないから一言だけ聞かせてくれ。みゆ先輩、俺の事、

好きか？」

「ふにゃ？い、いきなりだけど……大好きだよ、貴雅が好きっ」

その一言で十分だった。

臆面もなく好きといえる彼女の気持ちを確認できた。
すでに彼女の恋は本物、疑う余地はなさそうだ。

「……」

俺は照れ隠しに彼女の額にデコピンする。

「恥ずかしいんだよ、真顔で言うな。ロリ先輩」

「な、何で……。聞いてきたの貴雅なのにーっ。むうっっ」

「ははっ。そんじゃ、俺は教室に帰るよ」

俺は教室に帰ろうと身を翻す。

「待つてよ。貴雅からは聞いてないよ？」

だが、俺の服のすそを掴んでみゆ先輩は制止させる。

「私も一言だけ聞きたいな。貴雅からの気持ち」

俺はみゆ先輩の顔を見ずに小さな声で言ってやる。

「……みゆ先輩ほど、今、気になる女の子はいない」

「うわっ、そっちの方が照れるよお。ふふふっ、嬉しいよ。私って愛されてるっっ」

言った本人も恥ずかしいから、過剰な受け止め方はやめてくれ。俺はこれ以上、甘ったるい雰囲気が続けていられなくて足早に去る。

少し離れてから後ろを振り返るとみゆ先輩は満面の笑みで俺を見送っていた。

先ほど、小夜子先輩に言われた言葉。

俺はすでにみゆ先輩に恋をしているかもしれない。

「好きか。俺があこのロリ先輩に恋をしているなんて思えない」

年上好きな俺を好きと言わせるにはあの容姿だと難しいぜ？

そう思いながらも、否定をしない事は可能性としては残されたままという事で。

俺はふと思い出した、胸ポケットに入れられた写真を取り出した。

「そっぴや、結局、これは何なんだ？小夜子先輩は笑える写真って言うってたな」

どんなマヌケな顔の写真だろうと、俺はそれを見た。

「……………！？」

そこに写るみゆ先輩はとても満たされた表情を浮かべ、幸せそうな顔をしていた。

何も特別な事はない、いつものみゆ先輩……。

「ふふ、ははっ……………」

だからこそ、俺は思わず笑ってしまうのだ。

これが、みゆ先輩が俺に恋をしている時の表情だと小夜子先輩は言っていた。

何気ない事が幸せだと、人は気づいた時に初めて知る。

「毎度お馴染み、いつもの可愛いみゆ先輩じゃんか」

——そして、この笑顔こそが俺にとって1番好きなみゆ先輩の表情なんだ。

第25話：粉雪の奇跡へ前編

【SIDE：初音美結】

クリスマス・イブ、12月24日は子供の頃から心の躍る特別な1日。

いつもはケーキを食べてお終いなんだけど、今年のクリスマスは恋人と過ごす初めてのクリスマスだから楽しみだった。

貴雅とどんなデートをするのだろう。

期待に胸を膨らませていた私はその前夜に眠れずにいた。

本を読んだりして、ようやく眠りにつけたのは朝方ぐらい。

「ふわぁ……」

小さく欠伸をして私はリビングに朝ごはんを食べるためにおりた。そこではいつものようにママとパパがいる。

「おはよう、美結。今日は何だか眠そうね？寝ちゃダメよ」

「んー。昨日は眠りが浅くて……ぐう」

「こらこら、言ってる傍から寝ないの。今日は終業式だけなんですよっ?」

「そうだよ。あっ、今日は恋人とデートだから帰りは遅くなるかも」

ママに私はそう言うとコーヒーを飲みながら新聞を読んでいたパパが吹きだす。

「なつ、なんだと。みゆちゃんに恋人？そんなの僕は聞いていないぞ？」

「あら、美結も年頃ですもの。恋人もいるわよね。今日はクリスマスでしょう。私たちもクリスマスデートしましょう」

「いや、それよりもみゆちゃんの恋人が……」

「今日はお休みでしょう？いい機会じゃないですか」

パパは私に恋人の話を書きたそうだったけど、ママが微笑んで誤魔化してくれる。

そういえば、恋人の話はママにだけしかしていなかったけ。仕方ないと言った風にパパはそれ以上の追及は諦めたようだ。

「……いいじゃない、デートしてくれば？そうすれば、私ものんびりできるし」

うちの両親はすごく仲がいいので、デートなんてしょっちゅうしている。

泊りがけで旅行もよくあるし、私は別に問題なんてない。

「ええ。そうさせてもらうわ。夜遅くまで遊んでも、ちゃんと帰ってきなさいよ？」

「分かってる。その辺は大丈夫だから心配しないで」

んー、貴雅とデート、楽しみっっ

そんな気分のいい1日が始まるうとしている。

「……くしゅんっ」

だけど、私はまだ自分の身体の変化に気づいていなかった。

「ふにゅ。今日は寒いなあ」

大好きな貴雅と2度目のデート、特別な夜は意外な展開を迎える事になるなんて……。

約束の時間は夕方の5時半、私はお昼近くに帰ってくると既に家には両親の姿はない。

テーブルの上には「パパと少し遠出してくるので明日のお昼頃に帰ります。ちゃんと戸締りをして出かけてね」とママからの伝言が書かれた紙が置いてある。

「……お泊りデートなんてラブラブだなあ」

ずっと仲のいい関係、両親は未だにお互いに恋愛している。

そういうのって理想的な関係だと思うんだ。

私はくすつと笑いながら、その紙を片付けて昼食の準備をする。

「……んっ？」

帰り際に買ってきたクリームパンを食べていると何だか気だるさに襲われる。

脱力感というか、疲れているのかな？

「今日は眠れなかったから。お昼寝でもしよう」と

眠りが浅いせいだと思い、私は食事を終わると自室に戻りベッドに寝転んだ。

「目覚ましは4時半頃にセット。ついでの携帯電話の目覚ましもセット。これで寝過ごすって事はないはず。ふう、何だろう。ホントに……身体がダルいよお」

私は布団に入るとすぐに強い眠気に飲まれてしまう。

「……くしゅんっ」

後になって思うと異変はもうその前からあったんだよね。

「……う、ううっ」

何だか頭が痛い、ズキズキする。

数時間後、目をあけた私が時計を見ると5時を指していた。目覚ましでは起きられなかったらしい、そろそろ行く準備をしないといけない。

「あ、あれ……？」

立ち上がった瞬間に立ちくらみがして再びベッドに座り込んでしまう。

頭がボーっとしている事に気づいた私はハッとする。

「もしかして、私……けほっ、けほっ」

咳をする私はその時になって自分が風邪をひいている事に気づいた。

朝から体調不良はあったけど、それは寝不足のせいだと勝手に思い込んでいた。

多分、昨日の夜に眠れなくて夜遅くまで起きていたのが原因だと思う。

なんていうタイミングで風邪をひいてしまったんだろ。

「うあっ。とりあえず、薬と体温を測らないと……」

よろよろと家の中を歩いてリビングに向かう。

途中に何度か壁にぶつかりながら、私は今日は誰もいないことを思い出した。

ホントにタイミングが悪すぎるなあ。

「げっ……嘘でしょう?」

さらに体温を測ってびっくり、私の現在の体温、38.3。
微熱レベルではなかったので、深いため気をついてた。

「……どうしよう、どうしよう」

刻一刻と容赦なく時計の針は進行中、どうしようもない展開だ。
このままだと間にあわない、私は慌てて自室に戻ると服を着替える。

こんな風邪なんかに負けないもんっ。
熱を下げる薬は飲んだし、この程度なら大丈夫。

せつかくのデートを台無しなんて事にだけはしたくない。

「私は……ふにゃんっ!？」

バタツと着替え中にベッドに仰向けに倒れこんだ。

「えぐっ、これはマズイよ……力が入らないにゃあ」

窓の外は夕焼け空ではなく曇り空、今日は夜には雪が降るかもつて。

まさにホワイトクリスマスが楽しめるかもしれない。
そんな特別な夜を逃すわけにはいかないの。

「……少しだけ休めばよくなるはず」

私は身体を半分だけ起こしたままで、布団の中に入る。

「貴雅に連絡をして、時間をずらして……けほっ」

自分で思ってる以上にダメかもしれない。

私は不安を抱えながらも、貴雅に電話をかける。

『……どうした、忘れ物でもして遅れるって電話か?』

時間はすでに5時半過ぎ、彼はいつもの意地悪口調で言う。
余計な心配はさせたくないの、「そうなの」と短く答えた。

『おいおい、ホントかよ。どれくらいかかりそうだ?』

「もう少しだけ、待ってられない。すぐに……くしゅんっ!」

「……みゆ先輩？　もしや、風邪をひいたとかいうんじゃないだろうな？」

「気まずいので、どうやって誤魔化すのか悩んでいた。
その沈黙が貴雅には肯定ととられたみたい。」

「今、どこにいるんだ？　家だよな……？」

「え、あ、そうだけど……。けほっ、けほっ！」

「おい？　本気でまずそうなら今日のデートはやめておいた方が……」

「だ、ダメっ！　１時間だけ時間をちょうだい、すぐによくなるから！　待ち合わせは６時半、それまでにそこに行くから待っていてね。
絶対に間に合わせるから！！　じゃあね」

「私は無理やりに約束を取り付けると、そのまま電話を切る。
このままだとデートが中止になっちゃうかもしれない。
クリスマスデートだけは絶対に一緒に過ごしたいもん。
恋人として、このイベントだけははずしたくない。」

「も、もうダメにやあ……」

「だけど、私は彼に電話した後にぐったりしてしまう。
くしゃみと咳がひどい、頭も熱で気持ち悪い。」

「……どうして、今日に限って、風邪なんてをひいてしまったの」
「楽しみにしていただけに何とも言えない気持ちになる。」

そのまま私は意識を手放して眠りに付いた。

「んっ……」

冷たい感触が額に当てられているのに気づいて目が覚める。

「あ、あれ？今、何時っ！？……いたっ」

ひどい頭痛を我慢しつつ、枕元の時計に目を向ける。

時刻は夜の8時過ぎ、完全に寝過ごしてしまっていた。

やつちやった……遅刻もそうだけど、連絡もしないでこんな時間なんて。

慌てて起きようとするけど身体がだるくて、身動きできない。

「うえっ……」

ちよつと涙目になりながら、私はショックを受けていた。

貴雅に嫌われちゃうよぉ……。

だけど、その時、私の額に濡れたタオルが当てられているのに気づいた。

「え？これって……？」

私が声をあげると室内に男の子の声が聞こえた。

声の方を向くと貴雅が携帯電話を眺めて、私の部屋にいたの。

「んっ、起きたのか？」

「ふえ？た、貴雅……冷たいっ！」

「まったく、無茶するからだろ。ほら、タオルかえるからじっとしておけ」

優しい声で言うと彼は私の額に手を当てた。

すぐにタオルを濡らして、もう1度私の額に乗せる。

「どうして貴雅が私の家に……？」

「あー、勝手に入ってきて悪かった。時間になってもこないし、携帯も通じないから心配になったんだよ。みゆ先輩の家にきたのはいいものの、誰もいないみたいで勝手に入らせてもらっただ。で、案の定、倒れていたみゆ先輩を見つけたわけだ。適当にあつたものをつかったぞ」

布団に寝かせてくれたのも彼らしい。

「そうなんだ、ありがとう。今日は両親が出かけていて……。ごめんね、貴雅」

私はシュンツとしてしまうが、彼は「気にするな」と言うだけだ。

「でも、クリスマスデートをダメにしちゃったよ」

「それは残念だが、これが最後なわけじゃない。デートならいつでもできる。今はゆっくり休め。辛くはないか？おなかは空いていないか？他にも何かあれば言ってくれ……。みゆ先輩？」

「うつ……うわぁぁぁん」

私は貴雅が優しすぎる対応に思わず泣いてしまったの。

「仕方ないなあ」

年下の恋人はそんな私の頭を撫で続けてくれた。

「ひつく……えぐっ……」

窓の外は粉雪の舞い散る夜の景色。

今日は1年で最も奇跡がおきる確立の高い1日、クリスマス・イブ。

私達のクリスマスはまだ終わっていない。

第26話：粉雪の奇跡へ後編

【SIDE：倉敷貴雅】

みゆ先輩がどうやら風邪をひいたらしい。

彼女が俺に咳混じりの電話をしてきたのは12月24日の午後5時半を過ぎた頃だった。

時間になってもこないの、またドジでもしているのかと思っていた矢先。

こんな日に風邪とはまたみゆ先輩らしいハプニングだな。

昼間の帰り際に会った時は別に異常はなかったはずなんだが。

俺は駅前の時計塔の前で白い息を吐きながら、

「……俺の予想だと、今日のデートは中止だな」

別に俺はさほどクリスマスデートにこだわりなどなかった。

ただ、彼女と一緒に楽しい時間が過ごせればいいと思っていた。

すぐに頭を切り替えて、俺は財布の中身を確認する。

元々、デート用の資金はそれなりに持ち合わせていた。

手に持っていた彼女へのプレゼントはジャンバーのポケットに突っ込んでおく。

「あとは、みゆ先輩の居場所か。俺は知らないんだよなあ」

とりあえず、みゆ先輩に電話をかけてみるが応答なし。

既にダウンしている可能性がある、これは今日のデートはホントに諦めておこう。

家に誰かがいればいいが、今日は両親が出かけると言っていたよな気がする。

「さて、どうするかね」

俺は心当たりのある相手にメールを送る。

相手は絵美、彼女は知らないだろうが、彼女の幼馴染である小夜子さんに連絡をとりついてもらい、みゆ先輩の住所を聞きだす事にした。

『私が小夜子に連絡なんて嫌よ。悪いけど、自分でしてくれる？』

と明らかに不満そうなメールが絵美から帰ってくる。

ついでに一言、「あと例の話……ごめんね？」とだけ文字が書かれていた。

すぐにそちらの謝罪の意味を察する。

「あちらもようやく彼氏ができたか」

今日はクリスマス、絵美も独り身が嫌で他の相手を見つけたらしい。

美人なお姉さんだ、相手を見つけるのには苦労しないだろう。やれやれ、予想はしていたがこうなるか。

「絵美とは縁がなかった、お互いにそれでいいだろう」

元カノが新しい恋人と付き合い始めた、最初にそれをしたのは俺だ。

今さら、俺が何かを言う権利も資格もない。

何となく気分が盛り下がるが、今はそれどころではない。

このままじっとしていても寒いので近くのコンビニに入ることにした。

小夜子さんの電話番号がメールには書かれていたので連絡を取ると、彼女からは詳しい住所を教えてもらえた。

「なるほど。意外と近いんですね。分かりました、ありがとうございます」

『うーん。でも、あの子もこんな日に風邪ひいちゃうなんてバカよねえ。本人はめっちゃショックを受けていると思うから優しくしてあげて』

「……まあ、あまりにみゆ先輩らしいので責めるつもりは微塵もないんですが」

『キミは優しいから信頼しているわ。いくら、病人だからって襲っちゃダメよ?』

俺は即答で「しません」と答えて苦笑いのまま電話を終える。コンビニ内の時計を見ると時間は約束の時間、6時半を過ぎている。

ふと、外を見るが待ち合わせ場所にその姿は見えない。もう1度だけみゆ先輩の携帯に連絡を試みるが反応はなかった。

「ちょうどコンビニだし、適当に物を買っていか」

俺は恋人の体調が心配になり、彼女の所に行く事にする。コンビニの袋をさげて歩く事、20分程度。

俺の家からだと電車で一駅程度は離れた場所にみゆ先輩の住むマンションが見えた。

「……このマンションの25階か。これだけ高い場所に住んでいる

と大変だな」

高層マンションとか住みたがる奴の気持ちはいまいち分からない。出かけるのも一苦勞だろうに、なぜにそんな高い場所を選ぶかな。そんなどうでも良い事を考えて、エレベーターで目的の階まで上る。

「あつ、どうしよう……」

そこで俺は彼女の家に入れない可能性がある事に気づく。両親は出かけている。当然、家には鍵がかけられているかもしれない。

「……まあ、その時はその時だ。とりあえず、行ってみよう」

部屋の前まで来て、俺は呼び鈴を何度か鳴らすが無反応。試しにドアノブをひねってみると……スツとドアは簡単に開いた。

「不用心だろ。それに、これって不法侵入だよなあ……」

だが、状況が状況だけに仕方ない。

俺は彼女の名前を呼びながら居場所を探すと部屋の一室に『美結の部屋』と書かれたプレートがぶらさがっている。

「……みゆ先輩、無事か？生きてるのか……って、何だこりゃ」

部屋に入るとみゆ先輩は確かにそこにいた、のだが……。

「……なっ……！？」

着替え中に倒れこんだのか上半身だけ下着姿。

ベッドに倒れこんだままの彼女は身動きせずに苦しそうに息をしていた。

……やばいよ、この人って身体の一部だけは十分すぎるほど大人なんだよ。

ちらりと見え隠れする白い肌、下着姿がやけに生々しい、俺もこれには動揺する。

俺は慌てて目を逸らすが、ぐったりとしている様子の彼女を放置しておけない。

「……仕方がない。着替えさせるか。べ、別にやましい事をするわけじゃない」

その場に脱ぎ捨ててあったパジャマを拾い上げて、俺は心を無にして行動を開始した。

手に触れる女の子の柔らかな感触。

やれやれ、本当にこのロリ先輩は俺に試練ばかりを与えてくれる……。

2時間後、俺は手持ち無沙汰にその辺の雑誌を読んでみゆ先輩が起きるのを待っていた。

コンビニで他に役に立つものを用意してくるべきだったな。水や食べ物ぐらいしか買ってこなかったことを後悔する。

「……ふう、少しはマシになったか？」

氷水で冷やしたタオルを頭にのせてやると、ずいぶんと彼女の表

情は楽になったと思う。

いまだに眠り続ける彼女。

今日は遅くなると親に連絡済み、何やら別の意味で勘違いされていそうだが気にしない。

彼女の家族がいつ帰ってくるのかが不安だが、それも状況次第だろう。

「んっ、起きたのか？」

彼女が目を覚ましたのは夜の8時を過ぎた頃だった。

辛そうにまぶたを瞬かせると俺の存在に気づいて声をあげる。

「ふえ？た、貴雅……冷たいっ！」

慌てて動いたために濡れタオルの水がパジャマの方にはいったよ
うだ。

「ったく、無茶するからだろ。ほら、タオル変えるからじっとして
おけ」

「どうして貴雅が私の家に……？」

俺はタオルを水に冷やしなおしながら、

「あー、勝手に入ってきて悪かった。時間になってもこないし、携
帯も通じないから心配になったんだよ。みゆ先輩の家にきたのはい
いものの、誰もいないみたいで勝手に入らせてもらったんだ。で、
案の定、倒れていたみゆ先輩を見つけたわけだ。適当にあったもの
をつかったぞ」

「そうなんだ、ありがとう。今日は両親が出かけていて……。ごめんね、貴雅」

どうにも覇気がないのは病気のせいだけではなさそうだ。気分的にもすっかり沈んでしまっている様子。

「でも、クリスマスデートをダメにしちゃったよ」

「それは残念だが、これが最後なわけじゃない。デートならいつでもできる。今はゆっくり休め。辛くはないか？おなかは空いていないか？他にも何かあれば言ってくれ……。みゆ先輩？」

「うつ……。うわああああん」

今度はいきなり泣き出した。

病気で情緒不安定になってるせいか、本気でこのデートがダメになったのが寂しいのか、それとも俺の態度が……。いや、これは俺の自惚れかもな。

「仕方ないなあ」

俺は彼女が落ち着くまでずっと髪を撫で続けてやる。

みゆ先輩は泣き止んでからが大変だった。

お腹がすいた、ケーキも食べたいつと我が侘言いたい放題。

まあ、看病してやる側としては別に不愉快ではない可愛い我が侘だったが。

コンビニで買ってきた夕食を食べ終わり、ふたりでケーキを食べる。

イチゴのショートケーキ（クリスマスVer）は程よい甘さがした。

「このケーキ、美味しいっ」

「コンビニのケーキで喜ばれるのも何だかなあ」

俺はふと窓の外を見るといつのまにかいい感じの雪が降っている。

「粉雪舞い散る聖夜。いい感じのホワイトクリスマスだよねえ」

「みゆ先輩、じっとしてる。口元に生クリームがついている」

俺がティッシュでそれを拭ってやる、ホントに子供相手にしてる気分だ。

けれど、目の前にいるのがただの子供ではなく、一人の女性だという事も自覚している。

「……雪が綺麗。もっと近くでみたいから窓を開けて？」

「風邪をひいているくせに。悪化しても知らないぞ」

「いいから、あけてよ。うわっ、冷たいじゃない。いきなりはやめてっ」

窓から雪が室内に入り込んでくる。

ほんのり冷たい粉雪、ふたりでその光景を見入る。

「……貴雅、今日はありがとう。感謝しているの」

「感謝してくれ。その代わり、さっさと風邪なんて治してしまえ。せっかくの冬休みがもったいないぞ」

「そうだよ。また一緒にデートしよう。今日のクリスマスは残念だったけど、楽しいの。やっぱり、貴雅と一緒にいてくれたからだよ。えっと、あのね……」

「来年も一緒にクリスマス・イブを過ごせればいいな。今度はちゃんとしたデートをしたい」

「え？あ、うんっ！私もしたいよ、クリスマスデート♪」

すっかりと機嫌を直したみゆ先輩に俺はプレゼントを手渡した。彼女に似合うと選んだピアス。
デザイン的には今までの彼女の身に着けているアクセサリーにはないタイプ。

「子供っぽいの中から少しは脱却してくれ。という意味で大人っぽいのを選んでみたぞ」

「動機は気に入らないけど、プレゼントは気に入った。ありがと、大好きっ」

「……メリークリスマス」

みゆ先輩と過ごすクリスマス・イブ。

こんな聖夜も悪くはないと俺は窓辺から降り続く雪とそれを楽しそうに見ている先輩の横顔を見つめながら思う。

俺って、もしかせずとも隣にいるこの子の事が好きなんだろうな。いつのまにか、俺は本気でみゆ先輩を愛している事に気づいたんだ。

第27話：セカンド・インパクト

【SIDE：初音美結】

風邪をひいてせっかくのクリスマスデートはつぶれちゃった。
でも、彼と一緒にクリスマスを過ごせたので悪くはない。

それから数日後、風邪も治して完全復活した私は貴雅と2度目の
デートを楽しんでいた。

今日は駅前の繁華街でのショッピングを中心にしたデート。

「にゃー、ここはどこ？ 私は誰？」

……の、はずだったんだけど、まさかの迷子になってしまった。
さっきまでは仲良く買い物をしていただけ、私がちょっと駅
のトイレに言ってる間に貴雅が行方不明に……というか、私がか
れたただけだね。

荷物には彼に預けてたので携帯電話も持っていない。

「はう、どうしよう、どうしようっ」

辺りを見渡しても貴雅の姿はなく、ジッとしている事もできず。

「ちょっと待っていて、と別れた場所はここのはずなんだけど」

場所を間違えて慌てて戻ってきた時には貴雅はいなかった。
ぐるぐる、ぐるぐると同じ場所を回ってもいないし。

「せっかくのデートなのに、こんなミスしちゃうなんて……」

ぐすつ、と私はへこんでいると、前から歩いてくる小夜子を見つけた。

なんてタイミングでお友達と会ったろう、ラッキー。

「あ、小夜子だ。小夜子っ！」

「ん？あら、美結じゃない。どうしたの、ひとりで泣きそうな顔して」

「うええーん。助けて、今、ちょっとピンチなの」

こういう時に小夜子はとても頼りになるから、助かるんだ。私は事情を話すと、小夜子は呆れた声で私を笑う。

「美結らしいわね。そう言うことなら、私が連絡してあげるわ。自分の携帯電話の番号くらい覚えておいて、公衆電話でかければよかったのに」

「あつ、その手もあった……って、今時、公衆電話を探す方が大変じゃない」

「ここは駅なので探せばすぐに見つかるはずよ。そんな事にも気づかないほど不安だったのかしら？本当に可愛いわね、美結って（バカっぽいのが見ていて楽しい）」

はう、ちょっと迷子になったことに動揺してた。

こんな不安な気持ちって誰でもあるよね？

というわけで、小夜子は貴雅の携帯電話に電話をかけてくれる。

「やつほ、貴雅くん。そうよ、私。目の前に何か泣いている猫を見

つけたの。そう、猫ちゃん。飼い主のキミが引き取りに来なさい。
お姉さんがただいま保護中よ」

「誰が猫だよ、にゃー」

迷子の小猫ちゃん扱いですか、うう……。

子ども扱いされてばかりいる私だって、怒る時はあるんだぞ？

「アンタよ、アンタ。迷子の子猫ちゃん、大人しくしておきなさい。
え？分かったわ。ほら、貴雅くんが電話に代わって欲しいって……
別れの電話かしら？」

彼女から携帯電話を借りると、貴雅の声が聞こえた。

その声に迷子の子供が親にあえたように不安が消えていく。

『おう、みゆ先輩。今どこにいるんだ？さっきから待ってるんだが、
全然来ないし』

「え？どこって駅の裏口だよ。貴雅はどこにいるの？」

『裏口って北側だよな？俺がみゆ先輩を待ってるのは東側だぞ？』

「嘘だあ。だって、目印も……あ、そうか。ここじゃなかったの。
私、勘違いしていたかも。目印にしていたお店って前はこっちじゃ
なくて、東口にあったんだよね」

私が勘違いしたのは洋服のお店、以前はこちら側ではなく東口に
あったの。

その店舗の見た目が以前と変わっていないからつい勘違いしてし
まったらしい。

隣の小夜子は「方向を間違える時点でドジすぎ」とからかう。
うるさいなあ、ちよつとしたミスじゃんか。

『まあ、みゆ先輩のドジ属性は今さらだから責めはしない。さっさと戻ってこい。ちゃんと小夜子さんにお礼を言っただぞ』

「はい。じゃ、すぐに行くから動いちゃダメだよ」

『——俺は最初から一步も動いてねえよ』

そうでした、私のせいだったよね、ごめんなさい。
私は気を取り直して、電話を切ると小夜子に返す。

「ありがとう、小夜子。助かったよ」

「連絡ついてよかったわね。それにしても、貴雅くんも美結につき合わされて大変じゃない。彼が優しい良い男でよかったわ。そうじゃなければすぐに別れてる」

「ふぎゅっ！？わ、別れるって私と貴雅はそんな危機ないもんっ」

いきなりの小夜子の言葉に私は新たな不安を抱える。
今まで貴雅に甘えてばかりで、彼にしてみれば私と付き合っただけでよかったと想ってくれているのになって……。

「ネガティブ思考してもしようがない。そう、私は彼に愛されている。だから、大丈夫……だと思う。うん、彼の家族とも仲がいいし……問題は無いっ、はず」

「だんだん自信がなくなってるみたいだけど？彼に甘えるのもいい

けど、少しは好かれる努力もしなさい。貴雅クンの前にそれっぽい可愛い子でも現れたら、あっという間に愛想を付かされて、破局なんて展開に……」

「うにゃー。そんなの聞きたくないっつ。もうっ、小夜子が意地悪する」

私は拗ねて唇を尖らせると、小夜子は微笑していた。
この友達は頼りになるけど、すぐに私で遊ぶから困る。

「私はもういくから。じゃあね、小夜子」

「ええ。デートを楽しんでらっしゃい」

小夜子と別れた私は早足で駅の構内を歩いて目的の東口へと向かう。

すぐに出口を出ると私は貴雅が待っている場所にたどり着けた。

……たどりつけたんだけど、そこで私は予想外の光景を目にする。

「やだあ、ホントにそう思う？だとしたら、嬉しいっ」

「ホントだ。俺は今日の髪型の方が似合うと思うよ」

うえ、何か嫌な場面に出てきたかも。

貴雅は私を待っているはずなのに、なぜか他の女の子と雑談中。

「……誰？美人さんと会話なんて珍しい」

はっ、これはいわゆるナンパという奴では？

私が迷っている間に他の女の子にちょっかいだすなんて……。

「貴雅、待たせたわね。あら、そちらの女の子は誰かな？」

どういう事情かは分からないけど、私は見ていられずに彼に声をかける。

自分の彼氏がそんなひどい人間だとは思いたくない。

「どこまで行つてたんだよ。まあ、いい。おかえり」

「……そちらの子は誰なの？誰？誰？」

私が彼に詰め寄ると私の前にその子は間近に近づいてくる。
私は威嚇するように相手にムツとした顔を見せた。

「本物だあ。ねえ、これって本物のみゆ先輩だよね？」

「俺は他にこんなロリ先輩を知らないぞ」

「めっちゃ失礼な事を言わないでよ」

彼女は興味津々と言った風に私を見つめてくる。

「あの、一緒に写メ撮ってもいいですか？」

「え？あ、別にいいけど？」

私が？マークを頭に浮かべるのをよそに彼女は私と一緒に携帯電話で写真を撮る。

何が楽しいのか、笑顔を見せる女の子。

結構な美人の子だ、貴雅の知り合いだとしたら、年下かな？

「ふう、いいじゃない。これで私の美少女コレクションもひとつ増えたわ」

「美少女コレクションって……相変わらずのようだな、華奈」

「まあね。でも、貴雅ちゃん。こんなにも可愛い子が恋人の貴方なんて羨ましい」

私を無視して会話を続けるふたり。

あのお、無視されると寂しいから仲間に入れてよお。

「つと、そうだ。紹介するよ、みゆ先輩。俺の幼馴染の宗田華奈（むねだ かな）。俺達と同じ高校に通ってる、俺と同じ年だ。偶然、そこで会って話をしていた」

「ふーん。幼馴染がいたんだ、可愛い子だね」

「あははっ、可愛い？当然ですけど、そう言ってもらえると嬉しいです」

よほど自分を褒められると嬉しいようだ、しかもちょっとナルシスト系？

私が妙な視線を向けると、彼女はすっと私に手を差し出した。

「みゆ先輩、初めまして。貴雅ちゃんの幼馴染で、心の恋人の華奈です。学園で噂のみゆ先輩に出会えて光荣ですよ」

「こ、心の恋人？何なの、それ？」

思わぬ単語に動揺する私、だって恋人って……え？え？
心の恋人って何なのよ？

「おい、華奈。余計な事は言つな。別に変な関係じゃない」

貴雅は否定するけど、彼女は私にこう言っただ。

「本当の事でしょう。私たちが昔、こ……むぐっ」

いきなり彼は慌てた様子で華奈さんの口をふさいだの。

「何でもないから。ホントに、気にする事じゃない。それよりも、
こんな場所で迷子になるとはどんなお子様なんだ？」

「違うもんっ、迷子じゃないくて、迷っただけ！」

「……どこに違いがあるのか分からない。小夜子先輩がいなかったら、今日のデートはこれで終わってたかもしれないな。ほら、荷物を返すぞ」

私にバッグを返してくれる貴雅。

聞きたい事はあったけど、誤魔化されてしまった感じ。

「みゆ先輩と貴雅ちゃん、ふたりはデートの途中だったの？」

「ああ。この先輩がこんな所で迷子になってな。待ちぼうけしてたんだ」

「だから、迷子言つな。少し場所を間違えただけじゃない」

うう、貴雅がいつものように意地悪する。
けれど、隣にいた華奈さんは笑って言うんだ。

「貴雅ちゃんって昔から好きな子とか気に入った子にはよく意地悪していたクセがあったけど、まだ治っていないんだ？私もよくされてたもの。好きな子いじめ、少しはやめてあげてよね」

「うっさい。そんな昔の事は忘れてくれ」

うにゆう、私のこと、やっぱり貴雅は気に入ってくれているんだ。
意地悪は照れ隠しで、好きな子ほど意地悪しちゃうタイプなのか
な……って、“私も”？
何かが引つかかる物言い、何だろう……幼馴染ってこんなに親密なものだっけ？

「あつ、もうこんな時間。私も待ち合わせがあるから行くわ」

「おう、また今度な」

彼女は貴雅に挨拶して私にも「それじゃ、さよなら。先輩」と頭をさげる。

「——ふふつ。みゆ先輩だけが彼の“特別”ではない、それを忘れずに」

その去り際、彼女は私の耳元にこんな意味深な言葉を囁いたの。
その後、何もなかったかのように去ってしまう、華奈さん……。
彼女は一体、貴雅の何なのよ！？

何だか新たな波乱の予感、これっていわゆる幼馴染ライバルの登場なわけ！？

んにゃー、私ってこんなのはっかりじゃない……どうしよう。

第28話：幼馴染に注意せよ！？

【SIDE：初音美結】

——お姉さんは怒ってます。

年下の恋人が無駄に女の子にモテる事に。

「だから、華奈とは幼馴染であって恋人なんて関係になったこともない」

喫茶店に入り、紅茶を飲む私は貴雅の言い訳を聞く。
華奈と言う女の子との関係を問い詰めたら、彼は別に何でもないといい張るのだ。

『先輩だけが彼の特別な人間じゃない』

あの意味深な台詞、挑発的な視線、彼女は私に明らかに不安を煽ってきていた。

「そんなの信じられない。大体、あの子が言っていた心の恋人って何？」

「……そんな事より、このケーキを食べろ。好きだろ、ショコラケーキ」

「食べるけど、話を逸らすなつ。私、怒ってるんだからね？」

ケーキを食べながらも私の怒りは収まらない。

「怒るって言われてもな。ホントに何でもないんだ。みゆ先輩だつて周りに男の友人くらいいるだろう？それでいちいち文句言われても困る……」

「私の周りに親しい男の子はいないもんつ。貴雅みたいに女の子に囲まれた生活していないから。ふんつ、モテるからってそんな言い訳しないでよね。正直に言つて、あの子と貴雅って何なのよ？ただの……」

「しつこいぞ、みゆ先輩。何でもないって言ってるだろ！」

「ひゃんっ!？」

貴雅に怒鳴られて私は身体を縮ませる。

こんな風に声を荒げる彼を見るのは2度目、前と同じく彼は怒ってる。

彼はハツとして、すぐ私に謝ってきたの。

「わ、悪い。つい怒鳴つて。ホントに何でもないんだ。華奈は幼馴染だ、それだけで何の関係もない。それに女に囲まれてって言つが、言うほど俺は女の子が……」

「ふええーん」

私は貴雅に怒られたのがショックで涙ぐむ。

彼は私の涙に慌てた様子で「え？」と驚いた。

「えぐつ、私は……貴雅が他の女の子といちゃラブするのが嫌なの。それだけなのに、怒らなくてもいいじゃん、ぐすっ」

「お、おい、みゆ先輩？」

「貴雅のバカ！っ！不安になる私の気持ち、少しは理解してよ。貴雅が……貴雅が私を好きって言うてくれないから不安になるんだよ！っ。バカ、バカ！」

私は言うだけ言っつて、半泣きの表情を手で覆い隠しながら席を立ち上がる。

呆気にとられた貴雅の顔、私はぷいっつと逸らしてその場を去る。

「ま、待てよっ！みゆ先輩、ちよつと待っててば！」

彼の制止する声も聞かずに私は喫茶店を飛び出した。

うう、女心の分かつてくれない貴雅のバカ！。

その数十分後、私には冷たい視線を向ける天音ちゃんがいた。

「——で、また喧嘩したんですの？みゆちゃん、懲りませんわね」

あの後、部屋に來た私にそんな辛らつな言葉を投げる彼女。

その頃になつてみれば、私も多少は冷静になれていた。

「だって、貴雅が私に怪しく秘密にするんだもの。何かを隠すの嫌でしょう？」

「まあ、気持ちは分かりますわ。貴雅兄様の方が今回は悪い様子ですわねえ」

つい先日喧嘩したばかりの私達に天音ちゃんは呆れた顔をする。

「ホントにおふたりは似たもの同士ですわ」

それ、褒めてないよね？

私だって好きで喧嘩したんじゃないもん……。

拗ねるように唇を尖らせながら、ふつつつと怒りが再沸騰。

「そうだよ、そもそも幼馴染のあの子さえ出てこなければ……もうっ！せつかくの楽しいデートだったはずなのに！」

私は苛立ちを抑えきれずに叫ぶことにする、がおーっ。

子供っぽいつて自分でも思つて自己嫌悪……。

「……今、幼馴染つて言いました？それってもしかして？」

「そういえば、言つてなかったっけ。私たちの間に亀裂を入れる原因だったのは貴雅の幼馴染の華奈つて子が私に意味深台詞を言ったのが……天音ちゃん？」

ふと、天音ちゃんの様子がおかしい事に気づく。

その子の名前を聞いた瞬間に身体をビクツとさせていた。

「みゆちゃん、念のために聞いておきますわ。華奈に写真を撮られませんでした？」

「そういえば、いきなりツーショット写真を撮られたかも。何か女の子と写真を撮るのが好きみたい。それが何か？」

僅かな沈黙の後、天音ちゃんは小声で私に言った。

「——みゆちゃん、楽しい学園生活は諦めたほうがいいですわ」

「いきなり、何なの？」

物騒かつ不吉な台詞に私は天音ちゃんに尋ね返す。

「手遅れです。あの女、『美少女を不幸にする女』ですわ。彼女に狙われたのが最後、どんな不幸がみゆちゃんに襲い掛かるかと思うと……あまりにも不憫で涙が、ううっ」

「ちよつと待つてよ？意味がわかんない」

「……みゆちゃんって、見た目通り、学園ではかなり人気者でしょう？」

「え？あ、うん。それなりに皆には好かれているけど？」

男子は影で私の事を『コードネーム“146-86”』と呼んでるらしい（小夜子談）。

「146-86」って何だろうと気になって貴雅に聞いたら教えてくれなかった。

むー、何だよ、ワケが分からないなあ。

と、それは今はどうでもいいから置いといて。

「それがどうして私の残り少ない楽しい学園生活と何の関係あるの？」

「華奈、私もその名を口にもしたくない相手です」

普段、どんな相手にも恐れることなく毒舌を吐く天音ちゃん。そんな彼女が怯える女の子、という子なのかな？

彼女は少し待っていてくださいと、身を翻して部屋を出て行く。相変わらず、その着物の帯を引つ張りたくなる……ダメ？数分後、彼女は私の前にアルバムを持ってきた。

「貴雅のアルバムだよな？中学の卒業アルバムって書いているもの。うわっ、懐かしいなあ。私と同じ中学なんだ？」

「小学校、中学と同じのはずですわよ？おふたりともその事を知りませんでしたの？」

「……私、あんまり男子と関わらない生活していたもん」

この歳（１７歳）になるまで恋という言葉と縁がない生活。ようやく春が来たのはつい１カ月前なんだ。

「さて、確かこの辺に……ありましたわ。みゆちゃん、この子を見てください」

そこに写っていたのは可愛らしい女の子だった。

貴雅の学年って、すごく可愛い女の子が多い……複雑な気分だね。

「……これは私が独自に入手した情報です。多分、兄様に聞けば裏づけはとれるはずですが、この女の子、少女Aは学年でも人気の女の子でした。告白されるのも当たり前、恋人を見つけたのには苦労しない美少女でした」

「よくいるよね、そういう子って……調子に乗ってる高飛車系？」

「ええ、ですが、彼女はひとりの女に目を付けられたのです。自分よりも人気がある可愛い相手だという事。それが少女Aにとっての不幸の始まりでした」

彼女は次のページをめくると、少女Aはすごく暗い顔をしている写真が多い。

笑顔の似合うはずの彼女らしくないその表情に私は疑問を抱く。

「え？何で、この子、こんなに疲れた顔をしているの？」

「少女Aは恋人が二股して失恋した直後、悪い噂だけが周囲に飛び交い、学校のアイドルの座からも引きずりおとされて、友すら失う寂しい中学生生活をおくったそうです。順風満帆だった彼女に何が起きたのか……次の写真を見れば分かります」

その次のページからは中心にいる女の子が変わっていた。

先ほどの子や他の可愛い子は皆、暗い表情になり、中心で皆に囲まれて笑うのは華奈に変わっていたのだ。

私はアルバムを眺めながら嫌な予感を口にする。

「もしかして、不幸を呼ぶって華奈が何か仕組んだの？」

「……華奈は自分が皆の中心にならないと嫌な人間なのです。世界で一番可愛いと自意識過剰な想いを抱く危険な女。嫉妬深く、可愛いと褒められる事が生き甲斐で、自分より優れている他人が気に入らなければそこから突き落とす。そのやり方も自分の手を汚す事がなく、相手を追い込む卑怯なやり方ですの」

少女Aの恋人を誘惑したり、恋人関係で悪い噂を流したり、徹底

的に彼女を追いつ込んだらしい。

うんざりと言った天音ちゃんの言葉。

彼女は自分が目を付けられないように華奈にだけは逆らわず、関わらずに來たらしい。

「えー？でも、そんな子に見えなかったけどな。まるで昼ドラの泥沼みたい」

「実際にするのがあの自意識過剰な陰険女です。写真を撮られたでしょう。何と言うコレクションか知ってます？」

「確か美少女コレクションが増えたって」

「そのタイトル、前にある言葉が付きます。不幸にしたい美少女ベスト10ってね」

……それ、マジですか？

ふわあ、私つてもしかして大ピンチなの？

「みゆちゃんが高校で人気の相手だと知り、近づいて来たに違いありません。目を付けられたが最後。みゆちゃんは人気者の座から突き落とされて、多分、貴雅兄様との関係すらも……いえ、すでにこれは別の形で危ないですが」

「うわぁーん。もしや、あの意味深台詞もそういう意味なの？すべては私と貴雅の信頼関係を壊すため？何て子なんだ……。あれ、でも、貴雅はその事を知っているの？」

「男の子に敵を作らない、それが華奈のやり方ですもの。知るはずがありませんわ」

華奈に不幸にされた女子はこれまで5人、どれもが悲しき結末を迎えているらしい。

人気者って、その反面で反感を抱かれやすい性質があるから……。芸能人とかと同じ、盛り上がるだけ盛り上がれば落ちる時は皆に見放されるもんね。

「ちなみに貴雅が彼女を好きって話は聞いた事ある？」

「いえ、ありませんわ。それに逆もないと思います。華奈が兄様を好きなんて、きっとありえません。だから、みゆちゃんは彼女の巧みな罠にはまらずに冷静に対処していく事が必要なんです。気をつけてくださいませ」

私は彼女撒いた地雷を踏んでしまったようだ。

あう、貴雅を信じていればよかったのに。

「……どうやら貴雅兄様が帰ってきたみたいです。謝罪するなら今しかありません」

廊下を慌しく走ってくる物音、やがて、天音ちゃんの部屋の扉が開く。

「はあ、はあ……ここにいたってオチかよ！！人がどれだけ繁華街を探しまくったか……諦めて帰ってきて、家の玄関に見慣れた靴があつた時に普通にびっくりした」

疲れた様子の貴雅はそう言うと、私の手を引いて部屋から連れ出す。

その横顔は文句を言いながらも安心した様子にも見えたの。

「天音、少しこのロリ先輩を借りるぞ」

「どうぞ。貴雅兄様、妹として忠告します。女の子は好きな男の子に愛される証拠が欲しいモノです。言葉にしなければ伝わらない、それが人間ですもの。これからは気をつけてくださいね?」

「忠告ねえ。ほら、俺の部屋に来いよ。あんな中途半端な事で終わらせるつもりか」

貴雅の必死な姿に私は少しだけ不謹慎ながら嬉しくなった。
ちゃんと、私は彼に想われているだって……えへへっ。

「何をにやけてるんだ? まあ、いい……話があるんだよ、ちゃんと聞け」

年下の彼氏が握る手はひんやりと冬の寒さで冷えていた。

一生懸命に私を探してくれていた、そう考えると嬉しくなっちゃうの。

第29話：愛を叫べばいいじゃない

【SIDE：倉敷貴雅】

ロリ先輩が俺の前から逃走して、必死に探してみれば我が家にと
たと言っ。...

……俺の2時間を返してくれと強く言いたい。

携帯電話にかけても出なくて、心配したんだぞ。

彼女は去り際に俺に言った言葉が耳から離れずにいた。

好きと言ってくれない事が不安なんだ、と。

俺が言えずにいた、その好きという言葉ひとつが彼女を不安にさ
せていた。

その事実は俺にショックを与えたんだ。

自分で思っている以上にみゆ先輩に惹かれている自分がいる。

彼女の泣き顔は見たくないし、寂しさや辛さなどなく、いつもの
笑顔でいて欲しい。

そのために俺は何をすればいいのだろう。

どうすればあのヒマワリのような明るい笑顔を見続ける事ができ
るのか。

彼女を探しながら俺は何度も自問自答を繰り返す。

俺がすべきこと、したいこと。

そして、それがどんな未来を作り上げていくものなのか。

それは何も難しい事なんてない。

俺の財布の中に入れている1枚の写真。

以前、小夜子さんがくれたあのみゆ先輩の笑顔の写真。

あの屈託のない笑顔が俺を突き動かすんだ。

「認めるしかない。俺がみゆ先輩を好きだったこと」

どれくらいの時間が経ったか、繁華街を探し回ったがみゆ先輩の姿はない。

俺は仕方なく今日は家に帰る事にした。

夜にでも電話をして、ちゃんと話し合いをしよう。

そう決めて、家に帰った俺は信じられない光景を目にするのだ。

我が家の玄関にどこかのロリ先輩が履いていた靴がある。

「——こういう事かよ。あのロリッ娘め」

呆れと嘆き、ふたつの感情が入り混じる溜息をつく。

まさか我が家にいるとは……そうか、妹の天音に会いにきていたんだ。

前回の喧嘩と同じ結果に俺はただ苦笑いをするしかない。

天音の部屋にいたみゆ先輩を連れ出した俺は自室に入る。

彼女は落ち着かない様子で、ベッドに座りながら俺の部屋のことを眺めている。

眺めて面白いものは見える範囲には置いていない。

だが、彼女は出しゃばりなにしていた一冊の写真集に目が向く。

「あつ、エッチっぱい本を見つけた。グラビア写真集……？」

「ロリ先輩。男の趣味の本に触っちゃいけないって学校で習わなかったか？」

「そんなの習わないよ。むうっ、貴雅もこういう可愛い子が好きなの？」

「まあ、男なら誰だって可愛い子が好きだな」

「やれやれ……落ち着かないのは俺も同じか。」

恋人を自室に連れ込む、その行為に俺は前回の自己嫌悪を思い出した。

この可愛い恋人は無自覚で俺を誘ってくるから困る。

……手の届く範囲でふたりつきりっていうシチュは考え物だ、うん。

俺だって高校1年、16歳の思春期真っ盛りの男なわけだ。

俺は余計な雑念を消し、自分を落ち着かせようと話を切りだす。

「そんな事はどうでもいい。で、まずは何から話すでしょうか」

「私が知りたいのはふたつ。貴雅は幼馴染の華奈をどう思っているの？」

「アイツは昔から付き合いだけは長いけど、異性として意識しあったこともない。その意味で気にしているのなら、さっきも言ったが、気にするな」

華奈は美人だが、性格に多少の難がある。

彼女も俺を男としては見ていない、ただの幼馴染でそれ以上はない。

「……天音ちゃんから聞いたの。華奈って子がどういう子なのか。今まで何人もの女の子を不幸にしてきたんでしょ？自分が人の中心にいないとム力つくタイプで、そのためには容赦なく相手を蹴落とすんだって」

「おいおい、さすがにそれはないだろう。天音はずっと華奈が苦手だから過剰に言ってると思うぞ。確かに華奈は中学の頃に問題のある行動を起こしたのは事実だ。しかし、それには理由があるんだ。アイツなりのな」

俺はみゆ先輩に俺の知る限りの情報を話す。

華奈が中学の頃、仲間はずれにされる程度のいじめを受けていた。理由は彼女がその女子グループの中心にいた女の子の彼氏と仲がよかったという、嫉妬的な理由のせいだ。

華奈が自分から行動したのではなく、相手の男が一方的に恋人ではなく華奈に惹かれていたのが真実らしい。

だが、どちらにしてもその少女の怒りを買ってしまい、華奈は孤立してしまったのだ。

彼女は辛くて、寂しい想いをさせられた。

その内にくすぶる怒りはやがて大きな事件を引き起こす。

「……中学3年の春だったかな。華奈はその女の子に対して、陰湿な仕返しを始めた。彼女に対する悪意のある噂を流したりしていたよ。どっちもどっちな状況ではあるんだが、結果的に華奈はその女の子に勝った。自然に彼女の周りには人が集まるようになったんだ。元から人気のある女の子であつたからな」

負けた少女は恋人とも破局し、元から信頼もなかったのか、友達も失った……これもまた自業自得、としか言えない。

反対に華奈は皆の中心的存在に戻り、今も明るい笑みを見せている。

「他に人気な女の子がいれば蹴落とすって話は？」

「自分を守る事以外で彼女はそういう行動をした所は見えていない。その中学の1件だけだ。何かと彼女に否定的な連中は悪い噂を流しているようだが」

実際はちよつとナルシスト系な女の子だ、それ以上でもそれ以下

でもない。

今もそう言う事をしているようには思えない。

「——騙されているんじゃないの？貴雅は裏の顔を知らないから」

ぶつぶつとみゆ先輩は何か言う。

華奈に対して何だか敵対意識を抱いている様子。

何かふたりの間であったんだろうか、あの短い時間で……。

女の子って男には分からない事もあるから難しいぜ。

「ん？何か言ったか？小声で聞こえにくかった」

「何でもないっ。貴雅が彼女に幼馴染以上の感情を抱いていないのは分かった」

「そりゃ、よかった。誤解されるのだけは避けたかったからな」

みゆ先輩はどうやら独占欲が強いタイプだ。

俺の周囲にいる女の子に可愛く嫉妬する。

付き合いが長くなり、そういう性格的なものにも気づき始めた。

まだお互いに知らない事だらけなのは間違いないけど、理解しあうのは大切だと思う。

先輩は俺を小動物のような小さな瞳で見つめてくる。

「もうひとつ、知りたい。……それは貴雅の気持ちだよ」

そう言うや否や、彼女は小さな手で俺の手を握り締めてくる。

触れ合う温もり、間近に香る香水は彼女のお気に入りの花の匂いか。

「私はまだ1度も貴雅の気持ちを聞いていないよ」

遊園地デートの時、彼女は俺に好きだと言った。

俺はいまだに彼女に答えを出していない。

その答えがなければ俺達は本当の意味で恋人にはなれない。

恋人ごっこから本当の恋人になるためのステップアップが必要だ。

……そのためにすべきことはただひとつ。

俺がみゆ先輩に自分の気持ちを伝えて、意思を確認しあう事。

繁華街で探し回った時にはすぐにでも言おうとしていた。

しかし、実際にこの子を前にしたら言うべき言葉が出てこない。

ちくしょう、柄にもなく緊張しているってか。

相手は口り先輩、見た目は子供、中身も子供、体の一部だけが大人の女の子なのに。

下手に緊張なんてするなよ、俺。

……なんて、さすがにこればかりは緊張するだろう。

断られる事とか、そういう悩みじゃない。

俺が彼女を“好き”というのはこれまで以上に関係を深めるという事だ。

俺達の関係は間違いなく変わる、今までは恋を教えるための交際だった。

「私は知りたい。今の貴雅の心の全て、それが知りたいの」

ゆつくりと彼女は俺に身を委ねるように抱きついてくる。

身長差40センチの恋。

傍から見れば小学生と大人が付き合っているようにも見える。

よくて兄妹、恋人には見られる事は多分ないだろう。

しかし、大事なのは他人からどう見えるかではない。

俺がみゆ先輩をどう思うか、それが大事なのは百も承知だ。

「俺達の出会いはある意味、運命的だと思わないか。宛先もないラブレターを拾ったのが始まりで、気がつけば周囲に恋人宣言していて、いつのまにか恋を知るための交際を始めていた。そして、みゆ先輩は俺の事を好きになっていたんだ」

「だって、貴雅は優しいもん。男の子として、私は貴雅が好き……」

「恋のこの字も知らなかった先輩が、俺との付き合いを通して恋愛を知った。初めは俺もただ放っておけない気持ちだけだった。それが気がつかない間にある感情に変わっていくんだ」

そうだ、何て面倒で放っておけない女の子なんだろう、と常に感じていた。

胸が大きくて可愛くて、子供っぽい性格で、我が侂言ってばかりで。

喧嘩しても、空気読まずに家に来て、家族と和んでいた時はその神経の図太さに呆れた。

だけど、1度も俺はみゆ先輩の事を嫌いになつたことがない。出会ってから1ヵ月、意識させられっぱなしだった。

「……俺も好きだよ、みゆ先輩。意識させられた時点で俺の負けだ」

「ホントに？ホントのホント？嘘つかない？」

「こんな場面で嘘をつく気はない。ん、みゆ先輩？」

彼女は嬉しそうに照れる姿を見せると唇をこちらに突き上げてくる。

「キスしよう、ようやく“恋人”になれた記念のキス。私はずっと

貴雅から好きって言ってもらえる日が来るのを待っていたの。振り向かせる自信がなかったわけじゃないけど、中々、言ってくれなくて辛かったんだ。だから、キスして？」

桃色に染まる頬と濡れた唇、俺は想いをこめてその唇を奪う。

「――愛の証が欲しいの、んうっ」

恋を教えるはずが恋を教えられていたのは自分かもしれない。

どんなに体が小柄で、見た目がロリッ娘でも、みゆ先輩はやはり年上の女性だ。

俺よりも1年だけ早く生まれて、1年だけ長く生きている。

「大好きっつ、貴雅。私達、やっと本物の恋人になれたんだねっ！」

甘い言葉と一緒に俺の好きな笑顔を浮かべるみゆ先輩。

あまりの可愛さと愛しさに今度は俺の意思で彼女と唇を重ねあう。犯罪的な魅力を持つ乙女、みゆ先輩との恋愛はまだ始まったばかり……。

第30話：背伸びしてもまだ遠い

【SIDE：倉敷貴雅】

季節は12月後半、冬休みなので、俺はのんびりとした朝を迎えていた。

むしろ、寒さに震えて布団から出られなかったと言いなおしてもいい。

数日の間に一気に気温が下がったせいだ。

だが、休みと言うのはいつものように慌しく学校の準備をせずともいい。

「これも正しい休みの使い方のひとつだ」

寝坊を正当化しつつ、欠伸をしながら顔を洗い、俺は食事をしようとしていた。

すると、廊下で荷物を抱えた母さんとすれ違う。

「おはよう、貴雅さん。悪いんだけど、これから出かけてくるわ。帰りは明日の夜になるの。食事とか、いつものように勝手にすませておいて」

「んー、了解した。気をつけて行ってらっしゃい」

うちの母は華道の先生なのでこの時期はお正月用の花とかで忙しいらしい。

俺が台所を覗くとちゃんと朝食は用意してくれていた。

遅めの朝食をとりながらテレビを見ていると、家の電話が鳴る。

「はい、倉敷ですが？」

『その声は貴雅か？僕だよ、光里だ』

電話に出ると相手は俺の兄だった。

今は大学に通うために県外に出ているために中々会う機会がない。

「何だ、兄貴か。母さんなら今、出かけているよ。何か伝えておく事でも？」

『年末に帰る予定だったんだがちょっと野暮用が入ったんだ。帰るのは1月2日頃になると美琴さんに伝えておいてくれ』

「分かった。3日の本家の方にはちゃんと行くのか？」

『もちろんだ。それに間に合わせるために予定を組んでいる』

うちの家は古くから続く名家って奴で、正月になると毎年、本家に親戚一同が集まる事になっている。

正直言って面倒くさいことなのだが。

兄貴はその本家のお嬢様と恋人なので、参加しないわけにはいかないのだろう。

「……………話は以上か？だったら、もう切るぞ」

『ああ、そういえば、貴雅に恋人が出来たというのは本当か？』

「本当だけど……………それが何か？高校生なんだし、恋人くらい普通にいるだろ」

特別なことでも、珍しい事でもない。

そりゃ、小学生同士ならまだ話は別だけどさ。

『年始の本家の集会に連れていくのはどうだ？みんなの前で紹介しておけ』

「冗談。何で好き好んで親戚連中にいじられなきゃならないんだ」

しかも俺の恋人はみゆ先輩だぞ、ロリ顔で巨乳な女の子だ。
親戚から変な目で見られる光景が容易に想像できるっての。

『勝手に誰か婚約者でも決められたらどうする？』

「俺はまだ結婚できる年齢じゃないから心配なし。世話好きなおばさんもさすがに俺まで紹介しようとしないだろ」

『そのおばさんから僕は「貴雅クンにもそろそろ……」と言う話を聞いたから、お前に話しをしているんだが？』

「それはマジで勘弁。従兄の博道さんの二の舞にはなりたくないな」

親戚の中にはやたらと一族の若者を結婚させようとするおばさんがいるのだ。

去年のターゲットは従兄で、それなりの家柄のお嬢さんを紹介してもらったらしい。

だが、性格がかなり気が強いタイプで可哀想に思える結婚生活をしているとか。

『彼は自分で選んだ道だぞ、一応。今でも仲はいいじゃないか』

「お見合いとか、最初から逃げ場がないようなものだろう。俺は嫌だね」

一緒にいるうちに好きになる事もあるだろうが、そういう恋愛は遠慮する。

俺は自分で選んだ相手と添い遂げたい、それが普通の事だろ。

……みゆ先輩がその相手なのか、という問題はおいておく。

『だったら、早めに恋人がいる事を伝えておくといい。まあ、回りでよく言ったが、美咲が貴雅の恋人を見たいと我が侘を言ってるんだよ、頼む』

「結局、それかよ。はあ……」

兄貴は恋人にかなり甘いのだ。

幼馴染なので付き合いの長い中で、頼まれた事を断った事がないんじゃないだろうか。

当然ともいえる態度にあきれつつ、俺は断っておく。

「その話は帰ってきてからでもしよう。じゃあな、兄貴」

電話を切ると小さく溜息、気が重くなる話をしてくれる。

「本気でロリ先輩を親戚一同の前に出すのはやめてくれ」

好きな女の子ではあるけれど、周囲からロリコン扱いされるのは嫌なのだ。

妙に朝から疲れてしまった俺は自室に戻る事にした。

しばらくの間、漫画でも読んで時間を潰す。

ベッドに寝転がりながらダラダラしている。

「ふわぁ……」

あれだけ寝ても寝たりない、眠気に襲われてダウン寸前。

「寝むいなぁ、ぐう……」

言ってる間に俺の意識はすでに落ちて、再び眠りについていた。

モゾモゾと何かの音が聞こえる気がする。
しかも、なんだかやたらに体が重い。

「うつ……ん？何だ？」

薄っすらと目を開けながら俺は寝ぼけながらそれを掴むとぽいと放り投げる。

何だ、天音の悪戯か？
ぬいぐるみとかベッドに大量に置かれて、目覚めて本気でびびった過去を思い出す。

「ふ、ふにゃっ！？」

だが、今回は違ったらしい。
どこかで聞いた女の子の叫び声とともにガシャンという大きな物音を立てた。

「——な、何だ！？」

ハッと気づいてしつかりと目を覚ます。
目の前には本棚が崩れている悲惨な状況。

「うう、放り投げるなんてひどいじゃないっ!」

そして、1匹の猫が不満そうに口を尖らせてこちらを睨みつけていた。

怒っても全然迫力がないのは愛嬌だ。

「何だ、夢か?おやすみ」

「寝るなあっ、くおらっ!私の傷の手当をしなさい!」

こちらに飛んでくる本、そのうちの何冊かが俺の身体を直撃する。
ちよつと待て、本の角は普通に痛いんだよ。

「いてえ。何するんだよ、みゆ先輩。……みゆ先輩?」

そこでようやく俺はそれが猫ではなく、恋人のみゆ先輩だったと気がついた。

すりむいたのか赤くなるヒザをさするみゆ先輩。
ロリ体型の美少女は間違いなく俺の恋人だった。

「恋人をいきなり放り投げるなんてひどくない?」

「いや、寝ぼけていて、つい……。ていうか、何で俺の部屋に来て
いるんだよ。その方がびっくりした。今日は会う約束してたっけ?
俺の記憶が確かだとそんな約束はしていなかったが」

「ガーンッ！貴雅が私に対して暴力振るっただけでなく存在的に否定しようとしている。恋人になってから冷たくなったよね、釣った魚にエサをあげない典型的な男だったなんて。ぐすんっ」

薄っすらと瞳に浮かべた涙、俺が全面的に悪い奴みたいな言い方はやめてくれ。

「不注意の事故だ。寝ている相手に何かしてきたみゆ先輩が悪い」

「何かって、ちょっと抱きついただけなのに。悪戯なんてしてないもんっ」

「……それはすまなかった」

どうやら俺の方に非があるようだ、素直に謝る事にしよう。
で、なぜに彼女が我が家に來たのかと改めて尋ねる事にしよう。

「天音ちゃんと遊ぶ約束をしていたの。でも、お稽古があるって待っているのよ」

「稽古？今日は何だ、お茶か書道か……？」

「書道だっけ言っていたよ。ホントにすごいね、和風お嬢様そのものじゃない」

いや、ただ習い事が書道や華道をしているだけ和風お嬢様っていうのはどうかと。

まあ、天音は見た目から大和撫子なので文句はないんだけど。
俺は身体を起こすと、とりあえずみゆ先輩の治療と部屋の片づけをする。

本を片付けながら俺達は冬休みの話しをしていた。

「へえ、それじゃ、お正月は皆が集まるんだ？」

「本家に行きたくない、大人に囲まれるのは苦手なんだよ」

「でも、貴雅って父方も母方も同じ親戚なんだよね？そういうのって珍しいかも」

そりゃ、普通ではないかもしれないな。

親同士が従兄妹だったために、当然、親戚は同じなんだ。

「そう言う事情だと、美琴さんも結婚する時、頑張ったんでしょ」

「親戚からは反対意見も多かったみたいだが、うちの母さんって行動派だからな。結局、反対意見を言ってた連中をまるめこんで話を片付けたらしい」

なので、今での倉敷家は父よりも母さんの方が力があるように思う。

未だに親戚からはあの時の母さんのすごさを武勇伝のように語る人もいるし。

18歳の少女が親戚に対して何をどうして、結婚を認めさせたのか。

自分の母親の事なのであまり知りたくないのが現実だ。

「……ん、もうこんな時間じゃないか。昼ご飯は食べてきたのか？」

「私は食べてきたけど？貴雅はこれからなの？」

「そついや、母さんは出かけるって言っていたか。仕方ない、コンビニにでも行って来るかな。弁当でも買ってくるよ」

「お弁当？それなら私が何か作ってあげよっか」

みゆ先輩は自信を持って言う、料理が上手だったつけ。

というわけで、エプロン姿の先輩があるものを適当に使って料理をしてくれる事に。

「この材料だとオムライスかな。それでいい？」

「全然、オツケー。それにしても手際がいいな」

前にも見たがみゆ先輩はかなり料理が上手なのだ。

見た目的には子供向け料理番組を思い出すが。

「普段から料理をしてるし。もう少しで出来るから待っていて。ちゃんと栄養のあるもの食べないと大きくなれないんだからね」

「それを先輩に言われるともの凄く違和感があるな」

みゆ先輩と俺の身長差は約40センチ、背伸びしても俺に届かない。

それなのに、やはり内面的なものでは妙に年上を感じる事があるのだ。

「……見た目と中身、あってるようであってないか」

それも彼女が俺を惹きつける魅力のひとつなんだろう。

「ん？何か言った？」

「エプロン姿がやけに可愛いと思っていたんだ。今度、子供向け料理番組にでも……」

問答無用で攻撃されました、やっぱりただの子供なのかもしれない。

ちなみに作ってくれたオムライスはどこで食べたものよりも美味しかった。

恋人が作ってくれた料理、というのが何よりも美味しいのかもしれない。

いや、訂正、料理が上手い恋人だったただけだ。

……自分で言っておいて普通に恥ずかしいぞ、俺。

第31話：意地悪な彼氏

【SIDDE：初音美結】

私の恋人は誰にだって自慢できる男の子、それが貴雅だ。
めっちゃ優しく、カッコよくて、背も高くて……。

年下なのに生意気な感じとか、時々、意地悪する所を含めても、私にとってすごく相性がいいので、よく合う相手だと思う。

私の初恋、彼を初めて好きになったときからずっと私の心を支配する存在。

強く思えば思うほど、強く意識するほど、私は貴雅が大好きになる。

恋を知らなかった私に恋を教えてくれた。

人を愛するのって、とても大変なの。

相手の何気ない態度で傷ついたり、些細な言葉で嬉しくも悲しくもなる。

「……だから、大好きだよ。貴雅」

「説明する気がないなら、帰れ。ロリ先輩」

「ひどっ。彼女に向かって言う台詞じゃないよぉ」

冷たい言葉と一緒に私は彼にジッと睨まれてしまう。

今日は12月31日、世間で言う大みそか。

私はこのお正月は貴雅の家でお世話になることになっていたの。
事の次第は私の両親がお正月を海外で過ごすとか言い出したことから始まる。

当初の予定では私を含めていたんだけど、私は飛行機が超がつく

くらいに苦手で、もちろんパス、参加を拒否した。

「子供じゃないんだから、ひとりで留守番くらいできる。ふたりは楽しんできて」

と言ったら、あっさり両親は海外旅行の予定を組んでたのが数週間前の話。

うちの両親の仲の良さは見ているとベツタリすぎて辛い。ラブバカップルを結婚してもずっと続けていられるのはすごいけど。

それで、今年のお正月はひとりのはずだったんだけど、それを天音ちゃんに話したら、美琴さんに話通って、数日間、ここでお世話になることになったの。

「女の子のひとり暮らしって物騒でしょう、それにひとりじゃ寂しいんじゃないかって……。そんな感じで今日から3日間だけ、お世話になるね」

「そんな大事な話はまず彼氏の俺に伝えてくれよ」

あれ、何だか自分だけ聞かされてなかったことに不満な様子。

「ごめんなさい。えへへっ」

笑って誤魔化すと彼は仕方ないと言った感じで、

「まあ、いいや。それにしても、母さんも天音もすっかりみゆ先輩と仲良しになって……。人に好かれるという才能に満ち溢れているな」

それって褒められているのかにや？

私は天音ちゃんの部屋に行くと、彼女は私に一枚の紙を差し出した。

「どうしたの、天音ちゃん？」

「実は恋文というものを書いてみましたの」

「恋文ってまた古風な物言いだね。あの小林君に出すの？」

天音ちゃんの好きな男の子は以前の小学校潜入事件で会ったことがある。

向こうは彼女に気があるし、天音ちゃんの気持ち次第のはず。

「小林君のおかげで私はクラスに馴染むことができました。私が彼を好きなのは美優ちゃんも知っていますでしょう。しかし、その告白を急がなければいけない理由ができましたの。だって、あの他に好きな人が出来たみたいです」

「なんでそう思うの？」

「私の中にある女の勘というものがそう告げています」

いや、乙女の勘ってというか、ふたりが仲良くなってからまだ数週間も経ってない。

「……本当のところはどうなの？」

「冬休み、彼のサッカー部に応援に行ったらなぜか応援する女の子が増えていました。その前の試合でハットトリックとか言う一試合に3回ゴールを決めたらしいんです。それから小林君のファンが増えたみたいで……」

そもそも、彼の女性関係をそんなに知らない気がするの。
ファンが多いからすぐにモテるとは限らないし。

まあ、彼女がすぐにでも行動を起こすというならその方がいい。

「で、正月明けにでも手紙を出すつもり？」

「ホントは年賀状に書いて送るのもありかなと思いましたが、家族の方に読まれるのは恥ずかしいのでやめました」

新年早々、子供にラブ年賀状なんて送られてきたら普通にびっくりするでしょう。

それは普通にやめて正解だよ。

「というわけで、みゆちゃんに私の恋文のお手伝いを頼みたいのです」

「別にいいよ。私にできることならやってあげる。私も貴雅を落としたのはラブレターだったからね！結果的にはだけど」

ラブレターを書かなければ私と貴雅が恋に落ちることもなく、恋人にはなれなかった。

運命っていうのはホントにあるんだって。

「みゆちゃんの経験を当てにしています」

それでも困るとは言えずに私はうなづく。

私だって彼女に協力してあげたいもの。

大事なお友達だからこそ、力になってあげたいと思う。
それにしても、こういう文章を書いたんだろ。

「天音ちゃん、読ませてもらってもいい？」

「はい。ぜひ、率直な感想をくれたら嬉しいです」

私は手紙に目を通す、綺麗な達筆で書かれた文字。

その中身は……過去の私が書いた手紙と大きく違った。

『小林君、私はあなたを愛しています。友達もおらず、一人だった私に優しくしてくれた貴方。私の世界を広げてくれた。感謝してもしきれない思いでいっぱいです。私は生まれもよく、どこか他人を見下すクセがありました。そのせいで、周囲の人間からは距離を置かれてしまうことも多々あり、しかし、それを悲しいと思うこともなくこれまで生きてきました。けれど、貴方と出会い、私は一人の寂しさを改めて思い知らされたのです。小林君が話しかけてくれることは嬉しく、楽しくて仕方ありません。人間と言うのは孤独を知り、そして、強くも弱くもなるものですね。私はあなたと会えない時間がさびしくて、辛いです。今までは他人の事なんて気にもしなかった私をこんな思いにさせたのは貴方が初めてです。私はきっと貴方がいないとダメになってしまう、そんな弱さを手にしてしまいました』

……ちゃんとした本音が書かれたラブレターでした。
私の作り物のラブレターとは違いすぎる。

「天音ちゃん、私に教えることはもうないよ」

「……ホントですか？さすが私の恋の先生ですね。みゆちゃんのおかげです」

実のところ、私は何もしていない気がするの。

むしろ、とくに私なんて超えちゃってるよ、ふみゅーん。

でも、ホントに彼女は変わったと思う。

以前の天音ちゃんなら他人にこんな風に本音を語ることもなく、自分に素直になれるって素敵なことだと思う。

「これで小林君は私と交際してくれるでしょうか？」

「それは彼の気持ち次第だけど、きっと大丈夫だよ」

私から見ると、大丈夫そうに思えた。

このふたりは相性もいいし、うまくいくに違いない。

「とりあえず、少しだけ修正してみようか」

「そうですね、言葉の言い回しとかはわかりやすい方がいいですか？」

可愛いなあ、天音ちゃん。

ちゃんと小学生らしくなり、恋に一喜一憂するような可愛さをもつようになった。

彼にストレートに気持ちを告げる、彼女は弱さと強さを手に入れたんだ。

私はどうなんだろう。

貴雅との恋愛で強くなったり、弱くなったりしたかなあ。
なんて言うか、私と彼の場合はそういうのとは違う気がする。

「恋は単純に見えて難しいんだねえ」

私は手紙を書きなおす天音ちゃんを見ながら微笑する。
いい恋をして、女の子は成長するんだよ。

「ふにゃ〜っ」

私はその夜に彼氏にいじめられていました。

「ホントにこのロリ先輩はやることが半端ないな」

「ひよつとひたじょーだんなのにい（ちよつとした冗談なのに）」

私の頬をつねる貴雅は少しだけムツとしている。

そりゃ、今回は私も悪かったんだけども。

今、彼の部屋はとも女の子っぽくなっている。

ファンシーグッズに囲まれた小学生くらいの女の子の部屋だ。

「まったく、何で人の部屋に勝手に侵入して可愛いぬいぐるみなんて
並べてるんだ？これは天音の部屋から持ってきたやつだろ。しかも、
カーテンとか布団の毛布まで可愛いのに揃えてどうするつもりだっ
たんだ？」

「ふえ、ちよつとした冗談だよ。サプライズってやつ？」

「何がサプライズなんだか。ちゃんと元に戻るの手伝え」

彼が昼間留守の間に忍び込んで部屋を改造しただけなのに。
だって、この部屋ってザ・男の部屋と言う感じでシンプルすぎる
んだもん。

ちよつとぐらい可愛くしたっていいじゃない。

「……お、怒ってる？」

「こんなことぐらいで怒りはしない」

「だよね、だよね？貴雅って意地悪だけど超優しいから」

彼は「何だよ、それは？」とあきれた声で言う。

いい彼氏だよ、貴雅は本当にいい人だ。

私は貴雅に抱きつくとは彼は私の身体を受けとめてくれる。

「今度は何だ？先輩ちっさいからまた放り投げるぞ」

「甘えたい年頃なだけだよ」

幸せな気持ち、私は彼にキスをねだる。

「んむうつ……」

恋をしても私は基本的に甘えてばかりの私の性格は変わらない。

「もっとぎゅってして」

「……ここで断るってありか？」

「それってどんな放置プレイ。いいじゃん、抱きしめてくれるくらいっ」

「騒ぐな、分かったよ。ホント、どちらが年上か分からないな」

そう言いながらも甘えさせてくれるから貴雅は好き。

私は彼の腕に抱かれながら言う。

「今年はいろいろって言葉じゃ片付けられないくらいの出来事がたくさんあったね」

「……そうだな。高校に入学して、いきなり美人の先輩に告白されて、付き合い始めた」

「それ、私じゃないよね？絵美さんのことでしょっ！」

「思い出せって言ったのはそちらだろ。俺にとってはそちらの方が先なんだよ」

それはそうかもしれないけど、聞きたくないよう。

ムスツとする私の頬を彼は触れてくる。

「冗談だよ、冗談。絵美のことがあった後に、とんでもないロリ先輩に出会った」

「とんでもないもないって表現しなくてもいいじゃない」

「いや、俺の人生でみゆ先輩ほどある意味すごい人はいないぞ」

「だから、もっと褒めてよ。私を褒めなさい」

私に意地悪な貴雅、こんな風にされても私は嫌だと思つ気持ちすら起きない。

すっかりと私の心は貴雅に支配されているんだ。

「……みゆ先輩みたいな可愛い彼女ができて、毎日が楽しいよ。俺の生活は今年の最後の1カ月で激変したよ。ホントにすごいって思える。これって運命？」

「にゃー。素直に言われると照れる」

私も数か月前にはこんな風に男の子の前で甘えるなんて想像もしてなかった。

「もうすぐ新年だ。初詣にでもいくか？」

「うんつ。天音ちゃんも連れて行こうよ」

まもなく今年は終わって新しい年が始まる。
来年もいい年になればいいのにね。

第32話：夢で見た世界

【SIDE：倉敷貴雅】

新たな年、今年の初夢は変な夢だった。

俺に抱きつく女の子、本来は甘い雰囲気のある光景もその時は違った。

『み、みゆ先輩。離してくれないか？』

『嫌だよ、離さないもん。絶対に離れないんだからっ』

みゆ先輩が俺に抱きついて離れないのだ。
ずるずると引きずっても離れてくれない。

『離せ、うおっ、ちょっとこれは……げふっ』

力強く締め付けられて俺は苦しくなる一方、恋人に抱きしめられて死ぬのは嫌だ。

俺はジワジワと苦しみがらめっちゃくちゃ怖い思いをしたのだ。

そんな悪夢から目を覚ました俺はそれが夢ではないことに気づく。

「うにゅう……」

布団の中から顔を出す女の子、俺の身体にぴったりと抱きついて

いる。

心地よさそうな寝顔は今の俺にはかなりイラツとさせる。

俺の初夢を悪夢に変えたのは間違いなくこのみゆ先輩のせいだ。

夢にまで見た、というか、夢にまで出たロリ先輩。

人の夢に介入してくるとはやってくれる。

「つたく、人様の夢にまで出てくるなよ」

俺は軽く鼻をつまんでみてやる。

彼女は小さく唸っている、ちよつとぐらい俺の苦しみを理解しろつての。

「——かぶっ」

「い、痛てえっ！？か、噛んできたぞ、このロリっ娘め」

俺は慌てて噛まれた口から指を引き抜く。

危つく指を食べられる所だった、この子は寝ていても危険な存在だ。

……というか、改めて状況を把握するとなぜみゆ先輩が俺の部屋に、さらに細かく言えば俺達はなぜ同じベッドの中にいるのだろう。とりあえず、確認……ふう、俺がロリ先輩と一線を越えたわけはなさそうだ。

俺を犯罪者にするつもりか、この人は……。

「起きろよ、みゆ先輩。さっさと起きろ」

身体を揺らす中々目を覚まさない。

「うつっ……んっ……」

朝から妙な声を出すんじゃない、俺をどうしたいんだ。
自分を抑えるのも男として限界ラインはある。

こんな無防備な恋人の姿に多少なりとも俺は意識をしてしまう。

「いや、ここで反応したら人として負けな気がする」

俺は雑念を振り払うように彼女の身体をばいっとベッドの外に放り出すことにする。

「……ひゃんっ」

ベッドからゴロンっと転がって落ちた先輩。

目が覚めたのか、頭を押さえながらこちらを見上げる。

「痛いよう。何で突き落とすの。そこは朝からキスするとかしなさいよ」

しかも、どうやらそれ以前に起きていたようだ。

ふわぁと軽く欠伸をする彼女は悪びれた様子もない。

俺はムツとこみ上げる怒りを抑えながら彼女に尋ねる。

「いつから目が覚めていた？」

「貴雅が私の鼻をつまんだ辺りから起きてた。とりあえず、噛んでみて……いひゃいっ!? な、何するのよ、いやぁ」

俺は思いつき彼女を抱きあげて振り回す（セクハラでもDVでもない、お仕置きだ）。

朝っぱらからこの俺をドキドキさせるようなことをしやがって。

何かロリ先輩に遊ばれた現実に腹が立つわ。

「俺の反応を楽しんでいたのか？ん？」

「ご、ごめんなひやいゝつ。うにやあ。ちょ、ちよっと待って。脱げる、パジャマが脱げるってばっ！？にやー！」

「……あつ」

俺が勢いよすぎて、思わず手を放すとベッドにみゆ先輩の身体が飛ぶ。

飛ぶといっても実際は軽く身体が跳ねた程度だが。
俺の手にはロリ先輩のパジャマが……俺は思わず目をそらす。

「ふにやつ、な、何をするのよ。パジャマを返して、バカあつ」

真っ赤になって、すぐに布団で身体を隠そうとする彼女。
ちくしょう、見えてしまったじゃないか、白い……忘れろ、忘れてしまえ、俺。

「——貴雅兄様、みゆちゃんの回収に……きました？」

タイミング悪く扉を開けたのは天音だった。

……今の俺たちを第3者の立場からみたらどうなるのか。
ベッドに座って顔を赤くする女の子、なぜか下半身は下着姿だ。
そして男は意味深に女の子のパジャマのズボンを持って立ち止まっている。

この状況、どう見てもマズイ展開にしか思えない。

「……あ、天音、これは、だな」

「いいえ、何も言わないでください。兄様、みゆちゃんの色気に負けて襲ってしまったのですね。恋人同士ですもの、いつかは通る道ですわっ」

なぜに嬉しそうな顔をするのだ、妹よ。

「よかったですわね、みゆちゃん。作戦通りです」

「うう、違うの。作戦は失敗、私はただ貴雅にパジャマを脱がされてお尻を見られたの。恥ずかしくて死んじやいそう」

いや、白いパンツしか見てねえよ。

と、堂々と言うこともできずに俺は新年早々、頭を抱えるのだった。

……ちよつとだけいい思いをしたけどな。

「というわけで、昨日の夜にみゆちゃんが兄様の寝室に忍び込んでいました。兄様がどのような行動をとるのか興味がありましたの」

朝、おせち料理を食べながら天音は事の真相を話した。

朝から騒がせた原因、ロリ先輩はまだ怒っているのか、ぷいっと視線をそらす。

何の反省もないなら、あとで反省させるだけだ。

「ふんっ、手を出すどころか甘いことなんてひとつもなくて、ただお尻を見られただけだったけど。貴雅ってそういう男の子だったん

だ。しかも、放り投げるし、痛かったよ」

「あらあら、貴雅さん。男の子としてちゃんと責任は取らないといけないわ」

「いや、この場合、何の責任だよ」

母さんは微笑ましそうに言うが、親として別に言うことがあるだろう。

俺は黒豆を食べながら彼女達の話をもくもく聞く。

「みゆさん、貴雅さんは押しが弱いから既成事実を作ってしまったえば……」

「正月の朝から何を言い出すんだ。相変わらずだな、母さん」

えらく物騒なことを言い出す母に俺は呆れていた。

そうだ、この人はこういうことに關してはまるで女子高生のように目を輝かせる。

心は今でも恋愛大好きな年頃のままなのだろう。

「でも、既成事実強いわよ。私も貴雅さんが出来て……」

「リアルに聞きたくないって。頼むからそれ以上はやめて」

しっかりしてくれよ、父さん……何を誘惑に負けてんだよ。そうだった、この人は昔から数多の伝説がある人だった。

「……それくらいで慌てているようでは駄目ですわよ、貴雅兄様」

「天音はもう少し小学生らしい反応をしめしてくれ」

何でも朝から俺は疲れなくてはいけないだろう。
女3人の女子高談話に俺は頭を悩ませるのだった。

「天音、さつきから俺の方に数の子を持つてくるのはやめろ。俺はその黄色の魚卵が嫌いなんだよ。って、言ってる傍から俺の皿にいれるな」

「好き嫌いしては大きくなれませんか。兄様、さあ、どうぞ」

「……これ以上、大きくなってもしょうがないだろう」

仕方なく俺は苦手なものを食べることに、うう、この食感が苦手なんだ。

食事を終えた後はみゆ先輩と一緒に初詣だ。

本当ならば昨日のうちに済ませておこうと思ったが、肝心のみゆ先輩がぐっすりと寝てしまったためにずれたのだ。

しかし、その眠りはただの狸寝入りであり、今回のための罠であったことが判明したのだが……ホントにこのロリ先輩はややこしい。

「天音ちゃんも一緒にくればよかったのにね」

「アイツも付き合いつていうのがあるんだよ。友人は少ないが、関係は広いからな」

すっかりとご機嫌をなおしたみゆ先輩は俺の腕を組んで歩いている。

神社まで登る階段を腕を組むのは大変だ。

「……さて、と。もうすぐ境内だな。みゆ先輩は何を願うつもりだ？」

「もちろん、貴雅との関係の発展を……」

「ホントかよ。少しでも背が伸びますように、じゃないのか？」

「そ、そんなことないもん」

まあ、何を願おうとそれ以上身長が伸びることはないと思うが（禁句）。

奇跡のボディ、みゆ先輩はそのままが1番だろう。

お賽銭箱に金を放り投げて、俺は目をつむる。

何を願おうか、俺は……。

隣のみゆ先輩は手を合わせて、小声で何かを呟いている。

「……少しくらいは身長が伸びてくれますように」

やっぱり、それかよ！？

ていうか、俺との関係よりも身長の方が大事か。

……まあ、それがロリ先輩らしさなだけどさ。今年も初めから俺を悩ませる彼女。

俺の願いは当然、これしかないだろう。

「今年はロリ先輩が大人しくしてくれますように」

「それ、無理」

「即答か、みゆ先輩。そこは素直に頷いてくれ」

隣でにつこりと可愛く笑う彼女、美少女の笑顔には勝てないってか。

俺はやれやれと肩をすくめるしかない。

神様、もしもいるならちよつとばかり俺のストレス軽減に協力してください。

「初詣終了！ねえ、貴雅。駅前のスーパー、今日から開いているんだって。何か面白いものがないか、見に行こうよ」

俺の恋人、初音美結……彼女は常に俺を飽きさせない。

今年も何だか大変そうだ、頑張れよ、俺。

「言い忘れてた。あけましておめでとう、今年もよろしくね。貴雅」

まあ、俺がみゆ先輩を好きになったんだ、覚悟はしておこうか。

第33話：大事な家族として

【SIDE：初音美結】

お正月は貴雅の家で過ごさせてもらってる。

1月2日の今日は貴雅のお兄さんが帰ってくるんだって。

どんな人なんだろう、天音ちゃんは朝からものすごく嬉しそうだ。

「お兄さんってそんなにいい人なの？」

「はい。光里お兄様はとても優しくて、素晴らしい人ですわ。ただ、好きな人の事になると周りが見えなくなってしまうところが唯一の欠点ですけど」

「好きな人ってお兄さんの幼馴染の人なんでしょう？」

「倉敷家の本家である白銀家の令嬢です。本家はここから数十分離れた場所にあるですよ。子供の頃からその人にもよく遊んでもらいました」

それにしても、本家とかってすごいなあ。

私の家は普通の家だもん。

そう言う世界と関係がないから余計に不思議な世界に思える。

「お嬢様って大変そう。実際はどう？」

「別にみゆちゃんと思うほど、大変ではないと思います。ただ、少しだけ育ちの意味では面倒なところもありますわよね。私も庶民で生まれたらと思うたりしますもの」

それを贅沢というのかは別として、生まれの違いってやっぱりあるものなんだなあ。

天音ちゃんの他人との距離の置き方とか特別視とか分かる気がする。

「みゆちゃんは兄妹はいませんか？」

「いないよ。ひとりっ子だし、従姉のお姉ちゃんに懐いていたけど、それぐらいかな」

そして今は貴雅が私には兄のような存在に思えたり。

……年下なんだけど、年上に思えてしまう事が多々ある。

「お兄ちゃん、か……」

私にもそういう相手がいればよかったなあ。

何だか羨ましく感じているんだ。

「そろそろ、お兄様が帰ってくる時間です」

やがて、玄関の方で誰かが入ってくる音がする。

「ただいま」

その声に天音ちゃんはすぐに玄関へと向かう。

私もそれについていくと、そこにいたのは優しそうな印象を抱く男の人。

この人が天音ちゃんのお兄さん？

「天音、ただいま。元気な様子だね」

「はいっ。私は元気です。あけましておめでとうございます、お兄様っ」

彼に抱きついて甘える天音ちゃん。

ホントに仲のいい兄妹なんだって見ていっただけで分かる。

「いつまでこちらにいられるんですの？」

「僕は明々後日までこちらにいるつもりだ。また大学があるから……。おや、そちらの子は？天音のお友達かい？」

天音ちゃんは私を彼に紹介してくれる。

「私の親友で貴雅兄様の恋人である、みゆちゃんです」

「はじめまして、初音美結です」

「ああ、キミが……そうか、貴雅の恋人さんだったのか。ずいぶんと可愛いお嬢さんだね。確か高校生だったっけ？初めまして、貴雅と天音の兄の倉敷光里だ」

優しいお兄さんというイメージそのままな彼。

「みゆちゃんはこう見えても貴雅兄様より年上の１７歳なんです。世界の不思議ですよ」

だから、その紹介の仕方はどうなの。

……別に慣れてるからいいけどね。

「こら、天音。そういうことを言っではいけない」

「ふわぁ、ごめんなさい」

……あの毒舌大好き天音ちゃんが素直に謝るなんて。そこにびっくりしてしまった。

本当にお兄さんが好きなんだなあ。

「天音、貴雅はどうしているんだ？」

「兄様なら部屋にいますよ？呼んできましょうか」

「……いや、それより美結さん。少し話を聞かせてもらってもいいかな？」

「私ですか？私はいいですけど」

私はなぜか光里さんに呼ばれて彼の部屋を訪れることになる。
綺麗に整頓された部屋、そこも貴雅が言っていたように改築で和室ではなく洋風な内装になっている。

「キミに会ったらぜひ聞いておきたい事があったんだ」

彼は以前から私の事を聞いてたみたい。
話がしたいなんて、何のことだろう？

「美結さん。貴雅の事でキミに話があるんだ」

「貴雅の？彼のことで、何か？」

「貴雅と交際してまだ1カ月くらいだと聞いているんだけど、ずいぶんと天音が懐いているそうじゃないか。あの子は少し他人と距離を置く子だが、その彼女が信頼する相手だと聞いている。そんなキミだからこそ頼みたい事がある」

光里さんは私に穏やかな口調で言っただ。
それは兄として弟を心配する姿だった。

「彼の支えになっただけて欲しい。あの子はああ見えても打たれ弱くてね。昔からそうなんだ。強がって、一人で何でもしようとするが、本当は甘えたりしたいはずなんだよ。きっと貴雅もキミになら心を預ける事が出来ると思う」

「……貴雅のこと、心配しているんですか？」

「まあ、つい先日、ちょいと揉めごとあったんだ。まだ見ぬ先の事だが、その事で彼に将来の不安とかを感じさせてしまったのではないかと思ってるんだよ」

その揉めごとと言うのは先日の私と貴雅が喧嘩した時の話だ。
倉敷の家を継ぐとかどうか、そういうお話。

貴雅が家を出て行くつもりなのか、彼はどう思ってるんだろう？

「大丈夫ですよ。貴雅も子供じゃない、自分で考えて答えを出す。それを見守るのも家族なんだと私は思います」

「貴雅は初音さんだからこそ心を許しているようだね。昔から人を信じたりするのが苦手な子だったんだが……」

「それは初耳です。そんなに違つたんですか？」

「今でこそ、大きい身体をしているが、小学校まではクラスでも前の方の背の小さな男の子だったんだ。そのせいか、よくからかわれたりしていたようで、人を信じるとかそう言う事をしなかった子ではあつたよ。性格も少し人に臆病なところもあつた」

初めて知る貴雅の子供の頃の話。

今とは違う彼……背も小さかつたんだ。

でも、今は普通だよな？

デ力くなつたら心に余裕もできたのかな。

「彼を変えているのは初音さんかもしれないな」

「え？私ですか？そんなことないですよ、いつも貴雅に甘えているばかりです。私は彼と出会えてよかったと思っています。私の知らない事をたくさん教えてくれた。その恩返し、今の私にはまだできていませんよ」

初恋を教えてもらつたり、恋人ごっこにつき合わせたりと困らせてばかりいた。

私は貴雅に何かをしてあげられたとは思えない。

「いや、これは確信を持つて言える。キミの事は天音からよくかかつてくる電話でよく話を聞いていた。不思議な魅力を持っている女の子だ、と。彼女も問題を抱えていたが話を聞けばずいぶんとも解消しているそうだ」

「天音ちゃんは自分で頑張つたんです。私はそれをお手伝いしただけで」

小学校潜入事件など、身をもって協力しましたです。ただ、私はサポートだけで後は天音ちゃんの結果だ。

「人に影響力を与えると云うのも一つの才能だと僕は考えるよ。初音さんにはその力があるんだ。それが自分が気付いていない所であつてもね」

どうなのかな、よく昔から誰とでも親しくなれる才能があるとか親に言われた事はある。

自分では普通にしているだけなんだけどなあ。

「……みゆ先輩は確かに変な力を持つてるぜ」

「貴雅？どうして、ここに？」

部屋の扉をこっそり開けて貴雅は声をかけてきた。

「あのなあ、この部屋の隣は俺の部屋だつての。隣からみゆ先輩の声が聞こえてくりゃ、気になるだろう。兄貴、この先輩、何か妙なことも言っていたか？」

「いや、変なことではない。それで貴雅はどういう力を彼女に感じているんだ？」

「ある意味、これも才能なんだろうな。人の心に入り込んでくるっていうか、親しみやすさっていうべきか。この子の馴染みやすさは驚くべきものだな。俺や天音みたいな人間にもあつさりと踏み込んできたんできたんだ」

あのお、私は褒められているの……？
きょんとする私に静かに光里さんは頷いた。

「そして、貴雅は彼女を好きになったわけか。どうにも昔からお前は人に触れてほしいのに、触れてと言えない子だからな。向こうから触れてくれる子には弱いらしい。気になる相手を常に意識させられたんだろう？」

「違うつてば。俺がロリ先輩になびいたのは……な、なんだよ？」

私は彼の物言いに唇を尖らせて拗ねるように言っただ。

「私の事、意識しまくったから好きになったって前に言ったのに」

「ぐつ、そんなこと言っただけ？ ああ、悪かったよ。確かに俺がみゆ先輩に惚れたのは兄貴の言うとおりだ。兄貴は何でもお見通しいい」

肩をすくめる彼、お兄さんとはホントに仲のいい様子だ。

「初音さん、貴雅は素直ではないがその本質を理解してあげてくれ」

「はいっ。私は貴雅の事を分かってるから大丈夫ですよ……むにゅっ！？」

私の頬を横から引つ張る貴雅。

伸びる、私の可愛い頬が伸びりゅーっ。

「調子に乗るな、先輩。俺の事を分かってる？ 言ってくれるじゃないか」

「貴雅。照れるのはいいが、暴力はいけないよ」

「ひょうだ、ひょうだっ！ もーりよく、ひゃんたいっ（そうだ、そうだ！ 暴力、反対っ）」

貴雅は軽く私たちから視線をそらしている。

ほんのりと頬が赤い気がする、貴雅って照れる顔が可愛いんだよね。

「ひゅなおじやにやいなあ（素直じゃないなあ）。……うにやつ」

彼は引つ張るのをやめて私の頭をそつと撫でてくる。

意地悪なのに優しい私の大好きな彼氏。

「つたく、こんな子供みたいな子なんだけど、好きになってしまったんだよなあ」

「恋とはそういうものさ。気づいた想いは止められない。いい恋をしているようだ」

お兄さんにそう言われて、貴雅は苦笑いしている。

大事な家族、“血”の繋がりではなく“絆”という物が本当の繋がりのかもしれない。

第34話：初めて好きになったヒト

【SIDE：倉敷貴雅】

毎年、正月の3日目は本家に親戚一同が集まる事になっている。
倉敷家の本家、白銀家の屋敷はかなり大きい。

それにしても、何で親戚の前で俺はみゆ先輩をさらすはめになるのやら。

今日、俺はなぜか兄貴の命令でみゆ先輩をこの集まりに参加させることになった。

「……まだ不満なのかい？ 貴雅、彼女は可愛らしいじゃないか」

「俺の恋人には体型が不似合いなのが唯一の悩みだ」

「そうかな。僕には彼女はとても魅力的に思えるよ」

「兄貴はロリな人だという事を美咲さんに言ってやる」

彼は慌てて、「そう言う意味じゃない」と否定する

兄貴の恋人であり本家の令嬢である美咲（みさき）さんは嫉妬が強い。

下手に他の女の子の話をするとえらい目にあわされているらしい。
過去にも数度痛い目にあっているとかいけないとか。

「それで、みゆ先輩は何をさせられているんだ……？」

「さあ、それは僕もよく分からないんだ」

「あの人の事だから大体の想像はつくが……」

この白銀家の本屋敷に入ってすぐに、美咲さんにみゆ先輩は見つかる。

本家のお嬢様、美咲さんは彼女を見るやいなや、

『なんて可愛らしいお嬢さんなの？さすがは貴雅君。女の子の見る目が違うわね。ホントに可愛い。ねえ、お名前は？』

可愛いもの好きな美咲さんに抱きつかれながらみゆ先輩は言う。

『初音みゆです……こうみえても、１７歳なんですけど』

『ええ、知っているわよ。でも、歳なんてどうでもいいじゃない。

可愛いのは最強、世界は可愛いのがすべてなの。私の妹もものすごく可愛いけど、みゆさんもめっちゃ可愛いわ。ほら、こちらにきて天音、貴方も来なさい』

『え？あ、あの、うわぁー！！？』

と、みゆ先輩は美咲さんに引きずられて行ってしまった。

あれから１時間、俺達は親戚に挨拶をしながら彼女を待っている。

「あ、お兄様。こちらにいらしたんですか」

「天音。どうだ、みゆ先輩はどうなった？」

「まだこちらに来るのはかかりそうです。今、着せ替え人形とさせられています」

あの人は昔から彼女の妹や、天音など可愛い子をみればすぐに服をきせたがる難儀な性格があるのだ。

本人いわく、可愛い子に可愛い姿をさせるのは当たり前のことだそうだ。

しかし、実際は着せ替え人形のように扱われるらしい。
被害者の天音が以前に疲れた顔でそう言っていた。

「それと貴雅兄様の事を根掘り葉掘り聞いていました。初チューとか、欲情されて襲われそうになったこととか。兄様も意外とやりますね」

「してないって。俺は襲ってはいない、それは断言できるぞ」

「まあ、とにかく兄様の情報は美咲さんに知れてしまったわけで、後でどう皆さんに離されるのか、今からでも楽しみですよ」

「……うぐつ、俺の今後に影響する事はやめてほしい」

親戚っていうのはつまらない事をいつまでも覚えているものだ。そんな話のネタにされるのは非常に不愉快だ。

「貴雅兄様の恋人、絶対に面白いことになりそうですね」

「美咲は嫌がる事はしない主義だ。さほど心配はするな、貴雅」

「どうだか。これまでがこれまでだけに、何とも言えない」

それにしても、兄弟3人でこうして話をするのは久しぶりだ。やっぱり、何かいいな。

安心感のようなものを感じることができる。

「そういえば、紫苑はどうしたんだ？どこにもいないぞ」

美咲さんには紫苑（しおん）という中学生の妹がいる。

けれども、この広間には他の親戚は騒いでいるが、彼女の姿はない。

「紫苑ちゃんは旅行中だそうです。年末からずっとこちらに帰って来ていない、と。留学の経験を積むとか言って冬休みの間だけアメリカの方で過ごらしいです」

「そうなのか。高校を卒業したら、あの子は留学するって話があるらしいからな」

「本家の方針でね、美咲はそれを何とかしたいようだ。紫苑には自由に道を選んで欲しいと悩んでいたよ。ん？どうやら叔父さん達が俺達を呼んでる」

俺達は親戚に呼ばれてそちらで話することに。

みゆ先輩が来たのはそれから数十分後、親戚一同がお酒や食事です楽しんでいた最中。

俺は親戚の中で最も厄介な世話好きおばちゃんの見合い攻撃を「みゆ先輩」というカードでかわして、別の従兄に恋人がいない事をリークする。

意気揚々とそのおばちゃんは彼の方へ向かっていく。

彼には悪いが、あの人のお世話にだけはなりたくないのだ。

「お待たせしました、皆さん。まずはあけましておめでとございます」

そう言つて頭を下げる美咲さん。
ご令嬢というだけあつて気品溢れるその姿。

「おー、美咲ちゃんか。ずいぶんと綺麗になつたな。来年こそは光里と結婚かい？」

親族からの言葉にも美咲さんは微笑で受け答える。

「ええ、そのつもりですわ。それは、また後ほど……その前に皆さんに紹介したい人がます。貴雅君の恋人、いずれは倉敷の家に嫁ぐ相手ですわ」

「いや、まだ結婚とかそんなの気が早いつて……」

「倉敷の人間が遊びで女性と付き合うなんてあつてはなりません。交際するなら、ちゃんと将来を考えてください」

ここで否定すると再び、世話好きおばちゃんの標的にされて、すぐにでもお見合いをさせられるに違いない。

とりあえずはその件で反論するのはやめておこつ。

「というわけで、初音みゆさんです……可愛らしい子ですが、17歳だそうですよ」

彼女の合図と共に、着物姿のみゆ先輩が現れた。
黒い髪は綺麗にまとめられている。

いつもは身長が低いのでロリ先輩と呼ぶ俺だが、その可愛さには驚かされる。

「……はじめまして、初音みゆです」

上品にお辞儀するみゆ先輩。

小柄な身体は和風な着物姿がよく似合う。

いつもはただの子供にしか見えないが、今日は普段と違う。

「貴雅兄様、みゆちゃんに見惚れてますね？」

「み、見惚れてなんていないさ。見慣れている顔だぞ」

「女性には常に変化します。綺麗になったみゆちゃんに見惚れるのは当然だと思いますけどね」

内心は見透かされているに違いない。

天音のにやついた顔がその証拠だ。

「ほう。貴雅君は面食いだな。綺麗な子を選んだじゃないか」

「それにあの身のこなし、上流階級のご令嬢かしら？倉敷に不釣り合いな人間ではないのは確かかなようね」

親戚共の反応は上々、好印象の様子だ。

身のこなしと言えば、確かに俺も気になる。

あのロリ先輩、たった数時間で礼儀作法を身につけているとは思えない。

「初音？もしかして、初音さんのお父さんは都議会議員の初音議員では？」

「ええ、そうですよ。確か、前にお会いしましたよね？」

「ああ、やはり初音議員の娘さんだったのか。あの時は先生にお世話になって……」

なんと、みゆ先輩の父親は政治関係の人間だった。

……そっぴや、住んでたマンションも高級マンションだったよう
な。

みゆ先輩はああ見えて、うちのようい古い家柄ではないが、それ
なりに育ちがよかつたらしい……普段が子供過ぎてよく分からな
かつた。

そんな感じですかかりとみゆ先輩は親戚の話題の中心になる。

後はお得意の人に好かれる特別な力もあり、1時間もすれば皆の
人気者だ。

「いやあ、みゆさんがいれば貴雅君も倉敷を背おつていける、我が
白銀家も倉敷が安定すれば安心だ。いいお嫁さんを見つけたなあ」

酔つた叔父さんに肩を叩かれながら俺は内心ため息をついていた。

「子供は早い方がいいぞ、貴雅君。頑張りたまえよ」

「——まだ結婚できる歳でもないのに何を頑張れ、と？」

酒も入り、気をよくした彼らを止めることなどできそうにない。

俺もまだ子供だつてのに子供の話をされても……まずい、このま
まだと本気で結婚しなくちゃいけない流れになつてゐる。

俺にはそついう話はまだ先なのだが、まだ18歳まで2年もある
ぞ。

まだ16歳だつていうのに、そんな先の話で盛り上がる親戚とい
うのはどこでもおかしい連中である。

……いや、俺もいつかはそんな風になるのか？

「ずいぶんとみゆさんは皆に気に入られているようだ。僕の見立てに間違いはなかった。美咲も喜んでくれているし、大満足だよ。それにしても、初対面だというのに気負いしないのはさすがだな」

「いじられ続ける俺にとっては災難だ」

「そう言わないでくれ。ほら、みゆさんも楽しそうだよ」

親戚の同世代の女の子たちに囲まれて楽しそうに笑う彼女。

「えーっ。ということは初音様は貴雅様が初めてのお相手なんですか？」

「うん。彼が私の初めて好きになったヒトなの。えへへっ」

嬉しそうにそういう彼女。

無邪気なお子様先輩、恋を教えてしまったのはこの俺だ。
横目に俺はみゆ先輩を見つめながら思う。

「……まあ、いいか」

俺が彼女を愛しているのは事実だし、未来の事なんてどうなるかわからない。

こんな風に盛り上がるのも悪くはない。

「それでね、貴雅ったら可愛い。私と一緒に部屋にいただけで、男の子って欲情しちゃうんだよ。いきなり私に迫ってきて、ベッドに押し倒されて……あ・と・は、きゅーっ」

「——って、そこ、おかしなことを言いふらすな!!」

女の子達の黄色い声、何を盛り上がってるのかと思えばそれが、みゆ先輩が調子に乗っておかしなことを言いだすのを阻止する。油断もすきもないな、本当に……。

結果、俺はロリコン扱いされることはなかったが、ものすごく疲れました。

……もうこの親戚連中にはみゆ先輩を見せたくない。

「また来年も来てくださいね、みゆさん。貴雅君、来年も連れてきてよ?」

どうやら美咲さんにずいぶんとお気に入りにされたようだ。

こうして正月早々、ずいぶんとみゆ先輩に振り回されることになった。

それにしても、ホント、俺の恋人は人に好かれる才能に満ち溢れているな……やれやれだ。

第36話：美結ちゃんパニックへ前編

【SIDE：初音美結】

1月下旬、寒さも一層厳しくなり始めて、時々東京でも雪が見られる。

夕食後、リビングで先日、貴雅の家でお世話になったときの写真を見ていた。

「これが、私の和服バージョンの写真よ」

「へえ、七五三の時みたいね」

「うう、その比較はものすごくキツイです。ちゃんと成長しているのに」

今日のお昼、貴雅がその時の写真をくれたので、ママと一緒に見ている。

その中には彼の親戚の集まりに参加した時の写真も含まれている。久しぶりに着た着物、浴衣と違って締め付けがきつかった。

「でもよく似合っているわ。お正月にお世話になっていたのも、電話だけのお礼でよかったのかしら。ちゃんと1度尋ねた方がいいわよね……」

「え、あ、でもお……何だか恥ずかしいよう」

「そう？よく彼の家に訪れてるんでしょ？」

なんていうか、そういうのって恥ずかしいじゃない。
確かに私は週に何度か貴雅の家に遊びに行っている。
だけど、それは彼に会うというだけではなくてもうひとつの目的
もあるの。

「貴雅の妹とも仲がいいの。よく遊んでいるのは彼女の方だよ」

私と彼が出会って恋をしてから3ヶ月。

私もすっかりと彼との関係を深めている。

恋人関係になるのって予想していたよりも楽しいの。

それに何よりも好きな人がいるっていうのは心に大きな影響を与
えている。

「この写真の横にいるのって噂の貴雅君？」

「そうだよ。私の貴雅、カッコいい子でしょ？」

「そうね。それにしても、ずいぶん身長が高いようだけど……」

「私より1歳年下なのに、身長180センチ越えだもん。身長差が
40センチもあるんだ」

一緒に見ている写真は私が彼に抱きしめられているものだ。

天音ちゃんや美咲さんにからかわれて、撮られたものだから、貴
雅も照れくさそうな表情をしている。

……えへへっ、可愛い。

自分の恋人が年下の男の子でよかったなあって思う。

ママはその写真を眺める私に言うんだ。

「美結、幸せそうな顔をしちゃって。そんなにいい人なの？」

「うん。とても優しくて頼りになるの」

私がそう言っていると、いきなり背後で妙な声が……。

「な、なんだ、その写真は！？隣の男は誰なんだ？」

「あつ、パパ。おかえりなさい」

「ただいま、美結ちゃん。……つて、それより、その写真は何だ？」

あちゃー、見られてはいけない人に写真を見られてしまった。

パパは私が男の子と交際しているのを未だに許してくれていない。

「お、男と抱き合ってるだ！？」

「だって、恋人だもん。甘えて当然じゃない」

「そんなのパパは認めていないぞ！」

私とママは顔を見合わせて溜息をつく。

ダメだ、こーいうときのパパはとも対応に困る。

いかにも典型的な娘を溺愛してるタイプ、この年で「美結ちゃん」は恥ずかしい。

娘として愛される事に嬉しくもあるけど、今は普通に困る事のほうが多い。

「貴方もお仕事でお疲れでしょう。ご飯の用意をしますね」

「それは後でいいから詳細を教えなさい、美結ちゃん。この男は誰

だ？確かクリスマスの時にも話に出てた相手だよな？今日はしっかりと話してもらっよ」

ママの言葉も届かず、仕方なく私はパパに貴雅の事を話す事になる。

「彼の名前は貴雅。ひとつ年下の男の子で私と付き合ってるの」

「ほら、お正月にはずいぶんとお世話になったと言っ話をしたでしょう？」

「おかしいな。僕は友達の家でお世話になってたと聞いていたんだが」

——ぎくっ！？

そうなのです、パパには内緒でお友達（天音ちゃん）の家に遊びに行ってるって答えたの。

だって、恋人の家と言ったら絶対に反対されているもん。

「正直に言いなさい。……美結ちゃん、まさかこのパパに嘘をついたのかい」

「違っつてば。彼の妹と私は親友なの。だから、嘘はついてないもんっ！」

「つまりは、お正月はその恋人という“野獣”と一緒に数日を過ごしてたと言っのか。おおっ、何たる不覚っ」

ソファーに顔をうずめてうな垂れるパパ。

これが若くして都議会の議員となり、地元からの評判も高い政治

家だとは誰も思わない。

普段はピシッとスーツ姿がよく似合う自慢のパパなのに。

「ここは亡き父より譲られし、先祖伝来の日本刀で叩き切らねば……」

そういうやいなや、彼はリビングに堂々と飾られている日本刀に手をかける。

「それ、前にパパが出たお宝鑑定番組で模造刀だって言われた奴じやん。しかも安物」

「うう、まさか先祖伝来の名刀のはずが、ただの安物の模造刀だったのは泣ける」

パパが某有名なお宝鑑定番組に出て、大恥をかいいたのもつい最近の話。

おじいちゃんは面白い人だったのでネタで買ってきた模造刀を、先祖伝来の由緒ある刀だと自慢げに語っていたのを真に受けられしく、実際はただの質の悪い安物だったらしい。

それ以来、名刀（自称）は暴漢対策用とかいう物騒なものに使われている。

「はい、没収。美結の前で危ない真似はさせませんよ？」

パパとママの力関係は圧倒的にママの方が有利。

模造刀を奪われた彼は怒りが収まらないらしく私に言うんだ。

「とにかくつ、僕は美結ちゃんの交際を認めんぞ。どこの馬の骨かも分からない男と交際するなど豪語同断だっ！」

「一応、家柄はいいんだけど……?」

貴雅の家は結構有名のはずなんだけどなあ。

そんな私の言葉を聞く耳持たぬと彼は怒鳴る。

「ふんつ。ちよつとばかりの家柄の男なら認めん。いいかい、美結ちゃん。恋人になるっていうのは大事な人とめぐり会う事から始まってね……」

以下、数分間、彼の恋愛観を聞かされ続ける。

ママは止める気がないのか、食事の準備を始めてしまう。

延々と彼の説教をひたすら聞かされてお疲れ気味の私。

私は面倒になったので止めの言葉を告げた。

「あのね、パパ。私は貴雅が好きな。将来も結婚したいの（願望）」

「ガーンっ! ? け、結婚だ、と? つまり、お嬢さんを僕にください
的シチュエーション! ?」

思いつきりショックを受けたパパはそのままソファアのクッションに顔を沈める。

普段の面影なしで見るも耐えないパパの姿に私とママは呆れるしかない。

「あらら。相当ショックだったみたいね?」

「……だって、パパが私の話を聞いてくれないんだもん」

「そうだ、1度、貴雅君を家に連れていらつしやいよ。向こうの御宅にお世話になってるんだもの。たまにはこちらにも来て欲しいわ。私も彼に会って見たいし」

ママの発言が思わぬ波紋を生む事に。

いきなりバツと起き上がったパパは鼻息を荒くして、

「ふふふつ、あははつ。そうだ。美結ちゃん、彼を連れて来るんだ。僕の愛娘の恋人になるにふさわしい相手かどうかこの目で判断してやる。今度の日曜日でも連れてきなさい。さあて、この刀の手入れでもしておこうかな……」

どこか目がヤバい、あんなパパは滅多に見たことがないよ。

私は身体を震わせながら、ママに「大丈夫かな？」と尋ねる。

「問題ないわ。“貴雅君”なら大丈夫よ」

「ホントに？貴雅、ばつさり切られちゃうんじゃない……」

「そんな事にはならないの。美結が心配しなくてもいいから、連れてくるといいわ。私もケーキを焼いて待ってる。どんな子なのかしらねえ」

期待に胸を膨らませるママと別の意味で期待するパパ。

うう、貴雅は無事にいられるのかホントに心配だよ。

という昨夜の出来事を経て、私は学校で貴雅に提案をする。

彼は最近、カットしたばかりの自分の髪の毛が気になるのか、いじっている。

「……ちよつと短め過ぎかなあ。何か今日は皆に髪型を笑われるんだ」

「いいんじゃない。よく似合ってると思うよ。あのね、貴雅。話があるの？」

「何だ、改まつて？ みゆ先輩らしくないな」

貴雅は本気になったパパの恐ろしさを知らないの。

以前、1度だけ私が彼に怒られたことがある。

子供の頃、パパのお気に入りワインボトルでボーリングごっこをして遊んでいたら（総額で数百万円以上の物らしい）、もの凄い剣幕で怒られて泣いちゃった。

幸いにもワインは割れなかったけど、あのときは怖かったな。

まあ、すぐに私が泣き止むまで謝り続けてくれたけどね。

後にも先にもあれ以来、パパに叱られたことはない。

「実は私の両親が貴雅に会って見たいって……。ほら、お正月にお世話になったことのお礼っていうか、ただ単に口実で興味があるっていうか」

「何だ、そういうことか。……ごめん、俺、そういうの超苦手」

「分かってるよ。両親に紹介とか、そんなのじゃない。今度の日曜日、空いてるかな？ 出来れば来て欲しいなあ」

彼は苦笑いしつつも「そういうことなら」と頷いてくれる。

「でも、みゆ先輩のお父さんって都議会の議員さんだろ？」

「そうだよ。ママはね、昔はパパの秘書してたんだって」

「へえ、そうなんだ。……つまり、自分の部下に手を出した？」

「逆よ、逆。ママの方がパパを好き過ぎて積極的なアタックを仕掛けたの」

そういう所の行動力は貴雅のお母さんと似ている気がする。

私も恋をしたら猪突猛進一直線な性格を受け継いでみたい。

「みゆ先輩の家って前に行った事あるけど、今回は両親と会うのか」

貴雅はふと考え込んで言うんだ。

「例えばだけど、みゆ先輩のお父さんってどういうタイプなんだ？
いわゆる『娘は絶対にやらん』って怒るタイプなのか？それは勘弁
して欲しいな」

「どうかなあ。会えば分かると思うよ」

私は不安もあるので警戒させちゃ悪いと思い、黙秘する。

「まあ、何とかなるだろ。みゆ先輩の両親だもんな」

はう、それ無理……絶対、変な事になっちゃうよ。

私は不安たつぷりに貴雅にこれだけは言う。

「あ、あの、言いにくいんだけど……貴雅の髪、前より後ろの方が変だよ？ぴょんってなってるの。ハサミあるから切ってあげよっか？ジツとしていてね」

「何っ！？うわっ、ホントだ。だから、今日は皆笑っていたのか。ちくしょーっ」

私はハサミで彼の髪を少しだけ切りながら、大いなる不安を抱えていたのです。

第36話：みゆちゃんパニックへ後編

【SIDE：倉敷貴雅】

なんと、みゆ先輩の家にお呼ばれしてしまった。

日曜日、俺はちょっと緊張しつつ彼女の住むマンションへと向かう。

「うーむ、こう言うのは苦手だ。本気で苦手だ」

どこかのロリ先輩と違い初対面相手に積極的に慣れる人間ではないのだ。

しかも相手は交際相手の両親、緊張するなと言う方がおかしい。

高校生だろうが、恋人の両親って言うのはハードル高めだ。

ああ、みゆ先輩みたいな無駄な仲よくできるパワーが欲しい。

ていうか、あの先輩の父親って政治家だろ。

やはり厳しいタイプなのだろうか。

……いや、みゆ先輩を見ていると甘やかされて育っていきそうな気もする。

「さあて、手土産も持ったし行くか」

手土産は日本全国を飛び回る人気華道家の母さんがよくお土産で買ってくるものを適当に持ってきた。

長崎名物のカステラ、お値段的にも品物的にも人様にあげて大丈夫な品物だろう。

俺はみゆ先輩のマンションに入ることにした。

玄関前でピンポン、呼び鈴を押してみる。

既にオートロックを開けてもらうときにみゆ先輩が中にいるのは

確認済み。

あとは問題の彼女の両親なんだけど。

「貴雅、来てくれたんだね！」

「……まあな。気は重いが……お邪魔します」

「どうぞ、両親はリビングで待ってるよ」

緊張さらに倍増中、どういう人たちなんだろうか。

俺はリビングへと入った瞬間、目の前に入ったのは刀を振り上げるおっさんだった。

「——うおおお、覚悟せいやっ!!」

WHAT! ? みゆ先輩のパパはヤクザさんですか! ?

俺はその振りかざされた刀を慌てて避ける。

ブンつと風邪を切る音がして俺の真横を刀が通り過ぎていく。
マジでこええーっ! ?

「くっ、避けられたか。次は外さんぞ。ふふふっ」

いや、誰だつて普通に避けるだろ! ?

しかも、何だかおっさんの目がヤバい、殺^やる気満々だぞ、おいっ。
隣のみゆ先輩も呆然とその光景を見てた。

「あ、あの、俺、その……! ?」

いきなり何するんだ、と叫ぶ間もなく刀を振り回すみゆ先輩のお父さんはこちらを睨みつけた。

顔が怖い、渋い系というかちよいワル親父系っていう感じの人だ。

「うちの可愛いひとり娘を傷物にした責任、どうやってとってもらおうか」

「傷物って、俺はこの口リ、じゃなくてみゆ先輩にまだ手は出してないんですけど」

「ふつ。我が愛娘を恋人にするという事は命をかける覚悟が……ぐわぁ!？」

「はい、ちょっとこちらに来てね」

彼の後頭部を殴ったみゆ先輩のお母さんが隣の部屋と彼を引きずっていく。

扉が閉まってすぐに、ガゴンツと言う鈍い音が響く。

……え、今の何の音ですか？

「ごめんなさいね、貴雅君。ちょっと娘に熱が入り過ぎているの……普段はいい人なのよ」

「は、はぁ……。あ、これ、どうぞ」

まるで、何事もなかったかのようにリビングに戻ってきたので俺は手土産を手渡した。

ホントに怖いのはみゆ先輩のお母さんの方かもしれない。

みゆ先輩の性格が変なのはお母さん譲りか。

「あら、カステラじゃない。ここのお店のってとても美味しいのよ。ありがとう」

「いえ、ただの母の土産なんですけど。先日は長崎に行っていたので」

「そうなの。貴雅君のお母様って何をしている方なのかしら？」

「華道家ですよ。生け花とか教えたりして、日本中を飛び回ってる人です」

たまにテレビにも出ている人なので忙しいようだ。

この前は長崎、その前は北海道と行く場所も様々だ。

「改めまして、いつも美結がお世話になってるわ。美結から貴雅君の事はよく聞いているの。初めての彼氏だからとてもいい人だよかったわ」

どうやら彼女には良い印象を抱かれているらしい。

なのに、みゆ先輩のお父さんは俺に敵意をむき出しにしていたのはなぜだ？

「美結って結構ドジばかりする子だから大変でしょう？」

「ええ、まあ……」

思い返せば、出会いからそうだったし、それ以外もみゆ先輩伝説は多々ある。

事実のために曖昧に返事するがみゆ先輩はそれに不満なのか。

「むうつ、私は別にドジっ娘じゃないもんっ」

「十分すぎるほどだと思っけどな」

「もうっ、貴雅ってば意地悪なんだからっ。いつも私を子供扱いするし」

頬をふくらませて抗議するみゆ先輩、可愛いじゃん。

「……今、うちの美結ちゃんのこと、可愛いとか思っただろ」

「うあっ!？」

いきなり真後ろから声をかけられてびっくりする。

そこには頭を押さえたおっさん、もとい、都議会議員であり将来は国政に乗り出すと言われて地元の支持も高いみゆ先輩のお父さんがいた。

「パパ、もう大丈夫なの？ママもちゃんと始末しておいてよ」

「ホント……意外と効かないのね、アレ」

おいおい、アレって何だ!？

みゆ先輩&みゆママ、この親子の方が危険な気がする。

何だか普通に怖いよ、この家族。

「落ち着いてよ、パパ。これ以上、貴雅にひどい事をする許さないよ?」

「うう、だからと言って……この男はいずれ『お父さん』とか言うつもりなんだろ。愛情かけて育ててきた果実を他の男に摘み取られるパパの苦しみも……昔はパパのお嫁さんになると言ってくれたの

に」

「それは捏造。私は一言も言った事ないもんっ」

その気持ちは男として分からなくもないが、やられるこっちはたまらない。

このままだと「俺の屍を越えていけ」的な展開になりそうだが、そんな不穏な雰囲気消したのはみゆママのある発言だった。

「はいはい、そこまで。貴雅君が困ってるでしょ。彼は貴方にとっても大事な人なのよ。貴方を支援してくれている白銀グループの関係者なんだから」

「……白銀グループの関係者？はい？」

その言葉にみゆパパは俺の方を見て驚く。

あー、そういうことか。

俺は冷や汗をぬぐいながら彼に自己紹介することにした。

「俺の名前、倉敷貴雅って言ってますよ」

「く、倉敷！？それはまさか、白銀グループの関係企業を束ねている倉敷家の？」

「ええ。白銀の分家なんです。一応」

分家とはいえ、その地位も力も世間一般では存在する。

あまり普段意識しないようにしているが、政治や経済界では名の通った家柄だ。

「……ごめんなさい、すみません。倉敷家の御曹司に対する無礼な振る舞い、本当に申し訳なく思っています」

「——態度、変えるの早っ!？」

みゆパパが素直に謝った、しかも低姿勢に頭まで下げてきた。娘の彼氏に敵意むき出しだったくせに権力を前に呆気なく屈したぞ。

「知らぬことだったとはいえ、数々の暴言、許してください」

「い、いえ……俺自身がすごいわけじゃないんですけど」

どうやら白銀グループには普段から支援してもらっているらしい。まさに権力者には逆らうなってやつだろうか。

「ママが言ってた大丈夫ってこう言うことだったの？」

「そうよ。貴雅君はパパがお世話になってる企業の大事な御曹司さん。議員であるパパが手荒な真似なんてしたらどうなるのか。だから、私は安心して言ったの」

権力って……やっぱり、俺は嫌いだ。

今回は命の危機を救うことになったのでよかったけどさあ。

「ほら、貴方。気はすみしましたか？ ケーキでも食べましょう。貴雅君、甘いものは大丈夫？」

「はい、大丈夫ですよ」

「それならよかった。私、趣味がお菓子作りなの。ケーキを作ってみたら食べてね」

綺麗にデコレーションされたショートケーキ。

手作りでこれだけ美味しそうなのは初めてみるかも。

これだけでも、彼女が料理が上手だという事が分かる。

「美結、お皿を並べるのを手伝って。そうだ、貴雅君は紅茶、それともコーヒーがいいかしら？どちらも用意できるわ」

「それじゃ、コーヒーをお願いします」

彼女達はキッチンへと行ってしまい、みゆパパとふたりつきりにうう、かなり気まずい。

彼はしばらく何も言わなかったが、やがて口を開いた。

「美結ちゃんは今まで僕が大事に育ててきた可愛い娘だ。もしも、近づく男がいるのなら我が家に代々伝わる（という噂）日本刀で叩き切ってやるつもりでいたんだ。娘っていうのは自分にとって宝物だからな」

「つもりっていうか、実際に襲われましたけど」

あれを“つもり”ですマされるのは非常に不満があります。

彼はそれを反省したうえで俺に言う。

「だが、キミのような素晴らしい人間に美結ちゃんが出会い、恋をした事を今は本当に嬉しく思う。本当に美結ちゃんは人を見る目があるなあ。さすが我が娘だけのことはある」

「……思いつきり、倉敷の名前目当てな上に、みゆ先輩はそんなすごい子じゃないでしょう」

「実際、そこらのどこの馬の骨か分からない男と違う事は父親というものは安心できるものなんだよ。子を持つ親の気持になれば分かる。……僕の事はこれから『お父さん』と呼んでくれてもいい。むしろ、今すぐ、呼んでくれたまえ」

俺の事を歓迎しすぎた、みゆパパ。

俺が倉敷家のものと知るやいなや、この態度の急変どうよ？

「まだ呼ぶつもりは全然ありませんから」

「何！？まさか他に付き合ってる女性がいたりするのか！？だとしたら許さんっ！二股で美結ちゃんを傷つけることがあれば……どうなるか、分かっているよねえ？ん？」

ぐぐつと顔を近づけてくる、ヤクザの若頭みたいな容姿なので普通に怖い。

みゆパパに対して俺は首を横に振りながら否定する。

「そ、そんなつもりはありません」

「ならいいんだ。キミに美結ちゃんを任せた。男と男、分かり合えると思っていたよ」

仕事柄で慣れているのか固い握手を交わしてくるので握り返す。
この人相手だと任侠映画を彷彿とさせる光景だ。

みゆ先輩も変だけど、その親もどこか変だと切実に思う。

その後は平穩そのもの、美味しいケーキを食べながら話がはずむ。俺の隣でみゆ先輩は笑いながらこう言った。

「よかった……貴雅、パパにやられちゃうんじゃないかって思ってたの」

「そういう危機があるなら最初に言っておいてくれ」

というわけで、何とか無事にこの危機は乗り越えることができた。……ある意味、みゆ先輩がどいう育て方をされたのかよく分かる家庭訪問でした。

そりゃ、あれだけ甘やかせたらああいう子が育つわな。

はあ、ものすごく精神的にも肉体的にも疲れた休日だった。

第37話：言葉だけじゃ足りなくて

【SIDE：初音美結】

大好きな彼氏。

貴雅との付き合いは私に恋だけでなく色々なことを教えてくれる。2月になり、バレンタインデーの時期を迎えていた。当然、私もチョコをあげて彼も喜んでくれたんだけど……。

「ええ？貴雅ってチョコが嫌いだったの？」

「はい、確か苦手だったはずですよ？」

天音ちゃんから聞かされた真実。

どうやら彼は苦手なのにちゃんと食べてくれたらしい。

「でも、貴雅って甘いものはそんなに苦手な方じゃないはずだよね？」

「そうですね。確か食べられないとかじゃないですよ。チョコレートパフェなら大丈夫、とか。そう言う類の苦手です。私もチョコレートが嫌いだということしか知りません。一度、詳しく聞いてみたことがありますの。そうしたら秘密だと教えてくれませんでしたわ。よほど、何か秘密にしたいことがあったのでは？」

天音ちゃんの話だと彼はチョコにトラウマがあるんじゃないかって。

それを本人に確認するために私は彼の部屋と向かう。部屋ではゴロンっとベッドに寝転がる貴雅がいる。

テーブルには私があげたチョコの箱。

ちゃんと食べてくれたみたい、苦手だっというのは誤解なのかな？

「……ん？何だ、みゆ先輩。どうかしたか？」

「どうかしたって、一応、彼氏の家なんだから彼氏に会うのは普通でしょ？」

「俺の家に来る時は大抵、天音と遊ぶためだろう。ふわぁ」

彼は欠伸をしながら起き上がる。

私は今がチャンスと彼に詰め寄り、尋ねてみる事にした。

「ねえ、聞いてもいい？チョコが嫌いだって言うのはホント？」

「……バレンタインの日に聞く質問じゃないだろ」

「あつ、やっぱり嫌いだったんだ？ごめんね？」

「いや、嫌いと食べられないは違うし。別に味がダメだとかそういうんじゃないから。気にすることじゃないぞ。こーいうのは気持ちだからな（棒読み）」

めっちゃ、気にしているじゃん！！

うう、何だよお、貴雅はそう言うところで気をつかうタイプだ。

気配りしてもらえるのは嬉しいけど喜んでもらえていないのは嫌だ。

別に嫌がらせしたいわけじゃないんだもの。

「何でチョコがダメなの？甘いものが嫌いってわけじゃないんでし

よ
」

「まあな。何ていうか精神的なものだ。それはもういからさ。別の話をしようぜ」

彼はストレートに話を変えようとしてきた。

むむつ、貴雅の態度が怪しいなあ。

私は彼の弱みを握った感じで攻めてみる。

たまにはいつもいじられているので仕返しをしたい。

「教えてよ。ね？ねえーってばあっ！」

「それは甘えているつもりか？俺には鬱陶しいんだが」

「ひどっ！？こんなに可愛い彼女にひどい暴言だ。ふーん、そう言う事を言うのね。あることないこと、学校で言いふらすわよ。私に對して屈折した愛情と性癖を抱いているとか」

「すまん。それだけはやめてくれ」

いつも私の事をロリ先輩とか呼ぶクセに、実はロリコンだと言われるのは嫌らしい。

私にも諸刃の剣的にダメージがあるのでこのネタで攻める事は滅多にしない。

自分の身体が小柄なのは私自身望んでいることじゃないもんつ。

私はもつとスタイルのバランスがよくてモデル体型の女の子になりたかったの。

「……ほら、教えてよ。いいでしょう？」

「誰にでも嫌なのくらいあるだろうが。その頬を引つ張るぞ」

「最近、彼氏の暴力に悩まされています。天音ちゃんに相談してこよう」

「ちょ、おまつ、そう言う事を冗談でも言っな」

慌てふためく姿も面白いけど、そろそろ本題に戻りたい。

私は箱に残っているチョコを指さして、

「何なら口移しで食べさせてあげよっか？」

私は唇にチョコを挟んで「んーっ」と突き出してみる。

何かこーいうの、恋人っぽくていいなあ。

「どこのバカップルだ、やめいっ！」

そう言って私の口にチョコを押し込んでくる。

口に広がる甘いチョコレートの味がする。

「んうっ！？甘いけど……ひどいなあっ。何てことをするの」

「別に何もしてねえよ。大体、口移しなんてしているうちに体温でチョコが溶けるって」

「……今、ものすごく意味深発言したよね？何よ、それ？どこの誰かと経験したことあるっていうの？ねえ！？」

私を不機嫌にしたのは彼の一言。

そりゃ、貴雅は恋愛経験があるので、いろいろとしたことがあっ

てもおかしくないけど。

ちよつと待って、貴雅がそういう経験した相手ってまさか……!?

「そのバカップルみたいな真似をした相手は絵美さんでしょう!？」

貴雅の元カノにして私にとってのライバル、絵美さん。

貴雅の「初めて」って大抵彼女と体験しちゃっているので不愉快になるんだもんっ。

初チューとか初デートとかさあ……いろいろとねえ？

「ああ、変な地雷踏ませたなあ」

彼はしょうがないと言った顔をして私に言う。

「まあ、昔の話は置いといてだ。チョコの話に戻ろうか？」

「嫌よ、そっちの話の方が重要じゃないっ」

「どっちだよ。はい、チョコに戻ろう。いいな？」

無理やりだけど、チョコレートの話に戻る。

不本意ながらも、私は本題を聞ける事に……。

だけど、恋人として私は絵美さんとの話の方が聞いておきたい。

「チョコだろ、チョコ。戻ってこーい」

「あう、むにゅっって引つ張るのはやめてよ。分かったわよ、もういいから。チョコレートの話に戻る。はう……」

少々不満は残るがチョコの話が聞けるのでよしとする。

彼は仕方ないと諦めたのか自分のチョコ嫌いの理由を話す。

「みゆ先輩は子供の頃、おやつって何だった？」

「ケーキとかクッキーとか。そういうのだったけど？」

「大抵は洋菓子だろ。俺の家って見たとおり、旧家じゃん。しかも母親は華道以外にも茶道をするから和菓子とか多かったんだよ。洋菓자에憧れていたのさ」

天音ちゃんなんて着物がよく似合う和風美少女だもの。
どつという家庭で育てられたかよく分かる。

「それで……この話でまたみゆ先輩に不機嫌になられても困るのだが、小学6年の時、ある女の子から初めてバレンタインデーでチョコレートをもらったんだよ」

「ふーん。貴雅ってモテるもんねー（棒読み）」

「いや、その時はまだ身長も低くてそんなにモテなかったけどな」

今、さらりとその後はモテたみたいな事を言ったよ、この人。

貴雅がカッコイイのはいいけど、他の女の子にも好かれて欲しくない。

「初チョコねえ。それがどうしたの？」

「これがまた美味くて、こんなに美味しいものだとは思わなかった。ケーキはその2年前に親に我が侘言って誕生日から食べさせてもらえるようになったんだが、チョコレートだけは父親が許してくれな

くてな……」

そんな苦勞話風に言うけど、その代わりに食べていたのは有名職人手作りの超高級和菓子なだけだね……。

ちなみに天音ちゃんも女の子と言うことで小さな頃から洋菓子も和菓子もどちらもオツケーみたいだったの。

なるほど、そういう経緯なら貴雅がチョコレートが美味しいと思うのは普通かも。

「それからは俺は親に隠れて小遣いでスーパーでチョコを買いきり食べていたわけだ。昔は好物のひとつだった」

「それが何で今はダメなわけ？」

「世の中、食べ過ぎと言う言葉があるんだよ。どんなに好きだからって食べ過ぎはいけない。ある日の夜、俺はチョコの食べすぎで鼻血を出した。そして、それを父親に見つかり、隠してあったチョコも見つかり、かなり怒られた」

何て可哀想な結末なんだろう、ちよいと同情しちゃう。

幼き頃の貴雅が可哀想、チョコレートくらい別にいいじゃん。

「それ以来、チョコを食べるとあの時の辛い記憶を思い出す。鼻血を止めながら親に説教され、さらに目の前で天音にそのチョコが食べられる様を見ている事しかできない屈辱と悲しみ。涙なしには語れない過去だ」

とりあえず、貴雅がピュアな子供だった事はよく分かった。

「へえ、そんな可愛い理由があっただ？今は食べてもいいの？」

「その時、皮肉にも残すともつたいないと不満を口にしつつ、父親がチョコレートを食べたら俺と同じように感動して、ハマってからは我が家でもチョコが解禁された。あの時の俺の悔しさは我が家の歴史を動かしたともいえる」

何かものすごく壮大なスケールがある言い方をするけど、ようするに彼のお父さんの食わず嫌いだっただけじゃないの？

「……ほら、あーん」

話を聞き終えた私はそのチョコを今度は手で持って彼の口に差し出す。

「ちゃんと食べる量を考えて食べたら美味しいんでしょう？」

「ああ、そうだな。チョコは嫌いではないからな」

そう言っただけで彼はチョコを口に入れる。

貴雅って普段は生意気だけど、可愛いよね。

年下の男の子の魅力に年上のおねーさんとしては嬉しい。

「さて、チョコの話は解決したから貴雅の過去について話そうよ？」

「うげっ……その話はやめてくれるんじゃないのか？」

「ダメですっ。話してくれないと地味に意地悪しちゃうからね！」

貴雅のチョコ嫌いも気になる。

だけど、それと同じくらいに私は貴雅自身についても聞きたいの。

「絵美さんとういう恋をしてきたのかチヨ」のように甘い話を聞かせてね」

「か、顔が笑ってねえ……怖いよ、みゆ先輩」

女の子の嫉妬をなめないでよね、ふんっ！

私が彼を好きだって想いはどんな言葉でも足りないくらい溢れている。

大好きな人だから、どんなことでも知りたいの。

「ふふふっ……。さあて、尋問開始と行きますか？」

第38話：コードネームは「147-88」？

【SUDE：倉敷貴雅】

季節の巡りは早く感じる。

長い冬が終わり春を迎え、4月に突入。

2週間の春休みも無事に何事もなく終了して新学期を迎えた。

みゆ先輩との交際も、彼女がゴスロリ系のファッション雑誌で期間限定モデルをして彼女の人気を高めたくらいで他に変化することもなく順調だ。

交際自体も好調でついに4カ月目だ。

喧嘩という喧嘩もせず、デートを積み重ねている。

そして、本日を持って俺は高校2年生になる。

あのロリ先輩は見た目が小学生のくせに、高校3年生という節目の年を迎えるのだ。

頭はなぜかいいので大学受験もすんなりとこなせるだろう。

「ふわぁ……」

俺は長ったらしい校長先生の言葉がようやく終わり、新学期もない教室の空気に触れながら欠伸をしていた。

なぜ春先と言うのはこんなにも眠くなるのだろうか。

春眠なんたらかんたら、欠伸をしてもし足りない。

家に帰ってさっさと寝たいのだが、残念な事に本日はまだ身体測定が残っている。

面倒だがしかたあるまい。

「……貴雅ちゃん、ずいぶん眠そうだね」

俺に声をかけてきた美少女は宗田華奈。

今年は同じクラスになった俺の幼馴染でもある。

性格に多少難があり、以前にみゆ先輩と問題もあったことがある。だが、俺自身は別に華奈に思う所はない。

話せばそれなりにいい奴だからな、男の評判も高い。

「そりゃ、春だからな。眠りたりないものさ。それより、華奈も今年は一緒のクラスか」

「うん。中学以来だから久しぶり。よろしくね、貴雅ちゃん」

「まあ、いろいろと頼むよ。ふわあ、やべえ、眠いわ」

昨日、徹夜してまでサッカーを見ていたのが悪かったのだろう。これだけ眠気がくるとマジでキツイ。

「……うう、俺はもう限界だ」

そのまま俺は先生が来るまで机に頭をのせて寝てしまった。春はどうしてこんなにも眠いのだろう。

さて、身体測定のために無理やり担任教師に起こされた俺は体育館を回っていた。

身長が少しだけ伸びた。

すでに中学の時にずいぶん伸びたので高校ではあまり変化はないようだ。

「いかん、重大事件だぞ。貴雅、噂のみゆ先輩がまた伝説を生んだ」

「いきなりなんだ？今度はどうした？」

友人たちが俺を囲んでの報告に頭を抱える。

今度は何をしでかした？

「それが実はみゆ先輩のコードネームが変わりそうだ。という情報をたった今、勇者な生徒のひとりが手に入れてきた。その勇者のなれの果てがあれだ」

彼らが指差す方向には教師に両脇を掴まれて連れて行かれる男子生徒が……。

「ふははっ、我が生涯に悔いなしっ！」

「こらっ、叫んでないでさっさと歩け」

「我らのリビドーを抑えられる者などいない。勝者は我らだ」

何で連行されているんだ、あれ？

俺の微妙な視線に彼らは答える。

「彼がこっそり女子の身体測定結果を盗み見てくれたおかげで情報漏洩したわけだ。我らは彼のような尊い犠牲を忘لهはしない。勇者に敬礼！」

「どうでもいい戦いをしているな。心配せずとも処分保留で彼はそのうち解放されるだろ。教師もそこまで暇じゃない」

そんな事に命をかけてどうする。

ふう、あれもみゆちゃんファンクラブとか言う連中のひとりなのだろうか。

「それで彼がそこまでして手に入れた極秘情報を知りたくないか？」

「いや、別に。何か気になるなら本人に聞けばいいだけだし」

「な、何と言う羨ましい奴だ。お前に独占されるのは何とも腹立たしい限りだ」

「まあ、一応聞いておくけど、何だったんだ？」

俺の問いに彼はにやつと嫌な笑顔を浮かべて、

「ふふつ、気になるか、気になるだろう！？」

「……いや、そこまで気にならない。本人に聞けば済むって言うてるだろ」

「待て、待つんだ、貴雅。せつかくの犠牲者の苦勞を無駄にする気か？」

犠牲者って大層な言い方をするがただの覗き魔だろうが。

彼らはもったいぶるのをやめたらしく、俺に堂々と言い放つ。

「本日より、コードネーム“146-86”と呼ばず、コードネーム“147-88”と呼び改めることになったのだ。……ありえないよな、あの素晴らしい体型。まさに神が与えた最後の奇跡。魅惑のボディーに目が釘付けた」

「ふーん……身長は1センチ伸びたのか」

とつくに成長期は終わってるとばかり思っていたぞ。

だが、俺の方も身長が数センチ高くなったのでその差はさらに広がっている。

デートする時に並ぶとどう見ても妹扱いなのが本人は大いに不満らしい。

身長差があるカップルって結構、面倒だったりする。

「……何だ、その淡泊な感想は？もつと何かあるだろ？感動しないか？」

「ある意味、まだ大きくなるのかと言う事に関してびっくりしている。言うておくがお前らのと違う部分が、だがな」

明らかに彼らの意識は147ではなく88の方へと向いている。

男子諸君の憧れなので、分からない気持ちはないが、自分の彼女なので露骨な態度はやめてくれと言いたい……。

それにしても、先輩は出会った頃とあまり変わらない気がする。

あのロリ先輩の成長と言う成長を感じられない。

そうか、146-86っていうのは去年の春先の情報だったから俺が出会ったところには既にサイズ的には変わっていたと言う事かもしれない。

まあ、本人はきつと身長が伸びた事を喜んでいるだろうから黙っておくことにしよう。

「あーっ、貴雅がいる。いいタイミングで会えたにやー」

俺の身体測定が終わり、のんびりと中庭でくつろいでると、無駄に元気なみゆ先輩がやってきた。

何だか良い事があった様子で元気を増量中と言った感じだ。身体測定中なので、普段は見慣れないジャージ姿だ。

「ふふふっ、聞いてよ。私ね、実は……」

「俺は身長が2センチぐらい伸びたけど、先輩はどれくらい伸びた？」

「がーんっ！？……わ、私？それは、その……」

先に俺から身長の話をしてやると先輩の顔色が変わる。

その瞳は「空気読んでよね」と言ってるようだ。

先制攻撃は効果抜群、彼女はぐったりとうなだれながら、

「……センチです」

「よく聞こえないぞ。ワンモアプリーズ」

「1センチだよ。うわあーん。それでも成長期が終わって伸びた事にもすごく喜んでたのにー。貴雅ってホントに意地悪するし。ちょっと自慢しようって思ったのに、ぐすっ」

「先輩が可愛くてついな。ほら、拗ねるな。よかったな、1センチでも伸びて。女の子で伸びるって結構大変だろ？」

俺の場合も中学の時にある程度伸びきってるから、それほど大き

く変化しなかった。

本気で拗ねて唇を尖らせているので慌ててフォローする。

「でも、貴雅って今、何センチになったの？」

「188センチだけど？」

「お願いだからそれ以上、身長を伸ばさないでください。これ以上、身長差が開くと本気で困るもん。ダメだからね？」

そんな無理なお願いされても困る。

まあ、少なくともこれ以上はそれほど伸びないだろ。

俺の成長気もとりあえずは終息した感じがする。

「でも、先輩は胸の方も大きくなったか？」

「きゃっ！？も、もうっ、そーいうところだけ見ないでよ」

相変わらず、一部分だけの成長は続いている様子だ。

俺はみゆ先輩とじゃれていると華奈が目の前を通って行く。

「よお、華奈。身体測定はどうだった？」

俺が声をかけると、みゆ先輩はなぜか俺の影に隠れてしまう。

「貴雅ちゃん。そちらは……美結先輩でしょ？何しているの？」

「これは気にしないでいい。それより、どうだった？」

「めっちゃ、最悪。身長は伸びないわ、スタイルもさほど変わらな

いのに体重だけが……って言う感じ？まだまだ許容範囲内だけどね
はあ、しばらくダイエツトします」

華奈は苦笑いを浮かべて言う。

スタイルも抜群と言っていていい体つきなのだが、どこが気にする必要があるのだろう。

俺は彼女にフォローではなく事実を込めて、

「そんな細かいことを気にしなくても十分、華奈は綺麗だから心配するな」

「ありがと。でもね、貴雅ちゃん。そーいうセリフを恋人の前でしちゃダメだよ？」

華奈の指摘に俺は隣のみゆ先輩に視線を落とす。

彼女は今にも噛みかかろうとする猛獣のごとく鋭い瞳をしている。

「うわあ！？な、何だよ、みゆ先輩」

「……私の時は意地悪して褒めてくれなかったのに。この扱いの差は何？」

「いや、これは、その……」

困り果てる俺を横目に華奈は「気をつけてね」と言い残して去っていく。

しまった、選択肢を間違えた。

「——前から気になっていたんだけど、ちょっと話し合いましょう」

体格差を感じさせない堂々とした彼女の威圧感たつぷりな言葉。
俺は素直に「ごめんなさい」と頭を下げた。

季節は春、桜の花が舞い散るその季節、春の嵐が巻き起ころうとしている。

「わ、私だつて脱げばすごいんだからねっ!？」

「おい、こらっ。意味分かって言ってるのか？ロリ先輩」

「た、多分。ほんのちよつとだけ。貴雅って他の女の子に色目つかいすぎなのよ。大体ね……」

最終話：みゆ先輩の笑顔

【SIDE：倉敷貴雅】

『ロリッ娘×ツンデレ×巨乳』最高！』

それがコードネーム「146-86」改め、「147-88」の魅力らしい。

その意見には同意だが、人の恋人を勝手に噂の対象とするな、と言う独占欲もある。

だが、彼らにとってみれば俺は学園のアイドルを落とした敵であり、独占欲をふりかざそうものなら、俺は体育館の裏へと呼ばれる可能性が多いので大人しくしておいた方が言葉通り、身のためだろう。

先日のみゆ先輩の非公式プロフィールが男子生徒の影の話題をさうつ中、俺はみゆ先輩と共に学園の屋上でのんびりとした昼の時間を過ごしていた。

「——貴雅、私は思うのよ。恋って人を幸せにするものだって」

いきなり、みゆ先輩が妙な事を言い出すので、俺はさっと彼女の額を手で触れる。

体温は平温、別に熱っぽいとかじゃない。

「……熱でもあるのか、という定番行為を試してみたり」

「するにゃ！？あのねえ、私だって真面目な時ぐらいあるの。OK？」

「ふーん。それで、何でそう思ったんだ？」

彼女はお茶を飲みながら食べ終えた弁当箱を片づける。

ちなみに俺も彼女手作りの弁当を食べている最中だ。

何気にみゆ先輩は料理が得意なんだよな、この卵焼きも美味いわ。

「貴雅と出会って半年くらい経つじゃない。半年で私の人生は大きく変わったと思うの。そりゃ、もう360度ぐるりって感じ？」

「それ、一周して戻ってるから。頭いいくせに、子供っぽい間違えるな」

彼女は「うるさいなあ」と唇を小さく尖らせる。

また何か企んでいる様子だが、素直に黙っておこう。

俺も食事を終えたので先輩に食べ終わった後の弁当の容器を渡す。何かこういうの恋人っぽくていいか思ってる、自分がちよいと恥ずかしい。

「……貴雅のおかげで私は恋を知ったわけじゃん。恋愛するって楽しいだけじゃなくて、大変なんだ。その経験を経て、私は今、貴雅の恋人をしている。それまでの私は恋がこんなに楽しいモノだって知らなかったもの」

「まあ、俺もそれなりにみゆ先輩のおかげで楽しませてもらってるよ」

相変わらず、ロリ先輩はやる事が子供っぽくて迷惑をかけられる事もある。

だけど、可愛いという意味では文句もない。

「貴雅に出会わなければ私は今の幸せを感じられなかったんだって……」

そう言ってもらえるのは嬉しいが俺は逆に立場を苦しめている場合もある。

「俺もみゆ先輩に出会わなければ、近所で『あら、知ってる奥さん倉敷さん』の次男さん、幼女を恋人にしているらしいわよ」という非常に不愉快な噂もされずにすんだだろうがな。アレの噂を消すのにどれだけ苦労したか」

「そっち！？しかも、私は幼女じゃない！」

「……危険人物扱いされそうだった俺の悲しみを少しは理解してくれ」

危うく、ご近所さんに俺はロリコン扱いされそうになっていたのだ。

まあ、そんな悩みも些細だと思えるほどにみゆ先輩との関係自体は良好だ。

話を戻してみゆ先輩は快晴の青空の下で満面の笑みで言う。

「私は貴雅が好き。最高の彼氏だと思ってるよ」

「俺もみゆ先輩の事が好きだぞ。時々、ものすごく子供っぽいのが可愛いからな」

「それ、褒めてないよね？褒めてないでしょ？」

今にも噛みつきそうな猫のような顔をして迫る彼女。

俺としては可愛いと思って褒めたつもりなのだが、伝わっていないようだ。

俺はみゆ先輩の小さな身体を抱き上げる。

抱きしめても腕の中でもがくような暴れる先輩。

やれやれ、本当に猫のような子だ。

ひとしきり暴れて大人しくなったみゆ先輩は俺に抱きしめられながら、

「そうだ。明日、私のパパに会ってくれない？」

「……またかよ！？あ、あの人はあんまりいい思い出がないんだが」

いきなり漫画みたいに模造刀で切りつけてきた人だぞ。

みゆ先輩の事を溺愛するあまり、俺を敵対視している。

俺の立場を知ってから直接攻撃はないが精神攻撃をしてくるのだ。

「心配しなくても、今回は大丈夫だよ……多分？」

「その多分が怖いんだが。何で今さら会わなきゃいけないんだ？」

「たまにはこっちの家にも遊びに来てね、ってママが言ってたからだよ。ほら、私ってよく貴雅の家に遊びに行くじゃない」

主に家に来る理由は天音に会うだけで、俺に会いに来てるわけじゃない。

「それで、みゆ先輩の家に来い、と。みゆ先輩のお母さんに会うのはいいんだよ。優しいし、お料理も上手だからな。だが、あのみゆパパだけは厳しいぜ。低姿勢になられるのも困るし、敵対されても困る」

今でも思い出すだけで背筋が凍る、娘を持つ世のお父さんの典型的なタイプだ。

『……うちの美結ちゃんに手をだしたら、どうなるか分かってるんだろうな？ん？』

初対面ではヤクザさんかと思っただくらいに怖いお人でした。

「パパもいつ来るんだって、楽しみにしていたよ？」

「その楽しみは俺にとっては別の意味での楽しみに聞こえるよ。娘を持つお父さんってのはそれなりに男に厳しくて当然だとは思うがアレは変だ。娘を溺愛しすぎてるだろ」

それだけ愛されて育ったからこそ、今のみゆ先輩があるのだと思うけどな。

みゆ先輩は俺に甘えるように抱きつきながら笑う。

小柄で腕の中にすっぽりと収まるサイズの先輩は抱き心地のいいぬいぐるみのようなのだ。

「今、私の事、可愛い、と思ったでしょ？」

「……あ、ああ。そんな感じかも」

「あははっ。嬉しいなあ」

事実を本人に言っていると傷つけるだけでなく、怒って拗ねるので言わないでおこう。

可愛いのは確かだ、最高の恋人だとも思ってる。

だが、しかし、交際半年になっても体格の違いってのは埋まらないわけ。

「みゆ先輩も、もうちょっと身長があればなあ……」

「ぐさっ！？今、私のガラスのように割れやすいハートを傷つけたわね」

「どの辺が繊細なハートなのかは分からないが、こちらの要望だ。ほら、スタイルはいいんだから、身長さえあれば最高ののに」

小柄で可愛いからこそ、ロリ先輩がロリ先輩たる所以なのだけど。

「私だって、身長があればって思うけど、成長しなかったんだからしょうがないじゃん。牛乳だって毎日、飲んでたのに」

「それで別の場所だけ大きくなった、と。痛いっ、いきなり何をする！？」

俺はひじ打ちをかましてくる先輩に「一言よけい」と怒られた。

「でも、いいんだもんっ。小さくたって、私を愛してくれる恋人がいるわけだし」

「……え？どこに？」

「貴雅のことだよ！違うの、違うんだ……ぐすっ」

泣き真似をする彼女に俺は勝てない、これもまた先輩のずるさだ。俺もいいように彼女にからかわれているな。

「あー、はいはい。俺でした、先輩の事が好きですよ（棒読み）」

「棒読み禁止！？貴雅って本当に私の事が好きなのか、時々、微妙に不安になるわ」

先輩はそつと俺から離れると頬にキスをしてくる。

「……まあ、素直じゃない貴雅の気持ちはちゃんと分かってるから」

「たまにみゆ先輩が年上っぽいな、と思わされるな」

「いつでも思ってたなさいよ。私は貴雅よりも年上のおねーさんなんだからねっ。もうっ、ホント生意気なんだからあ」

いつものやり取り、いつもの触れ合い。

こうしてバカップルみたいな時間を過ごすのが楽しい。

偶然だがみゆ先輩と出会い、彼女と恋人になってからの俺の人生は確かに変わった。

「でも、大好き。生意気でも可愛げなくても、好きだよ、貴雅」

みゆ先輩の笑顔に俺は「可愛いな」と思わず口に出してしまう。

これから先も先輩には困らせ続けられるんだろう。

だけど、そんな先輩だからこそ俺は好きなんだと思う。

春の陽気に包まれながら俺達は春風に吹かれながら、見つめ合って笑い合う。

「……いい天気だな。先輩、今度はデートでどこかに出かけるか？」

「いいよ。その時はまたお弁当を作ってあげる」

ゆっくりと雲が流れていく群青色の空。

俺はみゆ先輩の柔らかな薄桃色の唇にキスをした。

「——私だけを見て、恋をして。他の子は見ちゃダメなんだから」

身体が小さくて、胸だけは大きく、性格は強気で可愛い美少女」

コードネームは147-88」。

初音美結は俺の最高の恋人だ。

【THE END】

最終話：みゆ先輩の笑顔（後書き）

これで完結です。初音美結について。みゆ先輩、ロリなのに巨乳。そんなツンデレ。初恋未経験なので、貴雅にいろいろと迷惑をかけながらも成長していききました。名前の初音みゆ≡初●ミクとよく言われますが……違います、ネタにしたけど（汗）。ミクと似ているのに気付いたのは後の事です（笑）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0924s/>

コードネームは『146-86』

2011年4月17日21時10分発行